



● ● ●  
日本大学FD推進センター  
日本大学FD研究  
第9号

# 日本大学FD研究 第9号

## 目 次

### 研究論文

- 遠隔授業における学生の意識と教育効果の調査研究—日本大学文理学部の事例—……………1  
大川内 隆朗・小林 貴之・毒島 雄二・田中 絵里子
- ラーニング・コモンズ運営に関わる大学院生が発足初期に直面する運営上の困難と  
その解決方策について  
—ラーニング・アシスタントへの聞き取り調査結果を手がかりに—……………13  
加藤 雄大

### 教育実践研究

- 学生の予習行動と振り返りの質の向上を目指した協同的授業改善……………25  
篠ヶ谷 圭太・小野田 亮介
- WebClass を用いた自己分析診断表による試験結果の分析……………39  
竹内 麗理・平塚 浩一・Bhawal Ujjal Kumar・青木 秀史・丸山 満博・渡邊 信幸・小倉 直美

### 活動報告

- ゼミナールの教育効果とその実践—日本大学商学部におけるゼミナールを事例として—……………51  
関谷 喜三郎
- 近年の商学部・大学院商学研究科のFD活動……………63  
松原 聖・高久保 豊・竹林 一志・武田 圭太

### 学生レポート

- 「学生が変える日本大学」第6章  
—「令和元年度 日本大学 学生 FD CHAmmiT」における取り組み—……………79  
磯部 耕志郎・石原 諭衣・竹田 匠・柴田 謙吾・稲邊 奨太・岸部 美和・小中 英樹
- 「学生が変える日本大学」第7章  
—「令和2年度 日本大学 学生 FD CHAmmiT」における取り組み—……………99  
竹田 匠・吉田 未来・大貫 陽司・青砥 光希・小林 歩武・竹田 蘭丸・落合 凌也・梅村 智輝
- 「学生が変える日本大学」  
—「令和3年度 日本大学 学生 FD CHAmmiT」に関する報告書—……………119  
竹田 蘭丸・土屋 怜王・古家 凌成・渡部 大雅・高野 敦子・後藤 菜月・合原 嘉成・西村 憲人・  
柴田 大輝・曾山 はるか・佐藤 喜一・垂見 麻衣

『日本大学 FD 研究』投稿要項及び執筆要項……………155

令和元年度 日本大学 FD 推進センター活動報告書……………163

令和2年度 日本大学 FD 推進センター活動報告書……………225

### 編集後記

日本大学全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループメンバー  
日本大学商学部教授 松原 聖



## 研究論文

# 遠隔授業における学生の意識と教育効果の調査研究 — 日本大学文理学部の事例 —

大川内 隆朗\*, 小林 貴之, 毒島 雄二, 田中 絵里子

日本大学文理学部

## Students' Attitudes and the Effects of Distance Learning on Education: Case Study at the College of Humanities and Sciences, Nihon University

Takaaki OHKAWAUCHI, Takayuki KOBAYASHI, Yuji BUSUJIMA, Eriko TANAKA

College of Humanities and Sciences, Nihon University

In response to the spread of the new coronavirus infection (COVID-19), the College of Humanities and Sciences at Nihon University decided that all classes in the first and second semester of the 2020 academic year, except for practical skills and experiments, would be conducted online (e-learning).

The transition from face-to-face to remote classes was made after substantial discussion, and, in some cases, in stages. However, distance learning was implemented without sufficient preparation, and the class terms proceeded under unfamiliar circumstances for both the faculty and students. In this study, we analyzed and discussed the environmental and educational effects of distance learning in 2020, on the basis of student questionnaires and Institutional Research data.

The results of the questionnaire showed an improvement in the number of in-class assignments and online contents from the first to the second semester. Further, there was an improvement in overall student satisfaction with distance learning. In terms of educational effects, although there was an increase in the number of students with high grades in the compulsory subject on information literacy, the number of students who dropped out also increased.

In summary, while distance learning had its advantages in the 2020 academic year, we also identified several issues for improvement. We believe that we achieved the minimum distance learning goals in 2020 and have plans for further improvements in 2021.

キーワード：遠隔授業, E-Learning, データ分析, 教育効果

### Keywords:

Distance Learning, E-Learning, Data Analysis, Educational Effects

### はじめに

日本大学文理学部（以下：本学部）では新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行における対応として、2020年度前学期の授業についてはすべてオンラインによる遠隔授業（e-learning）の形態となった。また後学期についても実技・実験等で必要性が特に認められる授業を除いては原則として遠隔で行われた。遠隔授業の形態には、非同期型と同期型があり（野嶋ら、2006）、非同期型とは講義資料や録画した動画を教材と

\*E-mail: ohkawauchi takaaki@nihon-u.ac.jp

投稿：2021年7月31日 受理：2021年9月3日

してあらかじめインターネット上に置いておき、学修者は都合の良い時間および場所で学修を行うことができるオンデマンド型とも呼ばれる形態である。一方、同期型とは、テレビ会議システムなどを用いて、学修者と教員でリアルタイムに同時双方向の通信環境で授業を実施する形態のことを指し、わからない点があればその場で教員に質問を行うことができる長所がある（富永と向後，2014）。また従来の同期型遠隔授業は、学修者が決められた時間にしか受講できない点がデメリットとして指摘されていたが、近年では双方向のリアルタイムで行っている授業映像をボタン1つで録画しておき、欠席者や復習のための非同期型の動画教材として後から配信することも可能である。2020年度の遠隔授業に関しては、学部の方針として、どのような形態で実施するかは各担当教員の裁量に委ねられた。

対面授業から遠隔授業への移行については、通常であれば多くの時間と議論を経たうえで、場合によっては段階的に行う。しかし本学部の2020年度授業について、COVID-19の影響により、十分な準備期間を設けることなく急遽遠隔授業への移行が実施されることとなり、特に前学期は教員と学生の双方にとって慣れない環境下で授業が進行した。本研究では以上のような状況下において進められた本年度の遠隔授業の実施環境と教育効果に関して、学生アンケートおよび教学IRのデータを参照しつつ分析と考察を行った。

## 1. 遠隔教育のための情報基盤

本学部では遠隔教育を行うための情報基盤として、従前よりLMS（Learning Management System）の1つであるBlackboardを利用していた。2019年度までは学部として対面授業を前提としていたため、LMSは資料の配付、課題の提出、参考動画の公開など、対面授業の補足を遠隔で行うためのツールという位置付けであった。それまでは希望する教員のみが授業内で使用する方式を採用しており、実績としては年間約4,000ある科目のうち、Blackboardを利用するものは20%程度にとどまっていた。しかし前述のように、COVID-19の影響により2020年度は全面的に遠隔授業の実施が行われ、すべての科目においてBlackboard

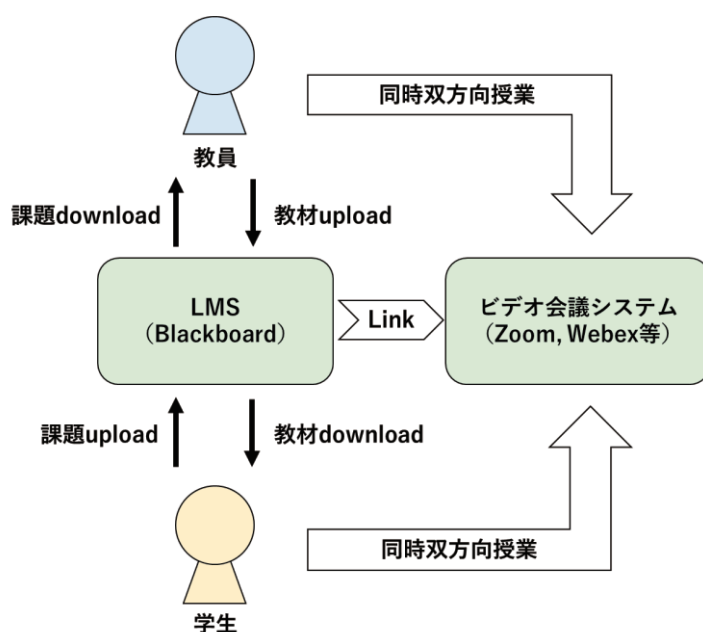


図1 遠隔授業におけるシステム基盤

の使用が必須となった。さらには同時双方向の遠隔授業にも対応するため、学部として Zoom, Cisco Webex, Blackboard Collaborate Ultra の3つのテレビ会議システムを契約し、教員にライセンスの配布を行った。以上の ICT ツールを利用し教員と学生はそれぞれ、教材の配布と受け取り、課題の出題と提出、必要に応じて同時双方向ツールへのリンクへの誘導と参加を行う形で遠隔授業に取り組んだ（図1）。

全学部的な遠隔授業への移行および同時双方向システムの導入にあたり、以下の2点を考慮した。1点目として、Blackboard についてそれまでは学内にサーバを置くオンプレミス型で運用・管理を行っていたが、本学部の学生全体（2020年5月1日時点で8,030名）からのアクセスが集中することを想定し、ベンダーが管理するクラウド上のサーバを利用する SaaS 型へと移行した。2点目は認証システムについてである。利用するシステム別にユーザ ID とパスワードを含めたアカウントを発行する形式だと、ユーザ側と運用側の双方にとってアカウント管理が煩雑になる。したがって、以前より学部内で学生／教員ともに利用していた Microsoft アカウントのメールアドレスとパスワードについて、Azure AD を利用したシングルサインオン認証（SSO）と連携させた。これにより1つのアカウントで各システムへのログインを可能とし、認証の利便性向上を図った。結果として2020年度に関しては、アクセスの集中によって LMS や認証の利用が停止することなく運用を続けることができた。また従来は法令停電やメンテナンスの際に学内システムを一日利用できなくなるようなこともあったが、運用をクラウド化したことによって年間を通して利用が可能となるような副次的な効果もあり、情報基盤としては安定した授業運用が現在も続いている。

## 2. 関連する研究

LMS の利用や遠隔授業の導入にあたっては、その長所と短所を十分に理解しておく必要があり、本章では関連する調査および事例を対象とした研究を概括していく。まず e-learning は万能な教育システムではなく、対面形式とは異なる教育方法の一つであるということを認識しておかないと利活用はできない（牧, 2007）。オンデマンド型の場合は、場所的・時間的な拘束がなく、学修者のペースに合わせて繰り返し学修することが可能となるメリットはあるが、教員の教材準備に大きな労力が掛かることがデメリットとして指摘されている。同時双方向型は、対面型授業とオンデマンド型授業の間のような特徴を持ち、教員・受講生ともに時間的には拘束されてしまう反面、その場での質疑応答を行うことが可能となる。また同時双方向型のシステムを利用した場合、学生からの反応を多少は得ることもできるが、やはり対面形式と比較すると個々の学生の様子や学修状況を詳細に把握することは難しい。

特にオンデマンド型／同時双方向型を含めた遠隔授業共通の短所として、学修意欲の維持やドロップアウト率の高さが挙げられる。例えば英国オープン・ユニバーシティでの事例（Salmon, 2011）として、履修者の35%以上が最初の課題提出を前にしてドロップアウトしてしまうことが報告され、その段階において学修者のタスクが認知的負荷（Sweller, 1988）の限界を超えないことの重要性が述べられている。遠隔授業における認知的負荷については、コンピュータや LMS に慣れること、対面型講義との違いを受け入れることなど、学修内容とは異なる遠隔授業特有のものがあることが報告されており（Tyler-Smith, 2006）、同研究によると授業の前半でそのようなドロップアウトの傾向を示す学修者を見つけることが求められる。また中断者・脱落者を含めた学修者の減少を抑制するためには、学修者に達成感を与えることや教員との接触の回数や質を向上させることが必要であるという調査もある（Martinez, 2003）。以上のようなドロップアウトに関連する観点は、遠隔授業への移行を図った2020年度の授業を評価するうえで重要な要素であると考えられる。

ドロップアウト率の調査と並行して、最後まで学修を継続した学生に対する教育効果の分析と評価も欠か

することができない。遠隔講義の教育効果に関する調査報告は様々で、数学授業において対面授業受講群と遠隔授業受講群の間で中間／期末試験ともに差が無かったという報告（光原ら，2005）もあれば、心理学の授業で遠隔授業受講群の方が高い成績を収めたという報告（堤ら，2008）もある。ただし、いずれも平均点の比較であり、対面形式と遠隔授業で全く同じ授業内容で全く同じ時間を掛けて学修した結果ではないことや、対面授業で学ぶ学生と遠隔授業で学ぶ学生の学力を事前に均一化するなどを行っていないため、これらの結果のみを用いて遠隔授業での学修効果の高低を単純に議論することは避けるべきである。しかし、教員が中心的に話す大人数の講義形式においては遠隔授業が比較的適しており、少人数のディスカッション形式あるいは実技・実習の授業にはあまり適していないということが一般的な認識といえる。また遠隔授業と対面授業において、試験の成績に差異は見られなかったが、学修者の満足度は対面授業の方が高かったという調査もあり（富永ら，2011）、これは受講生自身の主観的な評価と、試験の成績や教員による客観的な評価を同一視することの危険性を示唆している。

遠隔授業に向けた準備に関して言及すると、前章で述べたような情報システム基盤の構築問題のみではなく、各教員が授業準備を行うための設備や時間の確保、さらには遠隔教育のガイドライン作成等の観点からも支援が必要である。各大学は、遠隔授業においても対面授業に相当する教育効果を有するものとする（文部科学省，2020）を求められているが、これは授業担当者にとって容易なことではない。まず従来の対面授業の枠組みがあり、そこに出来る限り近づける形で遠隔授業を設計するのか、遠隔授業を対面授業とは全く別物と考えて一から授業を組み立てていくのでは方向性が大きく異なる。前者の事例として、日本語教育の授業において対面授業の学修要素を洗い出す形で遠隔授業を設計した報告（近藤，2021）があるが、やはり教室内で行っていた活動から ICT ツールを利用した形に移行することの難しさが述べられている。

後者としては、MOOC（Massive Open Online Course）による事例（Guo et al., 2014）などを中心に、遠隔授業自体に対する研究や実績は決して少なくない。しかし、このような事例は遠隔授業のためだけに十分な施設と時間を確保したうえで設計されていることがほとんどであり、今回のような急な遠隔授業への移行には適用できない点も多い。例えば、2020 年度のコロナ禍における本学部での授業対応として、設備や機器を例にとってみても満足のいく収録環境を用意することができず、さらには教員が教材コンテンツの作成を行うための準備期間も充分とは言い難かった。このような状況下において、大阪大学では「オンライン授業実践ガイド」を学内外へ公開し教材コンテンツの作成方法について、具体的なツールの操作方法を含めて紹介を行っている（村上ら，2020）。多くの大学教員は、これまで想像もしなかったような環境の中で、それぞれの大学が用意した資料やインターネット上の情報などを頼りに遠隔での授業設計を模索し、手探りの状態のまま授業開始を迎えた教員も少なくなかったであろう。この点に関して、本学部の各教員がどのような方法を取り入れて授業を行っていたのか、またそれに対する学生からの評価はどのようなものであったか検証を行う必要がある。

本研究では以上を踏まえ、2020 年度に対面から急遽切り替わった遠隔授業について、各教員が採用した授業の形態、前学期から後学期にかけての変化、ドロップアウトや成績から見た教育効果について評価を行っていく。

### 3. 調査の内容と結果

本研究における調査については、学生自身による主観的な評価と、事実に基づく客観的な評価の両視点から分析を行うため、次に挙げる 2 種類のデータを利用した。1 つ目が、遠隔授業を受講する中で、学修者である学生自身がどのように感じていたかを分析するためのアンケート調査である。こちらは前学期の終盤

(2020年8月前半)と後学期の終盤(2021年1月前半)にそれぞれ3週間の回答期限を設けて、学部共通のLMSであるBlackboardを通じて行った。強制力はないものの、Blackboardのログイン画面やログイン後トップページなどで周知を行ったうえでの約8,000名の学生に対する全件調査となる。質問の概要として、どのようなコンピュータを用いて遠隔授業を受講していたか、遠隔授業のコンテンツや課題の量は適切であったかなどについて、前学期は全44問、後学期は「PC周辺機器の購入状況」や「Blackboardの使いやすさ」などの繰り返し調査する必要性が低いと考えられる質問を大幅に削除したうえで、前学期の結果を受けて一部追加した全30問の質問項目とした(※付録参照)。回答数としては前学期が1,366名(回答率:17.01%)、後学期が616名(7.67%)となっており、回答率としては高くはないが、データ数としては統計的な分析も可能となる数にはなっていると考える。また回答者の学年構成比については、前学期・後学期を合わせて1年生:50.53%,2年生:23.35%,3年生:17.18%,4年生以上:8.94%となっている。

ここからは遠隔教育の実態や効果を評価するうえで、特に重要と考えた質問とその集計結果について言及していく。まず遠隔授業の分類については、前述のように同期型・非同期型に大きく2つに分類されるが、本研究ではほかの調査研究(加納,2020/鈴木ら,2021)を参考に、より詳細に(a)教材は無く課題出題や指導が中心,(b)PDFやPowerPointスライド等の静止資料の配付が中心,(c)YouTube等の一般公開されている動画のリンクが中心,(d)教員自身によって録画された動画配信が中心,(e)同時双方向のライブ授業が中心の5つに分類し、質問ID16および17にて、どの形態を中心とする授業を何科目受講していたか、また自身にとってどの形態が最も学びやすいと感じたかを尋ねた。当該の内容についてはシラバス等には記載されておらず、本調査では学生に直接質問する形を採った。その集計結果が表1であるが、下段のどの形態が最も学びやすかったかについては、集計の際に(a)~(e)のすべての形態について少なくとも1科目以上を受講している学生のみを集計対象とした。理由としては、例えば(a)の形態しか受講していない学生は(a)が学びやすいと答えるしかなく、すべての形態を一通り受講したうえでの回答の方がより妥当性が高いと判断したためである。この集計結果からわかるように、(d)の教員自身による動画を用いた授業形態が最も学びやすく、(a)の教材が無く課題や指示のみが与えられている授業の評価が最も低い。立教大学の調査(山口,2020)においても(a)の授業形態に対する評価は低く本結果と一致する一方で、科目数から見るとこの授業形態を採用している科目は前学期・後学期ともに1/6を上回っている。また同時双方向の講義についても、学生からの評価は高くないが後学期は科目数の比率としては前期からやや増えている。(a)や(e)の形態は、教員側の授業準備としてはおそらく労力が低く、それを理由に選択する教員も一部いるのかもしれないが、教材を作り込んだり、繰り返しの視聴を可能としたりするe-learningのメリットを損ねる形で、学生からの評価は高くないことが窺える。もちろん、授業によって向き/不向きもあり一概には言えないが、学生が求める遠隔授業を把握し次年度以降の授業設計を検討するうえでの重要な基礎データとなり得る。

表1 遠隔授業の形態と学びやすさ

|       |     | (a)           | (b)           | (c)           | (d)           | (e)           |
|-------|-----|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 科目数   | 前学期 | ④ 2828(16.7%) | ② 4165(24.7%) | ⑤ 1772(10.5%) | ① 4784(28.3%) | ③ 3344(19.8%) |
|       | 後学期 | ④ 1184(16.8%) | ③ 1592(22.6%) | ⑤ 738(10.5%)  | ① 1788(25.4%) | ② 1743(24.7%) |
| 学びやすさ | 前学期 | ⑤ 43(9.01%)   | ③ 84(17.6%)   | ② 133(27.9%)  | ① 141(29.6%)  | ④ 76(15.9%)   |
|       | 後学期 | ⑤ 15(7.81%)   | ③ 47(24.5%)   | ② 50(26.0%)   | ① 59(30.7%)   | ④ 21(10.9%)   |

※ 先頭の丸番号は各行内の順位

次に遠隔授業のコンテンツ量と授業時間外の学修に着目した。いくつかの調査において、遠隔授業における課題の多さが指摘されている（永井と金子，2021）が，ここでは履修科目数と比較してより詳細な分析を行った。表2は質問ID 20～22において、授業1回につき、予習（事前課題を除く）、復習（事後課題を除く）、課題作成にそれぞれどの程度の時間を割いていたかの集計結果である。前学期では毎回の課題への取り組みに90分以上掛けている比率が60%を超えているが、後学期になるとその比率が50%に留まっており、授業における課題量が全体的にやや減少した様子が窺える。この点は、遠隔授業への移行に伴い大学生の課題の多さが社会的に取り上げられるようにもなったことと、前学期が終了した時点でアンケートの集計結果を学部内の教員にフィードバックし問題提起を行った成果と考えている。しかし、課題に取り組む時間が減少しているにも関わらず、前学期と後学期の予復習の時間を比べてもあまり変化しておらず、また水準としてもかなり低く、この点は依然として改善の必要性が残されている。要因としては、前学期の課題量が学生の限界を超えていて、少し減った程度では予復習の時間にまで還元する余裕が無かったことが考えられる。遠隔授業への移行にあたっては、対面式の授業よりも課題の量を増やしたというような報告もいくつか見られ、その理由として、対面授業では授業時間内でできていたことが遠隔授業では時間が足りずに課題で補ったり、反転授業への転換など授業スタイルを変更したために時間配分も大きく変えたりしたという調査結果もある（葛城，2021）。前述のように、遠隔授業においても対面授業と同等の教育効果を持たせるため、その不足分を補うための方法として課題を通しての学修に頼りすぎた面があるとも考えられる。

表3は、質問ID 25において、各回の授業コンテンツの分量について「1. 少なかった」～「5. 多かった」の回答の平均値を、履修科目数の階級別にまとめたものである。ここでの各学生の履修科目数は、アンケー

表2 毎授業の予復習と課題にあてた時間

|          | 予習にあてた時間           |                    | 復習にあてた時間           |                    | 課題取組にあてた時間         |                    |
|----------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|
|          | 前学期                | 後学期                | 前学期                | 後学期                | 前学期                | 後学期                |
| 30分未満    | <u>567 (41.9%)</u> | 217 (35.5%)        | 532 (39.4%)        | 226 (37.1%)        | 13 (1.0%)          | 12 (2.0%)          |
| 30分～60分  | 448 (33.1%)        | <u>223 (36.4%)</u> | <u>548 (40.6%)</u> | <u>241 (39.5%)</u> | 114 (8.4%)         | 87 (14.2%)         |
| 60分～90分  | 204 (15.1%)        | 112 (18.3%)        | 163 (12.1%)        | 90 (14.8%)         | 411 (30.4%)        | <u>207 (33.8%)</u> |
| 90分～120分 | 75 (5.6%)          | 33 (5.4%)          | 57 (4.2%)          | 34 (5.6%)          | <u>424 (31.4%)</u> | 173 (28.3%)        |
| 120分以上   | 58 (4.3%)          | 27 (4.4%)          | 50 (3.7%)          | 19 (3.1%)          | 390 (28.9%)        | 133 (21.7%)        |

※ 項目内の下線は各列内の最頻値

表3 履修科目数と毎回のコンテンツ量の多さに対する回答

|       |       | 前学期：        |      | 後学期：        |      |
|-------|-------|-------------|------|-------------|------|
|       |       | 人数          | 平均値  | 人数          | 平均値  |
| 履修科目数 | 1～5   | 89 (6.8%)   | 3.39 | 49 (8.2%)   | 3.51 |
|       | 6～10  | 174 (13.3%) | 3.97 | 144 (24.0%) | 3.63 |
|       | 11～15 | 735 (56.0%) | 4.14 | 329 (54.8%) | 3.78 |
|       | 16～20 | 285 (21.7%) | 4.22 | 67 (11.2%)  | 4.03 |
|       | 21以上  | 30 (2.3%)   | 4.46 | 11 (1.8%)   | 4.36 |

ト内での自己申告ではなく、教学 IR のデータから集計した正確な値となる。前学期／後学期ともに履修科目数が多い学生ほど、授業コンテンツの多さを感じていることが確認できる。特に前学期に関しては6科目以上を履修している学生の平均値がほぼ4以上となっており、人数から見ても大半の学生が課題を多く感じている様子が窺える。課題やコンテンツの分量については、表3を見てもわかるように、教員から与えられる量が多い／少ないという議論と並行して、学生自身の履修科目数による影響、すなわち科目を多く取り過ぎているために学修や課題に追われているという要因も大きいといえる。また本学部には年間40単位（約20科目）までの履修登録に関するCAP制があるが、教職関連等のコース科目は上限から除かれるために20を超えるような科目を履修している学生が一部含まれている。

また両学期を比較すると、後学期の方が全体的にコンテンツの量を抑制できていることがわかる。この点については詳細な分析はできていないが、教員側もコンテンツや課題の量の調整に慣れていなかった面が解消されてきたことや、あるいは前章で言及したように学生自身も遠隔授業に慣れてきて認知的負荷が軽減した可能性もあると考えている。

次に、授業を遠隔で実施したことに関する教育効果について、教学 IR のデータの1つである教員による学生の成績評価から考察する。選択科目で見た場合、年度によって学生の所属学科などの構成比が大きく異なる可能性があるため、本稿では学部必修科目である「情報リテラシー」を対象に経年比較を行うこととした。本科目は一般情報教育を扱う基礎科目となっており、受講生数については2019年度：1931名、2020年度：1929名とほぼ変わらず人数としても十分であり、授業の形態は対面式からオンデマンド型へと大きく変わったものの、扱うトピックや試験の内容に関する年度を跨いだ変更については軽微な修正となっている。また授業内で配信する動画は全クラスで共通であり、テストはすべてコンピュータによる自動採点を取り入れており、レポート課題についても詳細なルーブリックを利用しているため教員間による採点基準の揺れがほぼ無い。したがって、対面形式と遠隔形式での差に焦点を当てて議論するにあたり、本学部の中で最適な科目であるといえる。本学部では学生の成績はすべて絶対評価による0～100点の素点で付けることになっており、学生の成績上は「S：90～100」、「A：80～89」、「B：70～79」、「C：60～69」のアルファベットののみで表示され、59点以下は単位不可という扱いになる。

以上の点を踏まえ検証を行った結果について述べる。表4に同科目の成績度数分布を示すが、まず平均点で比較する場合は、2019年度：81.54点、2020年度：80.02点と大きな差は見られなかったが、その分布にはやや差が見られた。2020年度は90点以上の成績を取める学生が大幅に増えている反面、59点以下で単位の取得に至らない学生についても88名増（6.42%→10.99%）と大きく増加していることがわかる。COVID-19の影響により、学修環境だけでなく家庭環境や経済状況なども変化し、このすべての要因が本科目の遠隔授業化によるものとは言えないが、必修科目の単位を落とすことは学修意欲の低下、さらには退学率の上昇

表4 「情報リテラシー」における昨年度との成績分布の比較

| 素点     | 成績 | 2019 年度      | 2020 年度      |
|--------|----|--------------|--------------|
| 0～59   | 不可 | 124 (6.42%)  | 212 (10.99%) |
| 60～69  | C  | 134 (6.94%)  | 131 (6.79%)  |
| 70～79  | B  | 300 (15.54%) | 191 (9.90%)  |
| 80～89  | A  | 697 (36.10%) | 473 (24.52%) |
| 90～100 | S  | 676 (35.01%) | 922 (47.80%) |

にも繋がりがねないので、次年度も注視し対策を講じていく必要があるだろう。成績上位層が増加したことについては、授業映像を何度も繰り返し視聴でき、課題の指示などもすべてオンデマンド形式で行ったため、自分のペースで学修を進めることができるメリットが表れたと考えている。また本授業は1クラスの数も平均で130名近く居る人数規模の大きな授業であり、同観点から見ても、大規模授業における遠隔教育の有効性、そして遠隔授業によるドロップアウトの増加といったような前章で述べた先行研究等で指摘されている内容とも一致し、結果として2020年度の成績については前年度と比較し、より二極化する傾向となったといえる。

最後に、遠隔授業の総合的な評価を学生に問う2つの質問の結果を示す。**表5**は、質問ID 15にあたり、選択科目を選ぶ際に、どの形態によって実施される授業であるかを考慮していたかという問いである。結果を見てわかるように、「オンデマンド型を好んで選択」と「気にしていない」が意見を二分するような形になっている。同時双方向型は、時間的制約からの開放や繰り返し学修などの遠隔授業のメリットを損ねており、遠隔形態になるのであれば学生はオンデマンド型をより好んで選択する傾向にあるといえる。また対面を進んで選択する学生が最も少なく、この値のみを見ると学生は対面授業よりも遠隔授業を求めているような印象もあるが、次に挙げる質問の回答状況と併せて確認するとその限りではないことがわかる。

**表6**は、質問ID 44にあたり、コロナ禍の終息後も一部の授業を遠隔で実施することを望むかという質問の集計結果であるが、「思う」、「やや思う」を合わせたポジティブな回答結果が、前学期は42.46%、後学期は58.89%となっている。表5では対面授業を好んで履修選択する割合が3.28%のみであるが、根底として対面授業に対する需要がここまで低いのであれば、表6で遠隔授業の継続を望む比率はより高くなるはずである。したがって表5の解釈としては、学生は本質的にオンデマンド型の授業を求めているのではなく、遠隔授業が混ざるのであれば基本的には遠隔で済ませたいという意識の表れであると考えられる。授業形態と時間割配置については、学部として全く考慮していないので、オンデマンド授業の間に対面授業が挟まってしまうようなことも実際に起こっている。このような点が改善されれば、表5の結果は大きく変わってくる可能性がある。またアンケートの実施時点は、コロナ禍の最中であったため、表5において学生は学修環境のみ

表5 選択科目を選ぶ際の授業形態に対する意識

|                                 |              |
|---------------------------------|--------------|
| オンデマンド（録画配信型）を最も好んで選択していた       | 288 (47.21%) |
| 同時双方向（Zoomなどのライブ授業）を最も好んで選択していた | 25 (4.10%)   |
| 大学構内での対面授業を最も好んで選択していた          | 20 (3.28%)   |
| 科目選択の際に、授業形態を判断材料として気にしていなかった   | 277 (45.41%) |

表6 コロナ禍の終息後の遠隔授業継続に対する希望

|           | 前学期          | 後学期          |
|-----------|--------------|--------------|
| 思う        | 275 (20.13%) | 198 (32.30%) |
| やや思う      | 305 (22.33%) | 163 (26.59%) |
| どちらともいえない | 214 (15.67%) | 84 (13.70%)  |
| あまり思わない   | 223 (16.33%) | 72 (11.75%)  |
| 思わない      | 319 (23.35%) | 85 (13.87%)  |

を判断基準としていたとは限らず、感染リスクなどを避けるために授業を選んでいたことも考えられる。この点は今後さらなる追跡調査により確認していく必要があるだろう。

ここでは特に表6において、前学期から後学期にかけて、ポジティブな回答の比率が大きく向上している点に注目したい。学生が遠隔授業に慣れて認知的負荷が軽減されたことや、あるいは教員が提供する講義の量や質が変化したことなど、可能性として考えられる要因はいくつかあるが、少なくとも遠隔授業に対する学生視点の主観的評価がより肯定的な方向に変化している。前章で示したように、これが教育効果の向上とは必ずしも一致するわけではないが、学生が肯定的な印象を持って授業に臨むことは大学にとって1つの重要な評価指標であり、この点において前学期よりも大きく改善したといえる。

## むすびに

本研究では、2020年度に全学部的に実施されることとなった授業の遠隔化における実態と教育効果について、学生アンケートと教学IRの成績データから分析と考察を行った。まずはオンデマンド型授業および同時双方向型授業を含めた遠隔授業のための情報基盤として、円滑に移行が進み、授業期間中に大きなトラブルが生じることもなく十分な体制を整えられたことが確認できた。全学生を対象としたアンケート調査では、教員自身が作成した映像による授業形態の評価が高いことが明らかになった一方で、課題ややることのみを指示するような学生評価の低い授業形態も多く存在することがわかった。コンテンツや課題の量については、教員の授業内容による要因のみでなく、学生の履修科目数にも大きく影響されることが明らかとなった。また前学期から後学期に掛けて学生の負荷が改善され、最終的に遠隔授業に対する肯定的な印象にも結びついているような示唆も得られた。さらには学部必修科目の成績データを利用し遠隔授業の教育効果について検証を行ったところ、単位の取得に至った学生については全体的に成績の素点が向上しておりオンデマンド型授業の利点を確認することができた反面、単位の取得に至らない学生の数が増加していることが判明した。

今後の課題として2点を検討している。1点目として本調査の結果を学部の教職員にフィードバックすることが挙げられる。前学期のアンケート結果については、学内の講演会や、Blackboard上に教員のみが閲覧できる形で掲載し周知は行っているものの、いずれも各教員が能動的に情報を閲覧しないと結果や意識が共有されず、非常勤講師を含め、十分に情報が行き届いていない様子が窺える。2021年度の前学期についても、特別に必要性が求められる授業を除き遠隔授業を実施するという2020年度後学期と同様の体勢が続くため、遠隔授業に関する継続的な改善に向けた活動が必要になる。2点目として、講義内容と結びつけることでより有効的な分析や働きかけが可能と考えている。今回のアンケート調査においては、設問数の多さを鑑みて、個別の授業に対する評価ではなく、すべての授業を総合的に見た遠隔授業全体に対するアンケートという形式を採った。したがって、ある教員が学生アンケートで評価の低い項目を見ても、自分の授業は良かったがほかの授業に問題があった結果であるというように、他人事として捉えてしまうことも考えられる。やはり全体としての意識調査と並行して、各教員の直接的な意識改善につながるような方法も求められ、例えば、本学部内で各学期に行っている「授業改善のためのアンケート」では、教員の各個別の授業について学生が回答を行うことができるが、その中に本調査の質問の一部を含める試みも有効といえる。

COVID-19の影響により、急遽実施されることとなった全学部的な遠隔授業であるが、本稿のような調査がこの非常事態における教育効果の検証・改善のみでなく、さらにはコロナ禍終息後の遠隔授業の在り方を検討するうえでも重要なデータとなる。今後もより多角的に広い視野で継続して調査を進めていく予定である。

## 引用・参考文献

- Guo, P. J., Kim, J., and Rubin, R., (2014), "How video production affects student engagement: an empirical study of MOOC videos," Proceedings of the First ACM Conference on Learning at Scale Conference 2014, 41-50.
- 加納寛子 (2020), 「コロナ禍における高等教育でのオンライン授業の可能性について～学生のオンライン授業のための通信環境と ICT 機器の所有状況に関する調査より～」『日本科学教育学会年会論文集』第 44 巻, 521-524 ページ。
- 葛城浩一 (2021), 「コロナ禍における学生の学習活動及び教員の教育活動の実態」『香川大学教育研究』第 18 巻, 77-90 ページ。
- 近藤有美 (2021), 「構成主義の学習理論に基づく大学オンライン授業の試み—主体的に考える力を育成する大学教育を目指して—」『名古屋外国語大学論集』第 8 巻, 105-130 ページ。
- 牧紀子 (2007), 「e-Learning 利用の現状と課題」『湘南工科大学紀要』第 41 巻 1 号, 125-133 ページ。
- Martinez, M. (2003), "High Attrition Rates in e-Learning: Challenges, Predictors, and Solutions," The E-Learning Developers' Journal, 17 (11), 1-9.
- 光原弘幸・能瀬高明・三好康夫・緒方広明・矢野米雄・松浦健二・金西計英・森川富昭 (2005), 「徳島大学における e-Learning のシステム開発・運用・実践」『日本教育工学会論文誌』第 29 巻 3 号, 425-434 ページ。
- 文部科学省 (2020), 「大学等における本年度後期等の授業の実施と新型コロナウイルス感染症の感染防止対策について」[https://www.mext.go.jp/content/20200916-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200916-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf) (2021 年 05 月 15 日アクセス)。
- 村上正行・佐藤浩章・大山牧子・権藤千恵・浦田悠・根岸千悠・浦西友樹・竹村治雄 (2020), 「大阪大学におけるメディア授業実施に関する全学的な支援体制の整備と新入生支援の取り組み」『教育システム情報学会誌』第 37 巻 4 号, 276-285 ページ。
- 永井暁行・金子大輔 (2021), 「北星学園大学における非対面授業の実態—2020 年度前期末調査からの報告—」『北星学園大学文学部北星論集』第 58 巻 2 号, 39-49 ページ。
- 野嶋栄一郎・鈴木克明・吉田文 (2006), 『人間情報科学と e-ラーニング』放送大学教育振興会。
- Salmon, G. (2011), E-moderating: The Key to Teaching and Learning Online, London: Routledge.
- 鈴木克夫・穴久保恵治・大野彬 (2021), 「新型コロナウイルス感染症対策と遠隔授業の活用—遠隔授業導入実態調査から—」『桜美林大学研究紀要・総合人間科学研究』第 1 巻, 177-184 ページ。
- Sweller, J. (1988), "Cognitive load during problem solving," Effects on learning, Cognitive Science, 12 (2), 257-285.
- 富永敦子・向後千春・岡田安人 (2011), 「e ラーニング・対面講義・グループワークに対する学習者の認知と成績との関連性」『教育システム情報学会誌』第 28 巻 3 号, 247-252 ページ。
- 富永敦子・向後千春 (2014), 「e ラーニングに関する実践的研究の進展と課題」『教育心理学年報』第 53 巻, 156-165 ページ。
- 堤教彰・芦高勇気・石坂洋輔・嶋田博行 (2008), 「他大学出身学生・社会人学生の研究室受け入れ後の入門学習として e-Learning を用いた教育実践」『日本教育工学会論文誌』第 32 号 Suppl. 号, 1-4 ページ。
- Tyler-Smith, K. (2006), "Early Attrition among First Time eLearners: A Review of Factors that Contribute to Drop-out, Withdrawal and Non-completion Rates of Adult Learners Undertaking eLearning Programmes," MERLOT Journal of Online Learning and Teaching, 2 (2), 73-85.
- 山口和範 (2020), 「オンライン授業に関する学生意識調査 (立教大学経営学部調査)」<https://www.rikkyo.ac.jp/news/2020/09/mknpps000001bg3b-att/report.pdf> (2021 年 05 月 15 日アクセス)。

## 付録 学生アンケートにおける質問項目

| ID | 質問内容                                       | 回答形式         | 前学期 | 後学期 |
|----|--------------------------------------------|--------------|-----|-----|
| 1  | 受講に利用したことのある情報端末はいずれか                      | 複数選択式        | ●   | ●   |
| 2  | 受講に利用していた情報端末は他にあるか                        | 自由記述式        | ●   |     |
| 3  | どの情報端末を最もよく利用して受講していたか                     | 複数選択式        | ●   |     |
| 4  | 最もよく利用していたコンピュータの所有者は誰であるか                 | 択一式          | ●   |     |
| 5  | 新しく用意した PC や周辺機器はあるか                       | 複数選択式        | ●   |     |
| 6  | 用意した周辺機器は他にあるか                             | 自由記述式        | ●   |     |
| 7  | 受講や学修に利用したことのある回線はいずれか                     | 複数選択式        | ●   | ●   |
| 8  | 受講や学修に最もよく利用していた回線はいずれか                    | 択一式          | ●   |     |
| 9  | インターネット回線や通信プラン等の新規契約や変更は行ったか              | 択一式          | ●   |     |
| 10 | インターネットの回線速度の測定                            | 専用 URL へアクセス | ●   | ●   |
| 11 | インターネット回線の影響で授業に支障を感じることはあったか              | 択一式          | ●   | ●   |
| 12 | 主にどこで授業を受けていたか                             | 択一式          | ●   | ●   |
| 13 | 授業で利用したことのある LMS はどれか                      | 複数選択式        | ●   |     |
| 14 | 授業で最もよく利用していた LMS はどれか                     | 択一式          | ●   |     |
| 15 | 履修科目を選択する際に、授業形態を考慮したか                     | 択一式          |     | ●   |
| 16 | 受講している科目の中で、各授業形態を中心とした授業がいくつあったか          | それぞれ数値入力式    | ●   | ●   |
| 17 | どの授業形態が最も学びやすかったか                          | 択一式          | ●   | ●   |
| 18 | オンデマンド型の教材や映像は、授業開講日の何日前にアップロードされることが多かったか | 択一式          | ●   | ●   |
| 19 | オンデマンド型の授業について、授業開講日から見ていつ頃受けることが多かったか     | 択一式          | ●   | ●   |
| 20 | 授業 1 回につき、どれくらいの時間を予習にあてていたか               | 択一式          | ●   | ●   |
| 21 | 授業 1 回につき、どれくらいの時間を課題作成以外の復習にあてていたか        | 択一式          | ●   | ●   |
| 22 | 授業 1 回につき、どれくらいの時間を課題作成にあてていたか             | 択一式          | ●   | ●   |
| 23 | 受講している科目の中で、各成績評価方法を取り入れている授業がいくつあったか      | それぞれ数値入力式    | ●   | ●   |
| 24 | 教員は、課題や小テストをどの程度の頻度で出題していたか                | 択一式          | ●   | ●   |
| 25 | 毎回の授業コンテンツの分量は、適切であったと思うか                  | 択一式          | ●   | ●   |
| 26 | 教員は授業の準備や資料作りを十分に行っているように感じたか              | 択一式          | ●   | ●   |
| 27 | 遠隔授業は、対面形式の授業と比較して学びやすいと思うか                | 択一式          | ●   | ●   |
| 28 | 対面形式の授業と比較して、教員に質問しやすいと思うか                 | 択一式          | ●   | ●   |

|    |                                             |       |   |   |
|----|---------------------------------------------|-------|---|---|
| 29 | Blackboard 内掲示板やメール等での質問に教員は返事を返してくれたか      | 択一式   | ● | ● |
| 30 | 教員のマイク音声聞き取りにくいことはあったか                      | 択一式   | ● | ● |
| 31 | 資料や黒板等の文字の大きさは適切であったか                       | 択一式   | ● |   |
| 32 | Blackboard は使いやすかったか                        | 択一式   | ● |   |
| 33 | 「使いやすい」または「使いにくい」と感じた理由                     | 自由記述式 | ● |   |
| 34 | 授業の中で利用したことのある同時双方向システムはいずれか                | 複数選択式 | ● |   |
| 35 | 同時双方向システム野中で最も使いやすかったのはいずれか                 | 択一式   | ● |   |
| 36 | 「使いやすい」または「使いにくい」と感じた理由                     | 自由記述式 | ● |   |
| 37 | 遠隔授業は、対面授業を代替できていると思うか                      | 択一式   | ● | ● |
| 38 | 授業補助としての「TA/SA」は、遠隔授業における学修の助けになっていたか       | 択一式   | ● | ● |
| 39 | 学生向け遠隔授業補助「デジタル教育支援サポーター※」は、遠隔授業の助けになったか    | 択一式   | ● | ● |
| 40 | 遠隔授業は、コンピュータの得意/不得意によって、学修に有利/不利が生じると思うか    | 択一式   | ● | ● |
| 41 | 遠隔授業にメリットを感じたことがあるか                         | 択一式   | ● | ● |
| 42 | 遠隔授業を受講する中で、良かったと思う点                        | 自由記述式 | ● | ● |
| 43 | 遠隔授業を受講する中で、不便を感じた点や改善点                     | 自由記述式 | ● | ● |
| 44 | 新型コロナウイルス感染症が終息した後も一部の授業をオンライン形式で行ってほしいと思うか | 択一式   | ● | ● |
| 45 | 大学に求める支援策や要望                                | 自由記述式 | ● | ● |

※ 情報システムを含めた遠隔授業全般に関する質問を、Blackboard 上で受け付け回答する学生サポーター

## 研究論文

# ラーニング・コモンズ運営に関わる大学院生が 発足初期に直面する運営上の困難とその解決方策について —ラーニング・アシスタントへの聞き取り調査結果を手がかりに—

加藤 雄大\*

日本大学大学院文学研究科教育学専攻（教育学コース）博士後期課程

## On the Difficulties Faced by Graduate Students Engaged in the Early Stages of the Operation of Learning Commons and the Solutions they Arrived at: Based on Data from Interviews with Learning Assistants

Yudai KATO

Ph.D. Student, Graduate School of Literature and Social Sciences, Nihon University

In this article, I examine the difficulties faced by graduate student staff involved in the operation of Learning Commons in its early stages, and how they tried to resolve those difficulties. To address these topics, I have used the interview data gathered from graduate student staff (Learning Assistants) in 2019.

Throughout the interviews, I found that they faced the following difficulties. (1) Difficulties related to disseminating information to students who use Learning Commons: Learning Assistants found it an onerous task communicating to students how to use the Learning Commons space. (2) Confusion about having to do kinds of work not covered in their contract: Learning Assistants felt confused about the gap between the work content explained by the university officials initially and subsequent actual tasks.

The Learning Assistants' solutions to these difficulties were as follows. Solution (a) is the countermeasure to resolve difficulty (1). (a) was non-cooperation with other departments in the university. Solution (b) is the countermeasure to resolve difficulty (2). (b) was a redefinition of work content by the Learning Assistants themselves.

**キーワード：**ラーニング・コモンズ, ラーニング・アシスタント, 学習支援

**Keywords:**

Learning Commons, Learning Assistant, Learning Support

### はじめに

本論文では、ラーニング・コモンズの運営に関与する大学院生スタッフが、ラーニング・コモンズ発足初期にどのような困難に直面し、またその困難に対してどのように対処していくのかということについて検討する。

これまで、ラーニング・コモンズに関する研究は、主として図書館学や建築学の領域で多く蓄積されてきた。しかしながらこれまでは、利用学生のラーニング・コモンズ内での学習行動に着目する研究（例えば、

\*E-mail: k.yudai.1209@gmail.com

投稿：2021年1月15日

受理：2021年10月1日

時任ら, 2019) や, ラーニング・コモンズの望ましい空間設計について検討する研究(例えば, 宮田ら, 2020)が多く, ラーニング・コモンズの運営に直接関与するスタッフを対象とした研究はこれまであまりなされてこなかった。

そのような状況の中で, 山本良太による調査は, 本論文における重要な先行研究の一つとして位置づけることができる(山本, 2018)。山本は, ある大学でラーニング・コモンズが発足したときに運営担当者として採用された2名の専任教員が, 発足最初期にどのような困難に直面し, その困難に対してどのような解決を試みてきたかということについて, 聞き取り調査の手法を用いて検討している。

山本によれば, このラーニング・コモンズでは, 発足当初には「学生対応が少ない現状」があり, 教員らは「様々な不安を感じ」ながらも「同時に学習支援環境構築に向けた取り組み」を行っていた(山本, 2018: 38)。そのような学習支援上の困難を解消するために, 2名の専任教員は, 困難の解消のための具体的な取り組みとして「教員連携による学習相談の展開」や「他部署との連携」を基盤とした, ラーニング・コモンズ全体の環境構築を試みていた(山本, 2018: 39)。また, この専任教員らは「LC へのニーズ調査を教員に対して行い, その際に連携に向けた関係構築」を試みる, 「LC 開設の1年ほど前に新設された」関連部署との「連携を模索」といった取り組みを行っていた(山本, 2018: 39)。こうした専任教員によるラーニング・コモンズ発足直後の一連の取り組みを, 山本は「草の根的なレベルから他部署との連携を模索し, 公的なものへと発展」させるためのものと位置づけている(山本, 2018: 39-40)。

この山本による調査は, ラーニング・コモンズを学習空間として位置づけようとする際に, 現場レベルで運営を担当するスタッフに何ができ, また実際に何をしようとするのかということ明らかにしようとしている点で, 重要な先行研究であるといえる。だが実際のラーニング・コモンズの運営には, 専任教員以外にも多くの人間が関わっている。そうした関係者の代表例が, 学生スタッフである。

以上のことから本論文では, 発足初期にラーニング・コモンズ内で日常的に発生していた運営上の困難と, その困難に対する解決策がそれぞれどのようなものだったのかということについて, 当時の大学院生スタッフに対して実施した聞き取り調査の結果を用いて検討していくことを目的とする<sup>1</sup>。そのために, まず聞き取り調査の具体的な手続きについて簡単に説明する(第1章)。そのうえで, 彼(女)らが実際に直面した困難とはどのようなものだったのかということ(第2章)と, そのような困難に対して彼(女)らがどのように対処しようとしたのかということ(第3章)について, それぞれ聞き取り調査の結果を踏まえながら検討していく。

第1章でより詳細に見ていくが, 今回, 聞き取り調査の対象となった大学院生スタッフは, 全員が大学院博士前期課程学生であったという立場上, 教職員間で定期的開催される会議に出席し, ラーニング・コモンズの今後の運営方針について各自の意見を述べることや, ラーニング・コモンズ運営のために配分された学内予算を自らの判断で執行する権限など, 教職員が行使できる権限の多くを持っていない<sup>2</sup>。同様に, 彼(女)らは大学院生という立場上, 大学の一教職員として大学生の学習支援に携わった経験がない。そのため, 本研究で着目する大学院生スタッフは, 先に見たような専任教員による困難への解決策とは質的に異なる方法を選択する可能性がある。

呑海沙織・溝上智恵子らがいうように, 大学院生スタッフは, 教職員と同様に「ラーニング・コモンズを実質的に運営する上で欠かせない存在である」(呑海ら, 2011: 178)。つまり, 大学院生スタッフは「単純作業を機械的にこなす単なる学生アルバイト」(呑海ら, 2011: 178)ではなく, ラーニング・コモンズにおいて日常的に生じる様々な学習支援に対して主体的な役割を果たしていくことが期待される存在である。

このことを踏まえると, 教職員と同様にラーニング・コモンズにおける学習支援の「主役」の一端を担う大学院生スタッフが直面する困難とそれに対する解決策について検討しておくことは, ラーニング・コモンズ内での学習支援をより有意義なものとしていくために必要不可欠である。

## 1. 調査の概要

### 1.1 調査対象

筆者は、東京都内にある私立大学（以下、X大学と表記する）の一学部内に所在しているラーニング・コモンズに在籍している大学院生スタッフ（このラーニング・コモンズでは、大学院生スタッフを「ラーニング・アシスタント」と呼称している。以下、LA と略記する）に対し、聞き取り調査を実施した。X大学の当該学部は人文科学系学科、社会科学系学科、自然科学系学科の3系列から構成される総合学部であり、所属している学生・大学院生の専攻分野はそれぞれ幅広い。

X大学ラーニング・コモンズが発足したのは2017年4月であり、聞き取り調査実施時点では、発足から約2年が経過していた。このラーニング・コモンズは、図書館棟とは別の、当該キャンパスにおいて中心的な機能を持つ建物の1階出入口付近に設置されている。ラーニング・コモンズ内には飲み物や軽食を提供するカフェが併設されており、カフェのみを利用する学生・教職員が多数訪れるなど、人の往来はきわめて多い。また、このラーニング・コモンズの運営にあたっては、X大学教務課が運營業務全般を担当しており、施設内にはラーニング・コモンズ運営を現場で統括するスタッフとして、教務課臨時職員1名が常駐している。

調査対象者となるLAは、次のような方法で選定した。はじめに、調査対象者となりうるLAに対して筆者が個別に直接コンタクトを取り、口頭で調査への協力を依頼した。その後、調査への協力に同意したLAに筆者が連絡を取り双方の日程を調整したうえで、1人あたり50分程度の聞き取り調査を実施した。表1は、聞き取り調査協力者（Aさん～Fさん）の基本的な属性の一覧である。

表1からわかるように、Eさん、Fさん以外の協力者は全員、X大学ラーニング・コモンズ発足当初からLAとして勤務していた。各LAの専攻分野は、人文科学・自然科学領域に広く分布している<sup>4</sup>。また、コース科目履修経験の有無について見ると、大半のLAが学部卒業までに何らかの資格課程に在籍していた経験があることがわかる。教職課程を履修していた経験を持つ学生は6人中4人と多いものの、4年間を通じて教職課程科目を履修し続け、学部卒業時に教育職員免許状を授与されたのは、調査協力者の中ではAさんのみであった。

### 1.2 調査方法

聞き取り調査は、2019年1月21日から2019年1月25日にかけて、X大学ラーニング・コモンズ内で実施した。実際の調査は、調査協力者1名に対して筆者が聞き手となる1対1の対面面接形式で行った。聞き取りに先立ち、この調査ではICレコーダーを用いて発言内容を録音すること、聞き取った発言内容の中に個人の特定につながる可能性がある情報が含まれている場合については筆者が該当箇所をすべて匿名化する

表1 聞き取り調査協力者の基本属性<sup>3</sup>

| ID  | 性別 | 年齢  | 研究領域／専門分野 | 学年 | 勤務期間 | コース科目履修の有無                          | これまでに取得した資格・検定       |
|-----|----|-----|-----------|----|------|-------------------------------------|----------------------|
| Aさん | 男  | 20代 | 地理学／人文地理学 | M2 | 約2年  | 教職課程                                | 教育職員免許状（高校一種地理歴史・公民） |
| Bさん | 男  | 20代 | 歴史学／考古学   | M2 | 約2年  | 学芸員課程<br>教職課程（1年次まで）<br>司書課程（4年次まで） | 学芸員                  |
| Cさん | 男  | 20代 | 化学／無機化学   | M2 | 約2年  | 教職課程（1年次まで）                         | —                    |
| Dさん | 女  | 20代 | 中国文学／中国文化 | M2 | 約2年  | 司書課程（4年次まで）                         | —                    |
| Eさん | 男  | 20代 | 地球科学／気象学  | M2 | 約1年  | —                                   | ニュース時事能力検定2級         |
| Fさん | 男  | 20代 | 地理学／人文地理学 | M2 | 約1年半 | 教職課程（2年次まで）                         | 地域調査士                |

こと、聞き取った内容は、発言者個人が特定されないように配慮したうえで、学術的な目的で利用する可能性があることを口頭で確認し、確認事項すべてに同意できる協力者にのみ聞き取りを実施した。

実際の聞き取り調査では、半構造化インタビューの手法を採用した。すなわち、筆者が大まかな聞き取り項目を事前に準備したうえで、実際の聞き取り調査では協力者の発話の状況などを随時観察しながら、必要に応じて質問の順番を入れ替える、事前に用意した質問を実施しない、聞き取り項目にない質問を追加で行う、などといった対応をとった<sup>5</sup>。協力者には、筆者からの問いかけに対する回答としてその場ですぐに思いつくことや、その回答と関連する別の話題などを、できる限り自由な形で発言してもらった。なお、協力者の調査時点での率直な考えをその場ですぐに述べてもらうために、調査実施前にあらかじめ協力者に質問項目を知らせることはしていない。

聞き取り終了後、筆者が録音データからトランスクリプトを作成し、聞き取りの中で述べられた個人情報などを匿名化する処理を行った。協力者には、本論文の初稿となる文章を送信し、匿名化IDを個別に伝えたうえで、本論文内で引用されている自身の発言内容に誤りがないかあらかじめ確認してもらっている。以上、ここまで本章では、調査協力者の基本属性や調査の手続きについて簡単に述べた。

## 2. LA が直面したラーニング・コモンズ運営上の困難

本章では、LA がラーニング・コモンズの運営にあたって、どのような困難を経験してきたのかということについて、聞き取り調査の結果を適宜引用しながら概観する。その際、本論文では、聞き取り内容を(1)発足時から1年目までの一年間(2017年4月～2018年3月)、(2)1年目終了時から現在まで(2018年4月～聞き取り調査実施時点)の2つの時期に分け、それぞれの時期において日常的に直面していた困難とは、それぞれ具体的にどのようなものだったのかということについて検討する。

### 2.1 発足時から1年目まで

はじめに、ラーニング・コモンズ発足時点から1年目終了時点において、LA が日常的に直面していた困難について確認する。LA らの発言によれば、この時期のラーニング・コモンズでは、新しくできたラーニング・コモンズという空間がどのような場所なのかということを、一般利用者の学生に向けて広く周知していくことが、LA の主たる業務であった。この点について、Aさんは次のように述べている。

聞き手 [……] Aさんは、どういう取り組みをこれまでしてきたかっていうのを、まあ思いつく限りで…。

Aさん まあ、よくある点だと…まあなんでしょうかね。例えば学習目的で使ってない学生さんに、「まあこういう場所だから」ということを注意喚起すること、あるいは、ホワイトボードたくさんあるんで、そこに掲示じゃないですけど、文字で注意喚起してみたりっていうこともやりましたね。

聞き手 なるほど。まああの、[そのような取り組みをしていたのは] 初期の頃だよな。

Aさん そうですね。

[……]

聞き手 まあ初期の頃は、ここが学習空間であるということを学生に広く認知させるための取り組みが、メインとしてあったと。

Aさん そうですね。メインとしてはね。

(2019年1月21日、Aさん。傍線は引用者による)<sup>6</sup>

このような形で利用者の学生へ向けた周知活動を進めていく過程で、各 LA は次第に困難に直面することになる。そのことについて、A さんは続けて次のように説明する。

A さん [……] 一年目ですから、やはり土台作りの段階だったので、先ほども言いました通り、主たる目的としてこのスペースを使ってくれる学生さんのほうが最初は少なかったわけですから。まあそこで注意喚起とか当然するんですけども、まあなかなかうまく伝わらなくて、そのまま居座ってくれちゃう学生さんもいたりですとか。まあなかなか今の状態に持ってくるまでが確かに大変でした。

聞き手 まあやっぱり、今までは学習空間という認知がされていない中で、いろいろ注意して\*\*\*。

A さん そうでしたね。椅子もやけに高級で座り心地の良さそうな椅子が真ん中にあったりとか、あとは〔座席がサポートデスク7から見て〕死角にあったりとか、ってところでやっぱり携帯いじってみたりマンガ読んでみたり、いろんな学生さんがいましたので、そういう人たちに「ちょっとここではそういうのはやめてよね」という話をしていたときに、「え？なんですか？」みたいな受け答えを…。

聞き手 ちょっと怪訝な感じに。

A さん そう怪訝な感じに〔対応された〕。まあその困難はありましたね。

(2019年1月21日、Aさん。傍線は引用者による)

A さんによれば、当初のラーニング・コモンズでは「主たる目的としてこのスペースを使ってくれる学生さんのほうが最初は少なかった」。ここでいう「主たる目的」とは、あくまでも学習目的での利用のことを指している。A さんの説明によると、発足当初のラーニング・コモンズでは、そのような目的で利用する学生が少なかったため、利用者の学生に向けた注意喚起を行っていたが、学生にはその説明の意図が十分に伝わらず、しばしば「怪訝な感じ」に対応されていたという。このA さんの発言からは、A さんが学生からそのような対応をされることを、運営上の困難の一つとして認識していたことがうかがえる。

またこの点については、B さんも類似の内容を語っていた。

B さん [……] やっぱりちょっと認識の低い学生…が、昼寝の場として使っているっていう事実はある。アプローチにすごい苦慮したのは、物分かりが良さそうな子に、「今やっていることをやめて、勉強するか、あるいは場所を変えてください」と言ったときに…こう嫌々ながら…〔別の場所に〕移っていく子のほうが、実は意外と良くて。ヘラヘラしながらあんまり聞いてくれない子とか…なかなか相手のキャラによってアプローチの仕方を変えなければいけないのでわからない。そういう理解、こちらの理解と合わないっていうところの難しさとか。

(2019年1月21日、Bさん。傍線は引用者による)

B さんは、学生への注意喚起を行う際、その都度初めて接することになる学生の「キャラによってアプローチの仕方を変えなければ」ならず、そのような学生にラーニング・コモンズの適切な利用方法について理解させることに、難しさを感じていた。

さらにC さんの証言によれば、学生に向けた注意喚起を行う際、ラーニング・コモンズ運営担当者は、ときには利用者側からのあからさまな反発を受けるようなこともあったという。この点について、C さんは次のように述べている。

聞き手 で、なんか注意するときに、学生からも言われたりするってことがあったんですか？

Cさん あー…。いやあの僕は直接は学生からはなにか言われるってことはなかったですね。反論を受けるっていうのは、僕はなかったですね。

聞き手 Cさんは、なかった。他の人は…あったみたいな話は聞いてた？ どうなんでしょう？

Cさん Yさん〔＝ラーニング・コモンズ常駐の教務課臨時職員〕かもしれないんですけど…。なんか〔スタッフのうちの誰かが〕反論を受けたって話は聞きましたね。

(2019年1月23日、Cさん。傍線は引用者による)

このように、発足最初期のラーニング・コモンズにおいては、学生へ向けた注意喚起がLAの主たる業務であり、それはLAにとってはしばしば困難を伴うものであった。

また、そのような注意喚起に関わる困難の他に、この時期のラーニング・コモンズでは、そもそも学習相談に関連する問い合わせ自体がないという状況も生じており、LAはそのような状況にも戸惑いを覚えていた。この点については、DさんとBさんが、それぞれ次のように当時の状況を語っている。

聞き手 [……] まず発足から1年目までの、昨年度のことで、まあ困ったことがあったかなかったか。で、困ったことがあったとしたらどういうところで困ったかっていうのを、ちょっと思いつくまま言っていただければいいんですけど。

Dさん 困ったこと…。[……] まあ学術的な質問とかはなかったんで、その辺は困るというか…、まあ学部生もなんかここの使いかわからないんだろうな、って感じはしてて。

(2019年1月23日、Dさん。傍線は引用者による)

Bさん [……] あとはまあ、質問に来てくれない。学習面で言うのであれば、去年一年間〔のこと〕であれば、我々の立ち位置がやはり確立されていない分、〔利用学生が〕質問に来ないということで、まあちょっと手持ち無沙汰…こちらも手持ち無沙汰になっていた、ってことがあるかもしれないですね。

(2019年1月21日、Bさん。傍線は引用者による)

ここでBさんとDさんは、発足直後のラーニング・コモンズでは、学生からの質問対応に関する業務がほとんどなかったことを述べている。Bさんによれば、この時期のラーニング・コモンズでは、「質問に来ないということ」で、[……] こちらも手持ち無沙汰になっている状況にあった。また、Dさんはそのような状況が生じていた要因として「学部生もなんかここの使いかわからないんだろうな、って感じ」があったと振り返っている。この点について、Fさんはラーニング・コモンズ内でのLAの業務内容について、大学側から事前に「サポートデスクにいるわれわれ大学院生っていうのは、学生たちから来た質問とか、そういったことに答える、という仕事がメインっていうふうに向っていた」(2019年1月25日、Fさん)と話している。そのような説明を受けて応募をしたにもかかわらず、この時期のラーニング・コモンズでは、そうした業務は実質的に発生しておらず、各LAは当初の大学からの業務内容の説明と実際の業務内容との間のギャップに困惑していた。そのことは、次のDさんの回想からも読みとれる。

Dさん [……] まあでも院生〔＝大学院〕に入ってるし、学部生のなんかまあ…助けになるようなことができたらいいなとは、少しですけど思っていました。

聞き手 ああ最初だけ。

Dさん 最初だけ、少しだけ思っていました（笑）

聞き手 えーと…その、どのくらいまでそれは思っていました？

Dさん え、でも4月5月くらい〔まで〕ですかね。

聞き手 ふーん。

Dさん でもここのルールとかもあまり全然決まっていなかったじゃないですか。だから…何にもできないんじゃないですけど。自分でもどうしたら、〔LAとして〕何したらいいんだろうみたいなのがわかんなくなっていましたね、夏くらいには。

（2019年1月23日、Dさん。傍線は引用者による）

このように、Dさんは、LAとして採用され勤務を開始した直後には「学部生の〔……〕助けになるようなことができたらいいな」と考えていた。ところが当時のラーニング・コモンズ内ではそうした学生対応が発生する状況にはなく、発足から数ヶ月が経過した夏の時点で「自分でもどうしたら、何したらいいんだろう」と思うようになり、次第にここでは「何にもできないな」と考えるようになっていったという。

以上、ここまでは発足初期から1年目終了時までにはLAが日常的に直面していた困難とはどのようなものであったのかという点について見てきた。その結果、この時期のラーニング・コモンズでは（1）ラーニング・コモンズを学習空間として構成するための利用者への周知に関わる困難、（2）本来想定された業務に従事できないことへの困惑、という2つの状況が生じていたことがわかった。

## 2.2 1年目終了時から現在まで

続いて、1年目終了時から聞き取り調査実施時点までの時期において、LAがラーニング・コモンズの運営にあたり感じた困難について見ていく。この時期は、X大学ラーニング・コモンズが発足してから約1年が経過しており、利用者の学生の側にその存在が徐々に認知されはじめた時期にあった。そのような状況の中で、LAは少しずつ先述の「学生たちから来た質問とか、そういったことに答える、という仕事」に近い業務内容を経験するようになっていった。例えばDさんは、この時期のラーニング・コモンズでは「4月になって新一年生が、「履修の仕方がわからない」とか質問が結構増え」てきたために、そういった学生への対応が「ちょっとてんやわんや」として振り返っている（2019年1月23日、Dさん）。

その一方でLAの間では、ラーニング・コモンズ利用学生との利用マナーをめぐるやり取りが、引き続き困難な業務の一つとして認識されていた。この点についてEさんからは、利用マナーのよくない学生に注意をしようとした際のエピソードとして、次のような証言を聞き取ることができた。

聞き手 実際に注意に行ってみて、〔……〕学生はちゃんと聞いてくれる？

Eさん えーと…まあ半々くらいですかね。

聞き手 半々くらい。

Eさん 半々くらいはちゃんとわかってくれる子たちがいるんですけど、もう半分くらいはガン無視の方〔＝学生〕が…。

聞き手 ガン無視される？

Eさん ガン無視されたりとか、もうなんか聞いてないふりしちゃう子がいるので。

聞き手 ああ、それはなに？ 例えば携帯とかをこうやってさ〔＝聞き手が携帯電話を操作するような動きをする〕。っていうところに注意しに行って…。

Eさん そうですね。〔注意しても〕「あー、うん」みたいな。なんかもう聞く耳を持たないっていう言い方が一番いいと思うんですけど。

聞き手 ああ、それは…切ないな。

Eさん そういうときはちょっと…言っても無駄だと思うんで。僕もそんなに威厳がある方じゃないんで、どちらかというとない方なんで（笑）。

（2019年1月25日、Eさん。傍線は引用者による。）

以上、ここまで見てきたように、LAへの聞き取り調査の結果から、発足初期のX大学ラーニング・コモンズでは大きく分けて（1）利用者に向けたラーニング・コモンズという学習空間の利用方法の周知に関わる困難、（2）発足以前に想定されていた学習支援業務に従事できないことへの困惑の2つの困難が日常的に生じていた。

### 3 LAによるラーニング・コモンズ運営上の困難に対する解決方策

前章では、ラーニング・コモンズ発足初期に現場の運営スタッフとして雇用された大学院生が、実際の運営にあたりどのような困難に直面してきたのかという点について確認してきた。このことを踏まえて、本章ではこれらの困難に各LAがどのように対処しようとしていたのかという点を見ていきたい。ここでの検討を通じて、LAによる現場レベルでの対応が、具体的にどのようなものだったのかという点を検討していく。

はじめに、前章（1）の困難についてである。この点についての解決方策として、Eさんからは次のような発言を聞き取ることができた。

Eさん ただ単に結構騒いでる人というか、まあ基本的には〇〇〇なんですけど。ガタイのいい人たちを注意するのはちょっと怖かったなっていうのは…はい。

聞き手 ああ、〇〇〇とか〇〇〇とかね。

Eさん [……] ちょっとほんとに怖い人たちを…全然基本的には注意はしてたんですけど、ちょっと…うん、ガタイのいい人たちを注意するのはちょっと怖かったんで、まあいろんな方に協力していただきながら、はい。ときには学生課の方をちょっと呼んだりとか、はい。

聞き手 ああ、学生課のね。

Eさん なんか… [学生課職員の中で] すごい〇〇〇に精通している方にちょっと注意してもらったりとか。

[……]

聞き手 なるほど。そういう事態に直面したときは、まず呼ぶのは大人の人。

Eさん そうですね。ちょっとさすがに…。

聞き手 大人の人に間に入ってもらって。…ああ今まさにだね [=聞き取り実施時に偶然ラーニング・コモンズ内に居合わせた教務課職員が、学生へ注意をしに向かう]。[……] 今、Zさん [=教務課職員] が…。今まさに [そうした対応をしている] ってことだね、たぶんね。

Eさん そうですね、ああいうことですね。

（2019年1月25日、Eさん。傍線は引用者による）

ここでEさんは、LAが利用マナーのよくない学生に向けた注意喚起を行う際、利用者側から明確な反発を受けることが想定される場合は、学生課の職員に依頼し、職員と一緒に注意喚起を行う、偶然その場に居合わせた教務課職員に立ち会ってもらって注意を行うといったような形で対応をしていたと述べている。

このような対応は、Eさんに特有のものではない。この点についてはFさんも同様に次のような証言をしている。

聞き手 注意っていうのは、具体的にはどういったふうに注意をするのかっていうのは…。

Fさん 基本的にはその…ものすごく厳しいような形で言うことは避けて。まあその…「ちょっと声が大きいので、トーン下げてください」というような、軽いような形で最初は軽く言いつつ、もうあまりにもひどいようであれば、…いつときあったのは、学生課〔職員〕に来てもらう、とか…。

聞き手 ああ、なるほど。

Fさん で、あとは一緒に入っているYさんと一緒に、学生番号を…学籍番号を控えるように行動を取る、[……]。

聞き手 それは…それはもう、ほぼほぼ最終手段…。

Fさん 最終手段ですね、はい。

(2019年1月25日、Fさん。傍線は引用者による)

Fさんによれば、各LAは、最初はなるべく穏当な形で説明を行い、その対応で問題が解決されない場合、最終手段として「学生課に来てもらう」といった対応や、ラーニング・コモンズ内に常駐している教務課臨時職員と一緒に「学籍番号を控える」といった対応を取っていた。

ここでEさんやFさんが述べているような解決方策は、先行研究でも見られるような「草の根的なレベルから他部署との連携を模索」(山本, 2018: 39)する動きに、やや類似したものであると解釈できる。しかし、先行研究で明らかにされている専任教員らの連携と、ここでEさんやFさんが説明しているようなLAの「連携」との間には、質的な差異がある。山本によれば、専任教員らによる「草の根的なレベル」の連携とは、「学習環境構築」のために「授業科目を開発する部署」と協働して、「アクティブラーニング型授業に関する学習会を持ち掛ける」といったような積極的なものであり、そのような連携の結果、後にこの学習会は「大学のFD委員会の後援を受ける」など、公的な取り組みに発展していった(山本, 2018: 39)。その一方で、ここでEさんとFさんが述べているような、LAと学生課や教務課との間の「連携」は、ラーニング・コモンズを「公的なもの」にしていくための積極的な連携ではなく、あくまでも現状のラーニング・コモンズを学習空間としてなんとか維持するための、応急的な「連携」であったと理解することができる。

続いて、前章(2)の点について見ていく。この点については、主にBさんから当時の状況を詳細に聞き取ることができた。

Bさん さらに言うならば、その運営体制というか、機能面、ソフト面って意味でも、我々が配置されてなお、学校〔＝大学〕からのアプローチっていうのが全然ない状態。あるいはそもそもこっちもどんなことを要求すればいいのかっていうのがまだ学生から集められていない状態なので、実は押すも引くもないような、「フワフワしている」でもなく「押すもの」がないっていうような状態だったので、ある種最初は仕方がないかなと。そういう意味で、〔自分たちで〕ルールを作るとか…一番最初にあったふんわりしたルールを、みんなに納得してもらえるかたちでアウトプットしなければいけないっていうのはもう、入った瞬間に理解したこと。[……]  
〔当時は、〕どの時期までにどんなことができるか、どの程度のアウトプットができるかっていう、ある種の差し迫ったカウントダウンみたいなものが見えていて…。まあ当時いたメンバーっていうのが、それにむけて…まあ全員ではないんですけど、面白いように動いた。まあ変な話、互いの状況を忖度しながら(笑)。面白いように…面白くなるようになって言えがいいんですね、動

いて。

(2019年1月21日、Bさん。傍線は引用者による)

ここでBさんは、発足当初のラーニング・コモンズには大学側からの実質的な支援が乏しかったこと、また、そのような状況下で現場のスタッフ自身によって、独自のルールを構築しなければならないと思ったことを述べている。Bさんによれば、発足当初のラーニング・コモンズは、大学側からの実質的な支援がほとんど期待できない状況にあった。そのような状況の中で、Bさんはその状況を「仕方がない」と思い直し、ラーニング・コモンズの利用方法に関するルールの設計をLA自身で行い、そのルールを「みんなに納得してもらえるかたちでアウトプット」することが自身の業務であると認識するようになったという。

ここでの一連の発言からは、(2)の困難に対するLAの解決策は、概ね次のようなものであったといえる。すなわち、採用前に説明されていた学習支援に関する業務にはほとんど従事できず、「学校からのアプローチってというのが全然ない」現状を受け入れて、その現状に適合するように各LA個人の中で自身が行うべき業務内容を定義しなおすというものである。このような「業務内容の再定義」といった解決策は、現実的に利用できる資源に乏しいLAに特有の解決策であったと考えられる。

## おわりに

以上、ここまで本論文では、ラーニング・コモンズ発足当初に配置されたLAが、ラーニング・コモンズの運営にあたりどのような困難に直面し、その困難をどのように解決しようとしてきたのかという点について、聞き取り調査の結果を用いて検討してきた。最後に以下では、本論文を通じて明らかになった知見と、今後の課題について簡単に整理する。

聞き取り調査を通じて、X大学ラーニング・コモンズの運営に現場レベルで関与していた大学院生スタッフは、主として(1)利用者に向けたラーニング・コモンズという空間の利用方法の周知に関わる困難、(2)発足以前に想定されていた学習支援業務に従事できないことへの困惑、といったことに直面していたことがわかった。また(1)の困難に対しては、(a)対外部署との「応急的な「連携」」、(2)の困難に対しては(b)LA個人の中での「業務内容の再定義」といった方法で、日常的に発生する困難の解消を試みていたことが明らかになった。

解決策(a)について、先行研究(山本, 2018)に即して言うならば、専任教員と比較して行使できる権限の少ないLAは各所との「連携」を通じて、日常的に生じる困難の解消を図ろうとしていたということが出来る。ただし、LAは専任教員と比べ、実際に行使できる権限が限られていることから、LAらによるこうした解決策は、どうしても応急的なものにとどまる傾向にあった。また解決策(b)については、ラーニング・コモンズの外部に存在する様々な資源に依存しない方法で困難の解消を図ろうとしていた点で、LAに特有の解決策であったと見る事が出来る。この場合、各LAは、たとえば雇用契約時に大学側から示された業務内容と実際との間に乖離が生じていることについて大学側に問い合わせるといったような対応は取らず、当初の説明と明らかに異なっている現況を「仕方がない」ものと考え直し、現時点で遂行可能な業務(ラーニング・コモンズ利用ルールの策定など)に取り組んでいく方向に考えを改めていた。

ただしこれらのことは、発足初期にラーニング・コモンズの運営に携わった各LAが、外部との積極的な連携の可能性を一切模索しようとせず、ラーニング・コモンズの運営をめぐる生じる困難すべてを上記のような方法で解消しようとしていたことを示すものでは必ずしもない。各LAは、場合によっては、より根本的な解決策を模索する場合もある。たとえばBさんは、教職員とLAの間で半年に1回程度実施される

ミーティングに出席した際、ラーニング・コモンズをより望ましい学習空間として構築していくために、出入口に学生の入退室を記録し管理するための「ゲートが必要だ」という要望を、教職員に向けて「立場的には言いすぎかなと思うくらい激しく言った」ことがあるという（2019年1月21日、Bさん）。このようなBさんの行動は、現場レベルで挙げられている要望を大学側へ強い言葉でアピールすることで、大学側からの支援を引き出そうとする動きであったと理解することができる。しかしながら、本論文はあくまでも発足初期のラーニング・コモンズにおける日常的な実践において頻繁に生じている運営上の困難に対して、LAがどのような対応を取ってきたのかを検討することを目的としてきたため、このような特殊な状況下での各LAの対応については、十分に検討することができなかった。この点については、今後の課題としたい。

その一方で本論文は、大学図書館の外部に設置されたラーニング・コモンズにおいて、発足から間もない時期に運営に携わる関係者の一人である大学院生スタッフがどのような困難にさらされるのかということを詳細に検討してきた点に、学術的な意義を見出すことができる。近年では、様々な事情から大学図書館の外部にラーニング・コモンズが設置されるケースが多数あり、今後そうしたラーニング・コモンズにおいても、本論文を通じてこれまで見てきたような事例と類似の状況が生じる可能性がある。その意味で、本論文を通じて得られた知見は、今後の大学教育に対して重要な視点の一つを提供するものであるといえるのではないだろうか。

## 注

1. ラーニング・コモンズに勤務する大学院生スタッフを調査対象に設定した研究として、竹永啓悟・城阪早紀・阿部康平による、同志社大学良心館ラーニング・コモンズをフィールドとした事例研究が挙げられる（竹永ら、2019）。しかしながら、竹永らの研究では「ラーニング・アシスタントの勤務実態を精査し、LAの勤務経験と大学教員としての教育指導能力との関連を解明すること」（竹永ら、2019：3）に主眼が置かれており、大学院生スタッフの勤務上の困難についてはほとんど触れられていないため、本論文では主要な先行研究としては位置づけない。
2. この点について、永井暁行・廣川和貴・米谷さくら・中村和彦の報告によれば、北星学園大学ラーニング・コモンズでは「予算管理」や「個別学習支援に関する関係各所の調整」などの業務は「専任事務職員」または任期付の「助教（教員）」の役割である一方、学生スタッフは「個別学習支援」に関する業務の一部のみを担当し、予算管理や関係各所との調整といった業務には従事していない（永井ら、2020：116-7, cf. 表2, 3）。これはあくまでも北星学園大学ラーニング・コモンズの事例であるが、この点については、その他の多くのラーニング・コモンズにおいてもほぼ同様の傾向であると考えられる。
3. 「学年」は聞き取り調査実施当時（2019年1月時点）のものである。また、「学年」に付されている「M」は「Master（博士前期課程）」の略号である。
4. 今回の聞き取り調査協力者は、いずれも人文科学領域、自然科学領域を専攻する大学院生であったが、当時在籍していたLAの中には、教育学や社会福祉学などの社会科学領域を専攻する大学院生もいた。
5. 聞き取り調査にあたり、筆者が事前に準備した聞き取り項目は、大きく次の9つである。1. LCの現状の学習環境についてどう思いますか。2. 現在のLCでは、どのような学習支援を行っていますか。3. これまで、LCの学習支援環境を構築するためにどのような取り組みをしてきましたか。4. あなたは、どのような目的でLAの募集に応募しましたか。5. あなたの、LCの第一印象を教えてください。6. LC発足から1年目終了時までの間で、あなたはLAとしての勤務中にどのような困難を感じましたか。7. LC発足1年後から現在までの間で、あなたはLAとしての勤務中にどのような困難を感じましたか。8.

あなたは、今後 LC がより良くなるために、大学側からどのような支援が必要だと思いますか。9. あなたは、今後 LC がより良くなるために、LA 個人にどのような取り組みができると思いますか。なお、項目 1～3 については、先行研究において設定された聞き取り項目（「①当該施設の学習環境、②当該施設における学習支援の現状、③学習支援環境構築に向けた取り組み」）を参照している（山本，2018：38）。また、今回の聞き取り調査は、過去に生じた出来事について主観的かつ回顧的に述べてもらうという趣旨のものであったため、調査協力者による一連の発言が、必ずしも当時の状況を適切に表現していない可能性がある点には十分留意しておく必要がある。

6. 本論文において、ゴシック体で表記されている箇所は、すべてトランスクリプトからの引用である。また、トランスクリプトに付した記号の凡例については次のとおりである。

聞き取りの中で数秒程度の沈黙や言いよどみがあった箇所には「…」を、発言内容を録音音源から聞き取ることができなかった箇所には「\*\*\*」をそれぞれ付した。個人情報保護の観点から匿名化が必要であると判断した発言は、発言の長さに関わらず該当箇所をすべて「○○○」で置換した。引用に際して、紙幅の都合から発言の一部を省略した箇所には「[……]」を付した。引用文中の亀甲括弧「〔 〕」内は、筆者による発言内容の補足・修正である。以下、特に断りのない限り同様。

なお、各 LA による一連の発言は、場合によっては自身が所属する大学を批判するような内容に見えることもあるが、これらはあくまでも当時の状況に対する各 LA の率直な評価であり、調査協力者の各 LA に所属大学を批判する意図は一切なかったことを付言しておく。

7. X 大学ラーニング・コモンズでは、運営担当の教務課臨時職員や LA が常駐し、学生からの質問相談などを受け付ける窓口を「サポートデスク」と呼んでいる。

## 引用・参考文献

- 呑海沙織・溝上智恵子・大学図書館研究グループ（2011），「大学図書館におけるラーニング・コモンズの学生アシスタントの意義（グループ研究発表，〈特集〉第 52 回（2010 年度）研究大会）」日本図書館研究会『図書館界』第 63 巻第 2 号，176-184 ページ。
- 永井暁行・廣川和貴・米谷さくら・中村和彦（2020），「北星学園大学ラーニング・コモンズにおける学習支援サービスと今後の課題」北星学園大学『北星論集（文）』第 57 巻第 2 号，113-121 ページ。
- 宮田圭介・亀井暁子・林左和子・羽田隆志・野村卓志・的場ひろし・井出直樹（2020），「ラーニング・コモンズのあるべき姿の検討」静岡文化芸術大学『静岡文化芸術大学研究紀要』第 20 号，135-142 ページ。
- 竹永啓悟・城阪早紀・阿部康平（2019），「滞在型ラーニング・アシスタントの学習支援経験を通じた教育指導能力の形成—同志社大学良心館ラーニング・コモンズの事例から—」同志社大学学習支援・教育開発センター『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』第 10 号，3-18 ページ。
- 時任隼平・巳波弘佳・藤井恭子・坂口将太・中野由美子・石橋将広・大田詠子・明賀豪・佐永田千尋（2019），「〈実践研究報告〉ラーニングコモンズが持つ機能と学習活動の結びつきに関する研究」関西学院大学高等教育推進センター『関西学院大学高等教育研究』第 9 号，53-59 ページ。
- 山本良太（2018），「ショートレター ラーニングコモンズ開設初期の学習支援環境構築に関する現状分析—運営担当者の視点から—」日本教育工学会『日本教育工学会論文誌』第 41 巻 Suppl. 号，37-40 ページ。

## 教育実践研究

# 学生の予習行動と振り返りの質の向上を目指した 協同的授業改善

篠ヶ谷 圭太<sup>\*1)</sup>, 小野田 亮介<sup>2)</sup><sup>1)</sup>日本大学経済学部, <sup>2)</sup>山梨大学大学院総合研究部

## Teachers' collaboration for enhancing the quality of preparatory learning and reflection.

Keita SHINOOGAYA<sup>1)</sup>, Ryosuke ONODA<sup>2)</sup><sup>1)</sup> College of Economics, Nihon University, <sup>2)</sup> Graduate School of Interdisciplinary Research, University of Yamanashi

This study seeks to improve class design and teaching methods for encouraging student learning outside the classroom in higher education. Applying a framework of lesson study, two university teachers collaborated to improve their own practices to increase students' preparatory learning and enhance the quality of reflection. The teachers found it difficult to communicate the necessity of preparatory learning to students, and thus altered their class design. One teacher picked up some students' descriptions written during the preparation task for the next lesson, while the other set a discussion activity at the beginning of each class. Consequently, students' spontaneous preparation increased, and the quality of reflection was enhanced. The two teachers in this study successfully improved students' learning behavior outside the classroom, facilitating the achievement of their educational goals and improving class design. This study encourages university teachers to collaborate to enhance the quality of their educational practices.

キーワード：予習，振り返り，授業改善

**Keywords:**

Preparatory Learning, Reflection, Class Improvement

## 1. 問題と目的

### ① 予習と振り返りへの着目

学修は、授業だけでなく予習—授業—復習といった、一連のサイクルを通じて深められるものであり（篠ヶ谷，2012），生涯にわたって効果的に学び続けていく上では，そうしたサイクルを自発的に回しながら理解を深めていくスキルを養っておく必要がある。自己調整学習（self-regulated learning）に関する研究では，授業外学修の重要性が指摘されており，授業外でも学修に取り組む中で，自律性や学修スキルが向上することが報告されている（Cooper et al., 2012；Zimmerman & Schunk, 2011）。こうした流れの中，日本の大学教育でも，事前準備や事後の学修も含めて単位認定を行うようになっており（中央教育審議会，2012），授業だけでなく，予習や復習などの授業外学修を通じて，学修スキルを育成していくことが目指されている。

\*E-mail: shinogaya.keita@nihon-u.ac.jp

投稿：2021年2月22日

受理：2021年9月22日

しかし、大学生の授業外での学修時間は十分とは言えず、特に、日本の大学生については予習の実施率が3割程度であることが報告されている（ベネッセ総合教育研究所，2016）。次回の授業に向けて予習を行うことは、授業での理解を深める上で非常に重要であり、授業内容と関連する知識が事前に活性化されることで、既有知識と新たな情報を関連づけ、疑問点を把握しながら授業に参加できるようになることが報告されている（Shinogaya, 2018；Titsworth and Kiewra, 2004）。これらの問題意識のもと、本研究では2名の大学教員が学生の予習行動を増加させるための授業実践を行い、レッスNSTAディ（詳細は後述）の枠組みを援用した協議を通して授業設計を改善していくこととした。

また、予習だけでなく、授業後の学修も重要であるが、予習と復習の両方の学修活動を一度に促そうとすることは過度に学生の負担を高めてしまうと考えられたため、本研究では、復習の前段階の活動として、授業時間の最後に振り返りの自習時間を設けてリアクションペーパー（以降、RP）の記述を求めることとした。RPはミニツッペーパー（One Minute Paper）と呼ばれることもあり、一般的には「授業の最も重要な点は何だったか」「解決されずに残っている疑問点は何か」といったオープンエンドな質問が与えられ、回答を記述していく（Angelo and Cross, 1993；Holtzman, 2007）。通常、RPの記述は1分で終わるものではなく、授業の最後の10分程度の時間を使って行われる（Stead, 2005）。心理学の観点からは、このように自らの学修を振り返ることで、知識同士が関連づき、より高次の知識が構築されることが期待される（Chi et al., 1989；King, 1992, 1994；Roscoe and Chi, 2007）。これまでの実践研究においても、RPは学生のエンゲージメントを高め、学修成績を促進することや（Erickson and Erickson, 2013；Holtzman, 2007）、RPが教員と学生の相互作用の契機となることが指摘されている（Stead, 2005；Vonderwell, 2004）。

ただし、先行研究では、RPの提出率に着目した研究は見られるものの（McElroy and Coman, 2002）、記述の質の変化に着目した研究はあまり見られない。小野田と篠ヶ谷（2014）では、学生が記述した質問を次の授業の冒頭に取り上げて補足説明を行うことで、授業後のRPにおいて知識の「なぜ」を問う高次質問の数が増加することが報告されているが、「わかったこと」の記述のうち、積極的に授業内容と自身の経験や推論を結びつける記述（拡張記述）を増加させる授業設計のあり方については今後の検討課題とされている。こうした点を考慮し、本研究では、授業後のRPの質を向上させるための手立てを考案することも目的とした。

## ② 協同的授業改善のアプローチ

本研究で対象とした授業は、第一著者と第二著者がそれぞれ担当した「教育方法論」の講義である。同じ日本の大学内で同じ講義名で開催されているが、授業者、授業内容、受講者は異なっている。第一著者はPPTスライドを用いて解説を行い、スライドの内容を資料として配付しているのに対し、第二著者は資料を配付せずに板書を用いて解説を行い、板書の内容を各自ノートに書きながら受講するよう指示していた。このように授業の運営方法は異なるものの、両授業者は、大学教育における授業外学修の少なさや、学生の自発的な学修促進の必要性に関する問題意識を共有しており、協同しながら互いの実践の質をさらに向上させていく上で、レッスNSTAディの枠組みを援用した授業改善が有効であると判断した。

レッスNSTAディでは、1) 目標設定と計画、2) 研究授業、3) 授業検討、4) 統合強化、の4段階で授業改善が行われる（Lewis, 2002）。ただし、両授業者は日程上、互いの授業を参観することができず、ビデオによる授業の撮影も困難であったことから、約2週間に1度のミーティングの他は、メールでのやり取りを中心として検討を行った。具体的な内容を以下に示す。

まず、1) 目標設定と計画の段階として、講義が始まる前月に複数回の協議を行い、学生の授業外学修を促進するための予習課題やRP、授業設計について協議した。その際に、2名が異なる授業を対象としていることを活かし、効果が期待される異なる介入的指導をそれぞれのクラスで取り入れることを決定した。2) 研究授業については、特定の授業回を研究授業とせず、毎回の授業を研究対象とみなし、予習課題やRP

のデータ収集と分析を行った。3) 授業検討では、指導を展開していく中での授業者のみとりを共有し、学生の予習やRPの記述の質的、量的検討を通じて、必要に応じて次の授業設計の改善策を協議した。そして、4) 学習の統合強化の段階において、複数回の授業検討を通して授業設計の改善策を考え、(1)に戻り再度授業を行った。大学の教員は必ずしも教えることのプロフェッショナルではなく、効果的な指導方法を理解していたり、指導方法を向上させようとする教員は必ずしも多くはない。また、小中高に比べて教員間での独立性も高く、互いの授業を吟味したり、実践例やデータを共有したりする機会もはるかに乏しい。こうした現状に鑑みると、本研究のように少人数であってもそれぞれの授業を研究対象として捉え、予習課題やRPのデータを共有しながら、協同で授業改善を図る実践例は、大学教育において重要な意義を有すると考えられる。

### ③ 予習課題の設計

本実践における予習課題は、成績評価の対象ではなく、任意の課題として扱った。予習を促したければ学生の予習実施に対してポイントを与えることが考えられるが(Ryan and Hemmes, 2005), この方法では個々の学生の予習状況を把握し、フィードバックしていく必要があるため、100人を超えるクラスでは非現実的とは言わないまでも、多くの大学教員が即座に実行できる手法とは言い難い。そのため、本研究では、自発的な予習を促すという共通の目的のもとで、簡便な予習課題を取り入れた授業を展開し、予習実施率の変化を追っていくこととした。

また、予習課題の内容としては、予習に対するコストの認知を軽減することを重視した。コストの認知とは、心理的な負担感を指す(Manalo, et al., 2017)。動画教材を視聴するなどの予習課題の場合、学生は1日に複数の授業を履修しているため、すべての科目の予習動画を視聴できるわけではなく、コストの認知を高めてしまうものと考えられる。また、各回の予習動画を作成することは教員にとっても非常に負担が大きい。そこで本研究では、授業で扱うテーマについて、自身の立場や根拠を整理しておくことを予習課題として取り入れた。たとえば、次回の授業で動機づけ理論とその応用方法について扱う場合には、事前に「やる気を高めるには報酬を用いるとよい」といった意見を提示し、「この意見に賛成か反対か立場を決定し、事前に自分の意見を考えておく」といったことを予習課題として提示した。このように、事前に考えておくだけでよい予習課題であれば5分程度で記述でき、動画を視聴することに比べると負担感が小さいため、予習に取り組むようになることが期待される。また、こうした予習課題であれば、教員は、動画や教材文などの予習教材を用意する必要はなく、事前に思考しておくべきテーマを提示するだけでよい。そのため、こうした予習課題は教える側にとってもコストが低く、多くの授業ですぐに導入することが可能であると考えられる。

### ④ RPの設計

授業後の振り返りについては、RPとして一般に行われている実践方法を採用した。具体的には、授業の最後に10分ほどの振り返りの時間を設け、A4サイズの手紙に「わかったこと」「わからなかったこと」「その他の感想」を記入するように求めた。また、複数の学生が共通してRPに記述した疑問点や、授業内容の理解を深める上で重要な記述を次の回の冒頭に取り上げ、補足説明を行うようにした。

### ⑤ 各クラスでの介入的指導

先述したように、目標設定と計画の段階の協議において、2名の授業者はそれぞれのクラスで工夫を取り入れることを決定した。まず、第二著者が担当するクラス(以降、解説クラス)では、予習課題として事前に思考させたテーマについて、授業者が、授業の中で関連づけながら解説を行うこととした。具体的には、「やる気を高めるには報酬を用いるとよい」という論題に対して賛成意見や反対意見を考える予習課題を与

えた場合には、次の授業において、報酬の影響を扱った動機づけ理論について解説し、予習で提示したテーマについて再度考えるとどうなるかを解説するようにした。このように授業者が予習課題と授業内の解説を積極的に関連づけていくことで予習課題が「授業者の解説の理解を深めるための準備」として捉えられると考えられる。また、予習で考えたことについて再考を求められることで、授業後の RP においても、自分の意見を授業内容と関連づけて精緻化する拡張記述が増加することが期待される。

一方、第一著者が担当するクラス（以降、解説・議論クラス）では、講義型授業に反転授業の要素を取り入れ、学生が予習課題で思考してきた内容について、学生同士で意見交換を行う時間を設けることとした。反転授業とは、オンライン上で講義動画を視聴してもらい、その内容の確認を授業の冒頭で行った上で、他の学生と協働的な活動を行う授業設計である（Bergmann and Sams, 2012；Bishop and Verleger, 2013；O'Flaherty and Phillips, 2015）。反転授業は近年、アクティブ・ラーニングを実現する授業設計として注目されているが（森と溝上, 2017）、この授業設計は、学生の予習を促す上でも有効であると考えられる。予習の実施を促す上では、予習の必要性を高めることが重要であるが（Shinogaya, 2018）、反転授業では授業中に予習内容をふまえて議論する時間が設定されているため、予習の必要性が高まる。そのため、たとえ講義型の授業であっても、こうした活動が授業内に設定されていることで、事前に自分の意見をまとめておく予習課題が「学生同士で意見交換を行うための準備」として捉えられ、予習実施が促されることが期待される。しかも、講義の中で他の学生と意見を出し合う時間が設けられていることで、授業者の解説講義を聞くだけよりも、様々な情報や意見を比較し、統合していく機会が与えられるため、授業の最後に行う RP では、知識同士を関連づける記述が多くなることが想定される。

## 2. 実践の対象

### ① 実践の対象者

東京都の国立大学において開講されている教育方法論の2クラスを対象とした。各クラスの授業者は第一著者と第二著者である。この授業は半期にわたって開講されている科目であり、多くの学生が2年時に履修する。解説クラスの受講生は94名（2年生90名、3年生1名、4年生3名、男子36名、女子58名）、解説・議論クラスの受講生は128名（2年生110名、3年生13名、4年生5名、男子54名、女子74名）であった。

### ② 各回の授業構成

授業は週に1回90分行われ、計15週で構成されていた。各回の授業では、教育心理学における理論や教育方法の原理について扱い、そうした理論からどのような学修指導上の工夫が導かれるかを論じた。解説クラスの授業では、教育心理学における理論や実践への応用方法について、予習課題とも関連づけながら解説講義を行った。解説クラスはPPTスライドを用いて行われ、予習課題もスライドで提示された。スライドの内容は資料として毎回の授業時に配付された。一方、解説・議論クラスの解説は板書形式で行われ、予習課題も、授業者が板書したものを学生が書き写した。また、授業の途中で、予習課題について学生同士で意見を交換する時間を設け、その後、議論の様子を踏まえて補足解説を行うようにした。意見交換の際には座席をこちらから指定することはせず、近くの席の学生と3名程度のグループを作るように指示した。また、両クラスとも、授業の最後に10分ほど時間をとってRPを記述してもらい、複数の学生が共通してRPに記述した疑問点や、授業内容の理解を深める上で重要な記述については、次の回の冒頭に取り上げて補足説明を行うようにした。なお、RPへの応答方法を検討した小野田と篠ヶ谷（2014）では、知識を関連づけるような質問（後述する「高次質問」）を重点的に取り上げていたが、本実践では様々な内容のRP記述を満

遍なく取り上げることとした。また、RP記述のカテゴリや分類基準は学生に伝えず、いずれの記述についても「いい解釈だ」「この点については多くの人が疑問に思っていたようだ」といった形で肯定的に評価するようにした。

### ③ 授業内容と予習課題

本実践の対象となった大学では、年末年始の休暇や大学入試のため、第9回以降の授業において、授業の間隔が2週間以上空くことが多く生じた。授業間の間隔が空いた場合、授業の直後に予習課題に取り組んだ学生は、その内容を忘れた状態で次の授業に出席することとなるため、第8回までの予習活動とは予習の効果が質的に異なるものと考えられる。そのため、本実践では第8回までの授業のみを検討の対象とした。

第2回の授業終了時から次の授業に向けた予習課題が提示されたが、第2回の授業までは正式な履修者が決定していなかったため、第3回の授業終了時から次の授業に関するテーマ（e.g., 思考力を高めるには、授業では教えずにじっくり考えさせるべきだ）を印刷したA4用紙を配付し、自分の立場（賛成・反対）とその根拠を記述して次の授業に持参するよう伝えた。また、個々の学生が事前に立場や根拠を記述する際に使用した情報リソースを尋ねる6項目（自分の経験、自分の考え、家族、友人、インターネット、テレビ、本、論文）も設け、それぞれ「はい」「いいえ」で回答（複数選択可）してもらった。この予習課題についてはあくまでも任意課題であり、評価対象としないことを伝えた。なお、予習の実施状況とRPの記述内容を把握できるよう、予習シートの裏面に罫線を印刷しておき、毎回の授業では、持参した予習シートの裏にRPを記述して提出してもらった。第8回までの授業内容と予習で提示されたテーマを表1に示す。

表1 各授業のタイトルと予習課題で提示されたテーマ

| 週        | タイトル     | 予習課題でのテーマ                      |
|----------|----------|--------------------------------|
| 解説クラス    |          |                                |
| 1        | 授業の進め方   | —                              |
| 2        | 知識と理解    | —                              |
| 3        | 学校での学習   | 学校で学習したことは、社会で役に立つ             |
| 4        | 教師のみとり   | 公平な視点で子どもを捉えることは可能だ            |
| 5        | 動機づけ     | 他者を「やる気にさせる」ことは可能だ             |
| 6        | 学級風土     | ルールが徹底された学級が児童にとって良い環境だ        |
| 7        | 学級目標     | 教師の期待は子ども達に影響を与える              |
| 8        | 道徳の教科化   | 道徳を教科として教えることは可能だ              |
| 解説・議論クラス |          |                                |
| 1        | 授業の進め方   | —                              |
| 2        | 学力とは     | —                              |
| 3        | 学習規律     | 学習規範は家庭で身につけるべきだ               |
| 4        | 授業設計     | 思考力を高めるには、授業では教えずにじっくり考えさせるべきだ |
| 5        | 動機づけ (1) | 報酬で勉強へのやる気を出させよう               |
| 6        | 動機づけ (2) | 勉強で人と競争させるのはよくない               |
| 7        | 協同学習     | 協同させる時は、能力の近い人同士で議論させるべきだ      |
| 8        | ICTの活用   | 教科書はすべてデジタル化すべきだ               |

#### ④ 倫理的配慮

本研究では、授業内容に関するアンケートを行う際に、学生に対して、大学教育の質の向上のために受講生の学修について分析を行うこと、分析の結果は学会や論文などで発表される可能性があること、その際、データは統計的に処理され、個人情報は一切漏えいすることがないことを伝え、自身のデータが研究目的で使用されることに対して同意するか否か回答を求めた。その上で、同意すると回答した学生のデータのみを以下の分析に使用することとした。

### 3. 実践の経過

#### ① 前半（授業改善前）

以下、レッススタディの流れに沿いながら、授業改善が行われる前の協議および授業の様子について述べる。まず、1) 目標設定と計画の段階では、予習に関しては、学生が自らの経験や体験、調べてきた情報をもとに自分の意見をもって授業に参加すること、授業後の振り返りについては、自らの経験と授業内容を関連づけ、授業で扱った内容を現実生活に応用できる可能性を探索するなど、学生が授業内容を現実世界に拡張して解釈することを目標として授業を設計した。その結果、先述したように、異なる介入をそれぞれのクラスで行うことが決定された。

2) 研究授業では、毎回の授業を研究授業の対象として位置付けた。図1に示されているように、第4回の時点で学生の予習実施率は期待するほど高くなく、しかも、どちらのクラスでも第4回から第5回にかけて減少する傾向が認められたのである。また、予習シートの内容を見ても、自身の立場を裏づける情報リソースを参照していた学生はあまり見られておらず、根拠となる情報を参照せずに、直感的に賛成か反対かを述べている様子が見て取れた。

上述の状況をふまえ、2名の授業者は、第5回目の授業が終了した段階で、それぞれのクラスにおける介入の問題点について3) 授業検討を行った。その中で、両クラスで予習課題に取り組むことの必要性や必然性が感じられていない可能性が指摘された。解説クラスの場合、予習課題について授業内で関連づけながら

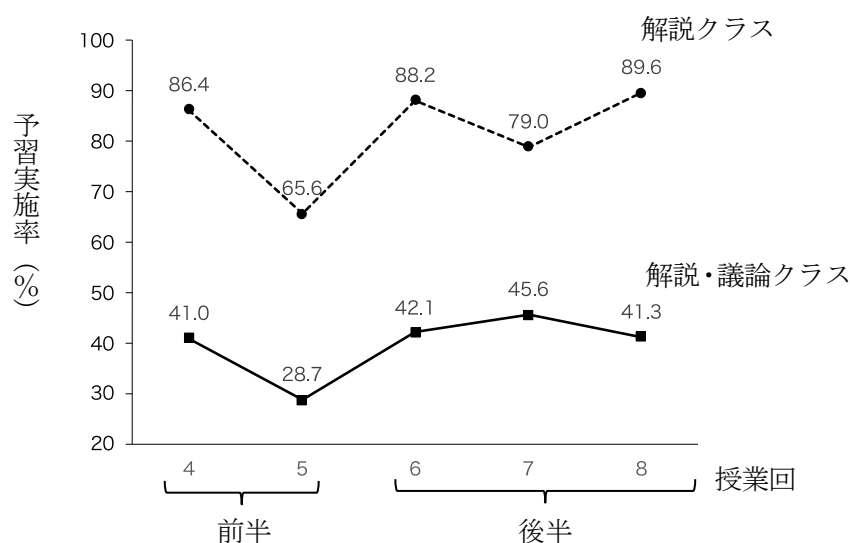


図1 予習実施率の推移

解説を行っていたが、授業後の RP には、「予習課題はなんのためにやっているのでしょうか」といった記述が見られていた。また、解説・議論クラスにおいても、学生が予習を行う意義や必要性をあまり感じられていない様子が見てとれ、実際に、第5回の授業では予習の実施率が3割以下に低下してしまっていた。この原因としては、解説講義と意見交換の順序の問題が考えられた。解説・議論クラスの授業では、まず、予習課題に関連する理論や実証的知見について、授業者が解説講義を行った上で、学生に意見交換を行わせていたが、こうした構成の場合、授業者による解説の内容が意見交換を行う上での有益な情報となるため、学生としては、事前に意見交換の準備をしておく必要性が感じられなかったのではないかと推察された。

加えて、第二著者からは、意見交換の行わせ方も、予習の必然性を減じている可能性があるとの指摘がなされた。第4回や第5回の意見交換では、近くに座っている人と互いの意見を交換することが求められたが、こうした指示では、意見交換に参加しない学生がただでなく、学生は単に自身の意見を伝えるだけでよい、ため、「なぜ自分はこの立場（賛成・反対）を選択したのか」の根拠となる情報が乏しくても相互作用が成立してしまう。そのため、予習の段階で自身の立場選択の根拠となる情報を明確に把握しておく必要性を高めるためには、単に意見を述べ合うだけにならないような配慮が必要であるとの指摘がなされた。一方、第一著者からは、予習シートでの記述をいくつか取り上げて共有することで、解説クラスにおいても予習の必要性が高められるのではないかと提案がなされた。

上述した協議をもとに、4) 統合強化の段階として、両クラスで授業に改善を加えることとした。まず、解説クラスでは、第一著者の助言を受け、授業冒頭に授業者が RP の記述内容だけでなく、予習の記述内容も紹介することとした。具体的には、授業の最初に自分が事前に考えてきたことを確認する時間として予習シートを見返す時間を2分程度とり、その間に授業者が机間巡視を行い、授業内容と深く関連していたり、発展的な内容となっている予習課題の記述をチェックした。その上で、解説講義の中で関連する内容を扱う際に、学生の予習記述の内容に言及するようにした。情報発信に関する研究では、書き言葉 (e.g., Holliday and McCutchen, 2004; Midgette et al., 2008)、話し言葉 (e.g., Fussell and Krauss, 1989) を問わず、「情報の受け手」への意識が情報発信に影響を与える重要な要因として見なされている。実際に、授業内容に関する感想においても、想定する「情報の受け手」が異なることで記述される内容が発信される情報が異なることが指摘されている (e.g., Onoda, 2011)。こうした知見をふまえると、上記のような変更により、学生は予習に取り組む際、授業者や他の学生を「情報の受け手」として強く認識するようになることが考えられた。

一方、解説・議論クラスでは、意見交換の時間を授業の冒頭に設けるようにした。このようにすれば、学生は意見交換の際に授業者が解説した情報を使用できないため、自身の意見やその根拠を他の学生に伝える意識がより強められ、予習で事前に思考しておく必要性が高まるものと予想された。さらに、第二著者の助言により授業中の意見交換のさせ方にも変更を加え、まったく意見交換を行わない学生が生じないように、5名掛けの机を必ず2人もしくは3人で使用することとし、意見交換を行う際は同じ机の人と行うように指示した。また、単に互いの意見を伝えるのではなく、テーマについて話し合い、グループごとに、社会に提言するための結論を出すよう指示するようにした。意見交換中に机間巡視し、その後の補足解説では、グループでどのような提言がなされていたかを2つほど紹介するようにした。このように、グループで1つの意見に集約するよう指示することで、全員が自身の意見とその根拠を提示することが求められ、予習課題に取り組むようになることが期待された。

## ② 後半（授業改善後）

後半の1) 目標設定と計画の段階では、前半部の授業研究の結果をふまえ、上述した改善を加えることで、予習と振り返り活動を促進することを目指すこととした。ふたたび、毎回の授業を2) 研究授業の対象とし

て位置付け、授業を展開した。各回の授業における出席者のうち、予習をしてきた学生の割合を「予習実施率」として算出したところ、図1に示すように、解説クラスでは、第6回で予習実施率が回復し、その傾向は第8回まで継続していた。また、授業終了前に10分間のRP記述時間において、介入変更前には時間内に記述を終えて退席する学生が2割程度見られていたが、変更後には毎回1、2名にまで減少し、逆に、授業時間を超えて、次の休憩時間に入って記述を終える学生が1割程度見られるようになった。

また、解説・議論クラスにおいても、前半と同様、校外実習での公欠者が多かったものの、第5回で28.7%に落ち込んだ予習実施率が、第6回で40%以上に増加し、その後第8回まで維持された。また、授業途中の意見交換では、どのグループにも属さずに一人で黙々と考える学生は見られなくなり、単に自身の意見を紹介し合うだけでなく、グループとしての結論を出すために意見を統合しようとするやりとりが見られるようになった。

そこで、後半の3) 授業検討として、毎回の授業後に、授業のみとりや気づき、予習課題やRPの内容を共有して協議を行った。また、第8回の講義終了後には、授業後半で得られたデータについて統計的解析を行った。その結果を以下に示す。なお、分析では、授業設計の変更前後の各時期に1回以上出席した学生のうち、本研究に対して同意を得た213名（解説クラス94名、解説・議論クラス119名）のデータを使用した。以降の分析は全て、オープンソースの統計環境であるR 3.5.3 (R CORE TEAM, 2019) 上で行った。

分析では、RPの記述を文単位で抽出し、小野田と篠ヶ谷(2014)のカテゴリに分類した。まず、「わかったこと」に関する記述を1) 授業内容に対する感想や主張を伝えるだけの「単純記述」(e.g., 学習の捉え方として行動主義や認知主義があることを学んだ)と、2) 授業内容を自分の経験と結びつけたり、授業間の関連づけをしたりするなど、学生自身の推論が加えられている「拡張記述」(e.g., 有意味受容学習について、既有知識の差によって学習達成度は大きく変わってしまうのではないかと感じた)に分類した。

また、「わからなかったこと」については、3) 聞き逃した点の確認や、用語の確認などを行う「低次質問」(e.g., 仮説実験授業の内容がわからなかった)と、4) 授業内容を日常生活や教育場面に当てはめて推論を行い、知識を関連づけている「高次質問」(e.g., 勉強が苦手な子が1日1時間勉強した場合、努力をしたと認めてあげて方略帰属に移行していいのか)に分類した。授業前半の初回にあたる第4回のRP記述について、教育心理学を専攻する大学生と第一著者で独立に分類を行ったところ、一致率は $\kappa = .77$ となり、十分な一致率が得られたため、残りの授業回については大学生に単独で分類してもらった。

このようにして分類された各カテゴリの記述数を用いて、「各時期の記述総数/各時期の出席数」を算出し、各時期のカテゴリ記述数として分析に使用した。各クラスの前半と後半の授業におけるカテゴリ記述数を表2に示す。群（解説クラス、解説・議論クラス）と時期（前半、後半）の2要因分散分析を行なった結果を表3に示す。分析の結果、単純記述、拡張記述、低次質問において、群と時期の交互作用が見られたため、各クラスでの時期の単純主効果を検討したところ、解説クラスでは、単純記述 ( $F(1, 93) = 29.08, p < .01, \eta_g = .085$ ) と拡張記述 ( $F(1, 93) = 29.54, p < .01, \eta_g = .091$ ) が有意に増加しており、低次質問は有意に減少していた ( $F(1, 93) = 5.92, p < .05, \eta_g = .031$ )。一方、解説・議論クラスでは、拡張記述 ( $F(1, 118) = 9.14, p < .01, \eta_g = .020$ ) と低次質問 ( $F(1, 118) = 15.45, p < .01, \eta_g = .047$ ) が有意に増加していた。また、高次質問では有意な交互作用は見られておらず、前半よりも後半で少なくなっていることが示された。以上の結果をまとめると、前半から後半にかけて拡張記述が増加し、高次質問が低下するという傾向は両クラスで一致しており、単純記述や低次質問についてはクラス間で異なる挙動が見られたといえる。

最後に、後半の授業における4) 統合強化を行なった。この段階で議題となったのは、解説・議論クラスの予習実施率についてである。解説・議論クラスでは、第6回で予習実施率が回復したものの、解説クラスと比べると予習実施率が一貫して低く、2名の授業者はこの点について協議した。

解説クラスを担当した第二著者は、解説クラスの場合、授業者が巡回しながら予習内容を取り上げたこと

表2 授業改善前後のRP記述量（カッコ内はSD）

| クラス   | 単純記述        |             | 拡張記述        |             | 低次質問        |             | 高次質問        |             |
|-------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
|       | 前半          | 後半          | 前半          | 後半          | 前半          | 後半          | 前半          | 後半          |
| 解説    | 1.23 (0.69) | 1.71 (0.88) | 1.12 (0.87) | 1.71 (1.01) | 0.13 (0.28) | 0.05 (0.13) | 0.64 (0.65) | 0.54 (0.49) |
| 解説・議論 | 1.27 (0.88) | 1.38 (0.74) | 1.86 (1.12) | 2.16 (1.01) | 0.07 (0.22) | 0.18 (0.30) | 0.56 (0.63) | 0.35 (0.41) |

表3 カテゴリ記述量に関する分散分析の結果

|          | df     | 単純記述    |          | 拡張記述    |          | 低次質問    |          | 高次質問    |          |
|----------|--------|---------|----------|---------|----------|---------|----------|---------|----------|
|          |        | F       | $\eta_g$ | F       | $\eta_g$ | F       | $\eta_g$ | F       | $\eta_g$ |
| 時期の主効果   | 1, 211 | 22.77** | .032     | 36.47** | .046     | 0.72    | .001     | 12.19** | .019     |
| 交互作用     | 1, 211 | 9.10**  | .013     | 3.94*   | .005     | 19.66** | .038     | 1.30    | .002     |
| 時期の単純主効果 |        |         |          |         |          |         |          | —       | —        |
| 解説クラス    | 1, 93  | 29.08** | .085     | 29.54** | .091     | 5.92*   | .031     | —       | —        |
| 解説・議論クラス | 1, 118 | 1.66    | .005     | 9.14**  | .020     | 15.45** | .047     | —       | —        |

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ 

で、たとえ評価対象とはならなくとも、予習課題に取り組む際に、自身の記述が授業者に読まれることをより強く意識するようになり、それゆえ高い予習実施率となった可能性を指摘した。一方、解説・議論クラスを担当した第一著者は、解説クラスとは異なり、予習課題がスライドの形で提示されず、資料としても配付されなかったことや、予習内容について授業者が授業の中で直接言及する機会がなかったことを、予習実施率の低さの原因として挙げた。こうした点をふまえ、授業が授業者によって設計され、運営されている以上、授業者の視点や働きかけを意識させることはやはり重要なのであろうとの解釈が行われた。また、協議の中では、RPの中に予習の必然性を高める工夫を取り入れることが新たに提案された。具体的には、RPを記述させる際に、予習内容と授業内容を関連づけた記述を求めるといった工夫が考えられるとの指摘がなされた。ただし、先述したように、年末年始の休暇や入学試験の期間になると、学生の予習活動を維持させることはさらに困難になることが予想されたため、この時に提案された工夫については別の授業で改めて取り組んでいくこととした。

## 考 察

### ① 予習実施率に生じた変化

第5回の授業において、両クラスで予習の実施率が低下していたことから、「テーマについて考えてくる」という、授業者からみればきわめて容易な課題であっても、学生の自発的な予習実施は期待しにくいことが示された。これは、授業者の見立てのように、授業前半では両クラスとも予習の必要性が学生にとって不明瞭であったことが原因であったと考えられる。

こうした協議をもとにそれぞれのクラスで授業改善を行なった結果、第6回で予習実施率は向上し、その後維持された。解説クラスでは、授業の中で、学生の記述を授業の中で授業者が実際に取り上げたことで、評価対象とはならないとはいえ、学生にとって授業者が、予習課題の際に想定する「情報の受け手」として

より強く認識されるようになったのではないかと考えられる。また、自身の予習課題での記述が授業の中で取り上げられることで、授業者だけでなく他の学生も予習活動の「情報の受け手」に加わることとなり、それが予習の積極的な取り組みにつながった可能性も考えられる。小野田と篠ヶ谷（2014）では、RPの記述を授業者が取り上げることで、学生のRPの記述が変容したことが報告されているが、本研究の結果は、それと同じ現象が予習においても生じたものと考えられる。また、解説・議論クラスでは、授業の途中ではなく、冒頭に学生同士の意見交換の時間を設けるようにし、意見交換のさせ方にも変更を加えたために、学生は授業者の解説講義の内容を意見交換の際の根拠とすることができず、予習の時点で根拠を伴わせながら自身の意見を考えておく必要性が高まったことが示唆される。

## ② RPの記述の変化

RPの記述に関して、解説クラスでは、介入に変更を加えたことで、単純記述や拡張記述が増加した。授業者が一貫して様々な記述を満遍なく取り上げたにも関わらず、RP記述に質的な変化が見られた理由としては、変更後の介入の影響が考えられる。解説クラスの後半の授業では、予習課題で学生が思考してきた内容を授業者が授業の中で取り上げた。こうした働きかけにより、予習のみならずRPでも「情報の受け手」として授業者をより意識するようになり、授業内容をもとに思考したことを重点的に記述するようになったために、単純記述や拡張記述が増加したものと考えられる。そして、単純記述や拡張記述が増加した分だけトレードオフが生じ、質問数が全般的に減少したものと考えられる。

解説・議論クラスでも解説クラスとまったく同じやり方で、授業の冒頭にRP記述を取り上げていたが、解説・議論クラスでは、授業設計に変更を加えたことで、単純記述には変化が見られず、拡張記述が増加した。学生同士で意見交換を行う場合、授業者の解説講義に加え、他の学生の意見や考えにも触れることとなる。特に、後半の授業では、授業者の解説講義をふまえずに意見交換がなされたために、意見交換の中で自身の経験や考えを根拠として挙げる必要性が生じ、RPでは「競争社会で生き抜くには競争させる必要があります、グループ内のメンバーもそれなりに人と競うことをモチベーションにやってきたことがわかった」などのように、他者の経験に自身の推論を加える記述（拡張記述）が増加した可能性が考えられる。また、実践上の問題への対処法を問う高次質問については意見交換の中で互いに発信できていたために、RPではむしろ「セルフハンディキャッピングが分からなかった」「Dweckらの研究の詳しい内容が知りたいです」などのように、学生同士では解消できない事実確認のための低次質問が増加したものと考えられる。また、拡張記述や低次質問の増加によってトレードオフが生じ、特に記述に負担のかかる高次質問が減少した可能性がある。本研究は大人数の講義型授業を対象としているため、授業内で行われた意見交換の内容までは把握できておらず、上記の考察はRP記述に基づく推測的解釈となる。しかし、授業改善の結果、授業者や学生、授業内容が異なる2つのクラスにおいて拡張記述が増加したことは、重要な結果であるといえる。

## ③ 本研究の意義

近年では、授業外学修の重要性が指摘され、事前や事後の学修の充実が求められるようになった（e.g., 教育課程研究会, 2016; 森と溝上, 2017）。こうした中、反転授業のように、授業外の学修を前提とした新たな授業方法が考案され（Bergmann and Sams, 2012）、その報告も多く見られるようになってきている。しかし、学生の予習実施率そのものをどのように高めるかについては、十分な検討がなされてきていなかった。こうした問題意識のもと、本研究では、レッスンスタディの枠組みを援用しながら、2名の大学教員が授業外での予習行動を促進すること、授業後の振り返りの質を高めることを目的として、協同して授業改善を行った。その結果、2つのクラスではもともとの予習実施率が異なっていたものの、どちらのクラスでも予習実施率の低下が見られ、たとえ負担の少ない予習活動にしても学生の自発的な取り組みを促すことは難し

いこと、学生にとっての必然性を高めるためのさらなる工夫が必要となることが示された。授業外学修の効果的な導入を実現する上では、授業外での学修課題を設定するだけでなく、授業外学修に取り組む必然性を高める工夫を授業の中に組み込んでいく必要があることが示唆された点で本研究の知見は意義深い。

加えて、本研究のように、複数の大学教員が協議を行いながら、各自の授業の改善を図っていくような実践報告はあまり見られない。小中高では、授業力を向上させることを目指して、教員同士での研究授業の参観および事後討議が頻繁に行われ、研究報告もなされているが、こうした活動を大学で行うには、ある程度の強制力をもったトップダウンでの指針が必要になると考えられる。本研究は、そうした指針がない状況において、同じ問題意識を有する少数の大学教員が、レッスンスタディの枠組みに沿って協議を行ったことで、授業の問題点の抽出と改善を行っていくことが可能であることを示した。本実践においても、第二著者から第一著者に対して議論の行わせ方の改善策が提案され、逆に第一著者から第二著者に対して、講義形式の授業の中で予習の必要性を高める方法が提案された結果、それぞれの授業が改善されるに至った。こうした授業改善は単独で自分の授業を分析しているだけでは達成し得なかったことであり、その他にも、自分では気づけなかった視点や、問題点、改善方法が協議の中で浮かび上がってきたことも両教員の実感するところであった。教員が教育のプロフェッショナルではなく、教育への関心が必ずしも高いとはいえない大学教育においては、たとえ少人数であっても、同じ問題意識を有する教員が互いの授業について協議しながら授業改善を図る取り組み自体に、実践的価値および学術的価値があるといえる。

#### ④ 今後の課題と展望

本研究の課題としては、授業実施時期の特徴から、全授業回を対象にできなかった点が挙げられる。後半の授業に関する協議では、予習と RP を関連づける新たな工夫が考案されたため、今後はその効果について検討していく必要があるだろう。また、本研究の実践に際しては、他の大学教員にも協同的授業改善の取り組みへの参加を打診したが、積極的な参加の意図を示した教員がいなかったため、2名での実施となった。本研究が発信され、こうした取り組みの実践的価値や学術的価値が伝わることで、さらなる参加者の増加を期待することができ、小中高で行われているような取り組みを大学教育の中でも行なっていくことができるようになる。本研究の知見が、大学教員間の協同を促し、大学教育の質の向上につながることを期待したい。

## 引用・参考文献

- Angelo, T. A., & Cross, K. P. (1993). Classroom assessment techniques: A handbook for college teachers Jossey-Bass.
- ベネッセ総合教育研究所 (2016) 第3回大学生の学習・生活実態調査報告書 [https://berd.benesse.jp/up\\_images/textarea/05\\_daigakusei\\_sec2\\_P30\\_39.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/textarea/05_daigakusei_sec2_P30_39.pdf) accessed 2021.02.12)
- Bergmann, J. & Sams, A. (2012). Flip your classroom: Reach every student in every class every day. International society for technology in education.
- Bishop, J., & Verleger, M. (2013). Testing the flipped classroom with model-eliciting activities and video lectures in a mid-level undergraduate engineering course. Proceedings - Frontiers in Education Conference, FIE, 161-163.
- Cerbin, W., & Kopp, B. (2006). Lesson study as a model for building pedagogical knowledge and improving teaching. International journal of teaching and learning in higher education, 18 (3), 250-257.
- Chi, M. T. H., Lewis, M. W., Reimann, P., & Glaser, R. (1989). Self-explanations: How students study and use examples in learning to solve problems. Cognitive Science, 13, 145-182.
- 中央教育審議会 (2012). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成す

- る大学へ～（答申）[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/giji/\\_icsFiles/afildfile/2012/08/30/1325118\\_4\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afildfile/2012/08/30/1325118_4_1.pdf)（accessed 2018.03.13）
- Cooper, H., Steenbergen-Hu, S., & Dent, A. L. (2012). Homework. In K. R. Harris, S. Graham, T. Urdan, A. G. Bus, S. Major, & H. L. Swanson (Eds.), *APA handbooks in psychology*®. APA educational psychology handbook, Vol. 3. Application to learning and teaching (pp. 475-495). American Psychological Association.
- Eccles, J. S., & Wigfield, A. (2002). Motivational beliefs, values, and goals. *Annual Review of Psychology*, 53, 109-132.
- Erickson, L. E., & Erickson, P. A. (2013). Predicting student performance using online one-minute papers. *Journal for Economic Educators*, 13 (1), 6-13.
- Fussell, S. R., & Krauss, R. M. (1989). The effects of intended audience on message production and comprehension: Reference in a common ground framework. *Journal of experimental social psychology*, 25 (3), 203-219.
- Holliway, D. R., & McCutchen, D. (2004). Audience perspective in young writers' composing and revising. *Revision Cognitive and Instructional Processes* (pp. 87-101). Springer, Dordrecht.
- Holtzman, R. (2007). Adapting the one-minute paper for active learning. *Academic Exchange Quarterly*, 11 (2), 97-101.
- King, A. (1992). Facilitating elaborative learning through guided student-generated questioning. *Educational Psychologist*, 27 (1), 111-126.
- King, A. (1994). Guided knowledge construction in the classroom: Effects of teaching children how to question and how to explain. *American Educational Research Journal*, 31 (2), 338-368.
- Lewis, C. (2002). *Lesson Study: A Handbook of Teacher-Led Instructional Change* (Philadelphia: Research for Better Schools).
- Manalo, E., Uesaka, Y., & Chinn, C. A. (2017). Promoting spontaneous use of learning and reasoning strategies: Theory, research, and practice for effective transfer. Routledge.
- McElroy, B., & Coman, C. (2002). Writing to learn in managerial accounting classrooms: Further evidence about student performance and perception. *Business Quest*.
- Midgette, E., Haria, P., & MacArthur, C. (2008). The effects of content and audience awareness goals for revision on the persuasive essays of fifth-and eighth-grade students. *Reading and Writing*, 21 (1), 131-151.
- 森明子・溝上慎一 (2017). *アクティブラーニング型の授業としての反転授業* ナカニシヤ出版
- O'Flaherty, J., & Phillips, C. (2015). The use of flipped classrooms in higher education: A scoping review. *The Internet and Higher Education*, 25, 85-95.
- Onoda, R. (2011). How motivation of writing were affected by address: Focusing on contents of Reaction-paper. *World Association of Lesson Studies International conference 2011 Programme Book*, 213.
- 小野田亮介・篠ヶ谷圭太 (2014). リアクションペーパーの記述の質を高める働きかけ—学生の記述に対する授業者応答の効果とその個人差の検討—*教育心理学研究*, 62 (2), 115-128. <https://doi.org/10.5926/jjep.62.115>
- R CORE TEAM (2019). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria.. URL <https://www.R-project.org/>. (accessed 2019.12.10)
- Roback, P., Chance, B., Legler, J., & Moore, T. (2006). Applying Japanese lesson study principles to an upper-level undergraduate statistics course. *Journal of Statistics Education*, 14 (2), 1-20.
- Roscoe, R. D., & Chi, M. T. (2007). Understanding tutor learning: Knowledge-building and knowledge-telling in peer tutors' explanations and questions. *Review of Educational Research*, 77 (4), 534-574.
- Ryan, C. S., & Hemmes, N. S. (2005). Effects of the Contingency for Homework Submission on Homework Submission and Quiz Performance in a College Course. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 38 (1), 79-88.
- 篠ヶ谷 圭太 (2012). 学習方略研究の展開と展望—学習フェイズの関連づけの視点から—*教育心理学研究*, 60 (1), 92-105.

- Shinogaya, K. (2018). Motives, beliefs, and perceptions among learners affect preparatory learning strategies. *Journal of Educational Research*, 111, 612-619.
- Stead, D. R. (2005). A review of the one-minute paper. *Active Learning in Higher Education*, 6 (2), 118-131.
- Titsworth, B. S., & Kiewra, K. A. (2004). Spoken organizational lecture cues and student notetaking as facilitators of student learning. *Contemporary Educational Psychology*, 29 (4), 447-461.
- Vonderwell, S. (2004). Assessing online learning and teaching: Adapting the minute paper. *TechTrends*, 48 (4), 29-31.
- Zimmerman, B. J., & Schunk, D. H. (Eds.). (2011). *Handbook of self-regulation of learning and performance*. Taylor & Francis.



## 教育実践研究

## WebClassを用いた自己分析診断表による試験結果の分析

竹内 麗理<sup>\*1)</sup>, 平塚 浩一<sup>1)</sup>, Bhawal Ujjal Kumar<sup>1)</sup>, 青木 秀史<sup>1)</sup>,  
丸山 満博<sup>1)</sup>, 渡邊 信幸<sup>1)</sup>, 小倉 直美<sup>2)</sup>

日本大学松戸歯学部 <sup>1)</sup>生化学・分子生物学講座, <sup>2)</sup>顎顔面外科学講座

## Group Analysis by Academic Ability Based on Test Results Using Self-Check Table

Reiri TAKEUCHI<sup>1)</sup>, Koichi HIRATSUKA<sup>1)</sup>, Ujjal Kumar BHAWAL<sup>1)</sup>, Hidefumi AOKI<sup>1)</sup>,  
Mitsuhiro MARUYAMA<sup>1)</sup>, Nobuyuki WATANABE<sup>1)</sup>, Naomi OGURA<sup>2)</sup>

Departments of <sup>1)</sup>Biochemistry and Molecular Biology, <sup>2)</sup>Maxillofacial Surgery,  
Nihon University School of Dentistry at Matsudo

We build learning activities and monitor student progress using our original “self-check table”. The table is set up to investigate the individuality of the students knowing the answers or choosing the wrong answers to the examination questions. Paper-based self-check table was replaced by a computer-based WebClass system in 2015. This study aims to analyze the enormous amount of data generated for the period 2016-2018 and to emphasize the importance of self-check tables.

The students were divided into three groups (high, middle, and low) based on their exam score (100-80%, 79-60%, and 59-0%), respectively. The differences in the students knowing the answers or choosing the wrong answers to the questions was analyzed in each group.

The cumulative total number of the subject was 1,190. The number of students were 452 (38%), 526 (44.2%), and 212 (17.8%) in high, middle, and low groups, respectively. The total number of the checkboxes in the table was 79,660. The number of correct answers, incorrect answers, and non-response were 53,081, 20,755, and 5,824, respectively.

The “self-check table” may prove invaluable to help students adapt to the learning.

キーワード：卒前教育, 試験結果, 自己分析, 個別指導, WebClass

### Keywords:

Pre-graduate education, Test result, Self-analysis, Tutorial, WebClass

## 緒 言

1991年の大学設置に関する規制緩和により、1990年に372校であった私立大学は2012年には605校へと急増し、大学全入時代となると同時に入学生の学力低下が問題となっている（石井ら、2007；武田ら、2015）。加えて、18歳人口の減少も相まって、入学者競争倍率の低下による医学部学生の学力低下や専攻分野への適応度の低下（前田と羽野、2013；石井ら、2003a；石井ら、2003b）が報告されている。

日本大学松戸歯学部では、教育改革の1つとして「平成22（2010）年度新カリキュラム」を進め、個別

\*E-mail: takeuchi.reiri@nihon-u.ac.jp

投稿：2020年9月7日 受理：2021年11月26日

に単位が設定されていた「講義」および「実習」をまとめ、一つの学科目として「講義・実習」を行っている。これにより、「講義」と「実習」の両時間枠（コマ）が統合され、前・後期の設置時期の振り分けをはじめ、授業形態およびその回数などを単位数に応じたコマ数で、自由にプログラム構築することが可能となった。

我々は2011年度から、それまで行われていた前期「生化学（講義；3単位）」と後期「生化学実習（1単位）」を合わせ「生化学（4単位）」として、前期のみに設定し、水曜日9時～17時での講義・演習・実習の統合型授業を実施している。この統合型授業に関する概要、および、学生の知識の習得や学修態度・学修意欲に与える効果については以前に報告している（平塚, 2013; 平塚ら, 2014）。本プログラムの実施により、座学における学生成績はそれ以前と比較し顕著に上昇した。また、プログラム構成要素の流れである「予習」→「講義」→「演習」→「確認試験（Check Test：CT）」→「口頭試問」のすべてに対し、履修回数や学力レベルの違いに関わらず多くの学生から高い支持を得ていることが学生アンケート調査より判明した。加えて、プログラム1つ1つに対し、高いモチベーションで積極的に参加していることが学生アンケート内のコメントから読み取れた、また、これまでの受け身の授業から積極的に参加する授業へと、学生の行動変容の観察から担当するすべての教員が評価した（平塚ら, 2014）。

「生化学」の授業全体を「基礎生化学領域」（10ブロック）、「一般生化学領域」（6ブロック）、および「口腔生化学領域」（4ブロック）の3大領域に分類し、各領域終了後にMCQ形式の平常試験（「領域別試験」）を紙媒体で実施している。試験終了後、直ちに出题者による解説講義を行い、同時並行で他の教員によるマークシート採点処理を施し、解説講義終了後ただちに個人成績表を返却することで、各自の勉強成果を客観的に明瞭化し、自己反省する機会をつくっている。

統合型授業を実施することで全体の平均点は顕著に向上したものの、成績不振者はどうしても一定の割合存在し課題となっている。このような学生は、結果の出せる学修方法が身についていないばかりでなく、本質的に自分が理解できない所が分からない等、客観的に判定するすべを確立しておらず、それを補う第三者による個別指導がどうしても必要であると考えられる（武田ら, 2015）。本プログラムの「演習」や「口頭試問」は、個別指導を含む内容であり、特に成績不振者から高い支持を得ているが、それでも授業時間内の限られた中でしか対応できない。そこで我々は、学生が記入する「自己分析診断表」を独自に作成し、学力向上のサポートにあたった。この診断表は試験の1つ1つの設問に対して、正解・不正解となった理由を自己分析するものである。診断表は紙ベースで実施していたが、2015年度からはWebClassを用いてインターネット上で実施している。本研究は2016～2018年度の3年間の自己分析診断表から得られた膨大なデータを分析することで新規に得られた結果を考察し今後の教育に生かすことを目的として行った。下記の結果が主に得られた。アンケート総選択数は79,660であった。高得点率群（100～80%）、中得点率群（79～60%）、低得点率群（59～0%）となるに従い、平均正解率が約20%ずつ減少し、不正解の割合が約15%ずつ増加した。

## 方 法

### 1) 調査方法

2016年度～2018年度の3年間に、日本大学松戸歯学部2年次生の学科目「生化学」で、年3回の5択MCQ式平常試験（第1回100問、第2回60問、第3回40問、合計200問）を行った。試験終了後の解説講義の際に、WebClass上に構築した自己分析診断表の回答（択一式アンケート）を学生に実施させた。自己分析診断表は平常試験に出題した各設問に対する学生の正解・不正解の理由を問うものである。自己分析

診断表の質問項目は、この表を作成する以前に長期にわたりおこなっていた、学生との試験結果に関する個別面談での経験を基に作成した。学生に「この問題は正解であったが、どのように正解できたのか」「この問題は不正解であったが、なぜ不正解となったのか」などと質問した際に、学生が「自信ありました」「2つにまでは絞れたのですが」「偶然です」「勉強不足で、この範囲までは手を付けていませんでした」「まったく分かりませんでした」などと回答したことを参考としている。これらは学生の言葉なので、学生への質問項目として適切で、学生が自己分析診断表に回答しやすいであろうと考えた。得られたデータをエクセルへ移行し、個々の平常試験の設問に対する回答とその学生成績を照らし合わせて相関を分析した。

## 2) 分析方法

3年間合計9回実施された各平常試験の総得点率から、神林の方法（神林，2011）および日本大学松戸歯学部成績評価基準を基に、学生をそれぞれ高得点率群：100～80%，中得点率群：79～60%，低得点率群：59～0%の3群に分類した。日本大学松戸歯学部ではGrade Point Average（GPA）制度を導入しており、100～60点を合格、59点以下を不合格と評価している。本研究では合格判定の基準範囲を2分割し不合格判定の基準とともに使用し3群とした。

自己分析診断表での平常試験の各試験問題に対する学生の回答は、正解の理由（経緯）5種類、不正解の理由（経緯）5種類に加え無回答の合計11種類のうち、いずれか1つとなる（Table 1）。これら全ての回答の合計を100%とし、正解、不正解、無回答の割合を算出した。また、正解の理由5項目の合計選択数を100%，または、不正解の理由5項目の合計選択数を100%として、正解または不正解の各理由の割合を算出した。

各得点率群間の特徴を調査するために「無回答」選択肢のある者を除いたのち、各学力別群における「自信をもって正解」と「消去法で正解」の各人の合計選択数を算出し、得点率との関係を比較した。また、「2つに絞り正解を選択」に対する「2つに絞り誤答を選択」の割合を算出した。

## 3) 統計学的解析

正解・不正解の各理由において、高・中・低得点率群間の相違はTukey-Kramer法により検証した（池田，

Table 1 自己分析診断表（択一式アンケート）

### 試験問題番号〇〇〇

|                          |
|--------------------------|
| 1. ○ 正 解／自信をもって正解        |
| 2. ○ 正 解／2つに絞り正解を選択      |
| 3. ○ 正 解／消去法で正解          |
| 4. ○ 正 解／全くわからず偶然正解      |
| 5. ○ 正 解／その他             |
| 6. ○ 不正解／問題の意味が読み取れない    |
| 7. ○ 不正解／2つに絞り誤答を選択      |
| 8. ○ 不正解／試験勉強不十分な範囲      |
| 9. ○ 不正解／自己採点の際には正解の選択可能 |
| 10. ○ 不正解／「勘違い」か、その他     |

2019)。また、「自信をもって正解」と「消去法で正解」の合計選択数と学生の得点率との相関は、パラメトリックでの回帰直線と相関係数を求めることで検証した。

## 結 果

### 1) 得点率群の対象者数

学生数は2016年度147名（うち再履修者24名）、2017年度138名（うち再履修者7名）、2018年度140名（うち再履修者23名）であった。3年間に行われた全9回の平常試験（第1回～第3回）に対する延べ人数は1,190名となった。各得点率群での内訳は、高得点率群452名（38.0%）、中得点率群526名（44.2%）、低得点率群212名（17.8%）である。また、各群における平均得点率はそれぞれ、高得点率群 $87.3 \pm 1.2$ 点、中得点率群 $70.2 \pm 0.1$ 点、低得点率群 $50.5 \pm 0.9$ 点であった（平均値 $\pm$ 標準偏差）。自己分析診断表の回収率は98.8%、有効回答率は92.7%であった（Table 2）。

Table 2 平常試験成績における分類（人数）

| 平常試験  | 2016 |     |     | 2017 |     |     | 2018 |     |     | 総 計   |
|-------|------|-----|-----|------|-----|-----|------|-----|-----|-------|
|       | 第1回  | 第2回 | 第3回 | 第1回  | 第2回 | 第3回 | 第1回  | 第2回 | 第3回 |       |
| 高得点率群 | 29   | 83  | 103 | 8    | 71  | 41  | 19   | 62  | 36  | 452   |
| 中得点率群 | 69   | 46  | 29  | 76   | 43  | 69  | 63   | 59  | 72  | 526   |
| 低得点率群 | 40   | 8   | 5   | 50   | 14  | 17  | 49   | 10  | 19  | 212   |
| 総 計   | 138  | 137 | 137 | 134  | 128 | 127 | 131  | 131 | 127 | 1,190 |

2016年度から2018年度において実施された各平常試験全体の得点率から、高得点率群（100～80%）、中得点率群（79～60%）、低得点率群（59～0%）の3群に学生を分類した。

### 2) 自己分析診断表全体の総評

解析を行った自己分析診断表内での総選択数は79,660であり、正解または不正解の理由欄および無回答数の合計数はそれぞれ53,081、20,755、5,824であった（Table 3）。

各得点率群での正解、不正解、および無回答の割合を Fig. 1 に示す。高得点率群、中得点率群、低得点率群となるに従い、正解の割合は減少し不正解の割合が増加すると共に、無回答の割合も増加する傾向が認められた。

### 3) 正解に至った理由の解析

設問に対し、正解に至った理由5項目の解析結果を Fig. 2 に示す。全体では「自信をもって正解」が88.8%で最も高く、次いで「消去法で正解」が4.1%、その他3項目は4%以下で僅差であった（Fig. 2a）。得点率の異なる3群で同選択率を比較すると、低得点率群では他群と比較し「自信をもって正解」の割合は有意に低く、その反面、「消去法で正解」、「2つに絞って正解を選択」、「偶然正解」の割合は有意に高かった（Fig. 2b-2f）。

また個々の学生における「自信をもって正解」または「消去法で正解」のどちらかを選択した総数（二項

Table 3 解析の対象とした自己分析診断表の学生アンケート選択数

|       | 正 解      |            |        |            |     | 不正解          |            |            |                     |            | 無回答   | 各群における小計 |        |        |
|-------|----------|------------|--------|------------|-----|--------------|------------|------------|---------------------|------------|-------|----------|--------|--------|
|       | 自信をもって正解 | 2つに絞り正解を選択 | 消去法で正解 | 全くわからず偶然正解 | その他 | 問題の意味が読み取れない | 2つに絞り誤答を選択 | 試験勉強不十分な範囲 | 正解の選択可能<br>自己採点の際には | 「勘違い」か、その他 |       | 正解総数     | 不正解総数  | 全<br>体 |
| 高得点率群 | 19,999   | 315        | 603    | 114        | 119 | 136          | 826        | 1,400      | 198                 | 613        | 1,437 | 21,150   | 3,173  | 25,760 |
| 中得点率群 | 21,590   | 600        | 1,061  | 323        | 254 | 482          | 2,427      | 4,700      | 611                 | 1,844      | 2,588 | 23,828   | 10,064 | 36,480 |
| 低得点率群 | 6,817    | 302        | 538    | 291        | 155 | 237          | 1,868      | 3,509      | 371                 | 1,533      | 1,799 | 8,103    | 7,518  | 17,420 |
| 小 計   | 48,406   | 1,217      | 2,202  | 728        | 528 | 855          | 5,121      | 9,609      | 1,180               | 3,990      | 5,824 | 53,081   | 20,755 | 79,660 |
|       | 53,081   |            |        |            |     | 20,755       |            |            |                     |            | 5,824 |          |        |        |
|       | 79,660   |            |        |            |     |              |            |            |                     |            |       |          |        |        |

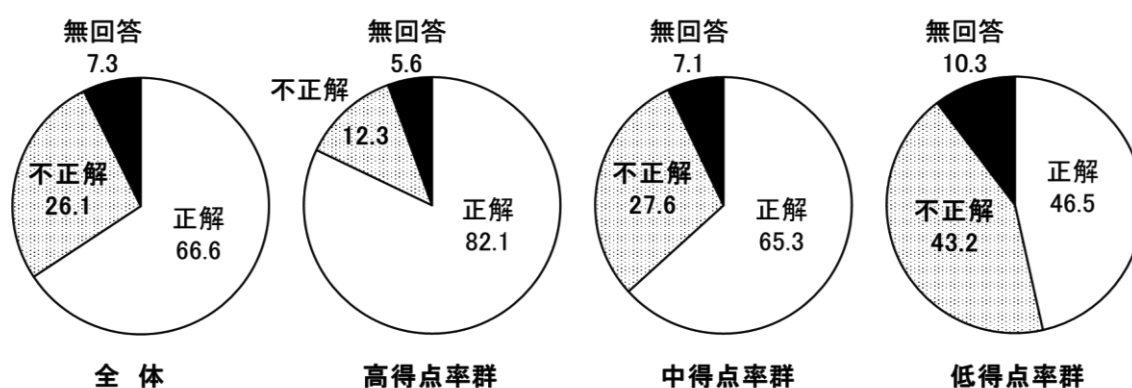


Fig. 1 各得点率群における選択率

平常試験の各試験問題に対する回答は、5つの正解の理由、5つの不正解の理由、または無回答のいずれかであり、その合計を100%とした時の各得点率群における正解全体、不正解全体、および無回答の割合を算出した。

目選択総数)と試験全体の得点率との相関を解析した (Fig. 3)。両者には極めて高い有意な相関が認められた ( $R=0.895$ ,  $P<0.01$ )。

#### 4) 不正解に至った理由の解析

設問に対し、不正解に至った理由5項目の解析結果を Fig. 4に示す。全体として最も高かったのは「試験勉強が不十分な範囲の出題」であった (43.4%)。続いて「2つに絞り誤答を選択」が25.1%、「勘違いか、その他」が18.5%であった (Fig. 4a)。

各得点率群間で比較すると、「試験勉強不十分な範囲」が高得点率群と比べて中得点率群で有意に増加していた。低得点率群では「問題の意味が読み取れない」や「自己採点の際には正解の選択が可能」で有意

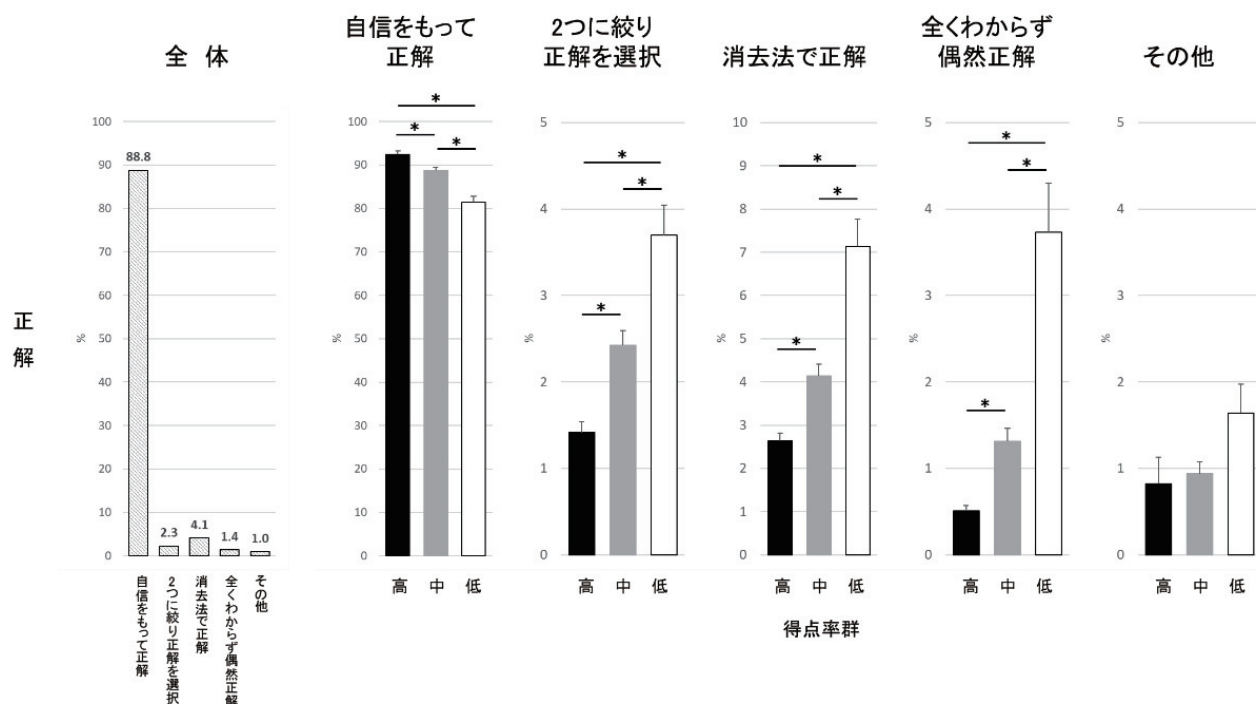


Fig. 2 正解の理由に対する群間比較

3群のデータを合計し、正解の理由5項目の割合を算出した (a)。また、各得点率群で、正解の理由5項目の合計選択数を100%として各正解理由を得点率の高・中・低群で比較した (b-f)。\*:  $P < 0.05$ 。

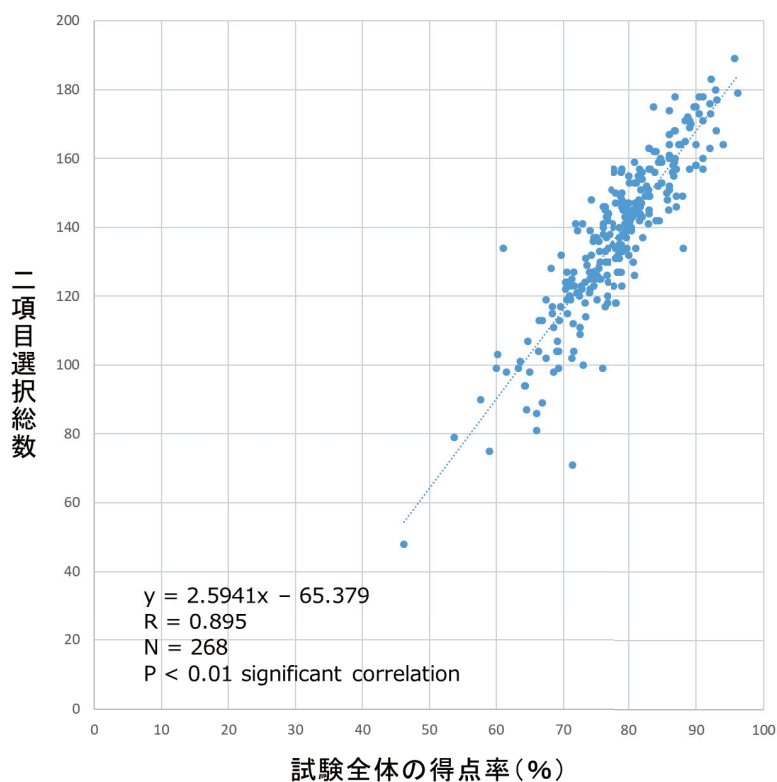


Fig. 3 二項目選択総数と試験全体の得点率の相関

全対象者から「無回答」の選択肢のある学生を除いた母集団 (対象者 268 名) において、個々の学生における「自信をもって正解」または「消去法で正解」のどちらかを選択した総数 (二項目選択総数) と、その個々の学生の得点率との相関を調査した。

な差はないものの、他群と比較し低い傾向が認められた。中得点率群では「2つに絞り誤答を選択」および「勘違いか、その他」で低い傾向が認められた (Fig. 4b-4f)。

### 5) 選択肢を2つに絞り込んだ後の正解率の傾向

試験問題の5つの選択肢のうち、消去法等で2つに絞り込んだのち最終的に選択したものが正解であったか、不正解であったかを調査するため、各得点率群において「2つに絞り正解を選択」した総数の割合に対する「2つに絞り誤答を選択」した総数の割合を調査した。その結果、高得点率群で2.6、中得点率群で4.0、低得点率群では6.2であった。全体の平均値は4.3であった (Table 4)。

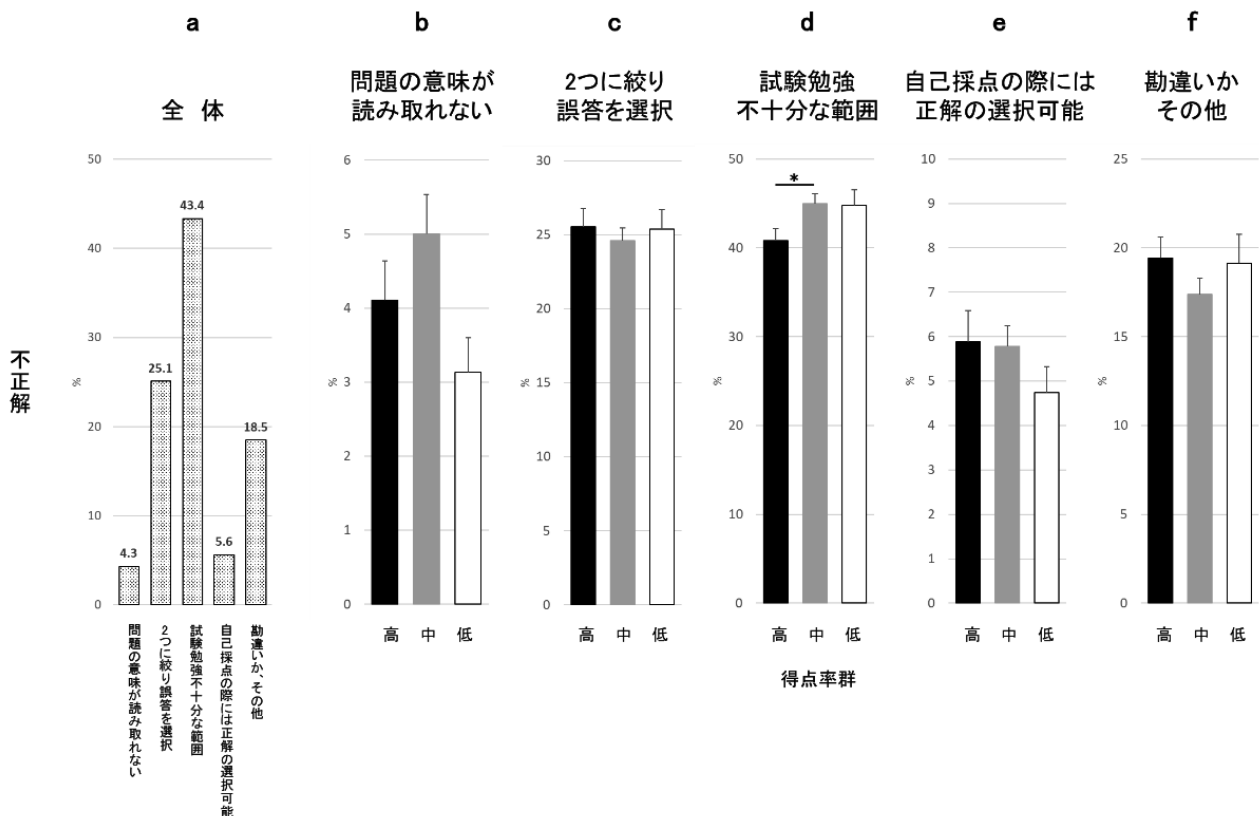


Fig. 4 不正解の理由に対する群間比較

3群のデータを合計し、不正解の理由5項目の割合を算出した (a)。また、各得点率群で、不正解の理由5項目の合計選択数を100%として各不正解理由を高・中・低得点率群で比較した (b-f)。\*:  $P < 0.05$ 。

Table 4 2つに選択肢を絞り込み後の正答に対する誤答の選択率

|       | 誤答選択率／正答選択率 |
|-------|-------------|
| 高得点率群 | 2.6         |
| 中得点率群 | 4.0         |
| 低得点率群 | 6.2         |
| 平均    | 4.3         |

「2つに絞り正解を選択」の比率に対する「2つに絞り誤答を選択」の比率の割合を各得点率群で算出した。

## 考 察

日本大学松戸歯学部2年次「生化学」授業では、予習・講義・演習・確認試験・口頭試問を実施する、実習を含んだ統合型授業を実施し試験後には直ちに解説講義を行っている。その中で授業についてこられない学生の勉強方法の聞き取りを重ねていくうちに、自分自身で何が悪いのかわからない学生が数多くいることがわかった。そこで我々は、学生自身が自ら振り返りが出来て、また教員側も個別のアドバイスの参考となるように「自己分析診断表」を独自に作成し調査を行った。2015年度以降、紙ベースからWebClassを用いインターネット上での回答に変更することで、大量のデータを分析可能となった。本研究では2016年度から2018年度の3年間に蓄積した自己分析診断表のデータを基に、試験の得点率で分類したグループ間での設問に対する正解・不正解の理由を分析した。

アンケートの総選択数は79,660であり、以前行われた紙媒体でのアンケートでは、これらデータを処理することは困難であったと思われるが、WebClassを使用した自己分析診断表の活用は、膨大なデータを短時間で処理することを可能にした。

高得点率群、中得点率群、低得点率群となるに従い、平均正解率が約20%ずつ減少し、不正解の割合が約15%ずつ増加した。加えて、無回答の割合は高得点率群と中得点率群の差が1.5%に対し、中得点率群と低得点率群の差が3.2%で、約2倍の変化を示したことから、低得点率群の学生は試験のために準備した勉強時間が不足したり、その質が悪く一生懸命に勉強してはいても結果に結びつかなかったり、または、その両方が欠けていたことが考えられると同時に、自ら何かを変えようとする学修への意欲や意識も低いと推察した。この点において近年、大学生の学修意欲の低下や目的意識の希薄化が指摘されており、改善策が求められている（岡田摩理と服部律子，2014；福泉隆喜ら，2018）。我々は学生の自己分析診断表の回収後、得点率が特に低い学生に対し呼び出しを行い、試験結果と診断表を示しながら個別の問題点を指摘し、次の試験の参考となるように指導を実施しており、その結果、概ね第1回平常試験で指導した学生は第2回平常試験では得点率の向上を認めており（未発表）、本診断表の活用は学生の学力向上にも寄与するものと考えられる。

多くの先行論文の中で、成績下位者の学習に関する特徴が挙げられ、彼らには個別指導が必要であると報告されている（有田ら，2013；小橋ら，2014；村上ら，2016；大関ら，2013）；①学習内容、学習時間、学習に対する姿勢が不十分である。②適正な自己評価能力に乏しい。③必要な学習ができていると勘違いしている。④不得意領域を自らの力で見出すことが苦手である。また、成績下位者の指導方策についても記述されている；①個別指導対象学生の見極めが重要である。②学生が自己を客観的にとらえ的確な自己評価が出来るよう指導する。③学生による日々の学習計画や優先順位の決定に際し、教員が集中的に関わる必要がある。④不得意領域の認識の促しと学習の進行に対する自覚・自信を学生が得るために支援する。

自己分析診断表は学生が自ら回答するため、学生の自覚を促し、自己評価を可能とする。そして、試験の設問1つ1つについて回答することで、理解不十分な領域を学生と教員の双方に対し明確化し、学習計画立案の補助資料となる。本診断表の活用は個別指導の際にも効果的であると考えられる。

低得点率群では他群と比べ、正解であった設問に対して「自信をもって正解」できる設問数は相対的に少なく、一方で「2つに絞り正解を選択」や「消去法で正解」、さらには「全くわからず偶然正解」する回答が最も多いことから、全体的に理解や記憶が曖昧なため、正答の選択肢を確定することができないことが明確であった。さらに、「自信をもって正解」と「消去法で正解」の合計選択数が得点率の低下に比例して減少し有意な相関を認めた。これらの回答肢を選べる学修を行っていると、試験全体の得点率上昇に繋がるという因果関係を類推できた。「自信をもって正解」できるのは、試験問題として出題された内容を学生が確

実に理解しており、選択肢の中から正答を確定できる場合であり、「消去法で正解」できるのも、誤りの選択肢を消去できる根拠を具体的に指摘できる場合であろう。このことから、一つ一つの選択肢に対して、正解または不正解の十分な理由付けを行えることが、学生の成績に直接繋がるということが明白となった。成績下位者は、自己判断では学修できているつもりで内容を理解しているつもりでも、実際には学修不足、理解不足である場合が多々ある。自己分析診断表を用いて視覚的にデータを示し、これらの不足を自ら認識させることで、学生の成績向上に寄与できるものと考えられる。また、相関係数の解釈は 1.00 ~ 0.70 で「強い相関がある」、0.20 ~ 0.00 で「殆ど相関がない」と報告されている（水本，2012）。正解の理由と得点率との相関で、「自信をもって正解」では強い相関を認めたが（ $R^2 > 0.70$ ）、「消去法で正解」「2つに絞り正解を選択」「全くわからず偶然正解」「その他」では全てにおいて殆ど相関が無かった（全て  $R^2 < 0.20$ ）（未発表）。

不正解となった設問に対する理由の分析では、「試験勉強不十分な範囲」がどの正解率群でも最も多く 40 ~ 45% を占める。これは配布している授業プリントの中で、学生が出題されそうな箇所を絞りこんだ結果を意味する。「2つに絞り誤答を選択」も同様に、どの学力群においても 2 番目に多く、特に高正解率群において不正解理由の 26% も占めるのは大変興味深い。「勘違いか、その他」の勘違いとは、問題をよく読んで出題者の意図を汲み取れなかった結果を意味し、よくある「うっかりミス」もこの中に入る。逆に言えば誤答理由の中でも、個人の注意次第で本来は正解を導き出せたはずであることを意味し、この回答が多い学生は試験を受ける心構えや精神的な不安を払拭することで試験結果が大きく変わる傾向にある。そのような学生は「自己採点の際には正解の選択可能」にチェックすることもあるかと思われる。実際に、分析表を用いた学生指導の中で、この「自己採点の際には正解の選択可能」に大部分チェックが入った学生が相談にきたことがあった。成績はかなり下位であったが、ヒアリングにおいて学生は成績上位者と変わらない勉強時間と方法を施しており、会話からは全く問題点が見当たらなかった。結果的に試験中に極度の緊張状態に陥ることがヒアリングから予想されたため、その点に絞って精神的な不安を払拭する指導を施した結果、3 日後の試験において学年 1 位の成績をとり、それ以後も成績は上位をキープすることができた。このように精神的に弱く極度に緊張しやすい学生はこの項目のチェックが極端に多いことがわかっている。

5 つの選択肢を 2 つに絞り込んだのち、最終的に選んだ選択肢が正解である場合と不正解である場合とがある。このどちらがより多いのか、また、その傾向は学力別に分類した正解率群によって異なるのかどうかに関して、「2つに絞り正解を選択」に対する「2つに絞り不正解を選択」の割合を計算し各群で調査した。その結果、高得点率群であっても 2.6 倍、中得点率群では 4.0 倍、低得点率群となると 6.2 倍と、どの群においても、正解よりも不正解を選択する傾向があることがわかった。さらに、その割合は高得点率群から低得点率群となるに従い明らかに増加した。また、2 つに絞り込み後の正解率は、高得点率群で 27.6%，中得点率群で 19.8%，低得点率群では 13.9% であった（未発表）。高得点率群の学生でさえも、2 択とした後には 4 問中 1 問しか正解しない。

“セッコ国語.com & 一般教養”に、5 択 MCQ 式試験で選択肢の中から正答候補を 2 つにまで絞り込んだ学生の心理が記述されている（セッコ国語.com & 一般教養，2019.03.25 アクセス）。例えば、学生を選択肢に対する理解度を 5 段階で記号によって表すとすると；① ○：明らかに正答であると分かり自信がある。② △：合っていそうな気はするが、自信が持てない。③ 空白：良く分からなく、判断が付かない。初めて目にする用語である。④ ？：誤答としてかなり疑わしいが、×にするほどの自信はない。⑤ ×：明らかに誤答であると分かる。下記の設問について考察する；問. 哺乳類はどれか。1 つ選べ。a. カブトムシ，b. カメ，c. カラス，d. サメ，e. シャチ。正答「e」。この設問に解答する学生心理が、○を付けられず，a. ×，b. ×，c. ×，d. 空白または？，e. △であるとする。ここで素直に e. △を選ぶことが出来れば正解となるが、多くの学生が d. 空白または？を選び不正解となる。このように不正解を選択しないようにするためには、正答肢・誤答肢を判断できる理解と知識を増やすことと共に、前もってその知識に自信をもって試験に臨める心

構えを付けておくことが重要であろう。

本研究では、WebClass を用いネット上で実施している自己分析診断表の 2016 ～ 2018 年度 3 年間のデータから、学力別グループ間での試験の設問に対する正解・不正解を選択した理由を分析した。学生が自ら学力向上のために自己の問題点を見出すこと、一方で、教員が学生の問題点を見出し個別指導をおこなうことは、非常に重要であるが容易なことではない。WebClass での自己分析診断表の活用は膨大なデータの短時間での処理を可能とし、学生の解答の傾向を分析することで、より適切な学力向上への指導を行えるものと思われる。

## 謝 辞

本研究は日本大学松戸歯学部口腔科学研究所研究費の助成を受けたものである。

## 参考文献

- 有田和恵, 有田彰, 森田孝夫, 別所正美, 大野良三 (2013), 学生の自己評価行動に与える確信度の影響, 医学教育 44 (3), 113-119 ページ.
- 福泉隆喜, 鯨吉夫, 中原孝洋, 深井康成, 海寶康臣, 吉野賢一 (2018), 歯学部における初年次教育プログラムによるクリティカルシンキングおよびロジカルライティングの学修効果の検討, 九州歯科学会雑誌 72 (1), 7-17 ページ.
- 平塚浩一 (2013), 機能系基礎歯科学科目に対する講義・実習統合型授業のプログラム構築とその評価, 日本歯科医学教育学会雑誌 29 (3), 205-213 ページ.
- 平塚浩一, 安孫子宜光, 柴田恭子, Bhawal Ujjal Kumar, 青木秀史, 寺尾直人, 丸山満博, 渡邊信幸, 城座映明, 小倉直美 (2014), 講義・演習・実習統合型授業が基礎的知識の習得, 学習態度および学習意欲に与える効果, 日大口腔科学 40 (1), 10-24 ページ.
- 池田郁男 (2019), 改訂増補版: 統計検定を理解せずに使っている人のためにⅢ, 化学と生物 57 (10), 629-647 ページ.
- 石井秀宗, 椎名久美子, 柳井晴夫 (2003), 医学部学生の学習活動と意欲に関する調査研究 (1), 医学のあゆみ 205 (12), 934-937 ページ.
- 石井秀宗, 椎名久美子, 柳井晴夫 (2003), 医学部学生の学習活動と意欲に関する調査研究 (2), 医学のあゆみ 205 (13), 989-991 ページ.
- 石井秀宗, 椎名久美子, 前田忠彦, 柳井晴夫 (2007), 大学教員における学生の学力低下意識に影響する諸要因についての検討, 行動計量学 34 (1), 67-77 ページ.
- 神林博史 (2011), 入試方法と学業成績: 東北学院大学 2009 年度卒業生データの分析, 東北学院大学教育研究所報告集 11, 33-41 ページ.
- 小橋一雄, 竹嶋理恵, 長谷川辰男, 大関健一郎, 船山朋子, 鈴木幹夫, 本間信生, 石井孝弘, 近藤知子 (2014), 作業療法教育における本学独自の国家試験教育プログラムの開発, 帝京科学大学紀要 10, 43-49 ページ.
- 前田正信, 羽野卓三 (2013), 生理学筆記試験成績よりみた医学部学生の学力低下, 医学教育 44 (2), 71-77 ページ.
- 水本篤 (2012), 質問紙調査における相関係数の解釈について, 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究部会 2011 年度報告論集, 63-73 ページ.
- 村上大介, 新井志穂, 木村涼子, 渡辺隆夫, 宇月美和, 板垣恵子, 庄子幸恵, 伊藤てる子, 鈴木秀樹, 作山美智子 (2016), 看護学科における国家試験対策指導の実績と課題, 東北文化学園大学看護学科紀要 5 (1), 27-35 ページ.

- 大関健一郎, 船山朋子, 長谷川辰男, 竹嶋理恵, 鈴木幹夫, 本間信生, 小橋一雄, 山本涼一, 小室元政, 石井孝弘, 近藤知子 (2013), KJ 法的学习法を用いた国家試験対策プログラムの学力・意識への影響, 帝京科学大学紀要 9, 25-35 ページ.
- 岡田摩理, 服部律子 (2014), 2 年課程の看護学生の学びの特徴—思考力を高めるための試行的な授業における学生の反応から—, 岐阜県立看護大学紀要 14 (1), 37-48 ページ.
- セッコ国語 .com & 一般教養～「3 つの知」知識・知恵・知性を育てる～ロジックを鍛える総合教育支援ポータル: 効率的な勉強法・教育法のオススメ, コツ, 勉強法・教育法⑤, 消去法の使い方のコツと意味! 理由・根拠から選択肢を絞り正答率も学習効果も高める方法, <https://sekko-kokugo.com/shoukyohou-reason-method/> (2019 年 3 月 25 日アクセス)
- 武田香陽子, 石突諭, 大野裕昭, 島森美光 (2015), 卒業延期生の学習状況の実態調査と支援方法の検討, 医学教育 46 (2), 161-170 ページ.



## 活動報告

# ゼミナールの教育効果とその実践 —日本大学商学部におけるゼミナールを事例として—

関谷 喜三郎\*

日本大学商学部

## Educational Benefits of Seminars : Using the Seminars at Nihon University College of Commerce as an Example

Kisaburou SEKIYA

College of Commerce, Nihon University

本報告は、日本大学商学部において、少人数教育としてのゼミナールの教育効果に関するさまざまな工夫とその実践から得られた知見をまとめたものである。商学部における1学年10名前後の学生から成るゼミナールは文字通り少人数教育を実践する場である。そこには、日常のゼミ活動を通じて学生が自ら考え行動するという「自主創造」を体現する場がある。ただし、学生がゼミナールの活動から創造力を養うことができるようになるためには、ゼミの活動の中にそれを実現するための「仕掛け」「工夫」が必要である。この報告では、授業としての「演習」だけでなく、合宿、学内・学外の論文発表大会への参加等を含めて、さまざまな場面を通じて、ゼミ生の能力を発展させるための実践例が示されている。

This report summarizes the findings on the educational benefits obtained from the activities of the seminars at Nihon University College of Commerce. In the Faculty of College of Commerce, a seminar consisting of 10 students in the one grade is literally a place to practice small-group education. Through daily seminar activities, students can embody self-creation in their thinking and actions.

However, in order for students to be able to develop their creativity, it is necessary to have devices and ingenuity to help them in realize their potential. In this report, not only class exercises, but also practical examples for developing the abilities of seminar students through various situations, training camps and participation in thesis presentation competitions inside and outside the college, are presented.

**キーワード：**少人数教育, 質問票, 論文作成, 古典の購読, 合宿, 5分前行動, サブ・ゼミ, 合同ゼミ

### Keywords:

Small-group education, questionnaires, dissertation writing, classic subscription, training camp, 5minutes before-actions, sub-seminars, joint seminars

## はじめに

大学教育の満足度調査において学生が高い満足度を示すのは少人数教育である。大教室での講義に比べて、学生自身が授業に参加したという実感がもてることが満足度の向上につながると考えられるが、それは学生が授業中に発表、討論、設問への解答を通じて自ら授業にコミットできるからである。授業で何を学んだか

\*E-mail: sekiya.kisaburou@nihon-u.ac.jp

投稿：2021年11月2日

受理：2022年2月2日

ということ以上に何らかの形で授業に参加したことが満足度を高めることになる。

商学部の授業では専門科目の多くが大教室での講義となる。そこでは、学生は授業を聞くだけという形になる場合が多く、積極的に参加したという実感が持ちにくい。そうした中でゼミナールは、専門科目に関する教育を少人数で行うことができる貴重な機会であるといえる。

商学部におけるゼミナールは2年生からの選択科目であり、学生が関心をもつ内容に応じてゼミを選択することができる。ゼミナールは2年生、3年生、4年生の3年間であり、同じ先生の下で特定の領域について専門的に学ぶことができる。多くのゼミが定員10名程度であり、文字通り少人数教育を実践することができる。選択科目なので、学生が学びたい内容を自ら選択することができるために、目的意識を持ってゼミに入ることができる。受け入れる先生も専門分野についてやる気のある学生を受け入れることができる。

ゼミナールは少人数教育の実践の場となるが、それを生かして教育効果を上げ、学生の満足度を高めるためには、さまざまな場面で学生の積極的な参加を促す仕掛けや工夫が必要である。本稿は、ゼミナールにおける教育効果を高めるための仕掛けや工夫とその実践についての報告である。

## 1 ゼミ活動の内容：活性化の工夫

ゼミナールは、2年生から始まり、3年生、4年生と3年間に渡り継続する。ゼミの学習は各学年とも演習という名目で週1回行われる。これを本ゼミと呼んでいる。授業回数は年間30回であり、授業時間も1回1時間半と通常の科目と同じである。修得できる単位は、2年生と3年生が各4単位であり、4年生は卒業論文の作成により6単位が与えられる。したがって、ゼミ3年間で14単位の修得が可能である。

### (1) 2年生のゼミ活動

2年生は専攻分野に関する基本的な文献を学ぶ。はじめは入門テキストを指定し、1回1章を目安にして読んでいく。順番にレポートする学生を決め、その学生がその週にやる章の内容を要約したレジュメを作成し、当日参加者全員にそのペーパーを配布して報告を行う。その後、事前に配布してある質問票にしたがって、レポーターが司会者となって内容を検討していく。そこには、ゼミの授業に全員が参加できるように、次のような仕掛けがなされている。

- ① 当日検討すべき内容に関して、事前に3から5問の質問を用意し、その内容を参加者全員が調べてくる。
- ② 質問内容はその日に行われる章を読んで理解できなかったことや内容に関してゼミで討論したいことである。各自が提出したものをゼミ生みんなで相談して5問以内に絞り込んでおく。
- ③ 提出された質問はゼミの3日前までには各自に行き渡るようにするので、当日までに予習が可能になっている。予習してあるので、ゼミの時間中、各質問に対してゼミ生からの発言が途切れることがない。
- ④ その日に学習する範囲や課題が決まっても、議論のための準備ができていなければ、先生の説明を聞くだけか、特定の学生が意見を述べるだけになる。
- ⑤ 学生に積極的な参加と発言を促すためには、仕掛けが必要になる。それが、事前に議論する質問を決め、それを前もってゼミ生全員に知らせておくということである。

司会者の進行に従って、1問について15分から20分議論し、質問ごとに教員がコメントを行う。事前に準備があるので議論は活発となる。これにより、ゼミ生は毎回ゼミ活動に参加したことを実感することができる。内容的にも、相手の意見を聞きながら、討論することができるので、人前で発言する訓練を積み重ねることができる。

## (2) 3年生のゼミと役職担当

3年生はより専門的な書物を用いて2年生と同様な形式でゼミ活動を行う。そこでも、2年生のときと同じように、質問への回答準備、レジュメの作成、報告、司会進行、意見発表、討論等を行うことにより、テキストの内容を理解するだけでなく、基礎的な学習能力を身に着けることができる。

3年生のゼミ活動が2年生と異なるのは、ゼミ活動を行うための役職に就くということである。ゼミ長、サブ・ゼミ係、渉外担当、会計担当、機関紙担当の5つの役職がある。

- ① ゼミ長はゼミのキャプテンとして、ゼミ活動全体を統括する。
- ② サブ・ゼミ係は2年生のサブ・ゼミを指導する。
- ③ 渉外はゼミのすべての行事の遂行責任者である。最も大きな行事は春・夏の合宿であるが、ホテルの選定、予約、事前の下見から当日の宿泊まですべてのことに責任をもつ。
- ④ 会計は合宿費の支払いを含めてすべての行事の金銭出納に責任をもつ。
- ⑤ 機関紙は、ゼミで2年に1回の割で発行している機関紙の編集、印刷に責任をもつ。OB・OGに機関紙への原稿依頼も行う。

ゼミ活動は、各学年の本ゼミだけでなく、春・夏合宿、前期・後期の納会、OB会の開催、その他さまざまな行事を伴うが、それらの遂行はすべて3年生に任されている。複数の卒業生から、ゼミでの役職の経験が社会に出てから役に立ったとの意見が寄せられている。

## (3) 4年生前期：新聞の購読

4年生には就職活動という一生を左右する大きなイベントがある。まずはこれに全力投球する必要がある。また、卒業論文の作成というゼミ活動3年間の総仕上げともいうべき仕事がある。

就職活動も卒業論文も4年生のゼミ活動の中心となるような大きなイベントであるが、実は時間的にはそれほど多くの時間を必要としない。したがって、こうしたことを理由にして4年生の毎週のゼミ活動を実質的に休止すると、4年生の大事な時間を無為の内に過ごすことになりかねない。就職活動をしながらも、毎週のゼミを充実させる可能性はある。前期のゼミ活動の事例として新聞を使った討論がある。

- ① 就職試験対策も兼ねて4年生の本ゼミで毎週新聞を読む。4年生の前半は就職活動優先ということで毎回全員参加というわけにはいかないが、ほとんどの学生は参加が可能である。
- ② 毎回、3人ぐらいのゼミ生にその週の新聞から話題となった記事をコピーしてもらい、それを参加者に配り、その報告を聞きながらみんなで内容を検討する。
- ③ 主に政治、経済の記事を取り上げるが、社会面のトピックでもよい。これにより、現代の社会のことに関心を向けることができるとともに、3年生までの討論形式を継続することができるメリットがある。これにより常に人前で自分の意見を発表し、討論するという機会を持ち続けることができる。
- ④ 就職の面接試験対策としても、時事問題への関心を高めておくというメリットがある。
- ⑤ 就職活動のために実質的にゼミ活動を休止すると、4年生になってゼミ生間の交流が途絶えることになるが、毎週ゼミがあり、就職活動と重ならない限りそこに参加できれば、そこが気分転換の場となり、仲間との情報交換の場ともなる。

## (4) 4年生後期：古典を読む

4年生の後期になると就職活動も終わり、単位もほぼ修得できているので、学生は自由な時間を手にすることができる。ゼミ生も卒業論文の作成を残すだけとなる。実は、ここに大学生活最後の時間を使って自由に学べるチャンスがある。4年生の後期は卒論の作成だけに使うにはもったいない時間である。そこで、この自由な時間を使って「古典」を読むことにしている。それは次のような意味を持っている。

- ① 多くの学問分野に古典といわれるものがあるが、その多くは知ってはいるが読んだことがないものである。大学の授業でも古典を読む機会はほとんどない。
- ② 古典の講読は、当面の学習に関係ない場合が多いために、教養として知っておいた方がよいとは思いつながら、必要に迫られることがないので手が出ない。
- ③ 実際に古典に触れてみると、その価値を実感することができる。これを学生時代にゼミ生にも味わってもらいたい。
- ④ 古典を読むには、時間に余裕があることが望ましい。3年生までは週に10科目近い科目を履修しているため、1つの科目にじっくり取り組むことは難しい。
- ⑤ 4年生の後期にはほとんどの学生が単位を取り終わっているため、時間的に自由である。そこで、特定の本を決めて2年生、3年生のゼミと同じ形式で、毎回、レポーターを決め、質問票を交換し、1時間半をすべて使って議論する。10月から12月の約3か月を掛けて読んでいく。3か月あれば古典を1冊読み終えることができる。

これまで読んだ本の中には、マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、ミル『自由論』、フロム『自由からの逃走』、マルサス『人口論』、バジヨット『ロンバート街』、ヴェブレン『有閑階級の理論』、マンデヴィル『蜂の寓話』などがあり、これ以外にも多くの本を読むことができた。古典はときに冗長な箇所があり、根気よく読む努力が求められるが、読み終わったときの充実感はまさに古典ならではのものがある。

ゼミの4年生後期で古典を読むメリットがいくつかある。その一つは3年生までのゼミ活動の蓄積が古典を読みこなす力になっているということである。3年生まででは、意識も意欲も、さらには学習の蓄積も不十分であり、古典にじっくりと取り組むことはできなかったと思う。もう一つは履修科目が少ないことで古典の講読に多くの時間を割けることができるということである。あるゼミ生が「3年生までのように、週10科目以上履修していたら時間的にも無理でした」と言っていたが、自由な時間がある4年生の後期が古典を読む絶好の機会である。いつの日か学生時代が充実したものであったと感じることがあるとすれば、その一部がこの古典講読の経験であることを期待している。

## 2 論文の作成：自主創造の実践

ゼミ活動の中には論文の作成がある。これはゼミ生が自主的に作成するものであるが、論文の作成の過程は、問題発見、問題解析、問題解決の過程である。それは、自ら考え、自ら行動し、自ら結論を導くという意味で文字通り「自主創造」の実践である。

### (1) インゼミ論文と大会参加

2年生は商学部でゼミナール連合協議会が主催する論文発表大会である「インゼミ」大会に参加する。大会の開催は12月初旬である。インゼミ大会には論文発表部門とプレゼン部門があり、どちらかに参加することができる。私のゼミは論文発表の部門に参加していた。

ゼミによって専門分野が違うので、その中で専門に近い3～4のゼミナールが1つのチームを作り、6月から7月にかけてテーマ設定会議を開き、共通テーマを決定する。それに従ってそれぞれのゼミが論文を書き、それをお互い交換し合い、それにもとづいてインゼミ大会において議論を行う。たとえば、2014年の第40回の日本大学商学部インゼミ大会における経済部門のテーマは、「日本の雇用問題」であり、これに参加した関谷ゼミの個別テーマは「女性の社会進出について」であった。

テーマが決まると、ゼミ内で何をどのように執筆するかの話し合いがもたれる。夏休みまでにゼミとしての論文のテーマが決まる。テーマにしたがって、夏休みから9月にかけてチーム内で各自の分担を決め資料の収集とその分析が行われる。先行研究も参考にしながら現状分析を行い、ゼミとしての問題提起と対応策を検討する。この間、ゼミの中では仲間と協力しながらも、時には意見の食い違いによる対立も生じる。紆余曲折を経ながらも論文が完成する10月頃にはゼミ生間の絆が深まり、ゼミ内に1つのものを共同で作る上げる協力体制が出来上がる。そこには各自が主体性をもって取り組んだ結果として自主創造の喜びがある。

## (2) 論文作成に必要な統計処理の習得

論文の作成に関しては、とくに経済問題を扱う場合、問題を解明していく上で分析に関する技術的な問題に直面することがある。それは統計数値の解析である。経済の現状と問題点を説明するためには統計的な検証が必要となる。しかし、商学部の学生は文系であるために受験で数学を選択する学生が少ない。そのため統計処理に関する知識が乏しい。

そこで、2年生のゼミ入室と同時に「ミクロ経済学」、「マクロ経済学」、「経済統計学」の科目を履修するように指導する。それによって、卒業に必要な単位の習得がそのままゼミでの研究活動に役立つことになる。授業でマスターした統計知識は学生時代の論文の作成だけでなく、卒業して企業に就職した後でも役立つことになる。

## (3) インゼミ大会

12月に行われるインゼミ大会当日は、この論文をもとにして、午前、午後に渡り参加ゼミによる討論が行われる。そこでは、他のゼミと討論するという通常のゼミではできない経験が可能となる。討論を指導する講師の先生からのコメントもその後のゼミ学習の参考になる。インゼミ大会への参加は、ゼミ生を成長させてくれるだけでなく、苦勞して1つのものを作り上げることによりゼミ生間の結びつきも強めてくれる効果がある。

## (4) インナー・インター大会への参加

3年生になると関東地方の大学による論文発表大会であるインナー大会か全国的な規模での論文発表であるインター大会への参加がある。これは、他大学のゼミ生と交流する絶好の機会である。両大会とも各部門のテーマに従って論文を書き、当日の発表大会に参加し、他大学のゼミ生たちと専門分野の問題について討論する。論文の作成プロセスについては2年生のインゼミ大会と同様であるが、大きな違いは、他大学の学生と交流することができるということである。こうした大会への参加は、他大学の学生の実力を知ることにより、自分たちのゼミ活動を再確認するとともに普段の活動に自信をもつことにもなる。

たとえば、2010年に行われた第50回のインナー大会での経済部門のテーマは「経済格差」であり、これに参加した関谷ゼミの個別テーマは「現在の日本の所得格差、雇用問題の現状についての今後の展望と見解」であった。

また、関谷ゼミでは、7年間にわたり毎年3年生が同志社大学で開催されているWEST論文研究発表会に参加していた。これは社会の諸問題を学生たちが経済学の視点から研究し、社会に対して政策提言を行うというものである。開催場所が関西であり、事前の打ち合わせや中間報告会を含めて数回にわたり同志社大学に行く必要があるために関東の大学からの参加は2～3校にとどまっており、参加校のほとんどは関西および四国、九州の大学である。大学の教員だけでなく、企業の担当者も論文および発表の審査員に加わっており、厳しい審査がなされている。発表のための論文作成も発表会と同様に学生にとってかなり負担であったが、各学年ともそれをやり遂げた。西日本の大学の学生と討論する機会はめったにないので、ゼミ生にと

って貴重な経験であったといえる。

関谷ゼミとして発表した論文のテーマとしては、2013年「高齢者間経済格差是正」、2016年「介護従事者の定着率改善に向けて」、2018年「高齢富裕層の消費促進」などがある。

### (5) 卒業論文の作成

4年生になるとゼミ活動の集大成としての卒業論文の作成がある。就職に目途の着く7月から8月に論文のテーマを決め、後期が始まるまでに論文の骨子を固める。夏合宿のときにテーマや章立ての内容について個別に報告してもらいアドバイスする。

9月から11月にかけて資料を作成し、参考文献を読んで論文の下書きをする。それを私が随時添削し、何回かに渡ってそれを繰り返すことで論文を完成させることができる。すでに2年生、3年生で論文作成の経験あるので、形式や文章表現には大きな問題はない。ポイントは、設定したテーマについて説得力のある論文が作成できるかどうかである。とくに、論考の裏付けとなる統計データの妥当性が重要となる。総じて卒論の質は高く、商学部が優秀な卒業論文に与える「優秀論文賞」に応募するゼミ生も多く、受賞者も多く出ている。

### (6) 論文作成・発表の効果

課題を設定し、問題の原因を解明し、対策のための方策を提示するために客観的なデータを重視し、それを論理的に解明する作業は、社会に出てからさまざまな仕事の場面で当面する課題の対応と共通する面があると思われる。その意味で、ゼミナールでの論文作成は有効なキャリア教育として役立つと考えられる。

また、論文発表大会において学内だけでなく他大学の学生の前で論文を発表し、討論するという経験がゼミ生を大きく成長させることも実感することができる。

## 3 サブ・ゼミナール：学生が先生になる

ゼミは、各学年とも公式の授業時間の中で週1回行われているが、ゼミ独自の活動として2年生に対してサブ・ゼミナールの時間を設けている。これは本ゼミの補助的活動として週1回行われるものであり、1年間続けられる。これは学生たちだけのゼミ活動であり、指導は3年生が行う。形式は本ゼミと同じであり、1時間半に渡って発表・討論が行われる。本ゼミと異なるのは、先生が3年生だということである。内容は、日本経済についての基本的なテキストを読むということである。

### (1) 学生主導のゼミ活動

このサブ・ゼミの大きな特徴は、学生だけの自主的なゼミ活動であるということと、3年生が先生となって指導するということである。2年生にとっては、本ゼミ以外に経済学の基本的な内容を学ぶ機会であるが、教える3年生にとってもよい経験になる。サブ・ゼミ係は3年生の中から自分たちで2名を選び、その人たちが指導することになる。

3年生にとっては、教える経験を通じて、授業の準備の大変さや指導の難しさを学ぶことができる。テキストは3年生が自分たちで決める。多くの場合、前期で1冊のテキストを読み終えるペースで進むので、年間を通じて2冊のテキストを読むことができる。テキストの内容としては、日本経済の入門といったレベルの本が選ばれる場合が多い。

## (2) 自主的活動

これは文字通りゼミ生たちの自主的な活動であり、ゼミが行われる時間も自分たちで相談して都合の良い日を決める。ゼミ活動の進め方もすべて学生に任せてある。大学生活において、実際に学生が学生に教わり、学生が学生に教える機会はほとんどないが、この経験は教育効果の点からも重要であり、それを実現できる点でゼミの存在意義は大きいといえる。

## 4 ゼミ合宿：自己啓発を促す7つの工夫

ゼミ活動の一環として、春休み、夏休みを利用してゼミの合宿を行っている。東京近県のホテルを利用して2泊3日で寝食をともにしながら学校での通常のゼミとは違う形の活動が実施できる。

### (1) 持久力を鍛える

2年生から4年生までの全ゼミ生が一堂に会して、2日間に渡り専門的な分野に関する議論をすることによって、知識の深化と討論の技量を磨くことができる。合宿では3日間で1冊のテキストを読み終えるが、テキストは1か月前に選定して学生に伝える。ゼミ生は合宿までにそれを読み込んでおく。議論の形式は通常のゼミと同じで、事前に質問を出してもらい、それをもとにして当日の議論を進めていく。司会はゼミ長が行う。合宿における学習面でのメリットは、異なる学年の意見を聞くことができることと、学年を超えて議論ができることである。食事の時間以外は討論し続けるために、集中力だけでなく持久力が求められる。

### (2) 3分間スピーチ

夏合宿では、2年生を対象にして「3分間スピーチ」を行う。1日目の夕飯後に会場を用意して、2年生に一人ずつ3分間のスピーチしてもらう。これはゼミ合宿の恒例行事になっている。3年生、4年生はスピーチを聞いて、一人終わるごとに批評する。「声の大きさ」、「話す速度」、「内容のまとまり」、「目線」、「手足の動き」、「口癖」等について真剣に指摘する。

人前でのスピーチは社会人になってから必要となるので、その準備も兼ねている。2年生のスピーチが終了した段階で、4年生の中から3人程度が模範となるスピーチを行う。これは2年生にとってゼミでの2年間の経験が4年生をいかに成長させたかを実感できるよい機会となっている。

### (3) 5分前行動

合宿が学校でのゼミと異なる点の一つは、生活面での規律ある行動の訓練の場となるということである。ゼミ合宿の基本は「5分前行動」にある。起床、朝食、午前のゼミ開始、昼食、午後のゼミ開始、夕飯等について決められたスケジュールの5分前には準備ができているようにする。この5分前行動は毎回の合宿で徹底するようにしているが、こうした習慣を身に着けると社会に出てから役立つことになると思われる。

### (4) 学生間の自由な交流

合宿のもう一つのメリットは、自由時間に先輩、後輩がそれぞれの部屋で気軽に交流できる点にある。ここでは、日常生活の悩みを話し合うことができるし、恋愛談議に花が咲くこともあるそうである。ある春合宿では、就職をまじかに控えた3年生がお互いの長所を指摘し合うといったことをしたこともある。これは自分の良いところを指摘してもらうことで、あらためて自分に自信を持つことができたということであった。これも合宿だからできることである。

### (5) やる気を高める表彰

合宿2日目の夜は、夕食の後、簡単な飲み物とお菓子をつまみながら合宿の打ち上げコンパを行っている。ここでは2日間の学習から解放されて楽しい時間を過ごすことができる。かつては、お酒を飲んで盛り上がっていたが、最近ではアルコールを口にするとはなくなった。禁止したわけではないが、自然の流れでそうなったので、時代の変化かと思っている。

コンパでの最大のイベントは、合宿におけるゼミ活動に対する表彰である。基本は学習における活躍が評価の対象となる。とくに討論における発言の回数とその内容である。発言回数が多かったか、下調べが十分であったか、議論に説得力があったか、といった点を中心に評価している。表彰の内容は、「MVP」、「敢闘賞」、「努力賞」、「新人賞」である。4月からゼミが始まるので、夏の合宿では2年生に「新人賞」を準備している、春合宿では新人賞の代わりに「努力賞」が与えられる。賞品はゼミ費から一つ500円から1000円程度の品物が用意されている。

表彰はゼミ生にとってうれしいことであり、賞品以上に自分のやったことが評価されたということに誇りを持ってきている。今回表彰されなかった学生は次回こそはと次の合宿で頑張ることになる。表彰の選定は教員とゼミ長の2人で相談して決めている。

### (6) 反省会

合宿の最終日には、あらためて時間をとって学習面と生活面について反省会を行っている。これは合宿を総括するとともに、ホテルの予約から合宿のスケジュール管理まで、すべてを取り仕切ってくれた渉外担当の学生への感謝も込められている。また、反省会は、合宿をきっかけにして長い休み中に生活のリズムが崩れてしまった学生には、規則正しい生活への軌道修正を促す機会ともなる。

### (7) 社会的礼儀の実践

合宿でお世話になるホテルへの挨拶もゼミの大切な行事の一つである。ホテルに到着したときに3日間お世話になるので、簡単な手土産を用意し、ゼミ長が中心となって全員でフロントに挨拶する。また、帰りも同じように全員でお世話になった旨の挨拶をする。これは行事を行う場合の社会的な儀礼として経験しておくべきことと考えている。

## 5 合同ゼミナール：議論を鍛える

ゼミナールは正規の授業であるので、時間割にしたがって学年別に行われる。そのために、学年の垣根を超えて2年生から4年生までが一緒に学習する機会はそれほど多くない。とくに、合宿を別にすれば学習面でゼミの先輩と後輩が交流できる時間は少ない。そこで、毎週のゼミとは別にゼミ生全員が一堂に会してテキストを読み、議論する機会を設けている。それが、「合同ゼミナール」である。

### (1) 全学年合同のゼミ活動

課外授業になるが、学校の教室を利用して前期2回、後期2回、土曜日に2年生～4年生まで全学年で合同のゼミを行っている。前期は5月と6月、後期は10月と11月に月1回土曜日の午後1時から5時の時間帯で約4時間に渡って討論が行われる。

合同ゼミでは、毎回テキストを決め、それを読んでいく。テキストは経済に関してそのときに最も話題になっている本を選び、それを半日で読み終える。やり方は通常のゼミと同様に事前に質問票を交換し、各自

が担当章についてレジュメを書いて提出する。ゼミ長が司会者となり、質問票に従って議論を進めていく。各章の議論が終了したところで教員が内容並びに議論の総括を行う。

## (2) 合同ゼミのメリット

合同ゼミのメリットの一つは学年が異なる先輩・後輩と一緒に議論できるということである。とくに、2年生は、先輩たちの発言内容や理解度の違いを知ることにより、ゼミにおける1年間および2年間の学習効果がいかに大きいかを認識することができる。また、30人を超える人たちの中で議論することにより、ゼミ生一人一人が人前で自分の意見を述べる勇気を持つことができる。さらに、その時に話題になっている本を読むことができるというメリットもある。

## (3) OB・OG・社会人の参加

合同ゼミのもう一つの意義は、土曜日の午後の時間なので、卒業生のゼミOB・OGに参加してもらうことができるということである。卒業生が参加してくれることにより、現役のゼミ生にとっては社会人と議論するまたとない機会となる。

ゼミ終了後に社会人である卒業生から就職に関するアドバイスや学生時代にやっておいた方がよいことなどを聞かせてもらうことができる。また、一般の社会人にも参加してもらうことがあるので、そうした方々から企業や社会に関する話を聞くこともできる。

# 6 ゼミに期待される教育効果

ゼミナールは科目としては選択科目の一つに過ぎないが、そこから得られる教育効果には大きな可能性がある。

## (1) 理解力を高める

毎週の演習時間を通じて専門書の解説を続けることによる理解力の向上と内容の的確な把握である。これは継続的な学習によって養われるものである。3年間のゼミ活動を通じて、学問研究に関する集中力と耐久力も養うこともできる。さらに、ゼミでの学習を通じてのレジュメの作成や論理的な思考の形成は、社会人になって仕事をしていく上で有形・無形の財産となる。

## (2) 人前で発言する力

人の前で発言する力を養うことである。ゼミに入室を希望する学生の多くがゼミ活動に期待することは、「人前で話ができるようになりたい」ということである。友達との日常会話と違い、複数の人の前で話することは簡単なことではない。そのためには、あらためて訓練が必要である。多く学生がゼミに求めるのがこの訓練の機会である。ゼミでは毎週の演習だけでなく、合宿、合同ゼミとあらゆる機会に発言が求められる。また、インゼミ大会やインター・インナー大会を通じて報告・議論の機会が与えられる。

実は、こうした経験が大学の卒業を待たずに役立つことになる。それは就職試験の面接である。多くのゼミ生が就職の面接を通じてゼミに入っていてよかったと実感することができる。

## (3) 先輩・後輩との交流

同期だけでなく、先輩、後輩との交流が人との付き合い方の幅を広げてくれる。とくに、先輩として後輩

のゼミ生を指導し、ゼミ活動を運営する経験は社会に出てからも役立つと思われる。年1回開催されるゼミのOB・OG会では、年代を超えた交流も可能となる。

#### (4) 大学での居場所

ゼミに限ったことではないが、学校の中に自分の居場所を作ることができるということである。通常の授業だけでは、授業が終れば自分がそこに存在したという実感を持つことは難しい。ゼミでの3年間は学校の中に自分の居場所が存在したことを実感することができるために、ここが自分の大学であることを認識することができる。それにより、大学への帰属意識を高めることができるので、卒業してからも母校という意識を持つことができる。また、卒業後も同期を中心にして大学時代の交流が続くために、人生を豊かにする一つの糧とすることができる。

## 7 勉強の3つのコツ

ゼミナールの活動には学生の積極的な参加を促すようなさまざまな仕掛けがなされているが、学生が活発なゼミ活動を展開するために最も必要なことは、事前の準備である予習をしっかりと行うということである。それは自宅ないしは図書館での勉強を意味する。

いったんゼミ活動が軌道に乗れば勉強の習慣もついてくるので、それなりに継続して学習することができるが、ゼミ生といえども勉強が好きだというわけではない。日常生活の中では他にやりたいことも山ほどある。アルバイトや友人との付き合いもあり、時間があり余っているわけではない。それゆえ、勉強のための時間は効率的に使う必要がある。

勉強を効率的に行うために役立つちょっとしたコツがある。これはゼミの時間にゼミ生に伝えてきたものである。

#### (1) すぐやる

勉強時間の無駄を省くコツの一つは、「すぐやる」ということである。一般に時間がかかる割に勉強が捗らないのは、始めるのがおっくうなためにいつまでもぐずぐずして多くの時間を無駄にするからである。学校から帰り、自分の部屋に入って机に向かってもすぐに教科書が開けない。まずはスマホを手に取り、メールを確認し、返事を出したり、動画を見たりする。好きな小説を読むこともある。そのうち夕飯の時間になる。夕飯が終わっても好きなテレビがあれば1時間、2時間はあっという間に過ぎる。そのうち、今日はやめて明日頑張ろうということでその夜はなにもしないで終わることになるが、次の日も同じことが繰り返される。

誰でもいやなことを始めるのは大変であるが、まずその大変さを振り払うことが肝心である。そのコツは、何も考えずに教科書を開き、ノートに今日勉強する項目を書き入れることである。そうすればとりあえず始めることができる。いやだと思っていたことでも始めればそれなりにできるのである。少し前に流行った「いつやるのか?」「今でしょ!」これがコツである。何も考えずにすぐ始める。これが時間を効率的に使うコツである。

#### (2) 自分に聞かない

2つ目のコツは、勉強を始めるときに、今、勉強するかどうかを自分に聞かないことである。自分に聞けば、できない理由がいくらかでも出てくる。友達へのメールが先、授業で疲れている、風邪気味で頭が痛い、お腹

が空いている。それらをいちいち聞いていたのでは勉強できるはずがない。用事が済んだら後でやると言ってやったためしはない。ゼミ合宿の反省会で、今回は十分にテキストを読み込めなかったので、家に帰ったら読み返したいという学生がいるが、実行したかどうかわからない。

なぜ自分に聞いてはダメなのか。それは自分に聞くと、その時の気分で答えるからである。気分ほど当てにならないものはない。ときには夜中まで勉強する気になっていたのに、次の日にはそれが嘘のように消えている。気分とはそのようなものである。ゆえに、その時の自分に聞いていたのでは、いつまでたっても勉強は手につかない。勉強しようと思ったら、目標を決め、計画を立て、それにしたがってすぐに実行することである。

ついでながら、やる気さえ出れば頑張れるのにと考えている人は、順番を間違えている。やる気は一生懸命勉強すると出てくるのである。頑張らないのに自然とやる気が出てくることはない。だから、やる気を待っていたのではいつまでたってもできない。挙句の果てにはできない言い訳として、時間がなかったということになる。やる気は頑張っていると出てくるのである。そうすると、いろいろなことが無理なくできるようになる。それが一層やる気を掻き立てるので、さらに積極的に取り組むことができる。まさに、やる気はまじめに努力する人に与えられる報酬である。ゼミ生が上級生になるにしたがってゼミでの学習に積極的に取り組むようになるのを見る時、まさにこれを実感することができる。

### (3) いつでも本格的にやる

3つ目のコツは、とりあえず大まかにやっておいて、後できちんと整理するというやり方をしないということである。今は仮にやっておいて後で本格的にやるという後でやった人はいない。そもそも今と後で同じことを二重にやるのは時間の無駄である。しかも、仮にやったことはほとんど何も頭に残らないので、後でやるときには初めからやり直さないといけない。それは大変な労力である。それにもかかわらず、多くの人が後でやる方を選択する。それは今きちんとやるのが面倒くさいからである。この癖を改める決心が勉強を捗らせる上で不可欠である。

1回の勉強に使える時間には限りがあるので、そのときにやれることは僅かであるとしても、それをきちんとやっておけば次にはそこから先に進むことができる。これが積み重なると、小さな一歩が大きな成果を生むことになる。仮にやっておくと、次に始める時にはまた初めからやらなければならない。これでは先に進むことができない。勉強はいつでも本格的にやる。これが時間を効率的に使うための3つ目のコツである。

ここに挙げた3つのコツを実行するのに特別な能力はいらない。誰でもすぐにできる。ちょっとしたコツを掴んで実践すれば少しは楽に勉強できるのである。

## おわりに

ここに記した「ゼミ教育の実践報告」は、日本大学商学部において1978年に「現代経済学」のゼミを開設して以来、2021年3月に定年退職するまでの43年間に渡るゼミ活動でゼミ生とともに築いてきたことが基になっている。

本ゼミを主体としながら、さまざまな活動を行ってきたが、その目的は学生の潜在能力の活性化である。それを実現するためにいくつかの仕掛けを作り実践してきたが、それらが軌道に乗るまでにはそれなりの時間がかかっている。はじめからすべてがあったわけではない。その時の学生と相談しながら、少しずつ時間をかけて活性化に向けた仕掛けを作ってきた。

ここに記したゼミ活動は、それをすべて実現しようとする学生にはかなりハードであると思われる。しかし、さまざまな仕掛けや工夫もいったん導入できると、それが後輩に引き継がれやがてゼミの伝統になる。そうした活動が軌道に乗ると、そこに好循環が始まり先輩、後輩が協力し合うことにより、やがて日常的な活動になる。こうしたゼミ活動から感じることは、日本大学の学生の潜在能力の高さである。ゼミはまさにこの潜在能力の顕在化のためにあるといえる。

ゼミ活動の活性化のカギは、議論のための質問を事前に準備するということであるが、実は、学生が準備する質問票の中には見当はずれのものも少なくはない。しかし、それを逐一指摘することはしない。まずは学生の質問を受け入れて、それに従って議論し、総括のときにもっと議論すべきことがあったのではないかと述べるにとどめておく。

学生も毎週テキストを読んで質問を出すのは大変である。サブ・ゼミや合同ゼミが重なるときもある。そこにインゼミ大会の論文の準備が加わる場合もある。それ以外にも、サークル活動、アルバイトなどがある。

そうすると、じっくりテキストを読んで質問を考える余裕がなくなる。そうしたことも考慮するとき、必要なことは学生を信頼して「待つてあげる」ということである。見当はずれな質問や答えに対しても、手を抜いていると受け取らず、事情を察してやる必要がある。ゼミ生の中には短い時間で成長する者もいるが、進歩するのに時間がかかる学生もいる。場合によってはゼミでの経験が卒業後に役立つこともある。「成長を待つ」ことも教育の一つである。

「大学時代に勉強した方がよい」といわれるが、文系の学生は特定の資格試験を除けば、大学時代に何を勉強したらよいのかわからない場合が多い。文系の場合、これを学んでおけばよいという科目があるわけではない。ただ、共通していえることは、それが何であったとしても、研究対象に関して問題発見、分析、検討を通じて基礎的な学力を養うとともに、それを適切に発表する能力を養うことが重要であると思われる。これが社会に出てから役立つ基礎学力となる。それを具体的な形で可能にするのがゼミナールの力である。

いずれにしても、教育を通じて養った力は社会に出てからどこかで、何らかの形で役立つものである。その際言えることの一つは、教えたことの効果をすぐに確認しようとする逆効果になる場合が多いということであろう。それだけに、教育の場では、目の前の学生を信頼し、長い目で見ながら可能な限り良質な教育を行うことが大切であると思われる。

## 活動報告

## 近年の商学部・大学院商学研究科のFD活動

松原 聖<sup>\*†</sup>, 高久保 豊, 竹林 一志, 武田 圭太

日本大学商学部

## Recent Faculty-Development (FD) Activities at College of Commerce/Graduate School of Business Administration

Kiyoshi MATSUBARA, Yutaka TAKAKUBO, Kazushi TAKEBAYASHI, Keita TAKEDA

College of Commerce, Nihon University

This article reports FD Week 2021 held in early September, 2021 and other FD activities that have been organized by College of Commerce and/or Graduate School of Business Administration. In Section two, past FD activities are reported. In Section three, the purpose and the contents of FD Week 2021 are presented. In Section four, details of FD workshop, one of the programs in FD Week 2021, are explained. In Section five, FD activities at Graduate School of Business Administration are reported.

キーワード：商学部・大学院商学研究科, FDウィーク 2020/2021, オンラインツール

## Keywords:

College of Commerce/Graduate School of Business Administration, FD Week 2020/2021, Online Tools

## 1. はじめに

本稿では、2021年9月上旬に実施された商学部FDウィーク2021を中心に、近年の商学部・大学院商学研究科のFD活動について報告する。この活動報告は、近年の商学部・大学院商学研究科のFD活動を紹介することにより、日本大学の他学部・他研究科、および他の大学・大学院における今後のFD活動の参考に供することを目的とするものである。特に、コロナ禍という未曾有の状況におけるFD活動や授業実践例を詳細に記録・報告することには意義があると言えよう。また、大学院のFD活動の事例報告は、全国的に見ても、学部のFD活動の事例報告に比して遥かに少なく、本稿は日本大学および他大学における大学院FD活動の推進に益するものであると考える。

以下では、まず商学部・大学院商学研究科における、これまでのFD活動を紹介する(第2節)。次いで、商学部FDウィーク2021の目的や内容を述べ(第3節)、同企画におけるプログラムの1つであるワークショップについて詳しく報告する(第4節)。その後、大学院商学研究科におけるFD活動について記す(第5節)。

\*E-mail: matsubara.kiyoshi@nihon-u.ac.jp

投稿：2021年12月9日 受理：2022年2月10日

<sup>†</sup> 本稿の執筆にあたって、後藤裕哉氏、烏山芳織氏、田中真理子氏(いずれも日本大学商学部教務課)に資料提供等で大変お世話になった。記して感謝したい。本稿の誤りについてはすべて筆者に帰する。

## 2. これまでの商学部FD活動

本節では昨年度のFDウィーク 2020 とそれ以前の商学部教員全員参加の活動について、簡単に説明する。

### 2. 1. FDウィーク 2020 以前の全教員参加型の商学部FD活動

FDウィーク 2020 以前から、商学部では全教員を対象とするFD活動を行ってきた。次ページの表1はそれらをまとめたものである。2016年度から19年度については、年度によって形式は異なるが、少なくとも年1回は講習会またはワークショップを行ってきたことが分かる。これらの経験は、2020年度からのFDウィークの企画・運営にも反映されている。

次にFDウィーク 2020 と銘打って昨年度行われたFD関連の一連のイベントを紹介する。2019年度までの活動との大きな違いは2点ある。1つはワークショップほか複数のイベントを1週間以上の期間をかけて連続して、または並行して実施したことである。もう1つはZoomを使って行われた講演会・ワークショップをはじめ多くのオンデマンドコンテンツ（動画）を提供し、動画を視聴した教員にGoogleフォームで所感を提出してもらったことである。これらオンラインツールの利用は、新型コロナウイルス感染拡大に伴うツールの普及や教員の講義・会議等でのツールの利用拡大で初めて可能となった。

### 2. 2. FDウィーク 2020

FDウィーク 2020 は2020年11月23日（月）～12月3日（木）にかけて行われた。全面オンラインでの実施という商学部にとって初めての試みであったため、2020年12月3日（木）実施のFDワークショップに先駆けて、11月16日（月）～23日（月）に教員への事前アンケートを行った。FDウィーク 2020 で開催した企画は以下の3つである。

- ・（全期間）オンデマンドコンテンツ視聴
- ・（11月26日（木）午後1時00分～午後2時00分）FD講演会
- ・（12月3日（木）午後1時00分～午後2時30分）FDワークショップ

オンデマンドコンテンツ視聴においては、各教員に令和2年度第1～4回日本大学オンライン授業に関するシンポジウムまたは11月26日にZoomで実施したFD講演会の動画を視聴してもらい、Googleフォームにて100字以内で所感を提出してもらった。FD講演会では法学部の臼井哲也教授に「教員一人ひとりが担う授業デザインと組織的なFD活動の関係―Teaching Guide『学生と創る授業デザイン』の活用方法―」というテーマで講演していただいた。

表1 商学部FD講習会&amp;ワークショップ実施状況(2016～19年度)

| 年度   | 実施日・時間                                                        | 学部・大学院     | 参加対象                                                 | 形式                         | 内容およびタイトル                                                                                                        |
|------|---------------------------------------------------------------|------------|------------------------------------------------------|----------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2016 | 11月17日(木)<br>12時50分～14時15分                                    | -          | -                                                    | 講習会                        | 「大規模授業におけるアクティブラーニングと教育改善」                                                                                       |
| 2017 | 10月26日(木) 第一部:<br>13時～14時15分,<br>第二部:教授会終了後                   | -          | 専任教員・<br>非常勤講師                                       | 講習会&<br>ワークシ<br>ョップ        | 第一部「中規模授業におけるアクティブラーニング」, 第二部「グループグループワークの方法と実践」                                                                 |
| 2018 | 5月31日(木)<br>16時30分～18時                                        | -          | 専任教員                                                 | 講習会                        | 「e-learningの活用」                                                                                                  |
|      | 1月17日(木)<br>13時～14時                                           | 学部・<br>大学院 | 専任教員・<br>非常勤講師                                       | ワークシ<br>ョップ                | 「学生の主体的学びを引き出す具体的な工夫をめぐる経験の共有—eラーニング実践の工夫&大学院教育における工夫—」                                                          |
| 2019 | 10月31日(木) 専任教員会終了後(16時～17時)                                   | 学部・<br>大学院 | 専任教員                                                 | 講習会                        | 「日本大学の教育と教育改善活動—21世紀に求められている大学のあるべき姿と本学の動向—」<br>講演者: 松戸歯学部教授 河相安彦<br>(日本大学FD推進センター副センター長, 全学FD委員会プログラムワーキングリーダー) |
|      | 12月12日(木)<br>第1回: 12時20分～<br>13時05分<br>第2回: 13時30分～<br>14時15分 | -          | 専任教員                                                 | e-Learning<br>「NUe」<br>研修会 | ①e-Learningシステム「NUe」の概説<br>(開発業者による説明)<br>②クラスの作成と学生の登録方法<br>③レポート提出及び確認方法<br>④教材の作成方法                           |
|      | 2月25日(火) 大学院分<br>科委員会終了後(15時35<br>分～16時35分)                   | 大学院        | 大学院の<br>専任教員<br>および非<br>常勤講師,<br>大学院研<br>究アドバイ<br>ザー | ワークシ<br>ョップ                | 「大学院教育の在り方とシラバスについて」                                                                                             |

注

1. 2016年度のFD講習会は竹村ほか(2017)『日本大学FD研究』第5号「活動報告」で詳細を紹介している。
2. 2017年度のFD講習会&ワークショップは竹村ほか(2018)『日本大学FD研究』第6号「活動報告」で詳細を紹介している。

出所 日本大学商学部教務課(2021b), 竹村ほか(2017), 竹村ほか(2018)

そしてFDワークショップは表2で示した通り、フェーズ1～3の3部構成で行われた。フェーズ1は「現状の問題共有」と題して（ア）趣旨説明の後、（イ）で参加教員が任意に興味のある議題のZoomのブレイクアウトルームに参加し、自由に情報交換をしてもらった。（ウ）は全体会として、各グループのリーダーを務めたFD委員会委員がグループ内での議論の様子を報告した。フェーズ2では「現在の取組分析」として、時田学准教授が研究代表者を務める共同研究「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が学生生活にもたらした変容」における研究成果を、山本専任講師・高階助教が報告した。そして最後のフェーズ3では「将来を見据えて」と題して、ハイブリッド授業（対面授業とZoomによるオンライン授業の同時進行など）の事例紹介を行った。（ア）では松原教授がこの時点で商学部で利用可能なハイブリッド授業のための設備（カメラなど）の紹介を行い、（イ）では鈴木教授がハイブリッド授業で行っているゼミナールの様子を紹介した。

表2 ワークショップ 2020

| 項目                       | 内容                                                                                               | 時間  |
|--------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| 【開会の辞】                   | 司会進行 高久保 豊 商学部FD副委員長                                                                             | 2分  |
| 【フェーズ1 現状の問題共有】          | 意見交換                                                                                             | 55分 |
| （ア）趣旨説明                  |                                                                                                  | 5分  |
| （イ）ブレイクアウト               | 参加者が任意に興味のある議題のグループ（1組約5名）を選択する。                                                                 | 30分 |
| （ウ）全体会                   | 各グループのリーダーが議論の様子を報告する。                                                                           | 20分 |
| ～休憩～                     |                                                                                                  | 5分  |
| 【フェーズ2 現在の取組分析】          | 共同研究発表<br>（山本 真菜 専任講師，高階 曜衣 助教）<br>「新型コロナウイルス感染症拡大下における<br>日本大学商学部生の生活実態：<br>オンライン授業のあり方の検討に向けて」 | 15分 |
| 【フェーズ3 将来を見据えて】          | ハイブリッド授業の事例紹介<br>松原 聖 商学部FD委員長                                                                   | 6分  |
| （ア）学部の用意している設備の紹介        | ビデオカメラを使用し対面とオンライン同時進行の手法を使用する方法や、教室のセット写真等を紹介（松原 聖 教授）                                          | 3分  |
| （イ）現在その手法を取っている教員による事例紹介 | 鈴木 正明 教授                                                                                         | 3分  |
| 【閉会の辞】                   | 松原 聖 商学部FD委員長                                                                                    | 5分  |

出所 日本大学商学部教務課（2020）

### 3. FDウィーク 2021 の内容

本節では 2021 年 9 月上旬に実施された商学部 FD ウィーク 2021 の内容を紹介する。FD ウィーク 2021 は以下の 3 つの内容からなり、教員にはどれか 1 つ以上に参加してもらった。① オンデマンドコンテンツ視聴、② ワークショップ、③ ①②に係るオンデマンドコンテンツ視聴。①では FD に関する動画 URL を教員に案内し、関心のある講演を 1 つ視聴し Google フォームにて 100 字以内で所感を提出してもらった。教員に案内したコンテンツは以下の 1～3 である。

- 1 第 1 回日本大学シンポジウム（令和 3 年 6 月 26 日開催）
- 2 全国私立大学 FD 連携フォーラム（JPFF）「実践的 FD プログラム・オンデマンド講義サービス」
- 3 FD 活用のための講演・事例発表オンデマンド配信（私情協）

表 3 ワークショップ 2021

| 項目                       | 内容                                                                 | 時間   |
|--------------------------|--------------------------------------------------------------------|------|
| 【開会の辞】                   | 司会進行 高久保 豊 商学部 FD 副委員長                                             | 2 分  |
| 【フェーズ 1】                 | 「情報共有」                                                             | 43 分 |
| (ア) アイスブレイク              | 「悩み共有の部」                                                           | 26 分 |
|                          | ・ 趣旨説明                                                             | 6 分  |
|                          | ・ グループセッション                                                        | 20 分 |
| (イ) 「取り組み共有の部」           | 「オンライン授業及び効果的なフィードバックの試験（小テスト）実施について」                              | 17 分 |
|                          | ・ 趣旨説明                                                             | 2 分  |
|                          | ・ フルオンデマンド授業（池野 秀弘 教授）                                             | 5 分  |
|                          | ・ セミオンデマンド授業（木下 征彦 准教授）                                            | 5 分  |
|                          | ・ 同時双方向授業（平松 庸一 教授）                                                | 5 分  |
| ～休憩～                     | 開始 5 分 ホームエクササイズ（深見 将志 准教授）                                        | 10 分 |
| 【フェーズ 2】                 | 「来年度に向けたプラン～フィードバックの方法を求めて～」反転授業プラン紹介<br>松原 聖 商学部 FD 委員長           | 15 分 |
| 【フェーズ 3】                 | 「フィードバックについて学生と一緒に考える」                                             | 15 分 |
| (ア) 「令和 3 年度 CHAmiT の紹介」 | CHAmiT 学生スタッフ 2 名<br>・ 昨年度 CHAmiT の報告<br>・ 商学部開催の今年度 CHAmiT 途中経過報告 |      |
| (イ) 「オンライン授業の生の声」        | 時田 学 准教授, 相澤 朋子 専任講師,<br>CHAmiT 学生スタッフ 2 名                         |      |
| 【閉会の辞】                   | 松原 聖 商学部 FD 委員長                                                    | 5 分  |

出所 日本大学商学部教務課 (2021a)

②のワークショップは、9月8日（水）午後1時～2時30分にオンライン形式（Zoom）で行われた。内容については表3を参照されたい（各内容の詳細は第4節で説明する）。ワークショップはフェーズ1～3の3部構成で行われた。フェーズ1は2部構成で行われ、（ア）はアイスブレイクとして、参加教員をZoomのブレイクアウトルームに分けて「悩み共有の部」と題して自由に情報交換をしてもらった。（イ）は「取り組み共有の部」と題し、授業形態別に3名の教員が講演した（フェーズ1の詳細は4.1）。フェーズ2では次年度の対面授業再開を見据えて、フィードバックと反転授業をキーワードに講演が行われた（詳細は4.2）。休憩時間にはオンライン講義等での疲れをほぐすホームエクササイズが紹介された。そして最後のフェーズ3では当初商学部開催予定であった令和3年度日本大学学生FD CHAmmiTの紹介を学生スタッフ2名が行い、続いて対話形式で学生と教員の意見交換を行った（詳細は4.3）。

次の節ではFDワークショップ2021の詳細を紹介する。

## 4. FDワークショップ2021

本節ではFDワークショップ2021の詳細を説明する（タイムスケジュールについては表3を参照されたい）。4.1から4.3はそれぞれフェーズ1からフェーズ3の内容を紹介する。4.4ではワークショップ後のアンケートについて述べる。なお、フェーズ1とフェーズ2の間の休憩の開始5分後から、深見将志准教授の指導によるホームエクササイズを行った。日頃のリモートワークで凝った心身をほぐし、リラックスした状態でワークショップ後半に臨むことができた。

### 4.1. 【フェーズ1】「情報共有」

ワークショップ最初のプログラム「情報共有」は、（ア）アイスブレイク「悩み共有の部」と（イ）「取り組み共有の部」から成る。

#### （ア）アイスブレイク「悩み共有の部」

高久保豊FD委員会副委員長による趣旨説明の後、Zoomのブレイクアウトルーム機能を用いて、参加者は1グループあたり5～6人ずつ、計8グループに分かれた。そしてグループごとに、遠隔授業における学生へのフィードバックの方法やオンライン試験の実施方法、LMS（Learning Management System）の使用などについて問題点や困っていることを共有し、解決策を探った。FD委員会の委員が各グループのファシリテーターになった。

ワークショップ後にファシリテーターから提出された報告書を見ると、受講者の多い授業における、きめ細かなフィードバックに困難さや負担を感じている教員が少なくないようである。また、スポーツ実技の授業をオンラインで行うことの難しさ・問題点や、情報通信機器に詳しくない教員へのサポート不足など、様々な指摘がなされていた。報告書の中には、ゆっくり意見交換ができなかった、解決策を十分に探れなかった、ということが記されているものも複数あった。アイスブレイクに割り当てられた時間は、趣旨説明を除くと20分であった。この時間設定の妥当性については今後の検討課題としたい。

#### （イ）「取り組み共有の部」

「オンライン授業及び効果的なフィードバックの試験（小テスト）実施について」というテーマのもと、フルオンデマンド授業について池野秀弘教授が、セミオンデマンド授業について木下征彦准教授が、同時双方向授業（同時双方向志向型授業）について平松庸一教授が、それぞれの2021年度前学期における授業実

践例を紹介した。

まず、池野教授から「経済学入門1」（木曜1限）の実践報告がなされた。同科目は学部1年生の必修科目で、複数のクラスが開講されている。池野教授の木曜1限のクラスには221名の履修者がいた。「経済学入門1」は、どのクラスも共通テキストを使用しフルオンデマンド型で実施されているが、その授業運営の仕方は各担当教員の裁量に委ねられている。池野教授はGoogle Classroomに講義の動画(PowerPoint使用)や、動画で使用するPowerPointをPDF化した資料をアップロードする方式で授業を行った。PDFの資料は授業の2日前にアップロードし、学生には、プリントアウトしたものにメモを書き込みながら動画を視聴するように勧めていた。動画は50分を目安とし、Zoomで作成された。課題のGoogleフォームには、授業内容に関する設問のほか、学生からの質問と授業の進め方についての意見を記入する欄を設けた。また、授業日の昼休みに約20分、Zoomで学生が質問できる時間をとった。池野教授の授業実践報告の最後に、フルオンデマンド授業で気をつけたこととして、教室での授業に近い感じを目指すこと、学生からの質問への対応の仕方、学生からの要望に可能な限り応えること、授業日の午前中にGoogle Classroomへの学生のコメントをチェックすること、パンデミックの中でも教員・学生ともに明るい気持ちになるよう努めることが挙げられた。

続いて、木下准教授から「社会学A」（セミオンデマンド）について授業実践の報告がなされた。同科目の履修者は、水曜1限のクラスが141名、水曜3限のクラスが138名である。「社会学A」において木下准教授が重視したのは、知識の暗記ではなく、社会学的思考についての理解を促すことであった。「社会学理論にもとづいて社会の仕組みと成り立ちを理解する」という目的のもと、毎回Googleフォームによる事前・事後課題が出され、前学期中に2回の授業内テストがGoogleフォーム（日時指定）で実施された。各回の90分授業は3つのパートに分かれている。最初のパートA（30分）は1つ目の講義動画の視聴と出席登録、続くパートB（40分）は2つ目の講義動画の視聴と感想アンケートなどの課題、最後のパートC（20分）はZoomによる解説・質疑応答である。課題のフィードバックは、Googleフォームの機能を用いた即時フィードバックのほか、講義動画やZoomで行われた。また、授業内テストのフィードバックは、Googleフォームの機能の使用に加えて、テスト後2日以内に解説動画が公開された。この動画では、平均点・得点分布・出題意図や誤答の多い問題などについて30分ほどで解説がなされた。木下准教授の授業実践報告の最後に、事前・事後課題と授業内テストについて、学生からのコメントを紹介しつつ、今後の課題と対処法が示された。

平松教授からは「同時双方向志向型授業のデザイン」について3パターンに分けての説明があった。1つ目は「自主創造の基礎1」やゼミナールのパターンである。受講者は10名～26名で、前学期15回の第1回・第2回・第11回～第15回が教室での授業、第3回～第10回が同時双方向型のオンライン授業であった。2つ目は「外国書講読I」のパターンである。受講者は34名で、全15回のうち、Zoomによる同時双方向授業が計9回、動画を視聴するオンデマンド授業が計6回であった。3つ目は「人的資源管理論A」のパターンである。受講者は火曜1限のクラスが88名、火曜2限のクラスが116名であった。全15回のうち、第1回と第15回がZoomによる同時双方向授業、第9回がZoomによるディベート動画視聴、第2回～第8回と第10回～第14回が動画を視聴するオンデマンド授業であった。オンライン授業における教材のアップロードや学生への情報伝達はGoogle Classroomを使用した。また、小テストはGoogleフォームで作成され、原則として学生の解答送信と同時にスコアが通知された。小テストの正解の公表と解説は翌週の授業の冒頭で行われた。平松教授の実践報告の最後に、同時双方向志向型授業での工夫として、学生の不安を解消することを第一としたこと、学生が規則正しい生活を送れるよう、授業時間内に動画視聴と小テストの解答をさせたこと、小テスト・質問のフィードバックを丁寧かつ迅速に行ったことが語られた。

#### 4. 2. 【フェーズ2】「来年度に向けたプラン～フィードバックの方法を求めて～」

フェーズ2では松原聖教授が担当科目である「貿易論1」を題材として次年度の講義プランを紹介した。新型コロナウイルスの動向次第では今年度オンラインで提供された科目の多くが次年度は対面授業となることが予想される。そのためこの講義プランも対面授業を前提にし、到達度評価や反転授業の試みを紹介する内容となった。

最初に同科目の概要が紹介された。商業学科の専門科目で履修者数が毎学期300名以上と多いこと、そして学期末の試験または課題および履修者の質問・発言等に対するボーナスポイントで成績が付くことなどである。続いて商学部FDウィーク2020オンデマンドコンテンツの1つであった、2020年度第4回日本大学オンライン授業に関するシンポジウムでのオンライン授業紹介の1つが反転授業計画のきっかけとなったことを紹介した。そして「貿易論1」第2回講義「1. データで見る日本の貿易」を具体例として、同科目の反転授業プランを説明した。第2回講義の内容紹介の前に、第2回以降も同じような形で

- ・予習（音声解説視聴）
- ・対面授業（音声解説内容の簡単な復習と黒板の利用やディスカッションが有用な内容の説明）
- ・Google フォームでの小テスト

を繰り返していくという講義形式のプランが紹介された。最後にGoogle フォームを使った小テストについて説明した（オンライン講義の場合は出席登録を兼ねる）。小テストの主な目的は前回講義の復習ならびに小テストの解答提示を通じた履修者へのフィードバックを行うこと、そして反転授業と合わせ何回も復習させることで履修者の理解度を高めることである。Google フォームの利用は自動採点により教員の負担を少なくすることを意図している。

#### 4. 3. 【フェーズ3】「フィードバックについて学生と一緒に考える」

ワークショップ3つ目のプログラム「フィードバックについて学生と一緒に考える」の前半は、CHAmiT 学生スタッフの商業学科4年古家凌成さんと経営学科3年森田麻衣さんによる令和3年度CHAmiT の紹介だった。CHAmiT の意味を教員が理解することを意図して前半は企画された。後半は、時田学准教授と相澤朋子専任講師が加わって、古家さん、森田さんとオンライン授業について意見を交わす「オンライン授業の生の声」が行われた。なお、参加した古家さんと森田さんは、所属学科・氏名および発言内容を本稿に記載することを承諾している。

##### （ア）「令和3年度 CHAmiT の紹介」

古家さんと森田さんがPowerPoint 資料を使って、CHAmiT とは何か、CHAmiT の目的を説明し、昨年度CHAmiT の内容と商学部が開催する今年度CHAmiT の途中経過を報告した。

令和2年度日本大学学生FD CHAmiT は、「ミライの大學生へ～オンライン授業ミライのカタチ～」を主題に、オンライン授業のメリット・デメリットについて学生と教職員とが互いに意見を共有した。令和3年度日本大学学生FD CHAmiT は、11月28日（日）にオンラインで開催される。ブレイクアウト・ルーム機能を使用したしゃべり場（グループ・ワーク）を設け、学部混合のセッション1の主題は「キャンパス・ライフのメリット・デメリット」、学部単位のセッション2の主題は「アフター・コロナの日大の教育」、学部単位のセッション3の主題は「学部提案書の作成」を予定している（ワークショップ2021が開催された9月8日時点の予定である）。

CHAmiT の意義について、古家さんは、「日本大学全体の規模で、学生・教員・職員が三位一体となり、

大学教育の改革について、フランクに話し合うことができる環境が整備されていることに、非常に感銘を受けております。また、学部がキャンパスごとに分かれてしまっている日本大学で、学部間での学生交流が進められる貴重な機会であるとも考えています。講義や試験、諸活動などの時間の制約から、三者が赤裸々に大学教育について話し合える環境は非常に限られてしまっています。学生FD CHAmmiT への参加をきっかけに、新たな切り口で日本大学の未来を築いていければと思います。ハードなテーマで真面目な団体と思われがちですが、企画から運営を担っているスタッフは非常に温厚で、当日のイベントもフランクにかかわることができます。学生FD CHAmmiT は、年に一度の開催ですが、商学部のみであれば複数回の開催の実施を検討してもよいと思います。目まぐるしく変化する情報社会のなかで、大学教育も同様に変化していきます。商学部のなかでCHAmmiT と同様のイベントを開催することによって、三者の障壁が減り、さらなる改革が期待できると感じます。私がこれまでにしかかわってきた学生FDとしての経験を後輩に引き継いでもらいたいと思います」と説明した。

一方森田さんは、「教員と学生の立場は対等であるべきという理論は存在するものの、私たち学生としては、教員に対して気を使ってしまうことも多いというのが現状です。そこで、教員と学生との距離という差をなくし、対等な立場で意見を発言できる場こそがCHAmmiT であり、これこそがCHAmmiT の意義だと考えます。教員の方々が毎回の講義について常に改善を行ってくださっていることは、私たち学生も十分承知しております。それに加え、CHAmmiT であがった学生の生の声なども考慮に入れて講義の改善に努めていただけると、今後の学生の学びのためにもなると思いますので、是非考慮に入れてくださると幸いです」と述べた。

#### (イ)「オンライン授業の生の声」

オンライン授業について、古家さんは、「私は4年生ということもあり、ほとんどの単位を取り終わっている状態です。そのため、特に大きな要望などは抱え込んでおりません。しかし、アフター・コロナにおいてもオンライン授業は完全になくなるものではないと考えます。対面方式とうまく連携しながら、学生にとっても教員にとっても最適な環境を今から作っていきたいですね」と話した。

森田さんは、「現在のように、講義式の講義はオンライン授業を継続し、ゼミ・語学・実技等の授業は対面で少人数など工夫をして行うのが効率的で良いと考えております」と語った。

授業や課題レポート、試験などの結果について、どのようなフィードバックを希望するかという質問には、「実際に自分自身がどれほど出席をしていて、確実に課題などを提出しているかが、Classroom および出欠管理システムと連携できればと思います。いつか課題の二重提出や提出忘れをした経験があり、未然に防ぐためにも今からできることをCHAmmiT などで考えていきたいです」と古家さんは答えた。森田さんは、「課題の頻度については、特にオンデマンド授業は、毎回の課題または小レポートがあるほうが毎回の授業で緊張感をもって取り組みます。また、記述式の課題に対してはコメントまたは点数をつけてくださると、安心はします。受講人数が多い授業などの場合は、課題の解説として模範解答などを示してくださると今後の学びにつながります」と話した。

このような学生の意見をふまえ、フィードバックを積極的に行うことを意図する場合、教員の視点と学生一人ひとりの視点とをどのように共有するかという論点を中心に、時田准教授が司会進行し、相澤専任講師も交えて論議された。

今年度のオンライン授業について、古家さんは、「フルオンデマンド授業が本格導入され、講義の受け方が多様になった」、森田さんは、「取りたい授業をすんなり取れるようになった」と感想を述べた。相澤専任講師は、ご自身が「担当しているフルオンデマンド授業は好評であるが、対面授業にも長所があるので、科目の特性に応じて、使い分けるとよい」と語った。

古家さん、森田さんが、「オンライン授業で使用する資料が鮮明でないため、見えにくいことがある」と指摘したことについて、相澤専任講師は、「見え方、聞こえ方は人によって違うし、画像を鮮明にすると容量が気になることもある」と述べ、グーグル・ワーク・スペースなどを紹介したうえで、「例えば、スマホのアプリを使うと、手軽に見やすい資料を作成できるので、見やすくするための工夫をしていただきたい」と語った。

最後に、リアクション・ペーパーによるフィードバックについて、古家さん、森田さんは、毎回の授業で質問や感想を求められ、その記述内容に教員が回答してくれると授業への意欲が高まると話した。相澤専任講師は、「学生が考えているフィードバックと教員が考えているフィードバックとは違う。教員は学生の声を聴きながら、フィードバックする姿勢を示すことが大切である」と語った。時田准教授は、「学生の視点に立ってフィードバックすると、学生の感じ方、考え方を理解し共有できてより生産的なフィードバックを考えることができるのではないか」と示唆した。

#### 4. 4. ワークショップ後のアンケート

ワークショップの後、2週間の期間を設けて Google フォームで記名式のアンケートをとった。アンケート項目は①「質問をしたいプログラムを選択してください」（回答必須。複数回答可）、②「質問内容を御記入ください」、③「感想・次回に向けたご要望がございましたら御記入ください」である。回答者は34名であった。

上記①の項目への回答は、「取り組み共有の部」の「セミオンデマンド授業」「同時双方向授業」を選択した参加者が各2名、「ホームエクササイズ」が1名、「オンライン授業の生の声」が3名、「その他全体」が3名、「特になし」が29名であった（選択肢の中には「取り組み共有の部」の「フルオンデマンド授業」、「来年度に向けたプラン～フィードバックの方法を求めて～」、「令和3年度 CHAmmit の紹介」もあったが、これらを選択した参加者はいなかった）。②の「質問内容」の記述には、学生の感想等に対する加点をどのように行っているのか、授業準備にどの程度の時間がかかっているのか（いずれも「セミオンデマンド授業」への質問）、教室での授業における機器のセッティングにどの程度の時間を要するのか（「同時双方向授業」への質問）、といったものが見られた。これらの質問内容は、質問対象のプログラムの担当者（授業実践報告者など）に伝えて回答してもらうことにした。なお、この②の項目には、質問ではなく意見の記述も少なかった。③の「感想・要望」の記述には、

- ・ 学生へのフィードバックにおける課題や手法を教員間で共有できたことが良かった。
- ・ 取り組みの事例を数多く知ることができたり、オンライン授業に対する学生の意見を聞くことができたことで有益だった。今後の授業に活かしたい。
- ・ 商学部専任教員の参加が少なかったのが残念だ。
- ・ 参加者全員による質疑応答・意見交換の時間があるとよい。
- ・ 各教員が蓄積しているノウハウをじっくり共有する機会を設けてほしい。
- ・ 「今後の日本のオンライン教育」「諸外国のオンライン授業の事情」などの大きなテーマでの議論もしたい。そのような議論によってマクロな視点を養うことが必要だ。

といった感想・要望のほか、ワークショップの準備に関わった人々への感謝の言葉が多数書かれていた。

## 5. 大学院FDの状況

本節では、上記「商学部FDウィーク 2021」の一環として実施された「大学院FD」について記しておきたい。大学院生に対する教育活動は、学部生に対するそれに連なるものがある一方、それだけにとどまらない部分もある。商学研究科は、商学専攻、経営学専攻、会計学専攻の3専攻で構成され、本稿執筆時点（2021年11月）で学生の大部分が中国人留学生であることから、言語・文化・思考方式を含めたコミュニケーションのうえで留意しなければならない事柄が少なくない。こうした問題意識のなか、過年度においても年1回のワークショップ等を実施してきたが、今後は年複数回の公式活動を実施することで大学院生への効果的教育活動に対する意識を高めるべく心掛けた点を特筆したい。以下、ここ3年間のなかから、①リアルに実施した2019年1月の取り組み、②コロナ禍で実施した2021年3月の取り組み、③FDウィークに合わせて大学院生との対話を重視した2021年9月の取り組みの3つに焦点を絞り、振り返っていくこととしたい。

### 5.1. 2019年1月17日の取り組み

まず、2019年1月17日に実施された「平成30年度大学院商学研究科・商学部FD講習会&ワークショップ」の概要を示しておきたい。このFD講習会&ワークショップは「学生の主体的学びを引き出す具体的な工夫をめぐる経験の共有」をテーマとし、第一部はeラーニングの実践を中心に2本の報告を頂戴し、第二部は大学院教育を中心にワークショップを実施したものである。以下、第二部の記録を抜粋したい。

第二部では、大学院教育について「今取り組むことのできる具体的な工夫」に焦点を絞り、参加者全員によるグループディスカッション形式のワークを実施した。まず、事前に希望者より「身近でささやかな第一歩を進める」にかかる意見をメールで集め、1項目あたり100字以内にまとめた52項目の問題が提起された。これらを便宜上、「支援体制」、「入試」、「指導教授」、「科目」、「成績評価」、「研究発表会」、「後期課程」、「広報」の8つの中分類にまとめ、第一部の開始時点において一覧表にして参加者全員に配布した。その後、第二部の参加者22名が3つのグループに分かれ、上記の一覧表を参考資料として自由にテーマを定め、ワークシートならびに模造紙・付箋紙を用いたディスカッションを行った。

Aグループでは、「研究交流の深化（大学院紀要編集体制を含む）」、「初年次教育体制の充実（指導教授決定手順を含む）」、「広報の充実（ホームページの機能化を含む）」、「カリキュラム&成績評価（奨励金支給基準を含む）」、「各専攻定員の見直し」の5点を中心に以下のアイデアが提出された。①指導教授の決定は、連休前に実施するか、学部のゼミ入室試験のような面接を行う。②「演習1」、「演習2」を設ける（学部とのコマ調整が必要）。③大学院入試要項のパンフレットを充実させ、ホームページを多数言語で掲載する。④成績評価をより客観的な方法で算出する必要がある。⑤博士後期課程の学生を共同研究に参画させたり、『商学集志』に投稿させたりする措置の拡充など、研究交流を深化する必要がある。⑥商学専攻・経営学専攻・会計学専攻の定員配分を見直すほか、将来は専攻の一本化ないし社会科学系研究科との連携による見直しが必要。⑦学部と合わせて5年で修了できるコースの導入や税理士育成プログラムの導入が求められるとした。そして、これらを分科委員会メンバー全員で実行することが不可欠である、とまとめられた。

Bグループでは、KJ法を通じて、議論の整理を進めていった。まず、「TA（ティーチング・アシスタント）制度・RA（リサーチ・アシスタント）制度」と「資金支援」との深い関連に着目し、安定した支援の必要性のため、「（成績資料の整理など）アルバイトの充実」、「資料調査費の支援」のほか、「助手制度の活用」、「留学制度の充実」などが提示された。また、「留学生ならではの対応」と「研究支援・学修支援の充実」の関連について、学部生を日本語チューターとする「ライティング・ラボ」を設置し、日本語チェックなどの支援が提示された。さらに、「専攻・研究科を越えた領域」への支援、複数教員と複数の大学院生が意見交

換を行う場の設置と充実が求められるとした。そのほか、中国大陸ではNU メールにアクセスできないことに対応する必要性が指摘された。「入試体制の充実（出題範囲と基準の明確化を含む）」については、過去問の開示、社会人入学の促進、学部・大学院を5年で修了できる制度の設置、課題図書方式の入試などが提案された。

Cグループでは、2つのテーマを集中的に話し合った。1つ目は、かつて平成19年度と平成22年度の2回、大学院生のホームカミングデーに相当する「東アジアシンポジウム」が2日間にわたって実施されたことを念頭に、3回目の企画案に関する意見交換を行った。2つ目は「研究発表会の充実」である。前者は、商学研究科を修了して学位を取得し、母国や日本あるいは世界各地で活躍するOBに光を当て、砧キャンパスでの講演や現役学生や教職員との交流会をもつ企画の積極的意義を掘り起こすものである。このイベントを通じて、修了生が母校で一堂に会することにより、彼らはもとより現役学生の帰属意識の向上につながるものであると紹介された。また、「XX学会」と銘打つことでOBたちが集まりやすくなるだろう、とのアイデアが紹介された。後者は、他専攻の報告が聞けなかったり、指導教授以外の教員からコメントをもらう機会が少なかったりする現状を変えるため、分科委員全員の出席を必須とし、報告を大部屋方式で行い、前期課程2年生と後期課程にしぼることで充実を図るアイデアのほか、最終報告会の導入が提案された。

高橋史安商学研究科長（当時）より、総括として、待ったなしの大学院改革に対応するため、当日のアイデアを実現する改革プロジェクトを立ち上げたい旨の意思表示が行われた。

## 5.2. 2021年3月18日の取り組み

2020年度においては、コロナ禍であったことから、オンライン開催（Zoomによる同時双方向型の遠隔会議）により「令和2年度大学院商学研究科FDワークショップ」が2021年3月18日に開催された。このワークショップは大学院課程検討委員会と商学部FD委員会が共同主催し、座長は池野秀弘教授、共同座長は松原聖教授であった。テーマは「外国人学生と接するマインドとスキルをめぐって」であり、趣旨として「大学院生の大部分が外国人学生である今日、教員と学生との間のコミュニケーションギャップや意識のミスマッチにお互いが悩むケースが少なくない。今回のワークショップでは、外国人学生と接するさいのマインドとスキルをめぐり意見交換を行い、教育改善に生かすことを狙いとする」と謳われた。参加対象者は、教員（専任、兼任、非常勤、特任、代講）、職員とし、分科委員会メンバーのほか、大学院科目担当か否かに関わらず、関心のある有志教職員の積極的な参加を歓迎した。あらかじめ25～30人の参加を想定し、全体会と分科会（ブレイクアウトルーム）の2つを組み合わせることで進行することとした。

ここでは、あらかじめ「想定されるお悩み」として、以下の12項目を発信しておくことにした。

- 1) ポータルやメールで連絡が取りにくい。どうしたらよいのか。
- 2) 日本語が通じているのかどうか。学生の日本語もわかりにくい。
- 3) 文化的背景が異なり、思いがけなく学生たちを傷つけていないか。
- 4) 修士論文の日本語指導が大変。よいアイデアはないか。
- 5) 商学・経営学・会計学の基礎が不足。リメディアルはできないか。
- 6) 学費・生活費で困窮する学生に一層の対応ができないか。
- 7) 授業以外に留学生たちのホンネを聞く場を作れないか。
- 8) 研究発表会の後にパーティーを開けないか。
- 9) OBを含めてよい関係を築きたい（大学院版ホームカミングなど）。
- 10) 商学研究会／『商学論叢』の拡充を通じ、活性化を図りたい。
- 11) 学部生と大学院生と一緒に学べる場を作って交流が図れないか。

12) 学生の意欲を汲み取り、教員側の受け入れ態勢を開放的にできないか。

実施の成果として、各グループの代表者から以下の報告がなされ、参加者に共有された。

グループ1の討論テーマ：修士論文の日本語指導が大変であり、良いアイデアはないか。

① 修士論文の作成時に学生たちが各種の自動翻訳機能を使用するケースがあるようだ。② 複数の大学院生から、論文を作成するに当たり、他の文献等から引用した箇所が論文全体の分量の一定割合を超える場合のルールについて質問があった。③ 他大学で教鞭をとっている教員から、当該大学院では院生による修士論文の「使い回し」の問題が起きているとの情報が寄せられた。④ 教員による日本語の指導には限界があり、入試の段階で日本語能力の審査をより厳しくせざるを得ないのではないかという意見が出た。

グループ2の討論テーマ：修論指導における日本語の問題

① どれくらい教員が関与するのか。「てにをは」レベルまですべてに関わるのか。指導例：修論執筆につながるように、こちらでひな形をつくって、院生に書かせている。② 非母語で論文を書くということの困難さを理解する必要がある。③ 授業中に自分の考えが説明できないケースがある。

グループ3の討論テーマ：日本語が通じているのかどうか不安。学生の日本語もわかりにくい。

① 問題／課題の整理において、学生間の日本語能力の差がある。② 問題／課題の解決に向けて、専門指導と日本語指導を分けるアイデアがある（日本語指導のチューター制度設置など）。

グループ4では、かつて留学生として日大大学院商学研究科で博士号を取られた非常勤講師より、自身の経験をお話いただき、他の教員との質疑応答を行った。以下では、質疑応答の内容を記しておく。

① 日本人学生との勉強と交流の機会がもっとあったらよかった。解決への推進策として、日本人・留学生の共同作業を必須するのがよいと考える。そのほか、(i) メンターの募集、(ii) 特定の委員会がスケジュール設定や予算確保を行い、学部生 or 大学院生による語学インストラクター（アルバイト）を募る。② 入学要件として、入門レベルの基礎学力が試されるような内容の試験を課す方向性を提案する。③ 学問の前提としてメンタル面のケアが重要である。④ とにかく日本語を書き、日本語を使う環境が重要である。

### 5.3. 2021年9月8日の取り組み

2021年度では、これまでの活動を受けるほか、大学院商学研究会という名称の大学院生による自主活動組織とのコラボレーションを念頭に置き、FDウィーク期間中において、大学院商学研究会から提出された改善提案リストに基づく教職員と学生たちとの意見交換会を行うこととなった。コロナ禍が収まっていないため、このときも遠隔会議方式をとることとなった。改善提案リストは2021年7月27日に「日本大学大学院商学研究会運営委員会（学生会議）一同」の名義で提出されたもので、12項目で構成される。その主な内容を集約すると、以下の通りである。① 大学院生による投稿論文を主なコンテンツとする『商学論叢』を発刊するための十分な予算水準の確保を商学部執行部に理解してほしい。② 研究のために会社や工場を見学する機会を作してほしい。③ コロナ禍のため、キャンパス内で大学院生が資料を印字することができない状況にあり、改善してほしい。④ 図書館3階の大学院専用スペースとコンピュータ・センターの再開に尽力してほしい。⑤ 対面指導を受ける場所の確保と手続きの簡素化をお願いしたい。⑥ 入構制限のしかたを見直してほしい。⑦ 図書館滞在時間を延ばしてほしい。⑧ 図書館オンラインデータベースのアクセス数を拡大してほしい。

こうした声に応える形で、大学院生との意見交換会を持つこととなった。学生側は、大学院商学研究会を代表して同会の運営委員会（学生会議）の大学院生たちが出席し、教職員側は、大学院課程検討委員会の委員のほか、有志の大学院担当教員が参加した。概要は、以下の通りである。イベント名：「日本大学大学院商学研究科FDワークショップ—大学院生と教職員との意見交換の場として—」。開催日時：令和3年9月8日（水）17：00～18：30。次第：1 趣旨説明，2 FDとは何か？大学院FDとは？，3 本日の進め方，4 大学院課程検討委員会委員長のご挨拶（池野秀弘教授），5 大学院商学研究会会長のご挨拶（ダオティトゥチャンさん），6 大学院生からの要望書「大学院生による、より良い環境のための改善提案リスト（令和3年7月27日提出）」の確認，7 教職員からの回答，8 『商学論叢』の募集要項（案）について，9 さらなる意見交換。

この意見交換会に先立ち、課程検討委員会では、上記の「改善提案リスト」に加え、これまでの大学院FDで得られた課題を踏まえて以下の点が「さらなる意見交換」で話題になることを想定し、回答を準備した。

- ① 日本語が通じているのかどうか不安になることがある。学生の日本語もわかりにくい。  
→それぞれの授業単位で Wechat というアプリのグループ機能を活用してはどうか<sup>1</sup>。
- ② 修士論文の日本語指導が大変。よいアイデアはないか。
- ③ 学部生と大学院生（日本人学生を含めて）と一緒に学べる場を作って交流が図れないか。
- ④ 商学・経営学・会計学の基礎が不足。リメディアルはできないか。
- ⑤ 研究発表会の後に交流会を開けないか。
- ⑥ 商学研究会／『商学論叢』の拡充を通じ、活性化を図りたい。

この意見交換会を通じて、教職員側から学生側に対して、以下の状況が説明された。①『商学論叢』の発刊について、直近では所与の予算内で実施するしかないが、必ず論文が掲載できるようなくみを実現する工夫を試みている。② 図書館3階の大学院専用スペースとコンピュータ・センターの使用については、コロナの感染拡大の状況を慎重に見極めながら、拡大が収まった段階で緩和できるような体制を作っているところである。③ 図書館については、すでに段階的な開放を行っており、詳細はポータルで把握してほしい。今後、2022年2月ないし3月にもう一度、教職員を対象とした「大学院FD」を実施する計画である。

## 6. おわりに

令和3年度の商学部FDウィーク2021は、商学部FD委員会中期計画（令和3年度～令和5年度）に掲げた人材育成の目標・方針ならびに教育の質向上をはかるための支援として、試験や課題レポートなどの評価結果のフィードバックについて、具体的な手続きや方法を理解し実践できるようになることを目指し、他の教員の創意工夫を互いに知る機会を設定することを目的に開催された。限られた時間内に興味深い取り組みが紹介され、有意義な意見交換が行われた。

教員からのアンケートではFDウィーク2021への感想だけでなく、今後の商学部FD活動に対する様々な意見が寄せられた。それらも参考にして、教員参加型の商学部FD活動に今後も取り組んでいきたい。

## 注

1. WeChat（ウィーチャット。中国名：微信）は中国 ICT 企業テンセント社（中国名：騰訊）が開発した中華圏最大のインスタントメッセージングアプリである。同社のホームページによれば、2020 年 3 月の時点で月間アクティブユーザー数は 12 億を超えている。

## 参考文献

- 日本大学商学部教務課（2020）「商学部FDウィーク 2020—大学院商学研究科・商学部FD実施要項—」
- 日本大学商学部教務課（2021a）「商学部FDウィーク 2021—大学院商学研究科・商学部FD実施要項—」
- 日本大学商学部教務課（2021b）「商学部FD講習会&ワークショップ実施状況（平成 28 年度～令和 3 年度）」未公表
- 竹村亮・金雲鎬・岡田太・菅野正泰・芝村良・服部訓和・根田正樹（2017）「【活動報告】大規模授業におけるアクティブラーニング—平成 28 年度商学部FD講習会報告—」『日本大学FD研究』第 5 号，27-50 ページ。
- 竹村亮・山根龍一・高久保豊・山本篤民・金恵鎮・高橋めぐみ・小川睦美（2018）「【活動報告】中規模授業におけるアクティブラーニング—平成 29 年度商学部FD講習会&ワークショップ—」『日本大学FD研究』第 6 号，47-77 ページ。
- テンセント社ホームページ <https://www.tencent.com/en-us/business.html>（2022 年 2 月 4 日最終閲覧）



## 学生レポート

## 「学生が変える日本大学」第6章

### —「令和元年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」における取り組み—

磯部耕志郎<sup>1), 2)</sup>, 石原諭衣<sup>1), 3)</sup>, 竹田 匠<sup>1), 4)</sup>, 柴田謙吾<sup>1), 5)</sup>, 稲邊奨太<sup>1), 6)</sup>  
岸部美和<sup>1), 7)</sup>, 小中英樹<sup>1), 8)</sup>

<sup>1)</sup>「日本大学 令和元年度学生FD CHAmmiT」学生スタッフ, <sup>2)</sup>日本大学危機管理学部危機管理学科3年,  
<sup>3)</sup>日本大学法学部政治経済学科3年, <sup>4)</sup>日本大学商学部経営学科2年, <sup>5)</sup>日本大学国際関係学部国際総合政策学科1年,  
<sup>6)</sup>日本大学生産工学部土木工学科4年, <sup>7)</sup>日本大学工学部電気電子工学科2年, <sup>8)</sup>日本大学医学部医学科3年

本稿は、日本大学における「令和元年度日本大学 学生FD CHAmmiT」の開催に至るまでの過程と開催後のアンケート結果より、学生スタッフの視点で今後の課題と展望を述べた活動報告書である。「日本大学 学生FD CHAmmiT」は、一般的な学生FDイベントと異なり、様々な学部から成り立っている日本最大規模の総合大学で行われるからこそ、その効果を大いに享受できる“日本大学独自の学生FDサミット”と言える。第1回目の「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」から今回で7回目を迎えた。本活動報告が今後の日本大学の「学生FD活動」の更なる発展に寄与することを期待する。

**キーワード：**FD (Faculty Development), 学生FD, 「令和元年度日本大学 学生FD CHAmmiT」

## はじめに

「日本大学 学生FD CHAmmiT」(以下、CHAmmiTとする)は、今年度で7回目になる。初年度から比べ認知度は高まり、すでに各学部には「学生FD団体」も誕生している。「CHAmmiT2018」では過去最大の参加人数を得た。今年度もその流れに乗り発展した企画を目指し開催した。ここで「CHAmmiT」の説明をしておく。簡単に言えば、「学生FDサミット」の「日本大学版」であると言えることができるが、少し毛色が異なる。「学生FDサミット」とは全国の各大学から十分な知識を持つ参加者が1つの大学に集い、大学教育について話し合い、学生FD活動を推進するための情報を交換する場である。一方で「CHAmmiT」とはチャットとサミットをかけ合わせた造語であり、難しく堅苦しい印象のあるFDと教育改善について教員・職員・学生で気軽に話し合うことがコンセプトである。今回の「令和元年度日本大学学生FD CHAmmiT」ではこれまでの6回を踏まえ、令和初ということもあり、様々な思考を凝らして取り組んだ。

## 1 「CHAmmiT」開催までの流れ

本節では、「令和元年度学生FD CHAmmiT」当日及び開催に至るまでの概要について報告する。令和元年4月中旬から5月中旬に学生コアスタッフ8名が公募により選出され、6月上旬から活動を開始した。途中辞退者が出てしまい、最終的には7人で活動することとなった。学生コアスタッフは、同時期に公募により選出または学部から推薦された学生スタッフ42名と6月下旬に顔合わせを行い、10月中旬から本格的に協働を開始し、企画・運営の準備を進めていった。総勢49名で「令和元年度日本大学学生FD CHAmmiT」のスタッフスタッフとなった。今回の学生コアスタッフは、例年問題とされていた一般スタッフとの隔たりをなくすため、協働して企画の立案に取り組んだ。スタッフ全員で話し合うことでスタッフ全員に共通意識が生まれた。以下では各ミーティングの概要を報告する。

### 1-1 第1回学生コアスタッフミーティング（令和元年6月8日）

本ミーティングでは、CHAmmiT コアスタッフと昨年度コアスタッフが集まった。今年度初の顔合わせでは自己紹介を行い、CHAmmiT コアスタッフの熱意を共有しあった。その後、昨年度コアスタッフにより引継ぎ作業を行い、去年の反省点の共有も行った。最後に代表・副代表の決定を行い、コアスタッフの担当、「企画班」・「広報資料班」の配属を決めた。

### 1-2 第1回学生スタッフミーティング（令和元年6月22日）

本ミーティングは全スタッフが集まる最初のミーティングであった。最初は学務課の濱野泰三氏が「CHAmmiT」についての説明を行った。説明後は自己紹介を行った。休憩の後、代表挨拶とアイスブレイクを実施した。アイスブレイクでは「CHAmmiT 2018」の当日実施したアイスブレイクを採用して徐々に緊張をほぐしていった。その後、芸術学部の吉野大輔准教授がスタッフ全員が当日担当する「ファシリテーション」の説明を行った。ワークショップ形式を採用し、スタッフによる理解が進んだ。その後企画骨子の検討をしゃべり場形式で行った。例年コアスタッフが中心であったが、スタッフ全員で話し合うことでスタッフ全員に「CHAmmiT」に対する意識が芽生えた。またしゃべり場形式を採用したため、班ごとに意見が飛び交い、効果的な時間となった。

※「しゃべり場」とは「討論」とは違った協議形式であり、相手の意見を否定してはいけない。また雰囲気も明るく意見が飛び交う特徴がある。

### 1-3 第2回学生スタッフミーティング（令和元年7月6日）

本ミーティングは開催会場である御茶ノ水の歯学部で実施した。最初に「CHAmmiT」当日の会場である歯学部歯科病院の歯学部創設百周年記念館講堂を見学した。松戸歯学部の河相安彦教授により「日本大学の教育と教育改善活動」の説明をしていただいた。次に歯学部の今村佳樹教授及び小泉寛恭准教授により、当日使用する教室の案内をしていただいた。その後場所を移し、企画骨子の検討を行った。本ミーティング自体2回目であったため、検討会の開始にあたって再度アイスブレイクを行った。スタッフの一部は歯学部1号館に行き、懇親会会場の見学を行った。企画骨子案の検討では、ホワイトボードを用いて6グループがどのような企画を行いたいかをより具体的に話し合った。しかし途中で行き詰まり、具体的な骨子案まではたどり着けなかった。以下の出た案をもとにコアスタッフで詰めることとし企画骨子案の検討を終えた。そして最後に一般スタッフの「企画班」・「広報資料班」へ配属した。今年度は任意形式にて配属を決めた。以下は各班の企画案である。

## 1 班

理想の大学生

## 2 班

未来へ続く自主創造

## 3 班

自主創造スイッチ, 学ぶ意義, 社会

## 4 班

大学生の見本

## 5 班

日大自慢

## 6 班

日大自慢 (アクティブラーニング)

**1-4 第2回学生コアスタッフミーティング (令和元年8月6日)**

本ミーティングでは8月20日に行う教員対象の教学推進ミーティングにおいて発表する「CHAmmiTの振り返り」・ならびに「今年度の企画案」の2つについて議論した。「CHAmmiTの振り返り」では過去6年間の内容の報告を行った。「今年度の企画案」では第2回スタッフミーティング以降の進捗状況も報告した。まずは今年度の目的である。そもそも「学生FD活動とは何か」という目的から再検討を行った。今年度のコアスタッフでは学生FD活動は「教職員のFD活動に関してのフィードバックを行う」とした。それを踏まえると、「CHAmmiT」においてフィードバックを行えているのかと疑問が生まれた。我々はフィードバックをできていないと感じた。当日の参加者にフィードバックを求めることは困難である。従って「学生FD活動≠CHAmmiT」という結論に至った。ではフィードバックを行うためにどうするのかと考えた結果、文理学部や生産工学部に存在する「学生FD団体」を他の学部でも設立するという答えにたどり着いた。自学部の学生によって行われるフィードバックこそがまさに学生FD活動であると考えた。そして各学部の学生FD設立を促進することができるものこそ「CHAmmiT」であると考えた。参加者に「教育改善」に関心を促すことができるからである。以上から今年度の「CHAmmiT」の目的は、「各学部に学生FD団体を設立させるため、より多くの学生のCHAmmiTへの参加を通じて、学生FD活動の認知度の向上」に確定した。そして上記を踏まえた企画案を作成した。前回のミーティングで検討した骨子案は二つに分類できる。第一に、日本大学の教育の特徴や教育理念である「自主創造」に焦点を当てた「日大の自慢」。2つ目は日本大学で身につけたい能力や教育理念の「自主創造」が社会で通用するのかどうかという「理想の日大生」である。しかし本ミーティングでは、1暗に絞り込むことができなかったため、現時点では「日大の自慢」と「理想日大生」の2つの企画案を実施する方向になった。最後に20日の教学推進ミーティングでの教職員とのワールドカフェの準備・各役割のタスクの洗い出しなどを行った。

**1-5 学生コアスタッフ企画検討合宿 (令和元年8月20日・21日)**

1日目は、第2回コアスタッフミーティングで教職員からのフィードバックを修正した内容の報告と共有を最初に行った。次に企画案の発表を行い、教職員からフィードバックをいただいた。その後時間をいただき、別室で学生のみで話し合いを行った。そして再度発表を行い、教職員からフィードバックをいただいた。以上のように健闘を繰り返すことを通じて企画案の内容を深めていき、21日の発表に向けた準備を行った。また、より多くの参加者を募るため、インスタグラムの開設やワールドカフェで動画を流す等の様々な広報活動を考案した。

2日目は、教員対象の教学推進ミーティングで発表する練習を兼ねて企画案の最終確認を行った。そして各学部教員の前で発表を行った。その後教職員と混ざり、ワールドカフェ形式で教職員としゃべり場を行った。

#### 1-6 第3回学生スタッフミーティング（令和元年9月21日）

本ミーティングは、全スタッフが揃う3回目のミーティングであった。合宿から1か月で企画内容に変更箇所が生じた。本来は身につけたい能力や教育理念の「自主創造」が社会で通用するのかが議題にした「理想の大学生」がテーマであったが、教職員と議論を重ね、「そもそも学生と教職員が認識している大学に隔りがある」とアドバイスを頂き、今年度の目的には大学に対する意識の乖離の問題解決は欠かせないことに気づいた。その結果、「大学とは」というテーマを扱うことになった。以上の変更点を踏まえて、一般スタッフには「今年度の目的」、「2つの企画案」、「ファシリテーションマニュアル」の説明を行った。その後しゃべり場の練習も兼ねて、2つの企画案の実践を行った。その後班活動で企画班はオープニング、エンディング、懇親会の枠組み考案、広報資料班は各学部で教員・職員・学生との写真の撮影を依頼した。以上の流れでミーティングを終えた。ミーティング後にコアスタッフと教職員で集まり、様々な問題を確認した。コアスタッフ内の報連相が不十分であることが主たる問題である。そのためコアスタッフがバラバラな状態になっていた。結果、変更した企画案に関する話し合いをしっかりとできていなかったこともあり、ミーティング中の企画案実践はうまくいかず時間超過してしまった。また企画案を2つ実施することは現実的に厳しいことを目の当たりにした。その結果、今回の目的に沿った企画案である「大学とは」に絞り、今後準備をしていくことを決定した。

#### 1-7 第4回学生スタッフミーティング（令和元年10月27日）

本ミーティングでは、前回のミーティングから変更し、企画を1つに絞ってやっていくことに触れ、再度企画案とファシリテーションマニュアルの説明を行った。その後当日の流れをピックアップしてしゃべり場の練習を行った。最後に班ごとの活動時間を設け、当日に向けて準備を行っていた。

#### 1-8 第5回学生スタッフミーティング（令和元年11月9日）

本ミーティングは、理工学部及び歯学部の開催キャンパスで実施した。最初に、誘導経路の確認を行った。その後、企画案とファシリテーションマニュアルの再確認を行い、しゃべり場の練習を行った。ミーティング終了後、企画班は残り、オープニングとエンディングのリハーサルを行った。

#### 1-9 前日リハーサル・設営準備（令和元年12月7日）

前日準備は午前中に全スタッフで使用教室の設営、当日使用する備品の設置を行った。その後誘導経路と誘導方法について最終確認を行った。午後には企画班はオープニング、エンディング、懇親会班の当日の最終確認のリハーサルの確認を行った。その他スタッフは理工学部の装飾を行い、しゃべり場の確認をコアスタッフ主導で行った。設営に予想以上の時間がかかってしまったが、できる限りの前日準備を行い、当日に備えた。

#### 1-10 令和元年度日本大学学生FD CHAmmit 当日（令和元年12月8日）

当日、全員午前9時に集合し点呼を行った。学生スタッフの当日欠席は4名だった。補填として、コアスタッフと一般スタッフで欠席者のファシリテーター対応する形をとった。午前9時に集合後、受付係は名簿などの確認を行い、企画班はオープニングの準備、その他の学生スタッフは参加者を座席に誘導するため配

置についた。今年度は東洋大学と法政大学の学生の方々も参加した。会場までの誘導は理工学部及び歯学部の教職員に協力してもらい、会場まではスムーズに誘導することができた。

当日は以下のタイムスケジュールで行われた。

### 10:30～11:10 オープニング

オープニングは、コアスタッフが作成したムービーから幕開けとなった。その後松林肇学務部長と歯学部長本田和也教授からの開会の挨拶、続いて学生スタッフ代表磯部耕志郎からも挨拶があった。そして「学生FDとCHAmiT」の説明を各年代の教職員の方々にインタビュー形式で行った。その後「企画説明」をあらかじめ撮影した動画を用いて、ニュース形式で参加者に視聴してもらった。そして「しゃべり場の説明」をスタッフが壇上で実演する形式で行った。以上の流れをもってオープニングが終わり理工学部への移動を行った。

### 11:30～12:30 自己紹介・アイスブレイク（遭難ゲーム）・昼食タイム

誘導が完了した教室より、適宜開始した。11:45までに自己紹介を行い、それからはアイスブレイクとして「砂漠からの脱出」を行った。チームで協力して1つの回答を導き出すことを目的としたコンセンサスゲームである。12:15から解説を行うため、それまで班で楽しく話しあいながらお昼の休憩をとった。答え合わせが終わり次第、休憩もしつつ12:30から学生のしゃべり場をスムーズに始めるため教職員へ移動をお願いした。

### 12:30～13:20 しゃべり場① 学生グループ 12:40～13:30 しゃべり場① 教職員グループ

ここでは教職員と学生にそれぞれ分かれてしゃべり場を実施した。しゃべり場実施の前に現時点における「大学とは」という問いの率直な意見を記述した。しゃべり場を通してどう変化するかを認識するためである。このしゃべり場で話し合う内容としては、教員・職員・学生がそれぞれ考えている「大学とは」についてじっくり考えて共有することである。しゃべり場①は時間通りに進行した。

内容は以下のものである。

#### ・教職員班

- I 自分たち教職員にとっての大学（主観）
- II 学生にとっての大学（想像）

#### ・学生班

- I 自分たち学生にとっての大学（主観）
- II 教職員にとっての大学（想像）

### 13:30～13:55 しゃべり場② 学生グループ 13:30～13:55 しゃべり場② 教職グループ

しゃべり場2では学生は「他花受粉」を行った。他花受粉とは、ハチが花の蜜を求めて違う花に行くことに由来して、参加者が他に移動して意見を吸収することである。他花受粉で得た新しい意見はメモしてもらい、各自スマホで再度模造紙を写真撮影してもらい、しゃべり場3に備えた。

教職員のグループでは他花受粉は行わず、しゃべり場3の学生・教員・職員が混合した際に、三者で共有できるように、しゃべり場1で作成した模造紙をグループ数分複製した。

#### 14:15～15:00 シャベリ場③ 学生・教員・職員混合

シャベリ場3ではアイスブレイクの班に戻った。シャベリ場1と他花受粉を通して学生・教員・職員それぞれの意見共有を行った。そしてシャベリ場3では学生・教員・職員混合で行い、それぞれ話し合ってきた学生側・教職員側の模造紙を合体して共有し、しおりに掲載している「大学とは」(資料1参照)のワークシートを作成した。

その後作成した「大学とは」に関する意見を共有した。共有の際はあらかじめ用意している定型文をもとに共有した。

#### 15:10～16:00 シャベリ場④ ※学生・教員・職員混合学部ごと

シャベリ場4は「大学とは」を議題に、シャベリ場4ワークシート(資料2参照)の完成を目的とした。最初に自己紹介も兼ねてシャベリ場3で話し合った内容や共有した。その後「大学とは」という議題を確定させた。その際、授業と結びつけるのが困難な案は採用しないようにした。次に確定した大学に対して「学生が求めるもの」と「教職員が提供できるもの」の観点で話し合い、それぞれの意見を共有した。その結果、学生側と教職員の間で意見一致、不一致」が浮き彫りになった。そして最後に「一致したものは強化案」と「一致しなかったものは解決案」の形式で話し合いを継続した。

話し合いが終わり次第、A3サイズで発表用の資料を作成した。全て終了後、エンディングに向けての誘導準備を行った。

#### 16:20～18:00 エンディング、懇親会実施

エンディングではまず、Google フォームを利用したアンケートを行った。参加者はQRコードから事前に用意したGoogle フォームにアクセスし、アンケートに回答した。アンケート実施後、シャベリ場4で作成した「大学とは」を理工学部・歯学部・通信教育部の3学部に自学部の学生FDの特徴や取り組みなどを発表してもらった。次に今年度のCHAmmiTの目的でもある「学生FD」を繁栄させるため、学生FD団体が存在する文理学部・生産工学部・工学部の3学部に発表をしてもらった。その後、理工学部長の岡田章教授から講評を頂き、日本大学副学長小田司教授からご挨拶を頂いた。またスタッフ代表磯部耕志郎からも挨拶があった。最後に1日を通して撮影した写真を学生スタッフが編集した動画として流し、記念撮影を行い「令和元年度日本大学学生FD CHAmmiT」は閉会した。懇親会では、参加者全員で和気あいあいと食事を取りながら会話をしていた。当日は学生・教職員スタッフ及び参加者の協力のもと大過なく閉幕することができた。

#### 1-11 事前準備から当日までの反省点

今年度は反省すべき点が多くある。まずはコアスタッフの連携が不足した点である。そのため一般スタッフに情報を共有することが遅くなり、変更する箇所が散見されたことや、締め切りに間に合わないことが多々あった。中心メンバーとしてはあってはならないことであった。また企画骨子案を8月の教学推進ミーティングまでに形としなければならなかったことや、全スタッフで作り上げることに意識しすぎてしまい、コアスタッフとしてしっかり話し合う機会がなかったことも原因であったと感じた。

## 2 参加者の制作物の分析

本節では「令和元年度 学生FD CHAmmiT」の参加者の制作物であるシャベリ場1・4で行った作成物の

分析をする。

しゃべり場1では、学生と教職員が分かれて行った。そこで双方の意見を比較する。

まずは学生の意見である。「学生にとっての大学」では「社会に出るための準備」という意見がもっとも多かった。また「自由」「交流」といった意見も多々存在していた。一方、学びに関しての意見も存在したが主にスキルアップや価値観を広げるなどといったように「社会に出るための準備」の一部に含まれる意見であった。「教職員にとっての大学」では、「職場」・「研究」・「教育」という意見が多かった。また一部では「学び」や「交流」といった意見も存在した。

次に教職員の意見を見てみたい。「学生にとっての大学」では大きな偏りは存在していなかった。「学修」・「交流」・「自由」・「社会準備」の4つが大半を占めて分かれていた。「教職員にとっての大学」では、学生側の意見と同じく「職場」・「研究」・「教育」という意見が多かった。

以上から双方の意見を見ると、「教職員にとっての大学」は学生側と教職員側に大きな隔たりは生じていなかった。「学生にとっての大学」もまた大きな違いは生じていなかった。しかし、1つの疑問が生じる。それは教職員側の学生にとっての大学である。大学とは本来、「学び」の場所であるため「学修」に偏らなかったことに疑問が生じた。理系学部では、授業＝社会準備と捉えられていると感じた。

次にしゃべり場4である。しゃべり場4では各学部の「大学とは」を作成した。以下のとおりである。

| 学部   | 大学とは                                        | 学生が求めるもの                                | 教職員が提供できるもの                                   | 強化案                    | 解決案                |
|------|---------------------------------------------|-----------------------------------------|-----------------------------------------------|------------------------|--------------------|
| 法学部  | 学生・教職員がコミュニケーションを通して、多くの価値観に触れながら、お互いに学びあう場 | ・アクティブラーニング<br>・課外学習<br>・フィールドワーク       | ・アクティブラーニング<br>・英語の授業（留学生受入）<br>・シラバス         | ・ゼミでFWの強化<br>・留学生交流会強化 | ・法学部版CHAmiT        |
| 法学部  | 様々なものに何度でも挑戦できる場                            | ・交流<br>・OBOGに合う機会<br>・選択肢<br>・悩みを相談できる場 | ・専門知識<br>・学生の意見を受け入れる場<br>・社会人との接点<br>・情報     | ・告知の質向上                | ・大学、学部の公式LINEの作成   |
| 文理学部 | 自ら考える場                                      | ・他学部交流                                  | ・能動的に動ける環境の提供<br>・CHAmiTの参加（単位認定）<br>・ヒントを与える | ・アンケート<br>・自主創造プロジェクト  | ・相互履修により他学部講義を受講する |

| 学部     | 大学とは                              | 学生が求めるもの                                                 | 教職員が提供できるもの                                                           | 強化案                         | 解決案                           |
|--------|-----------------------------------|----------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|-----------------------------|-------------------------------|
| 文理学部   | 試行錯誤する場。価値観を広げる場。やりたいことを実践する場     | ・学生主体の授業にしてわかりやすくしてほしい                                   | ・OB, OG のキャリア公演<br>・パワポの自主創造                                          |                             |                               |
| 文理学部   | 学ぶ場                               | ・イベント<br>・質の高い授業                                         | ・みんなの考え方に両立させる質の高い授業                                                  | ・意識の高い人から広げていく              | ・施設の変化<br>・意識を変化させる           |
| 文理学部   | 多様な個性目標を持った人に出会える場                | ・相互理解の場<br>・文理ワールドカフェ<br>・交流                             | ・フィードバック<br>・教職員との交流                                                  | ・文理ワールドカフェ開催                | ・授業内で他学科交流                    |
| 経済学部   | 自主創造する場                           | ・学びへの柔軟な対応<br>・教材への工夫<br>・教員の人間味                         | ・専門知識<br>・価値観<br>・考え方<br>・社会の生き方                                      | ・グループワークを増やす                | ・三位一体<br>・普段の話を<br>する         |
| 商学部    | 自由を活かし、失敗を恐れず挑戦する場<br>社会に向けて勉強する場 | ・交流<br>・機会<br>・単位上限の開放<br>・二外の選択                         | ・専門知識<br>・考え方<br>・FD 活動<br>・人脈<br>・自由な場<br>・単位認定                      | ・他学部交流のチャンスを増やす<br>・単位認定の強化 | なし                            |
| 芸術学部   | 専門的変態の歩み                          | ・他学部交流                                                   | ・カリキュラム                                                               | ・シラバスのアプリ化                  | ・授業を周知する魅力的なシステム              |
| 芸術学部   | 苦手な必修も様々な人間関係も、すべて学びに繋げ夢を叶える場     | ・受けたい授業作成<br>・平等<br>・交流<br>・他学科の実習受講<br>・他学部交流<br>・専門的な話 | ・面白くてためになる授業<br>・学びやすい環境づくり<br>・興味がないことも社会勉強の提供<br>・人とのマッチングを繋げられるように | ・将来に繋がられる授業づくり              | ・授業内容の透明化<br>・他学科合同制作等の授業を設ける |
| 国際関係学部 | 4年間の様々な学びを通して、将来を見つめる場            | ・学生間の交流<br>・受講したい授業を学びたい<br>・職員の対応                       | ・学生と教職員に意見を交換する場を定期的に関く                                               | 意見交換を様々な観点から行う              | 学生と教職員に意見を交換する場を定期的に関く        |

| 学部      | 大学とは                          | 学生が求めるもの                                                                                               | 教職員が提供できるもの                                                                                               | 強化案                                                                                        | 解決案                                                                                            |
|---------|-------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 国際関係学部  | 人生に関わりが深く、学びを提供する場            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・就活サービス</li> <li>・専門知識</li> <li>・資格</li> <li>・人間関係</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・情報</li> <li>・知識</li> <li>・技術</li> <li>・可能性</li> </ul>             | <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生指導の強化</li> <li>・受講できる、分野別の講座を増やす</li> </ul>      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・上に声が届く</li> <li>・情報発信を向上する</li> <li>・経費を増やす</li> </ul> |
| 危機管理学部  | 主体的に学び将来について考えることで自分の可能性を広げる場 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・多様性</li> <li>・他学部交流</li> <li>・事務の対応</li> <li>・先生の時間</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・スキル</li> <li>・糧</li> <li>・人それぞれに合ったもの</li> </ul>                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ゼミを早める</li> </ul>                                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の多様性</li> <li>・教員と関わる機会をもっと増やす</li> </ul>            |
| スポーツ科学部 | 経験を積む場                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・アウトプットする環境がほしい</li> <li>・班員評価などのものをしてほしい</li> </ul>            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の工夫</li> <li>・評価方法の知識</li> </ul>                                | <ul style="list-style-type: none"> <li>・学部間連携</li> <li>・話し合う場</li> </ul>                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・他学部を知る機会の提供</li> </ul>                                 |
| 理工学部    | 人材育成の場                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・質問が聞きづらい</li> <li>・情報が知りにくい</li> <li>・専門科目を増やしてほしい</li> </ul>  | ←学生の要望は提供できる                                                                                              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・学びたい科目を学べる選択</li> </ul>                            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「学生」と「生徒」の違いを理解してもらう</li> <li>・質問しやすい場にする</li> </ul>   |
| 理工学部    | 遊びの中で悩みを作り、物事の本質を見極める場        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・討論する場</li> <li>・現場のニーズを知りたい</li> <li>・ワクワクする授業</li> </ul>      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・知識の提供</li> <li>・考え方の方法論</li> </ul>                                |                                                                                            | <ul style="list-style-type: none"> <li>学生と教員で内容を決める講義を設ける</li> <li>・講義の中で考える時間を増やす。</li> </ul> |
| 理工学部    | やりたいことを見つける場                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・わかりやすいルール</li> <li>(何をどうすればいいのか、失敗した場合のフォロー)</li> </ul>        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・来年度からの自主創造の実践</li> <li>・キャリアデザインという授業</li> </ul>                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学を強くする</li> <li>・やりたいことをやってみる人を探し出し、知る</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>授業中にロールモデルを掲示する。</li> </ul>                             |
| 理工学部    | 色々な交流を経て技術とスキルを身に着ける場         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・共通必修の廃止</li> <li>・教員との会話</li> <li>・奨学金を増やす</li> </ul>          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・会話</li> <li>・環境</li> <li>・ゆとりのあるプログラム</li> <li>・授業の取り方</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の意見を学生目線で積極的に取り入れる</li> </ul>                    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・必修単位を自分で決める</li> <li>・構築カリキュラムの提示もよい</li> </ul>        |

| 学部        | 大学とは                              | 学生が求めるもの                                  | 教職員が提供できるもの                                    | 強化案                                    | 解決案                                        |
|-----------|-----------------------------------|-------------------------------------------|------------------------------------------------|----------------------------------------|--------------------------------------------|
| 生産工<br>学部 | 様々な刺激が得られる機会があり、社会に出る前に自分を見つめ直せる場 | ・専門的なものに触れる機会<br>・社会で行われていることにそくした授業      | ・自己分析セミナーの開設<br>や社会の方々の公演の開催                   | 生産実習プログラムを学生の意見を踏まえて修正し、より詳細を明確にする     | 一年時から自己分析セミナーや公演の実施                        |
| 生産工<br>学部 | 学び×人とのつながり<br>＝幸せ                 | ・就職したい企業に有利な授業<br>・他学科の授業を受講<br>・サークル発表の場 | ・多様な科目→共有科目あり<br>・学生FDを知ってもらう場                 | ・学生FDをポータルのメッセージだけでなくわかりやすくする          | ・学生の意見をフィードバックするシステム<br>・サークルや学部FDを交流する場   |
| 生産工<br>学部 | 自主性、社会貢献コミュニケーション<br>教員の価値観の転換が必要 | ・自主創造の時期の再考<br>・TAの配属                     | ・学生の要望の見直し<br>・教員側の教育につながるようにする<br>・3者の良い関係づくり |                                        | ・高学年時に自分から変えていく<br>・生産工学部内でできることは進める       |
| 工学部       | 成長する場                             | ・評価内容の提示<br>・講義の内容を就職に繋げる<br>・興味が持てるものの提示 | ・幅広いカリキュラムの作成<br>↓<br>・開示はできる                  | ・学生と教職員の信頼関係を強める<br>・しゃべり場をいろんなやり方で行う。 | ・授業評価アンケートのシステムを変更し、随時授業に反映させる             |
| 医学部       | 専門性・人脈・社会活動                       | ・講義によって講師の熱意にムラがある<br>・部活動をやらせてほしい        | ・自分の教わったことのみ授ける。<br>・コアカリキュラムに沿った指導            | ・懇談会を開き意見交換を実施                         | ・教員は学生がわかるような言葉を使う<br>・学生はよく考えて教職員の言葉を受け取る |
| 歯学部       | 学生と教職員で切磋琢磨する場                    | ・専門科目の早期受講<br>・前期の点数開示<br>・学生の意見を言いやすい環境  | ・勉強しやすい環境<br>・院内実習を見る機会<br>・よい歯科医師像を発見できる環境    | ・学生の意見をメリットと共に提示                       | ・学生の意見に対して手順を踏んで上に流す。                      |

| 学部          | 大学とは                                                                                          | 学生が求めるもの                                                               | 教職員が提供できるもの                                   | 強化案                                                | 解決案                                                                                    |
|-------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|----------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|
| 歯学部         | 医療人としての<br>未来の自分を作る場                                                                          | ・キャンパス目印<br>・学問のおもしろさ<br>・授業のハンドアウト<br>・テストを一限に<br>してほしい               | ・専門知識<br>・見守り<br>・医療人としての制度<br>(プロフェッショナルリズム) | ・兼任講師の<br>採用<br>・アンケート<br>の活用                      | ・教員が卒業<br>生の進路を<br>示す<br>・兼任講師の<br>採用<br>・教員FDの<br>向上<br>・教員間の共<br>有<br>・学生、教員<br>間の共有 |
| 松戸歯<br>学部   | マナーコミュニ<br>ケーション・知<br>識・技術を身に<br>着け、教職学が<br>三位一体とな<br>り、歯科治療を<br>通して地域・社<br>会貢献できる人<br>材を育てる場 | ・知識<br>・技術<br>・環境<br>・交流                                               | ・知識<br>・スキル<br>・経験<br>・教職学での交流する機会            | ・交流機会の<br>充実（ワール<br>ドカフェや<br>医療系学部<br>で集まる）        | ・低学年から<br>歯科授業の<br>導入<br>・早期国家試<br>験対策                                                 |
| 生物資源<br>科学部 | 専門知識を学<br>び、自主的に未<br>来への出発点を<br>作る場                                                           | ・フィードバック<br>が欲しい                                                       | ・思考力<br>・考察力<br>・専門知識                         | ・研究を通し<br>た相互のコ<br>ミュニケー<br>ション<br>・研究室に主<br>体的に行く | ・フィードバ<br>ックを行う<br>・学生も主体<br>的に聞きに<br>行く。                                              |
| 生物資源<br>科学部 | 人脈や学びなど<br>の暮らしのツ<br>ールを得られる、<br>学外実習などで<br>実際に専門知識<br>を体験して得ら<br>れる文理融合の場                    | ・実習に対する設<br>備<br>・学費の適切な使<br>用<br>・適切なレポート量<br>・職員の適切な対応<br>・制限のない履修制度 | ・学生と教員のコミュニ<br>ケーションの場<br>・知識、考え方<br>・教員、サービス | ・積極的に学<br>生と教員の<br>コミュニケー<br>ション                   | ・ルーティン<br>ワークのヒ<br>ント<br>・学習方法の<br>アドバイス                                               |
| 生物資源<br>科学部 | 自分の人生を豊<br>かにするための<br>ツール                                                                     | ・専門知識<br>・学びの動機づけ                                                      | ・専門知識<br>・人生の方向性を提供<br>・国際的な視野                | ・OBOGの声を<br>届くように<br>する<br>・相互のコミ<br>ュニケーシ<br>ョン   | ・設備の不具<br>合を学校側<br>に伝える<br>・学びのアン<br>テナをはる                                             |

| 学部                                                                                                                         | 大学とは             | 学生が求めるもの                         | 教職員が提供できるもの               | 強化案               | 解決案                     |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------|----------------------------------|---------------------------|-------------------|-------------------------|
| 薬学部                                                                                                                        | 学ぶ場所であり、学びを提供する場 | ・フィードバック                         | ・フィードバック                  | ・ウェブシステムの有効活用     | 授業のアンケートに対する回答をしてもらう。   |
| <div style="text-align: center;">  </div> |                  |                                  |                           |                   |                         |
| 通信教育学部                                                                                                                     | 学修の場             | ・学べる環境<br>・交流の場<br>・システム環境の設備と提供 | ・オフィスアワー<br>・情報提供システム     | ・ピアサポートの活動を啓蒙していく | ・教職員会議を減らし、学生と関わる時間を増やす |
| 短期大学部（船橋）                                                                                                                  | 自発性を高める場         | ・将来の情報<br>・議論の場<br>・専門的な講義       | ・研究に基づく専門的な知識<br>・設備、サービス | 履修科目の増加           | ・講義映像の配信<br>・学年交流       |

各学部を見比べると、学生が求めるものと教職員が提供できるものには共通するものも存在している。しかしやはり学部独自のものもある。それを解決案・強化案として今後改善していくことに期待したい。

### 3 参加者アンケート分析

本節では、当日の回答していただいたアンケート結果をもとに「令和元年度 学生FD CHAmmiT」について参加者の視点から考察する。

まずは認知度に関する設問を分析してみる。

#### 1. 今回のイベント以前に「FD」について知っていましたか？

|     | はい  |       | いいえ |       | 回答なし |      |
|-----|-----|-------|-----|-------|------|------|
|     | 人数  | 割合    | 人数  | 割合    | 人数   | 割合   |
| 昨年度 | 113 | 48.7% | 115 | 49.6% | 4    | 1.7% |
| 今年度 | 123 | 58.9% | 86  | 41.1% | -    | -    |

#### 2. 今回のイベント以前に「学生FD」について知っていましたか？

|     | はい  |       | いいえ |       | 回答なし |      |
|-----|-----|-------|-----|-------|------|------|
|     | 人数  | 割合    | 人数  | 割合    | 人数   | 割合   |
| 昨年度 | 113 | 49.0% | 117 | 50.0% | 2    | 1.0% |
| 今年度 | 109 | 52.2% | 100 | 47.6% | -    | -    |

上表「FD」と「学生FD」の認知度について、去年のCHAmmiTアンケート結果と比較したものであ

る。「FD」についての認知度は昨年度と比べて約10%上昇している。また参加者の過半数が「FD」を知っている状況で参加している。「学生FD」に関しては約3%上昇している。昨年度とは大きな差はないが、過半数を占めている。徐々に本校に「FD」と「学生FD」が浸透していると捉えられる。

次に今年度の満足度や参加者の意識の観点から考察する。

1 「令和元年度 日本大学 学生FD CHAmiT」は、全般的に楽しめましたか？

| 今年度 | 非常に楽しい |       | 楽しい |       | 普通 |       | あまり楽しくない |    | つまらない |    |
|-----|--------|-------|-----|-------|----|-------|----------|----|-------|----|
|     | 人数     | 割合    | 人数  | 割合    | 人数 | 割合    | 人数       | 割合 | 人数    | 割合 |
| 全体  | 70     | 33.5% | 107 | 51.2% | 30 | 14.4% | 2        | 1% | -     | -  |

2 「学生FD」を他の学生・教職員にも紹介したいと思いますか？

| 今年度 | はい  |       | いいえ |      |
|-----|-----|-------|-----|------|
|     | 人数  | 割合    | 人数  | 割合   |
| 全体  | 189 | 90.4% | 20  | 9.6% |

上記のアンケート結果はCHAmiTを広げていく上で重要なものである。

「非常に楽しい」・「楽しい」が全体の80%を超えており、「つまらない」0人であった。これは非常によい結果である。また「学生FD」を他の学生・教職員にも紹介したいと思いますか？」では約90%の方々が「はい」と答えている。現状のCHAmiTの普及率は高くはないとみられるが、今後はCHAmiTにおいてより多くの参加者を募り、規模が拡大していくことが期待できる。

3 「令和元年度 日本大学 学生FD CHAmiT」を通じて、学部に戻り、「学生FD」について何か行動を起こしたいと思いましたが？

| 今年度  | 必ずなにかしたい |       | 機会があればしたい |       | 学生FD組織ができればいい |      |
|------|----------|-------|-----------|-------|---------------|------|
|      | 人数       | 割合    | 人数        | 割合    | 人数            | 割合   |
| 全体   | 32       | 15.3% | 109       | 52.2% | 11            | 5.3% |
| 思わない |          | わからない |           |       |               |      |
| 人数   | 割合       | 人数    | 割合        |       |               |      |
| 17   | 8.1%     | 40    | 19.1%     |       |               |      |

上記の結果から、約70%の参加者が「学生FD」に肯定的な意見があった。

またその後のアンケート項目の「行動を起こしたい方にお聞きします。どのような形で今後もFD活動に関わっていきたいと思いませんか？」では「CHAmiTに関わりたい」との回答が約43%を占めていた。一方で、「自学部で学生FD組織を作りたい」との回答は約25%もあった。今年度の目的として、各学部における学生FD団体の設立を掲げていた。25%という結果を我々は十分な成果として理解しており、今後の「学生FD」にとってよい傾向であると捉えている。

最後に企画について参加者の視点から考察する。

「令和元年度 日本大学 学生FD CHAmiT」で有意義であったプログラムなどはどれですか?」を見てみたい。

| オープニング |       | しゃべり場1      |       | しゃべり場2 |       | しゃべり場3 |       | しゃべり場4 |       |
|--------|-------|-------------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|
| 人数     | 割合    | 人数          | 割合    | 人数     | 割合    | 人数     | 割合    | 人数     | 割合    |
| 27     | 13%   | 135         | 64.9% | 93     | 44.7% | 155    | 74.5% | 147    | 70.7% |
| エンディング |       | 教職員と交流できたこと |       | その他    |       |        |       |        |       |
| 人数     | 割合    | 人数          | 割合    | 人数     | 割合    |        |       |        |       |
| 22     | 10.6% | 110         | 52.9% | 7      | 3.4%  |        |       |        |       |

以上の参加者のアンケートから、「しゃべり場3」が一番多い。しゃべり場3教員・職員・学生が混合で行ったものである。また「教職員と交流できたこと」も約半数は絞めている。つまり、本大学では学生と教職員の間ではコミュニケーションが不足しているのではないかと感じた。教育改善をしていく上では、学生側と教職員の連携は不可欠である。その点からもやはり学生と教職員の密なコミュニケーションをとることができる「学生FD団体」は価値があると考えられる。

## 4 学生コアスタッフ「令和元年度学生FD CHAmiT」を通して

### 4-1 「令和元年度 学生FD CHAmiT を終えて」 磯部耕志郎

(日本大学危機管理学部危機管理学科3年・令和元年度 学生FD CHAmiT 学生コアスタッフ代表)

はじめにCHAmiTに関わった皆様に御礼を申し上げる。今年度は令和初の開催であった。以下に今年度の感想を四点述べていく。

約半年間代表としてまとめようとしてきたが、とても誇れるものではなかった。去年はコアスタッフの一員として携わってきたが、代表としての景色がまったく異なるものであった。代表を務めて初めて代表という役職の重みを理解した。自分自身このような経験をできたことは間違いなく今後の糧になると感じた。このような機会を提供していただきとても嬉しく思う。

今年度の企画は、自分が扱ってみたいテーマとなった。またこのテーマこそがFDをする上で重要ではないかと考えている。教育改善は教員・職員・学生の3者の視点が揃わなければ進めることができない。まずはお互いがお互いを知ることが大切ではないかと考えている。参加者アンケートでは「教職員と交流ができた」ことに充実を感じている声が半数を占めていたことには驚きを感じた。我々スタッフにとっては当たり前のことであったが、その他の学生にとっては貴重な機会であったようだ。

今年でCHAmiTに関わって3年目になった。例年関わってきたが、教育改善とはとても難しいものであると心底実感した。しかし少しずつではあるが、前には進んでいると感じている。今年度の活動が今後のCHAmiTの礎になってほしいと願うばかりである。

学生FDが今後も継続的に発展していくことを心から願っている。いつの日か教員・職員・学生の3者にとってよりよい大学になることを期待する。

#### 4-2 「令和元年度 学生FD CHAmmiT を終えて」 石原諭衣

(日本大学法学部政治経済学科3年・令和元年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ OP.ED. 懇親会担当)

私は、今年度のCHAmmiTで学生スタッフとしてではなくコアスタッフとして参加した。

CHAmmiTを知ったのは2017年にまで遡る。そもそもFDとは、何かも分からずにCHAmmiT2017の参加者として1年生の時に参加した。去年は、通信教育部から法学部に転籍するための試験対策に専念していた為に、一般スタッフとして参加をしたが、そこでもFDが何なのか十分に理解できずにいた。FDを理解できたのは、法学部に転籍した去年の四月であった。

コアスタッフに立候補した理由としては、自分の性格を変えたいと思ったからである。

私の第一印象は、必ずといっていいほど大人しいなどネガティブなイメージを言われてしまうことが多い。そんな第一印象とは違うことを見せたいと思い立候補したが、自分の意見をなかなか出せなくて葛藤があった。その後、葛藤はしていたものの打ち解けることが出来たのは7月の歯学部キャンパスにて行われたアイスブレイクがきっかけであった。アイスブレイクをどのような形で進めるかを、企画班内で打ち合わせを重ねながら行った際に自分の意見が採用された。自分の意見を採用されるためには、どのような事をすればいいのか自分自身で考え込むのではなく、一般参加者の立場になって考え、人が笑顔になることを考えることが大事だと思えるようになった。

私は、オープニングの台本作りやスライド作りを担当した。教職員と打ち合わせを重ね、至らないところも多数あったが、なんとか仕上げることが出来た。サポートしてくださった教職員の皆様にこの場を借りて感謝を伝えたい。本企画では、自分自身もファシリテーターとして「大学とは」のテーマに関して多くの参加前と意見を共有することができ、満足している。

コアスタッフの活動を通して、自分自身がどれだけちっぽけな存在か認識することが出来た。沢山の人の支えていただいたことを忘れずに自分の歩む道を確立していきたい。弱音を吐きなくなる時もあったが、自分を強くしてくれたコアスタッフ6人、教職員のみなさん、一般スタッフのみなさんに感謝する。

#### 4-3 「令和元年度 学生FD CHAmmiT を終えて」 竹田 匠

(日本大学商学部経営学科2年 令和元年度 CHAmmiT 学生コアスタッフ副代表)

はじめに、「令和元年度 日本大学学生FD CHAmmiT」開催にあたって準備や協力をしていただいた、担当教員及び学務課や理工学部・歯学部の教職員をはじめとする多くの関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

今年、コアスタッフとして参画した経緯は、昨年度は学生スタッフとして参画したが、言われるがままで訳も分からない状態で駆け抜けた一年間だった。そのため、「今年度はコアスタッフとして参画し、企画案を作り上げるところから携わりたい」と強く思ったのでコアスタッフに志願した。

振り返ってみると、初のミーティングから本番終了まで怒涛の半年間であったように思う。そもそも私は人見知りで初対面が苦手な性格であり、「どんな人がいるのか分からない」「いい企画を作り上げていけるのだろうか」など不安と期待でいっぱいだった。初回ミーティング時に副代表になった。それは、「初めてまとめる側に立つという感覚」や「去年は何も分からず過ごした半年間だったので今年何をしたらいいのか分からない」など、自分にとっては不慣れなことの連続だった。加えて、学部も学年も年齢も異なる約50名という人数をまとめ上げていくことは大変難しく苦慮した。

反省点は、本番まであと「6か月ある、5か月ある」などと考え、刻一刻と迫る本番までの時間に対して危機感を持つことなく終わってしまったことにある。達成感はもちろんあったが、企画案から広報に至るまでもっと本気でやれた、妥協するべきではなかった点は多くあると感じる。さらに予広報への協力や夏合宿での企画案の発表など、想定外のことは多くあった。しかし、置かれた状況で自分の全力を出せなかったこ

とは大きな落ち度であると感じる。

また、企画を作り上げていく過程において、チームの良い雰囲気づくり、チームメンバーのフォローやマネジメントなど、副代表として至らない部分が多くあった。自分の甘さや足りない部分を多く自覚することができ、自分の成長にフォーカスすると足りないものを知り成長できた半年間であったので非常に有意義な時間を過ごせた。

学生FD活動は学生と教員、職員の3者の意見を取り入れることが非常に大切だと学んだ。企画案を検討する中で学生と教職員が求める大学像には隔たりがあり、CHAmmiTを通して話したいと考えることには懸隔があった。しかし、学生FD活動は学生と教職員が手を取り合って行い、教育を改善してく活動であるため教職員の協力なくしては成り立たないものであり、企画案の選定には苦慮する部分が多くあった。その中で、教職員とともに作り上げたCHAmmiTは大変有意義な時間を共有することができた。

前述したが、企画案は学生と教職員にとっての大学に対する意識の隔たりがあると感じる部分があったこともあり「大学とは」をテーマとした。それは、教職員の方々がどのような考えをもって学生に接しているのか認識することでそれぞれが求める大学像に少しでも近づけ、今後の学生生活が少しでも有意義なものになってほしいという意味を込めた。

結果として、参加した友人からは「楽しかった」、「有意義だった」との声を頂けた。その言葉に少しでも達成感のようなものを感じられたし、開催に向けて頑張ってきてよかったと実感できた。今後、このような場がCHAmmiTに限らず増えていくことを切に願う。

最後に、重ね重ねになるが参加者やスタッフ、教職員、関わってくださったすべての方に感謝申し上げます。

また、今年度だけでなくこれまでのCHAmmiTに携わって築き上げてきた多くの関係者がいたからこそ、今年度も開催することができたと感じる。今回のスタッフや教職員、参加者だけでなく、今までCHAmmiTに関わってくださったすべての関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。そして、このCHAmmiT並びに学生FD活動、本学の教育改善活動のさらなる発展を願い本稿を終わらせていただく。

#### 4-4 「令和元年度 学生FD CHAmmiT を終えて」 柴田謙吾

(日本大学国際関係学部国際総合政策学科1年・令和元年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ OP.ED. 懇親会担当)

私は、今年度のCHAmmiTのコアスタッフとして参加した。立候補した理由は、純粹にCHAmmiTの企画に対して興味を持ったからである。昨年度のCHAmmiTの活動内容を見て、自分も他学部の人たちと交流して一つのことに進み気持ちや、中心になって活動していきたいという気持ちがすごくあった。これが私のコアスタッフに立候補した理由である。

それから、CHAmmiTに参加して良かった点は、ミーティングや事前準備、当日のCHAmmiTの活動を通して貴重な経験ができたことである。ミーティングや事前準備では、スタッフの集まりが悪く手間を取ったりしたこともあったが、他のコアスタッフや学生スタッフみんなとCHAmmiT本番に向けて一つになり、頑張れたことが良かった。CHAmmiT本番でも同様なことがあったが、たくさんの人に集まってもらうことができたし、参加者の人たちから「CHAmmiTに参加して良かった」と聞くことができて本当に良かったと思う。

反省点としては、あまりミーティング等に参加できなかったことだ。自学部の文化祭の実行委員と兼ねていたので文化祭の日が近くなってからはCHAmmiTで本来やらなければならないことをやらずに疎かにしてしまったせいでたくさんの人に迷惑をかけてしまった。本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

今回のCHAmmiTのコアスタッフをやらせていただいて、たくさん経験ができて本当に良かった。この経験で学べたことを忘れずこれから色々なことに対して頑張っていこうと思う。

## 4-5 「令和元年度 学生FD CHAmmiT を終えて」 稲邊 奨太

(日本大学生産工学部4年・令和元年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ OP.ED. 懇親会担当)

## ・CHAmmiT 本番までの自分の感情

そもそも自分がコアスタッフに挑戦しようと思った一番のきっかけが、学生最後にスタッフのリーダーとして先頭に立って、イベントを作り上げる経験をしたかったからである。実際に、OP.ED 班のリーダーになって、班内の雰囲気盛り上げるために連絡を密に取ったり、交流する機会も多く取ることを意識していた。しかし、卒業研究との兼ね合いもあり、継続して行うことができず、コアスタッフ内での情報共有で完結することが多くなっていた。だが、このような状況でも、OP.ED 班のスタッフが諦めずついてくれたことで、どのように見せたら内容が伝わりやすいのか、興味を持ってくれるのかを一緒に考えることができて、他のコアスタッフと同様に信頼できる存在に変わっていった。そして、最終的には、私達にとって最高の OP.ED を作り上げることができたと思っている。

## ・CHAmmiT に関わって感じたこと

今回、コアスタッフとして日本大学学生FD CHAmmiT に関わって、感じたことが二つある。それは、「みんなであつたイベントを作り上げる楽しさ」と「人に支えられるありがたさ」である。1でも述べたように、1人ではなく、複数で作り上げたからこそ感じられる喜びや達成感は、何のものにも代えがたい価値あるものだ、改めて感じた。同時に、それを感じられたのは、企画書への新しい意見やフィードバック、備品の準備や設営、進捗状況の確認をサポートしてくださった担当教員及び学務課の職員方。設営のサポートをしてくださった歯学部や理工学部の教職員の方々。そして、定期 MT や当日のしゃべり場などを一緒に盛り上げた一般スタッフ及びコアスタッフ。他にもたくさんの人の支えがあったからこそ、このイベントは開催できたし、成功させることができたのだと感じた。

## ・感想

正直に言うと、後悔している部分や反省する点は多々あるが、自分のこれからの課題を見つけることができて、社会人になる前に発見できてよかったと思う。また、最後までやり切ることができたし、班内のリーダーとして、納得のいくイベントを作り上げることはできた。今回の経験を通して、たくさんの人に支えてもらったり、学ばせてもらったので、これからは社会人として、自分から変化を起こして、今回学んだことを生かしていきたい。

## ・来年、コアスタッフとして活動する人に向けてのメッセージ

自分は、4年生での経験だったが、まだ時間も余裕もある1・2年生で経験の方が成長する速度は段違いだと感じる。従って、やってみようと思ってコアスタッフに応募するもよし。自分の中でコアスタッフでの目標や目的を決めて応募するもよし。ただし、自分で決断したからには、途中で諦めずに最後までやり切ること。

## 4-6 「令和元年度 学生FD CHAmmiT を終えて」 岸部 美和

(日本大学工学部電気電子工学科2年・令和元年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ広報資料班担当)

昨年度、一般スタッフとしてCHAmmiTの企画運営に関わり、もっと深くCHAmmiTについて関わりたいと思い今回コアスタッフとして参加した。

CHAmmiTのコアスタッフになり、教員・職員・学生のそれぞれが大学に様々な思いがあり、考えて実際に行動していることが再確認できた。学生からも教員・職員からも日本大学をよりよくしていくための様々な提案や、改善点が提示された。それが現実的か、非現実的なのかに関わらず、全員が日本大学を、大

学での教育をより良いものにしていこうとしているのだと理解した。普段、各学部のキャンパスで過ごしている教員・職員・学生だが、これだけの多くの日大関係者が全学部から集まり、同じ議題について議論し合った結果、日本大学への愛校心がより強固なものになったと感じた。

CHAmmiTに関わることが今回2年目になったのだが、今年度学生FD CHAmmiTを通じ、教員・職員・学生の三者から多くの意見が出た後だからこそ各学部でそれぞれの抱えている課題をもう一度確認し、今後の課題解決につなげるための話をする機会を設けるべきであると思う。もし、すぐにその機会を設けることができないとしても大学の教育について考えた時間が学生、もしくは教員、職員のそれぞれ個人にあったのならば、長期的にはなるが日本大学はよりよい大学になると思った。だからこそ学生FD CHAmmiTは今後も続けていくべきだと思う。

そこで、学生FD CHAmmiTが今後より浸透していくためには大きく3段階あると思う。一つが認知。そして設立、継続（浸透）である。認知については学生FD CHAmmiTが大きな役割を果たしていると思う。さらにいうかくならば、新規介入、継続を視野に入れて1年生の初年次教育に学生FDの紹介ををすることだと思う。設立に関しては、学生数の多い日本大学にはどの学部にも学生FDに興味を持っている学生が必ずいると思う。そして、そのような学生が団体を設立できるような仕組みづくりを検討すべきではないだろうか。また、継続に関しては学生だけでなく教員・職員を巻き込み、いかに賛同してもらうかがカギになると思う。FD活動をしてくださる教職員を増やすことができれば必ず継続し、浸透していくだろう。

今年度学生FD CHAmmiTを終えた結論として、学生FD CHAmmiTは短期的なゴールを目指すのではなく、長期的に継続させることが今後の課題になると考えた。

#### 4-7 「令和元年度 学生FD CHAmmiT を終えて」 小中 英樹

（日本大学医学部医学科3年・令和元年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ広報資料班担当）

半年間、私は広報資料班として活動してきた。広報資料班の主な役目はCHAmmiT本番までのカウントダウン、学部への写真撮影の依頼、参加者募集用のウェブサイトの作成、インスタグラムの公式アカウントの開設ならびに運営、そして前日の会場設営（とくに装飾）であった。初めてスタッフとして参加した私を全面的にサポートしてくださった教員・職員のみなさま、学生スタッフのみなさまに感謝の意を表したい。

このCHAmmiTは当日の参加者はもちろん私たちスタッフにもあらゆる学びと気づきを与えてくれる。

日本で最大の学生数を誇るこの日本大学で、大学の規模感に触れる機会は存外少ない。日本全国でOBやOGが活躍していることは在学生にとっては大きな励みとなっているに違いない。しかしその反面、キャンパスが全国に展開しているため、他学部とほとんど交流しないまま卒業する学生も多いのではないかと。今年度のCHAmmiTは大学そのものに焦点をあてて教員・職員・学生が自由に議論する場を設けることができたと思う。他学部交流というのは何も学生同士の交流に限ったものではない。「しゃべり場」を上手に構成することで、教職員の考えと、学生の率直な意見を整理することができた。こういった地道な議論の積み重ねこそが、長期的に教育内容を改善させると信じている。

ひとつ残念なことは、今年自分たちが取り組んだ教育改善活動の成果をすぐに実感することができないという点だ。来年度以降、私たちが議論したことの一部が実際の教育に反映されることを祈っている。

「学部開発」という概念は、教員・職員・学生の三者による教育活動の改善を意味しているが、その三者は議論の場においては対等であるべきだ。しかしながら実際には三者は対等ではない。例えば、学生は単位認定者や成績通知者の教職員に思ったことを言えないことがありうる。別の例を挙げよう。私が在籍する医学部や他のいくつかの学部では、教員から指名される「学年代表・クラス委員」なるものがあり、基本的には教員の要望を学生に伝えるメッセンジャーの役割を果たしている。学生からの要望は手続き上この「学年代表」からしか基本的には受け付けられていない。学年代表者は教職員の助けの下に学年をまとめているの

で、教職員に気に入られるような行動をとる。あるいは些細な学生からの要望は上にあげずに自分たちで解決しようとする。いわば「マネージャー」体質なのがこの「学年代表」である。

本来あるべき学生FDとはこのようなものとは対極にあるべきだと考える。統治者的発想ではなく、改革者の発想が求められている。何かおかしいと感じたら、自ら積極的にリーダーシップを発揮して、失敗を覚悟で手を挙げる。立場の対等性の基盤には、一定の分離が必要だと考えられる。植民地が宗主国から自治を享受したときのように、改革にはいつだって当局との距離感が求められる。

教育改善をピラミッドの建造に例えるなら、教員・職員・学生が互いの立場を尊重できて初めてピラミッドは次の階層へと進むことができる。ピラミッドの頂には汗と涙の結晶としてより優れた大学教育があると信じている。

## 5 参考資料

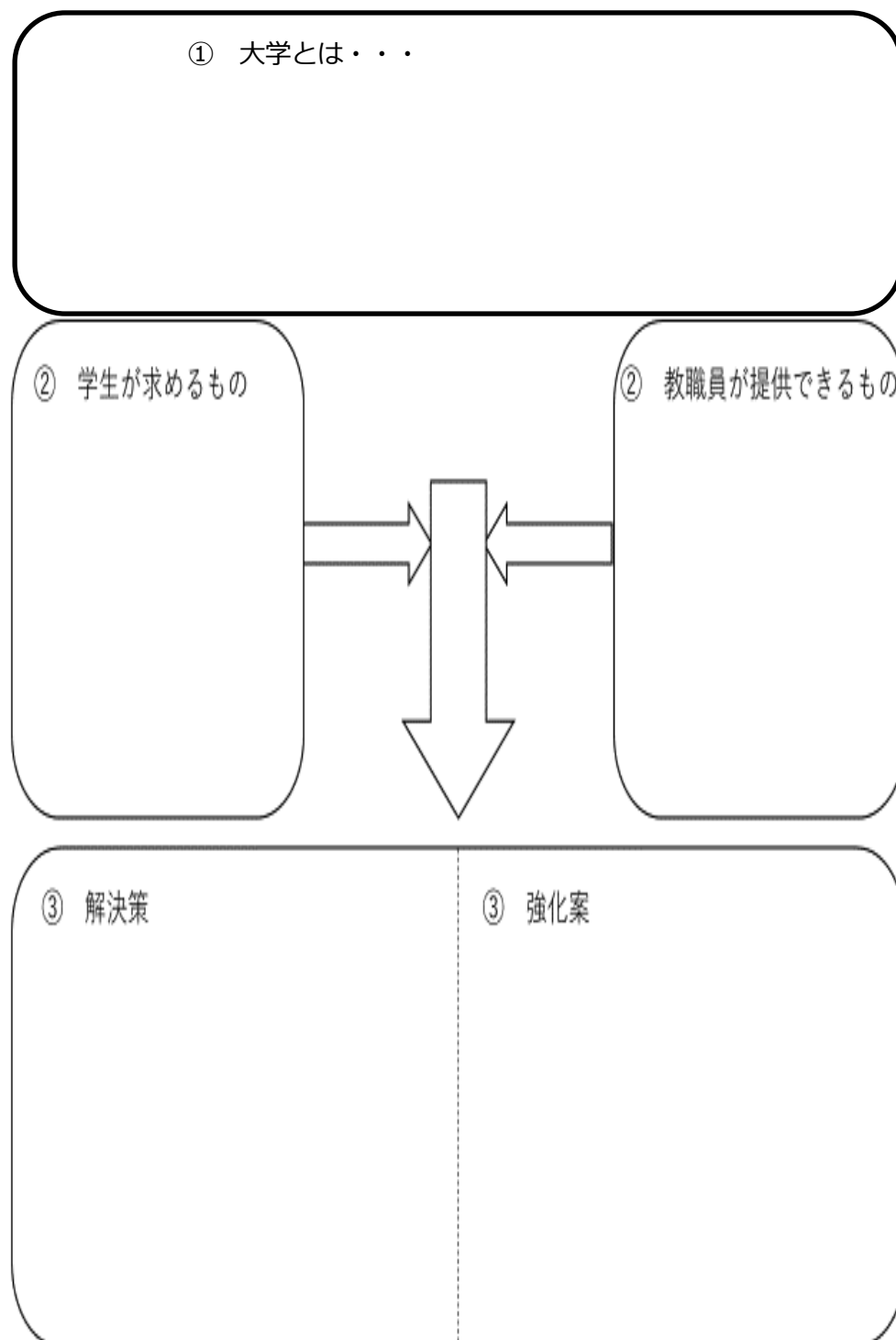
### 資料 1

“しゃべり場1”での自分の意見

影響を受けた意見

私にとっての大学とは・・・

資料2



## 学生レポート

## 「学生が変える日本大学」第7章

### —「令和2年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」における取り組み—

竹田 匠<sup>1), 2)</sup>, 吉田未来<sup>1), 3)</sup>, 大貫陽司<sup>1), 4)</sup>, 青砥光希<sup>1), 5)</sup>, 小林歩武<sup>1), 6)</sup>  
 竹田蘭丸<sup>1), 7)</sup>, 落合凌也<sup>1), 8)</sup>, 梅村智輝<sup>1), 9)</sup>

<sup>1)</sup>「日本大学 令和2年度学生FD CHAmmiT」学生スタッフ, <sup>2)</sup>日本大学商学部経営学科3年,

<sup>3)</sup>日本大学通信教育部法学部政治経済学科4年, <sup>4)</sup>日本大学経済学部金融公共経済学科3年,

<sup>5)</sup>日本大学文理学部哲学科3年, <sup>6)</sup>日本大学国際関係学部国際教養学科2年, <sup>7)</sup>日本大学国際関係学部国際総合政策学科1年,

<sup>8)</sup>日本大学経済学部経済学科3年, <sup>9)</sup>日本大学生産工学部数理情報工学科3年

「日本大学 学生FD CHAmmiT」は、日本最大規模の総合大学である本学のスケールメリットを活かし、学生と教職員が互いの視点から授業改善について議論し、その具体策を考案する学内イベントである。本会は「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」として始まり、今回で8回目を迎えた。本稿は、日本大学における「令和2年度日本大学 学生FD CHAmmiT」の開催に至るまでの過程と開催後のアンケート結果を踏まえて、学生スタッフの視点で今後の課題と展望を述べた活動報告書である。本活動報告が今後の日本大学の「学生FD活動」の更なる発展に貢献することを期待したい。

**キーワード：**FD (Faculty Development), 学生FD, 「令和2年度日本大学 学生FD CHAmmiT」

## はじめに

「日本大学 学生FD CHAmmiT」とは、全国の大学が集結する「学生FDサミット」の「日本大学版」である。「学生FDサミット」とは全国の大学から学生FD活動に取り組む学生・教員・職員が一堂に会し、各大学における活動や成果を発表し合い、大学教育における課題等を共有し、議論する場である。一方、「CHAmmiT」とはCHATとSUMMITをかけ合わせた造語であることから分かれるとおり、大学をテーマに友だちとチャットをするように気軽に話し合い、その成果を発表する場である。私たちが学ぶ大学の教育をより良くしたいという思いに基づき、学生のみならず、日本大学全体の学生・教員・職員が参加できることも大きな特徴である。

今回で8回目を迎える「日本大学 学生FD CHAmmiT 2020 (以下, CHAmmiT)」は、史上初のオンラインでの開催となったが、225名の参加があった。初めての最大のオンライン実施に際して、これまでの対面形式にいかにか近づけられるかが課題となったが、それを模索しながらイベントを企画し、開催することができた。

## 1. 「CHAmmiT」開催までの流れ

今回の「CHAmmiT」は、新型コロナウイルス感染拡大の影響によって開催そのものが危ぶまれた。しかし、学生の「CHAmmiT」を開催したいという強い希望と学生の希望に応えたいと考える教職員の思いがあったからこそ実施することができた。学生と教職員の思いが一つとなり、「CHAmmiT」開催に向けて皆が一丸となって行動することになった。従ってこの企画は大変価値のあるイベントだったといえる。今年は授業を主とした大学生活の大部分がオンライン上での活動となり、運営スタッフを確保できないかもしれないという不安もあったが、結果的に日本大学の教育をより良くしたいと考える意欲的な学生が集まった。今年のテーマは、オンライン授業の課題点などを共有し、それを授業改善などに向けて反映させるというものであった。こうしたテーマを設定したのは今のオンライン授業の実施状況について、学生は課題を感じており、これを改善したいという強い思いが学生の間にあったからである。

### 1-1 第1回スタッフミーティング（令和2年7月11日）

第1回は初回ということでまずCHAmmiTの概要を学生スタッフに説明した上で、今回のメインテーマであるオンライン授業のメリット・デメリットについて班ごとに分かれて話し合った。話し合ったことはGoogle Jamboardにまとめて、全体で共有した。ここではメリット・デメリットに関する代表的な意見をまとめておく。メリットとしては、例えばオンライン授業は対面のようにわざわざ移動の時間をかけて大学に通わなくても良く効率的であるという意見が挙がった。一方で、デメリットとしては、学生同士の繋がりを築き難く、教職員とのコミュニケーションもとることができないため、ただ大学の授業を受動的に視聴しているだけになってしまい、つまらないという意見が挙がった。議論は活発に行われたものの、Google Jamboardに入ることができない人がいるなどオンラインミーティングにおけるスキルやツールに関する課題も見つかった。

### 1-2 第2回スタッフミーティング（令和2年8月22日）

第2回では、第1回目で挙げられたメリット・デメリットについての意見を共有し、学生・教職員の両者の視点に立ってオンライン授業の改善点について話し合った。私たちは学生であるため学生視点のオンライン授業の改善点は簡単に出すことができるが、私たちとは異なる立場にある教職員視点でのオンライン授業の改善点を挙げるのが少し難しいところもあった。例えば、学生視点で考えると課題の量が過多で学習効果に疑問があるという意見があったが、教職員の視点で考えてみると、オンライン授業だからこそ課題の量を多くして学生の理解度を高めたいという考え方もあった。また、学生がコミュニケーションの不足を感じているように、教職員もまた同様に感じていることが確認できた。

### 1-3 第3回スタッフミーティング（令和2年9月19日）

第3回では、学生がよいと考えるオンライン授業の要素と、学生が課題であると感じた授業の要素についてをランキング形式でまとめた。さらに、授業態度についても教職員と学生の立場から課題となる要素をランキングした。学生がよいと考える授業としては、ITスキルが高い授業、先生から適切なフィードバックがある授業、見やすく工夫された動画授業などが挙げられた。一方、学生が課題があると感じている授業としては、音声・動画・解説なしで資料を配られるだけの課題提示型の授業、教員による暴言とも受け取れる発言がある授業、受講生や教員の携帯の通知音がよく鳴る授業、授業時間が極端に短い授業などが挙げられた。また、学生の授業態度については、授業を妨害する学生、オンライン授業の意図を理解していない学生、

カンニングをする学生などが挙げられた。これらの点を確認する作業は、それぞれの解決方法はどのようなものかを考えるきっかけとなった。

#### 1-4 第4回スタッフミーティング（令和2年10月10日）

第4回はコロナ禍における学生・教職員にとっての「大学とは」というテーマについて議論した。これは前回の「CHAmmiT」のテーマであり、この議論の目的はコロナ禍になる前の「大学」とコロナ禍に直面した「大学」とを比較してその違いをどのように埋めていくべきかについて考えるというものだった。コロナ禍になる前は、学生からは、勉強や部活動などに積極的に挑戦できたという意見が多く挙がった。一方、教職員からは、キャンパスで教育は学生・教職員双方が継続的に成長し学びを深めていく場であったという意見が多く出た。しかし、コロナ禍になったことでその「大学」のイメージが変化していった。例えば、学生からは良くも悪くも自分次第であるという意見や授業内課題をこなすだけの場所という意見が多く挙がった。教職員からは顔も知らない学生に授業をする場所という意見や研究で大学に行けなくなったなど、マイナスの意見が多く挙がった。

#### 1-5 第5回スタッフミーティング（令和2年11月7日）

第5回目は、前日リハーサル前の最後のミーティングとなった。今回は学部提案書の作成を行った。これは第1回から第4回スタッフミーティングを活かして、どのようにすればよりよい大学生活を送れるのかについて考えるというものだった。CHAmmiT 本番まであと少しだったが、一般スタッフがうまくファシリテーションできるかということも課題に挙がった。ファシリテーションのスキルに個人差がある状態だったため後日、改めてファシリテーションの練習を行った。また、今年は事前資料を動画で公開するという新たな試みを決定し、その準備にあたった。

#### 1-6 第6回スタッフミーティング（前日リハ）（令和2年11月28日）

前日リハーサルでは、現地に集まるスタッフは10時に集合し、最終的な確認とパソコンとの接続、オープニングとエンディングの最終確認を行った。その後、13時から現地に集まるスタッフ以外も含めた最終的なリハーサルとして、当日のファシリテーションマニュアルの読み合わせを行ったり、コツを説明したりして、当日と同じ時間配分でしゃべり場の練習を行った。その後、当日のスケジュール確認し質疑応答を行った。

#### 1-7 令和元年度日本大学学生FD CHAmmiT 当日（令和2年11月29日）

当日は以下のように進行的した。例年と異なり、今回はオンラインで行うため、参加者の疲労を考慮して、開催時間を1時間短縮させ懇親会も取り止めた。しかし、内容を詰め込みすぎたため、多くのグループで議論する時間が足りない事態が見受けられた。

Zoom の利用方法の説明が不十分であったため、ブレイクアウトルームへの移動に時間がかかった人が多く、しゃべり場が始まって10分以上経過しても入れなかった人がいたことは今後の課題である。今年度は初のオンライン開催ということもあり、混乱を避けるため他大学からの参加は見合わせた。

##### 1-7-1 10:00～ 現地スタッフのみで打ち合わせ

10:00にスタッフが現地集合し点呼を行った。エンディングで流すビデオの最終確認とZoomでの出欠確認のフローを再確認した。

#### 1-7-2 11:30～ 現地スタッフ以外も含めた最終打ち合わせ

11:30より現地集合以外のスタッフを含め、当日の流れを最終確認した。ファシリテーションマニュアルとファシリテーションのコツをコアスタッフから説明し質疑応答を行った。また、この際に自分たちから伝達しきれていないこともあり、万が一この時点でスタッフからの質問がなければ、本番が混乱していた可能性も十分に考えられるため、来年度開催への反省点としたい。

#### 12:30～ 一般参加者受付開始

Zoomでの開催ということもあり参加者の出欠確認を手動で行うことにしていたが、一度に多くの人が入室するため全ての人を確認することができず、後で確認することになった。一般参加者が入室後は、数秒ごとに変わる注意事項のスライドをBGMとともに流した。

#### 13:00～ オープニング

挨拶とコアスタッフの紹介をした上で、当日のスケジュールと参加者に注意して欲しいこと、より楽しんでもらうためのコツに関する説明を行なった。その後、ブレイクアウトルームへの移動を開始するアナウンスを行い移動した。

#### 13:30～ アイスブレイク

ブレイクアウトルームに移動した方から順に自己紹介とコロナによって変化したことや新たに始めたことなどにつき、自由に対話を楽しんだ。時間の都合上、コンセンサスゲームなどはできなかったためこのような形をとった。

#### 13:50～ シャベリ場① オンライン授業のメリット・デメリット

シャベリ場①では、学部を越えたメンバー構成となるようなグループに分かれ、学生や教職員が感じているオンライン授業のメリット・デメリットについてお互いに意見を共有し合った。このセッションでは一つの結論を出すのではなく、他学部の意見も聞くことで各々が視野を広げ、学部提案書の作成に役立てる狙いがあった。

#### 14:15～ シャベリ場② オンライン授業のミライの形

シャベリ場②では、メンバーを変え、シャベリ場①で出た意見に基づき、デメリットであった部分を改善していくにはどのようにしたらいいのか、反対にメリットである部分をアフターコロナでどのように活かせるのかについて議論を深めた。このセッションではシャベリ場①と同様に、シャベリ場③での学部提案書の作成に繋げるように意識した。

#### 15:00～ シャベリ場③ 学部提案書の作成

シャベリ場③では、学部ごとに分かれて議論した。シャベリ場①とシャベリ場②で話し合ったプロダクトを元に、どのようにそれらを自学部で活かしていけるのか、実際に学生がオンライン授業で感じていることをいかに引き出すのかを意識し、各学部の教職員に提案する書類を作成した。

#### 15:40～ エンディング

エンディングでは、シャベリ場③で話し合ったプロダクトをそれぞれの学系を代表して商学部・生産工学部・薬学部の3学部の学生に発表してもらった。発表後、CHAmmiTを双方向性のあるものにするために、

Zoom の機能を用いてアンケートを行なった。その後、日本大学副学長、日本大学FD推進センター長である本田和也教授よりご挨拶をいただいた。最後に、事前に作成したエンドロールを流し、「令和2年度 日本大学学生FD CHAmmiT」は閉会した。当日は、教職員の多大なるご尽力のおかげもあり、ブレイクアウトルームの移動以外の問題はほとんどなく、無事閉幕することができた。

## 1-8 第5回日本大学オンライン授業に関するシンポジウム（令和2年12月19日）

### 15:00～ 第一部 令和2年度日本大学 学生FD CHAmmiT の報告

第一部では、CHAmmiT について不案内である教職員を考慮し、CHAmmiT の説明や今年度の開催の経緯を説明した。報告①では、CHAmmiT で挙げた生の声を中心に学生が感じているオンライン授業のメリット・デメリットを説明した。次に、報告②ではオンライン授業のミライのカタチとして、「マイナスをゼロにする提案」と「ゼロをプラスにする提案」に分けて説明を行なった。「マイナスをゼロにする提案」では、CHAmmiT の中で多くの学生から挙げた交流機会の減少やシラバスの改編がされていないといった内容について話した。「ゼロをプラスにする提案」では、オンラインのメリットを活かした外部講師の積極登用や対面とオンラインの併用などプラスの付加価値を与えていけるような提案を行なった。

### 15:50～ 第二部 学系別、学生・教員によるディスカッション

第二部では、文系・理系・医歯薬系に分かれて学生と教員によるディスカッションを行なった。教員がファシリテーターとなり、学生から話を聞くことで、学生が抱えている悩みや不安について教職員がより深く理解する貴重な機会となった。

## 1-9 事前準備からシンポジウムまでの反省点

今年度は反省すべき点が多くあった。主に、組織面・タスク管理面・成果面・運営面から見ていく。

まず、組織面ではオンラインコミュニケーションの難しさを痛感した。見知った仲でのコミュニケーションであればオンラインのみでも問題はなかったが、新しく顔を合わせるスタッフが30名前後いる中で十分な信頼関係を早期に構築することに苦勞し、その結果、具体的な施策を出すこともできず、結果として10人以上の離脱を産んでしまったことは大きな反省点である。さらに、ミーティングごとに議論する内容をコアスタッフのみで決めてしまったためか、本番で議論すべきテーマを募ったものの、他のスタッフの中からは意見が上がってくることはほとんどなかった。コアスタッフで一方向的に決める形をとってしまったことは、例年からあったこととはいえ、引き続きの課題であり、スタッフ途中離脱の要因の一つになったのではないかと考える。

さらに、コアスタッフの中でも仲違いし、離脱する学生がいたことは組織的な面で大きな反省材料であると考え。波長が合わないということはあったのかもしれないが、それをうまくまとめていけなかったこと、遠慮してしまい自分の意見を素直に言うことができなかったことでこのような結果になってしまったことは、オンラインでの運営の難しさと考え。

タスク管理面では、期限を守れていないものが散見された。今年度のCHAmmiTでは、コアスタッフで行わなければならないタスクを個人に割り振っていた。しかしながら、個人の裁量に多くを任せていたため、期限までに提出できないものや、コアスタッフ内でのチェックのフローを設けても徹底できていないものがあつた。それにより、再三のチェックや誤字が散見され、職員の皆さんに手間をかけてしまうことが多くあつた。次年度からは事前にスタッフ内で確認するフローを挟み、確認を徹底したい。

成果面では、全体的な流れはまとまっていたが、プログラムの要素が多くなりすぎてしまった。そして、限られた時間の中で話せるのかなどのシミュレーションを行えず、結果として多くのグループで時間が足り

ず、まとめきれないまま次のセッションに進むという結果になった。そのため、未完成なプロダクトになってしまったグループが多くあり、貴重な機会を逃してしまったように感じた。さらに、オンライン授業に関しての表面上のメリット・デメリットで話が終始してしまい、学生が真に感じている意見を拾い上げることができなかったことは大きな反省点である。

運営面では、参加者自身でブレイクアウトルームに移動できない人が多く出てしまったため、しゃべり場内での入室タイミングのずれがプロダクトの作成に非常に大きな影響を及ぼしてしまったことである。これには、①事前の動画資料で案内できていなかったこと、②移動する方法をオープニングで示すことができていなかったことが原因と考えられ、次年度もオンラインでの開催になるのであれば改善したい。

## 2. 参加者のプロダクトの分析

本節では「令和2年度 学生FD CHAmmiT」の参加者のプロダクト（しゃべり場①②③で作成された成果物）を分析する。

### 2-1 シャべり場①（オンライン授業のメリット・デメリット）

しゃべり場①では、学部混合のグループに分かれてオンライン授業のメリット・デメリットについて考えて意見を共有し合った。

全体的にみると文系・理系・医歯薬系に共通してみられる意見が多くあった。メリットとしては、「いつでもどこでも授業を受けられる」「自分の時間が増えた」「オンデマンドは何度でも見返せる」という意見が多く、反対にデメリットとしては、「モチベーションの維持」「人との交流がない」「授業の理解度に差が生まれる」などが多くみられた。

そのほか、「実習ができない」といった理系医歯薬系のデメリットなど、学部ごとの特徴があらわれた意見も見られた。

結論として、学系に関係なく共通した意見が数多くあったので、それらのデメリットを改善できればオンライン授業においても対面形式と同じように学習ができるので、あとは学部ごとに学生と教員がそれぞれの意識によってどうデメリットを克服していくかが課題である。この課題を解決すべくしゃべり場③の学部提案書の作成につながられた。

### 2-2 シャべり場③（学部提案書）

しゃべり場③では、学部ごとにグループに分かれ学部提案書を作成した。

文系・理系・医歯薬系に共通する、オンライン授業に対するメリットやデメリットが多くあるものの、それぞれの学系ごとの特徴も現れた。文系では、交流機会の減少や授業でのコミュニケーションの減少が挙げられた。一方で、オンデマンド授業により、時間を調整して課外活動・就職活動に励むことができたなどコロナ禍であっても、「自ら学び、自ら考え、自ら道をひらく」日本大学の教育理念である「自主創造」に基づいた行動を行った学生も多くいた。理系では、オンラインでは実験の質が格段に落ちてしまう、資料が多くコピーするのが大変というデメリットもあったが、自分の時間を作りやすくなったことにより、例年よりも調査や研究に取り組むことができるという理系ならではの特色が出る結果となった。また、医歯薬系では、オンライン授業の出席率が低下し、ほとんどが必修科目であるため留年してしまう、他の学生がどのくらい勉強しているのかわからないというデメリットが挙げられた一方、タブレットを配布している学部ではペーパーレス化に繋がり非常によかったという意見も挙げられた。

それぞれの学部の主な意見に関しては、下記に添付する表をご参照いただきたい。

| 学部                | オンライン授業に賛成                           | オンライン授業に反対                          | 改善                          | 改良                         |
|-------------------|--------------------------------------|-------------------------------------|-----------------------------|----------------------------|
| グループ<br>1 (法学部)   | 自分の時間が豊富                             | 授業形式がバラバラ<br>学校の施設を活用できない           | 質問フォームの設置<br>教員間での課題量の共有    | 学生間の交流場所がほしい               |
| グループ<br>2 (法学部)   | いつでもどこでも受講できる<br>履修の自由度がある           | 授業妨害<br>カメラオフは顔が見えない                | 投票機能の活用                     | オンラインで交流会<br>対面でもオンラインの要素を |
| グループ<br>3 (法学部)   | 通学時間がなくなる                            | オンラインと対面の併用はかえって授業統一の妨げに            | オンラインサポートセンターの周知            | 学生間の交流会                    |
| グループ<br>4 (文理学部)  | 自分の時間が増える<br>通学時間がなくなる               | 学校の施設が使えない<br>コミュニケーションの機会が減る       | 授業によってはオンラインの方が効率良い         | 学生同士の交流の場合<br>オンライン黒板の採用   |
| グループ<br>5 (文理学部)  | 自分の時間が多い                             | 評価基準がバラバラ<br>実習ができない<br>通信障害        | 採点フォームが怪しい<br>学部の距離感        | オンライン社会人聴講生制度の発展           |
| グループ<br>6 (文理学部)  | 通学時間がなくなる<br>1限の授業が履修しやすい            | 通信環境の整備が大変<br>学校の施設が使えない            | 課題提出方法の統一<br>教員のITスキルの差     | 交流会の開催                     |
| グループ<br>7 (経済学部)  | 自分の時間を自由に使える<br>何度も復習できる             | モチベーションの維持<br>オンとオフのメリハリが大変         | 質問する場を増やす                   | 学生間の交流会<br>オンラインと対面の併用     |
| グループ<br>8 (商学部)   | 何度でも学習できる<br>通学時間がいらぬ                | 課題の提出方法がバラバラ<br>交流がない               | 課題管理ツールを活用<br>学校の通信環境を学生に提供 | 1年生のために交流会<br>他学部履修        |
| グループ<br>9 (芸術学部)  | オンデマンドは巻き戻し機能などで何度でも学習できる            | 成績基準がわからない<br>授業の資料の著作権<br>感性の共有が困難 | 外部講師を招いて全く違う単発授業を作る         | SNSを用いての交流                 |
| グループ<br>10 (芸術学部) | 自分に合わせて学習できる<br>Zoomのチャット機能で先生と交流できる | 同じ授業の受講者や先生の顔が見えないときが多い<br>実習ができない  | 課題に対して先生からのフィードバックがほしい      | 話したい人とSNSで話せるようにする環境づくり    |

|                      |                                      |                                       |                                        |                                 |
|----------------------|--------------------------------------|---------------------------------------|----------------------------------------|---------------------------------|
| グループ<br>11 (国際関係学部)  | 自分の時間が増えた                            | Zoomの授業時の態度                           | ITスキル向上<br>教材を直接購入したい                  | オンラインと対面の選択<br>復習教材がほしい         |
| グループ<br>12 (国際関係学部)  | 実家で授業が受けられる                          | 授業内のディスカッションの機会がない                    | シラバスのオンライン対応を                          | 都心学部の授業<br>(他学部履修)              |
| グループ<br>13 (危機管理学部)  | オンデマンドなら何度も見返せる<br>自分のペースで授業を受けられる   | 授業の質に差がある<br>先生との距離が遠い                | オンライン授業のやり方がバラバラ<br>学部内の交流機会がない        | キャンパスにオンライン授業のための部屋がほしい         |
| グループ<br>14 (スポーツ科学部) | 資料や動画を何度でも見返せる                       | 課題が多い<br>授業妨害が多い<br>通信環境のせいで授業に支障がある  | 教員間で交流会を行い授業の質を均等化してほしい                | 授業妨害した人に対して処罰を                  |
| グループ<br>15 (理工学部)    | コロナが不安なのでオンライン授業は安心                  | テストがカンニングし放題<br>通信環境によって授業に支障が        | 学生の理解度チェックがしやすい<br>課題のフィードバックを         | 双方向授業<br>交流会<br>キャンパスの有効活用      |
| グループ<br>16 (理工学部)    | 自分のペースで受講できる<br>船橋(違うキャンパス)の授業も受けられる | 一つの授業を受けるのに時間がかかる<br>質問への答えがすぐに戻ってこない | メモする時間を考えた授業時間の配分<br>対面でしかできないことは対面でやる | 対面講義のための復習の動画<br>オンデマンドと対面の併用   |
| グループ<br>17 (理工学部)    | 時間の管理・節約<br>柔軟に予定を組める<br>何度でも見返せる    | 実験系は実際に手元で作業したい<br>通学により家と学校のメリハリ     | 通信障害への対策<br>教員間での課題の量を共有               | オンラインなどの使い分け<br>図書館や学食などの利用     |
| グループ<br>18 (生産工学部)   | 座学の振り返りをしたい                          | 理解度がわからない<br>成績の統一化                   | 匿名で記入できるアンケートを増やす                      | 学生・教員の交流の場<br>誰でも生産工学部の授業が覗けるもの |
| グループ<br>19 (生産工学部)   | オンラインでも十分に受けられる授業があったから              | 実験や実習は対面がいい<br>学生と教員との間に距離が空いてしまう     | Zoomを使った質問の回答<br>受講する環境に差があるので改善       | 対面授業とZoomの同時双方向で授業中も録画して見返せるように |

|                      |                                                |                                                  |                                             |                                                |
|----------------------|------------------------------------------------|--------------------------------------------------|---------------------------------------------|------------------------------------------------|
| グループ<br>20 (工学部)     | 動画があると復習しやすい<br>時間の有効活用ができる<br>学生の復習用教材として残せる  | 課題が負担<br>コミュニケーション不足<br>対面とオンラインの同時進行は資料作成の負担が増加 | 出席確認・課題形式・授業形式の統一<br>学生同士の交流の場の不足解消         | 配信時間の統一・調整<br>対面授業の録画配信<br>工学部内でのしゃべり場         |
| グループ<br>21 (工学部)     | 好きな時間を有効活用できる                                  | 先生に顔を覚えてもらえない<br>メリハリがつかない<br>実験実習の機会がなくなる       | 出られる学生は対面、出られない学生はオンライン<br>1年生の授業は対面で       | 他学部他学科の授業を履修したい<br>遠隔でできるものは積極的に利用             |
| グループ<br>22 (医学部)     | 時間にゆとり<br>集中できる<br>質問しやすい<br>動画を繰り返し有効利用       | 実習ができない<br>学生間も教員と学生もお互いの様子がわからない<br>通信環境の差      | 大学内の通信環境の改善<br>教員のオンライン配信ツールの使い方講座          | オンラインと対面を選べるようにする<br>オンラインでも問題のない授業はそのままでもいいかも |
| グループ<br>23 (歯学部)     | 授業を録画できるので復習しやすい<br>資料の共有がしやすい<br>通学時間がなくなるため  | 専門知識が入りにくい<br>出席管理の問題<br>時間を守ることは将来の診療に関わることから   | オンライン環境の整備。基準明示<br>授業専用のソフトウェアの作成<br>時間割の共有 | 出席のカウント<br>雑音対策<br>課題の提出形式の統一                  |
| グループ<br>24 (松戸歯学部)   | 復習がしやすい<br>時間を有効活用できる                          | 質問がしにくい<br>友達が作りづらい<br>オンライン授業があってもみんな受けてない      | オンライン授業と対面の完全なハイブリッド型<br>確認試験を増やす           | 対面での出席差に対する加点<br>オンラインでの交流会                    |
| グループ<br>25 (松戸歯学部)   | ペーパーレス化<br>効率的に学習できる<br>オンデマンド<br>資料作成、説明がしやすい | 黒板が見えにくい<br>配信録画ミス<br>サボってしまう                    | 講義と実習の日を分ける<br>対面授業との差を縮めて欲しい               | 質問しやすいフォーマットの設置<br>学際的な講義の受講                   |
| グループ<br>26 (生物資源科学部) | いつでも授業を受けられる<br>聞き逃した部分を再確認できる                 | 実験実習が受けられない<br>回線環境が悪い                           | オンライン授業にガイドラインを作る<br>少人数実習実験                | 他学部履修<br>対面・オンラインのハイブリッド                       |

|                      |                                                      |                                                      |                                                  |                                               |
|----------------------|------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|--------------------------------------------------|-----------------------------------------------|
| グループ<br>27 (生物資源科学部) | 授業を詰めることで<br>時間の有効活用<br>感染リスクの軽減<br>選択の幅が広がる         | 友達と勉強した方が<br>効率的<br>講義はオンラインで<br>行うなど必要最低限<br>の移動にする | 課題提出方法の<br>簡易化とフィー<br>ドバック<br>プリンター・通<br>信環境の負担  | 学校のプリンタ<br>ーの使用<br>資料配布<br>オンラインと対<br>面の両立    |
| グループ<br>28 (生物資源科学部) | 時間の自由度の向上<br>何度も繰り返し復習<br>できる                        | 通信環境に左右され<br>る<br>試験での不正ができ<br>る                     | 不正防止策を考<br>案する<br>通信環境を考慮<br>しオンデマンド<br>型に       | インターネット<br>掲示板活用<br>オンラインでの<br>サポート拡充         |
| グループ<br>29 (薬学部)     | 講義を見返すことが<br>できる<br>実技以外はオンライ<br>ンでいいのでは             | リアルタイム配信が<br>できない場合にはオ<br>ンデマンドに<br>通信環境のトラブル        | 通信環境トラブ<br>ルへの対応を明<br>確にする<br>学生の出席率を<br>向上させる施策 | 学生間の交流<br>対面授業を録画<br>して気楽に復習<br>できるように        |
| グループ<br>30 (通信教育学部)  | 今年のデータからよ<br>り充実したオンライ<br>ン授業<br>対面での折り合いが<br>できるように | 友達ができないから<br>やってほしくない                                | 授業配信時間の<br>統一<br>オンライン形式<br>での提出方法を<br>統一        | オンラインでの<br>相談環境<br>履修方法や単位<br>取得法のマニユ<br>アル動画 |

### 3. 参加者アンケート分析

本節では、当日実施したアンケートを元に「令和2年度 学生FD CHAmiT」について参加者の視点から考察する。

最初に認知度に関する設問を分析していく。

表3-1-1

今回のイベント以前に「FD」について知っていましたか？

|    | はい  |       | いいえ |       |
|----|-----|-------|-----|-------|
|    | 人数  | 割合    | 人数  | 割合    |
| 昨年 | 123 | 58.9% | 86  | 41.1% |
| 今年 | 89  | 48.0% | 82  | 52.0% |

表3-1-2

今回のイベント以前に「学生FD」について知っていましたか？

|    | はい  |       | いいえ |       |
|----|-----|-------|-----|-------|
|    | 人数  | 割合    | 人数  | 割合    |
| 昨年 | 109 | 52.2% | 100 | 47.6% |
| 今年 | 73  | 42.7% | 98  | 57.3% |

上の2つの表は「FD」と「学生FD」の認知度について去年の CHAmmit アンケートの結果と比較したものである。まず、表3-1-1から「FD」についての認知度は昨年と比べて今年は10.9パーセント減少していることが分かる。さらに表3-1-2より、「学生FD」についての認知度は昨年と比べて10.5パーセント減少していることが分かる。

このように、昨年度と比べて「FD」、「学生FD」の認知度はどちらも約10ポイント程度減少している為、より一層FDの活動を知ってもらう為の活動を行う必要がある。

次に今年度の満足度や参加者の意識の観点から考察する。

表3-2-1

「令和2年度日本大学学生FD CHAmmit」は全般的に楽しめましたか？

|    | 非常に楽しい |       | 楽しい |       | 普通 |       | あまり楽しくない |      | つまらない |      |
|----|--------|-------|-----|-------|----|-------|----------|------|-------|------|
|    | 人数     | 割合    | 人数  | 割合    | 人数 | 割合    | 人数       | 割合   | 人数    | 割合   |
| 昨年 | 70     | 33.5% | 107 | 51.2% | 30 | 14.4% | 2        | 1%   | —     | —    |
| 今年 | 55     | 32.2% | 76  | 44.4% | 30 | 17.5% | 6        | 3.5% | 4     | 2.4% |

表3-2-2

「学生FD」を他の学生・教職員にも紹介したいと思いますか？

|    | はい  |       | いいえ |       |
|----|-----|-------|-----|-------|
|    | 人数  | 割合    | 人数  | 割合    |
| 昨年 | 189 | 90.4% | 20  | 9.6%  |
| 今年 | 148 | 86.5% | 23  | 13.5% |

表3-2-3

令和2年度 日本大学学生FD CHAmmit」を通じて学部に戻り、「学生FD」について何か行動を起こしたいと思いませんか？

|    | 必ず何かしたい |       | 機会があればしたい |       | 学生FD組織があれば関わりたい |      | 思わない |       | わからない |       |
|----|---------|-------|-----------|-------|-----------------|------|------|-------|-------|-------|
|    | 人数      | 割合    | 人数        | 割合    | 人数              | 割合   | 人数   | 割合    | 人数    | 割合    |
| 昨年 | 32      | 15.3% | 109       | 52.2% | 11              | 5.3% | 17   | 8.1%  | 40    | 19.1% |
| 今年 | 21      | 12.3% | 85        | 49.7% | 16              | 9.4% | 21   | 12.3% | 28    | 16.4% |

上記のアンケート結果は CHAmmiT の活動を客観的に評価するにあたって重要なデータである。

まず表3-2-1を考察する。この表では今年は「非常に楽しい」・「楽しい」と答えた参加者が全体の76.6%を占めており、非常に高い数値が出ていることが分かる。しかし、一方で「普通」・「あまり楽しくない」・「つまらない」と答えた参加者が昨年より増加していた。この問題はオンライン上でのコミュニケーションを図る上での難しさやオンライン上でのトラブルといった問題点が客観的に浮き彫りになったのではないかと考えられる。

次に表3-2-2を分析していく。この表では「学生FDを紹介したい」と答えた参加者は全体の86.5%を占めており、昨年と同様に高い水準を維持していることが分かる。しかし、前述した通り、満足度評価が芳しくない為、昨年より若干低い数値となっている。

最後に表3-2-3について分析していく。この表では「学生FD活動について何か行動を必ず起こしたい、もしくは「機会があれば起こしたい」と答えた参加者が全体の63.0%を占めていた。しかし、一方で「行動を起こしたいと思わない」と答えた参加者の割合が4.2パーセント増加していた。

以上のように昨年と比べて今年のFD活動は全体的に消極的・否定的な意見が目立った。しかし、評価を悲観的にとらえるのではなく、今後のFD活動の規模拡大に当たって、何をどのようにしていくべきかの指針になると考えられる。

表3-3-1

今年は、初めて Zoom によるオンラインでの CHAmmiT 開催でしたが、今後もオンラインでの学生交流のイベントはあった方が良いですか？ または、何かアイデアがある場合はその他に記載してください

| 今年 | あった方が良い |       | 対面と併用してほしい |       | 対面が良い |       | その他<br>(アイデア) |      |
|----|---------|-------|------------|-------|-------|-------|---------------|------|
|    | 人数      | 割合    | 人数         | 割合    | 人数    | 割合    | 人数            | 割合   |
| 全体 | 73      | 42.7% | 66         | 38.6% | 23    | 13.5% | 9             | 7.4% |

表3-3-1の結果から「あった方がいい」と答えた参加者の割合は42.7%であり、一方で「対面が良い」と答えた参加者の割合は13.5%であることからオンライン開催でも十分開催可能であることが判明した。また、「対面と併用してほしい」と答えた参加者の割合が38.6%であることから、新型コロナウイルスの流行が収束した後も新しいFD活動の形として対面・オンライン両方の開催が望まれているのではないかと考えられる。

その他の回答としては「その他（アイデア）」の回答割合が7.4%と少なく、「学部内でも授業の悩みを共有したい」という意見や「対面での活動の代替策としてオンラインを実用化してほしい」という意見も上がった。目新しいイベントの提案として「SDGsを題材としたイベントを学生FDで開催してほしい」という回答があった為、次回開催する際の参加者側の意見として十分考慮した上で反映していくべきである。

このように教育を改善していく上では開催する会場となる場所の選定も今後考慮する必要がある、対面・オンラインでの開催を両立することで、より多くの人にCHAmmiTの活動を知ってもらえるのではないかと考える。

## 4. 学生コアスタッフからのコメント

### 4-1 「CHAmmiTの反省とオンライン授業の展望」 竹田 匠

(日本大学商学部経営学科3年・令和2年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ代表)

初めに、「令和2年度 日本大学学生FD CHAmmiT」開催にあたり、準備や協力をしていただいた担当教員及び学務課をはじめとする多くの関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。特に、今年度の開催にあたっては、同じ会場に集まっての開催が新型コロナウイルスの影響で厳しく、初のオンライン開催となり、ZoomやGoogle Jamboardの設定など見える部分だけでも多くの準備をしていただいた。また見えない部分でも感染対策や事前準備など多くの部分で配慮していただき感謝申し上げます。

今年度の反省点は、やはり途中で連絡が取れなくなってしまったスタッフが10名ほどいたことだと考える。50名のスタッフと一緒に作り上げていくものでありながら、結局コアスタッフだけでほとんどの話し合いを行いまとめていた。さらにリハーサルと本番を除き全く顔を合わせることなく4カ月間活動を行なったことで、例年よりも明らかにスタッフのモチベーション維持が難しくなるであろうことはわかっていた。また、顔を合わせていないことにより、信頼関係の構築という面で非常に困難があった。しかしながら、限られた環境の中で最善を尽くすべきであったのに、全員でなし遂げることができなかったことは、今年度のCHAmmiTにおける最大の反省点である。

今年度のテーマである「オンライン授業のミライのカタチ」にはやはり「少しでも多くの学生の声を伝えたい」という思いが根幹にあったように思う。新型コロナウイルスにより急遽オンライン授業となり、学生も教職員も右も左もわからない状況から始まった。自分は学生なので、学生目線でしかわからないが、たびたび延期になる授業開始時期、いざ始まってわからないことだらけ、パソコンに慣れておらず困っているなど不安を抱え、学業面以外でも親の会社が業績不振、バイトに入れず生活困窮、就活や就職に対する不安など数えたらキリがないくらいの不安があったように思う。そんな中で先生方もどのようにしたらコロナ前とできる限り変わらない授業を行えるのか考えその限られた中で最大限の授業をしてくれているのだと感じた。その一方で、学生が不十分に感じている面も多くあり、オンライン授業の悪い部分を少しでもなくしていけたらという思いが活動を通していく中で日に日に強くなる一方であった。

しかしながら、オンライン授業は悪い結果だけではなくたように思う。それは、感染対策という観点のみならず、「どこでも授業を受けることができる」「オンデマンド配信があれば聞き逃した箇所を聞き直すことができる」「テスト前に一気に復習することができる」などコロナ後も残していきたいと学生が感じる部分は大きくあったと感じる。

また、今年度、「オンライン授業のミライのカタチ」という部分には未来の要素を多く詰め込みすぎたように思う。学生が課題に感じている面ではなく、表面上のメリットやデメリットに終始してしまい、これからどうしていったらいいのかなどには深く入り込むことができず、「オンライン授業について率直にどう思っているのか」というような声を聞く機会を逃してしまったのは今後の課題であると考ええる。

オンライン授業の今後を考える上では、学生が不満に思っていることを最大限解消していくことが必要になる。その上で、アフターコロナとなっても対面授業とのハイブリッドなどの形でオンライン授業はある程度残るものと思われる。自分の所属する商学部では一つの科目に対して3人の先生が授業をするオムニバス形式の必修科目があり、オンライン授業開始以前から、先生により内容は同じであっても授業の方法が異なるため不公平だと感じている学生がいたことを覚えている。プロダクトをまとめている中でも、多くの学生が対面になっても繰り返し勉強したい、他学部の授業を履修したいというニーズを持っていることが分かった。これはオンデマンド授業により解消できる部分も大きいのではないと思う。繰り返し授業を見られる

ようにすることは学習効果を高めるだけでなく、先生方の授業への準備に対する労力を削減することにもつながるだろう。、加えて、ゼミナールや研究室などの少人数授業を拡充したりすることで、労力やコストを抑えつつも、学生がより学びやすい環境が作られ日本大学としての教育力も上がるのではないだろうか。これは日本大学が総合大学としてのブランド力を向上させることにも繋がるのではないかと考える。

最後に、新型コロナウイルスの中で開催を取りやめることが検討された中で、実際にオンラインでの開催を行ってくださったことに熱く御礼申し上げる。また重ね重ねになるが、開催に踏み切ってくださった学務課の皆様とFDワーキンググループの先生方・参加者、スタッフをはじめとする関わってくださった全ての方に感謝申し上げます。そして、FD活動並びに学生FD活動の更なる発展を願い本稿を終わることとしたい。

#### 4-2 「CHAmmiT を終えて」 吉田 未来

(通信教育部法学部政治経済学科 4 年・令和 2 年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ)

初めに「令和 2 年度 学生FD CHAmmiT」開催にあたり、ご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

私は今年度コアスタッフとしてFD CHAmmiT に参加した。コアスタッフに挑戦しようと思った理由は、自分から率先して行動したいと考えたからである。

私は昨年度、一般スタッフとしてFD CHAmmiT に参加し、企画班としてオープニングやエンディングの準備に携わっていた。しかし、昨年度は初めてのことで、自分がどのように動いたらよいか分からず、自ら率先して取り組むことができなかった。私は昨年度の反省を生かし、今年度はコアスタッフとして、自ら率先して活動し、一般スタッフとともにCHAmmiT を作り上げていきたいという目標を掲げた。

しかし、今年度はコロナウイルス感染拡大により、オンライン開催となったCHAmmiT に大きな不安を抱えていた。それは一般スタッフとのコミュニケーションである。数少ないミーティングの中でコミュニケーションをとることは、対面で行っていたときでさえ、難しいことであると思っていた。さらに、今回はオンラインという限られた環境の中で、ミーティングを行ってきたが、例年より時間も少なく、アイスブレイク等で交流を深める時間もなかった。私たちは少しでも一般スタッフと交流を深めたいと考え、ミーティング後に懇親会を行い、オンライン上で出来るゲームなどで盛り上がりたそうとしていた。しかし、最初こそは順調であったが、後半は参加者も減り、数人の一般スタッフとしかコミュニケーションをとることができなかった。またコミュニケーションの他に、オープニングやエンディング等の役割分担を一般スタッフに振ることができなかったことも今回の反省点であると考え。私たちコアスタッフは定期的にミーティングを行っていたことにより連携がとれていたため、最終的にはコアスタッフ内で仕事を回すことになり、一般スタッフに仕事を割り振ることができなかった。私は今回のCHAmmiT を振り返ってみると、自分の目標を達成することができなかったが、一般スタッフや教職員とともにCHAmmiT という大きなイベントを成し遂げられたことについては大きな達成感があった。このような状況下で人との関わりが失われかけていたが、CHAmmiT を通して、多くの人と関わることは、私にとって嬉しいことであった。最後になるが、来年度以降のFD活動がさらなる発展を遂げられるよう心より願っている。

#### 4-3 「CHAmmiT の反省点とその改善点」 大貫 陽司

(経済学部金融公共経済学科 3 年・令和 2 年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ)

初めに「令和 2 年度 日本大学学生FD CHAmmiT」を開催するにあたりご協力いただいた教員の皆様並びに職員の皆様そして学生スタッフの皆様にお礼申し上げます。

今回のCHAmmiT の運営にあたっての反省点は以下の通りである。

- (1) スタッフミーティングやCHAmmiT で話し合う議題を決定する際にコアスタッフ内のみで決めていたため、アイデア不足に陥ったこと。

(2)一般スタッフに仕事の割り振りが行われず、コアスタッフと一般スタッフでの間に温度差が生じてしまったこと。

(3)オンライン開催であったため、スタッフ間で雑談等のコミュニケーションをとる時間が取れず、信頼関係の構築ができなかったこと。

(1)(2)が起こってしまった原因として、スタッフ内での仕事の割り振りがうまくいっていなかったことがあげられると思う。これは昨年も起こっていたことであるが、CHAmmiTでは一般スタッフを含めた大人数の人たちと連携をとることが難しいため、コアスタッフが学務課の職員及び担当教員と連携を取りプロダクトを作成するという形態をとっている。そのため、コアスタッフに仕事集中し、一般スタッフには仕事がほとんど回らないという状態になってしまった。

(3)の原因については、オンライン上のミーティングであったため、信頼関係の構築が難しかったこともあるが、それ以外にもミーティング時間が例年よりも短かったことに加え、ミーティングのテーマの実用性を重視しすぎたことにより、スタッフ間でお互いを知る時間をあまりとれなかったことがあげられると思う。ミーティング後にスタッフ同士の交流を深めてもらうために、懇親会を実施していたが、10名程度しか集まらず、集まる顔ぶれも毎回変わらなかった。やはり、全体ミーティングでの一定の信頼感の獲得が必要だと感じた。

これらの反省点を改善する策として、比較的早めの時期に班割りすることが効果的であると思う。コアスタッフを中心にスタッフをいくつかの班に分け、ワーク活動（アイスブレイクやプロダクトの作成等）を行うことで、一定の信頼関係を構築する。班割りを行うことで全体ミーティングでは聞きづらい細かい質問にも対応でき、ミーティングの途中で来なくなってしまう人を減らすことができると考えている。

最後に活動を通しての感想を述べ、本稿を終わりたいと思う。

私が今回コアスタッフに立候補したきっかけは、本年度のCHAmmiTの代表者である竹田匠に勧誘されたことであった。去年、一般スタッフとしてCHAmmiTに参加していたため、コアスタッフの仕事が忙しいことを知っていたので、正直あまり乗り気ではなかったことを覚えている。しかし、プロダクトの作成やミーティングで本番に向け準備を進めていくと不思議なもので、活動のほとんどを終えた今ではコアスタッフをやってよかったと思えるようになった。今年はオンラインの開催であったため、去年とは勝手が違い、手間取った部分も多かったが、ZoomやGoogle Jamboardなどオンラインならではのツールを使うことでオンラインということ以外は例年とほとんど変わらない形で開催できたと思う。今後はコロナウイルスの状況次第ではあるが、授業や就活などの活動もオンライン化が進むと思う。そのため、今回のようなオンライン上で何かを成し遂げたという経験は大きな財産になったと共に私の大学生活の大きな成果になった。

#### 4-4 「オンライン CHAmmiT の終わり、そして始まり」青砥 光希

(日本大学文理学部哲学科3年・令和2年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ)

はじめに、この日本大学学生FD CHAmmiTに関わってくださったすべての人たちに感謝を申し上げる。そもそも、今回の日本大学学生FD CHAmmiTは開催できるかどうか怪しかった。2020年は新型コロナウイルスという病原体が、日本のみならず世界中で流行し、今これを執筆している2021年でも流行は留まるどころかさらに感染が拡大している。今の段階でも収束する見込みが全くない。この社会的状況の影響で様々な活動が中止になった。大学の活動もその例外ではなく、授業がオンラインになったり、部活動ができなくなったりなど被害が甚大である。

そんな中で日本大学学生FD CHAmmiTも対面での開催ができないため中止になる可能性があった。私はこのことが非常に残念であった。なぜならこのイベントは学生と教職員の考えを共有して日本大学をよりよくしようとする伝統あるものだったからだ。この伝統が途切れてしまうことは、FD団体だけでなく、日

本大学全体の損失であると感じた私は、日本大学学務課宛てに学生FD CHAmmiT をオンライン上で開催したいというメールを送らせていただいた。そのメールに効果があったかは分からないが、結果的に日本大学学生FD CHAmmiT はオンラインで開催されることが決まった。これによって上述した伝統を守ることができたので、とても嬉しい気持ちになった。

さて、話は変わって今回のCHAmmiTのテーマは「オンライン授業のミライのカタチ」というものであった。これはオンライン授業が主流になってきた今に焦点を当てた素晴らしいテーマだと思う。私たちは学生であるため学生側の意見を出すことは簡単にできるが、教職員側の意見を出すことは少し難しいところもある。今大学はいくつかの批判にさらされている。特に日本大学は授業だけでなく部活動やその他の活動も辞めているためそれを再開して欲しいという意見がとても多くある。一見するとその主張は正しい。しかし、教職員の立場から見ると、大学でクラスターが発生することが懸念されるのである。このように学生と教職員の意見は違うのだ。しかし、我々は自分の立場に固執してしまいがちである。その価値観が今回のCHAmmiTで少しでも変化したのではないかと私は感じる。確かにこのイベントは推薦スタッフの方の中にもそこまで関心をもたない人もいたり、あるいはそもそもこのような活動に興味を示さない人もいたりする。それでもやはりこのイベントを行った価値は大きいのではなかろうか。それを感じることができたのは、今回一番良かった点である。

一方、もっと改善しなければならないことはこのイベントをいかにして広げていくことかということである。例えば、前述した通り主にコアスタッフや一部の学生スタッフは意識の高かった。しかし、学生スタッフの中にも意識があまり高くない人もいたことは事実である。今回はオンライン上での活動であったため、なかなかモチベーションが上がらないのは分かるが、もう少しやる気が必要な場面もあった。もちろん他にも改善すべき点は多々あるが、私としてはまずやる気をもってイベントに取り組むということが何よりも大切なことであると思う。その点で言うと、もう少しやる気をもたせることができれば良かったのかなと思う。

今回のCHAmmiTはあくまでも通過点である。CHAmmiTというものは開催するだけでなく、そこから先どのように行動を起こすのかということがCHAmmiT自体を行うことよりもはるかに大切なことである。私も今行動を起こそうとしている。私は文理学部学生FDの代表として活動しているが、そこでは学生が授業を企画したり、文理学部長と懇談したりなど、学生がよりよい大学生活を送るために活動している。まだまだ発展途上の団体であるが、このような団体を文理学部だけでなく、日本大学のその他の学部にも広げていくことができればよいと思う。そのきっかけとして私はまた交流会というイベントを開催しようと今企画をしている。尤もこのイベントも実現するかは分からないが、今自分たちには何ができるのかということを探している。今回のオンラインCHAmmiTの開催により、まだまだオンラインでの活動に可能性を感じることができた。今後の学生FDの発展のためにもっと行動していこうと私は感じる。

最後に最初でも述べたが、今回の日本大学学生FD CHAmmiTは一人の力ではとてもできない大きなイベントであった。このイベントを支えてくださったすべての人に改めて感謝申し上げる。今後の日本大学学生FDの発展は非常に楽しみであり、それを願いつつ行動していくことを抱負として本文を終わらせていただく。

#### 4-5 「オンラインという名のターニングポイント」 小林 歩武

(日本大学国際関係学部国際教養学科2年・令和2年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ)

突然舞い込んできたコロナウイルスに伴い授業のほとんどがオンラインでの開講を余儀なくされ、サークルや部活の活動さえもできず留学もできない状況となった。人との距離を保つことだけが要求され、例年おくってきた当たり前のような学校生活が失われた今学期であった。そのため、たくさんの学事行事も中止を

余儀なくされ、FD CHAmmiT も取りやめる検討がなされた中であったが、オンラインという媒体を用いて日本大学に所属しているさまざまな人との交流ができ、教育について話し合う例年の対面形式になぞって開催できたことは非常に喜ばしく思えた。また初めての試みであるオンラインでの開催に準備や協力してくださったすべての方々に厚く御礼申しあげる。

わたしは昨年度のFD CHAmmiT にも一般スタッフとして活動した経験があった。しかし、今年度はコアスタッフとして初めてのオンライン開催を迎えるにあたって非常に苦労をした。なぜならば、対面で会うことはなく、すべて通信媒体を用いるため、一般スタッフとの交流が難しく関係を築くのは大変だったからである。しかし、コアスタッフ同士では予定が合いさえすれば気軽にミーティングできるのはオンラインの良いところでもあった。そのような面があるため例年は一般スタッフと協力して行うオープニングとエンディングなどもコアスタッフが担うことになった。これにより、例年と比べてコアスタッフの仕事量が増え、一般スタッフの活動量が減ってしまい、グループで協力しての活動が減ってしまったのは今年度のFD CHAmmiT の反省点である。

コアスタッフとして約半年間活動させていただいたことで、オンライン授業は本来コロナウイルスの感染防止対策でありながら、オンライン授業のありのままをみんなで話し、現在の課題を参加者と共有できたのは、この状況下ではなかなかできないことだと思う。また、「ミライのカタチ」について、オンライン授業をどうしたら今後に生かせるかという一步踏み込んだ内容を話し合えたこともとても貴重な時間となった。

わたし個人の反省点としては、資料作成の準備の遅れやわたし自身のモチベーションの維持が難しかったことが挙げられる。実際にスタッフと会うことなく一人での作業となったため、モチベーションの低下により、資料作成に対する意欲やわたし個人のミスが相次いでしまった。また、これはオンラインのつきものであるが、通信環境の不具合やパソコンの不調でパソコンが落ちてしまうことが多々あり、メンバーに迷惑をかけてしまったこともあった。

今年度のFD CHAmmiT は日本大学のこれからについて考えるような重要なものであった。そのような大きい行事にコアスタッフとして参加できたことは誇らしく、これからの大学生活にも何かしらの形で生かしていきたい。最後にFD活動がますます活発化して、より良い日本大学になることを願望として本稿を終わらせていただく。

#### 4-6 「史上初！オンラインCHAmmiTを終えて」 竹田 蘭丸

(日本大学国際関係学部国際総合政策学科1年・令和2年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ)

まずは、このコロナ禍で初のオンライン開催ということになり、実現の難度が幾度も高まった中で、準備や協力をしてくださった担当教員及び、学務課の方々に厚く御礼申し上げます。

私が一年生でコアスタッフとして参加した経緯は、三点の理由がある。

一点目は、FD CHAmmiT に関心を抱いたからである。私の学部では、ポータルサイトでスタッフの募集をしていた。そこで私は全16学部の人たちと関わることや、自分の考えを伝えることで少しでも学校をより良くできるという点に魅力を感じて、ぜひ参加してみたいと思った。

二点目は、例年なら対面授業で友達ができたり、先輩と関われたりできるが、本年は新型コロナウイルスの影響で、一切、これらのことができなかった。そのため、私は多くの人と関わったり、友達を作れたりする機会を探していた。そんな中、FD CHAmmiT の話が舞い込んできて、ちょうどそういった機会を見つけたと考えたのである。

三点目は、私が大学に入る際、ボランティア活動や学内の活動に積極的にとりくみたいと考えていた点である。私は高校時代、あまり積極的にそういった取り組みをせず、人との関わりも薄かった。だから、あまり学校生活も充実していなかった。今回、FD CHAmmiT のスタッフとして参加させていただいて、私は今、

非常に充実している。

本年は誰も経験したことがないオンライン授業がテーマになり、例年以上に良いしゃべり場になったと考える。そして、CHAmmiTに参加させていただいて、非常に良い経験ができた。来年度、商学部ではすでにハイブリッド授業になることが決まっている。このように私たちの意見がしっかり取り入れられることは、非常に嬉しく、素晴らしく感じる。

私は7月11日の第一回のミーティングからCHAmmiT当日までを通して、本当に参加して良かったと思う。私自身のスキルも上がったと考える。それは、資料作成や人に伝える難しさを学ぶことができたからである。また、反省としては「期限がまだ先だ。」「これくらいできていれば良いだろう。」という油断をしてしまったことである。そのため、リハーサルの準備不足や次にやるべき行動が遅くなってしまった。つまり、授業とこの活動を上手く両立できなかった。この反省点を意識しながら、今後も様々な活動を行っていきたい。また、コアスタッフの中でも引っ張って頂いた先輩方のようになるために頑張りたい。そして、FD活動がますます活発化してより良い日本大学になることを切望し、本稿を終わらせていただく。

#### 4-7 「令和2年度学生FD CHAmmiTを終えて」 落合 凌也

(日本大学経済学部経済学科3年・令和2年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ)

##### ・CHAmmiT に対して思うこと

私は今年度、CHAmmiTの一般スタッフとして参加した。参加した理由は二つある。

1つ目は昨年度、CHAmmiTのスタッフだった友人に誘われ、ゲストとして参加した時に「大学の授業の在り方」についてもっと考えてみたいと思ったからである。

次に2つ目は、新型コロナウイルスの影響で全面オンライン授業となってしまったことから、今度は参加者側ではなく、運営側としてCHAmmiTの活動に参加して「よりよい授業形態とは何か」ということを考えてみたいと思ったからである。

半年間を振り返ってみると、初めてオンラインのミーティングをした時から本番終了まで、とても短くも濃厚な半年間であったと思う。なぜなら、私は元々一般スタッフとしてこの活動に参加していたが、運営側として積極的に活動に参加することができたからである。私自身、転部前は楽な方、楽な方にと流れ、明確に自分のやりたいことなどなく、周りに流されて生活を送りがちであった。

しかし、転部後は自分が今できることを仲間と一緒に全力で取り組みたいと考えていたため、コアスタッフの人たちと交流を深めることでとても精力的に活動をすることができたと思う。

##### ・CHAmmiT に関わって感じたこと

今回CHAmmiTに関わって感じたことは2つある。それは「自分一人だけでなく、周りと協力してイベントを盛り上げる楽しさ」と「自分が思ったことを発信していくことの大切さ」である。前述した通り、やりたいこともなく流されていた時期があったが、自ら考え、仲間と協力することの大切さを身をもって痛感した。また、コアスタッフの人たちを始めとした、日本大学職員の方のサポートや、在籍している教授陣からのフィードバックがあったからこそ、初めてのオンラインでのイベントを盛り上げることができたのだと思う。来年の状況は正直誰にもわからないが、オンライン授業の在り方について学生、教職員の方も含めみんなが一度立ち止まって考える機会であったことは間違いないと思う。

##### ・感想

自分は3年生での経験だったが、正直至らない点が数多くあったと思う。しかしながら、コロナ禍で活動が制限される中、自ら課題や目標を設定して仲間と協力して達成させるいい機会になったと思う。今回の経験を社会人になってからも活かしていきたいと思う。

また、もし機会があれば4年生でも、次はコアスタッフとしてFD活動に参加していきたいと思う。

## 4-8 「令和2年度学生FD CHAmmiTを終えて」 梅村 智輝

(日本大学生産工学部数理情報工学科3年・令和2年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ)

まず初めに「令和2年度 日本大学学生FD CHAmmiT」を開催するにあたり、ご協力いただいた教員の皆さま並びに職員の皆さま、学生スタッフの皆さまにもお礼を申し上げる。

昨年度に引き続き、今年度もCHAmmiTの一般スタッフとして参加した。参加した主な理由は「友達を作り人脈を広げる」である。小中高はクラス分けがあり、同じ教室の中で同じ時間を過ごすため、自然と友達が出来ていくと思うが、大学では違う。大学では、基本的に授業ごとに教室の移動が必須となり、個人の席も決められているわけではなく、毎回違う席に座っているのがほとんどである。そのような環境の中、友達を作るのは難しいであろう。そんな中このCHAmmiTでは、学生スタッフとして参加すると、他学部の人たちと同じ目標を立て、同じゴールに進むため、自然と仲良くなれると思い参加した。実際、人脈は増えたと感じられる。またCHAmmiTでは、学生スタッフがファシリテーターとして進行していくため、限られた時間の中で課題を達成する力、学生の意見をまとめる力や意見を引き出す力が身に付いたと感じられる。現在もオンライン授業のため、多くのグループワークがあるが、私の中では上手に出来ていると感じられる。

最後に、またCHAmmiTのようなイベントがあった際には、参加したいと思う。身に付けたスキルを学生生活だけではなく、社会にも通用するレベルまで伸ばしたいと思う。



## 学生レポート

# 「学生が変える日本大学」

## —「令和3年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」に関する報告書—

竹田蘭丸<sup>1), 2)</sup>, 土屋怜王<sup>1), 3)</sup>, 古家凌成<sup>1), 4)</sup>, 渡部大雅<sup>1), 5)</sup>, 高野敦子<sup>1), 6)</sup>, 後藤菜月<sup>1), 7)</sup>  
合原嘉成<sup>1), 8)</sup>, 西村憲人<sup>1), 9)</sup>, 柴田大輝<sup>1), 10)</sup>, 曾山はるか<sup>1), 11)</sup>, 佐藤喜一<sup>1), 12)</sup>, 垂見麻衣<sup>1), 13)</sup>

<sup>1)</sup>「令和3年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」学生スタッフ, <sup>2)</sup>日本大学国際関係学部国際総合政策学科2年,  
<sup>3)</sup>日本大学経済学部経済学科2年, <sup>4)</sup>日本大学商学部商業学科4年, <sup>5)</sup>日本大学文理学部中国語中国文化学科3年,  
<sup>6)</sup>日本大学経済学部金融公共経済学科3年, <sup>7)</sup>日本大学国際関係学部国際教養学科3年,  
<sup>8)</sup>日本大学法学部法律学科2年, <sup>9)</sup>日本大学国際関係学部国際教養学科2年,  
<sup>10)</sup>日本大学生物資源科学部生命化学学科2年, <sup>11)</sup>日本大学生物資源科学部動物資源科学学科2年,  
<sup>12)</sup>日本大学通信教育部法学部政治経済学科1年, <sup>13)</sup>日本大学通信教育部商学部商業学科1年

本稿は、「令和3年度日本大学 学生FD CHAmmiT」の開催に至るまでの過程と開催後のアンケート結果より、学生スタッフの視点で今後の課題と展望を述べた活動報告書である。「日本大学 学生FD CHAmmiT」は、日本最大規模の総合大学である本学のスケールメリットを活かし、学生と教職員が互いの視点から授業改善について議論し、その具体策を考案する学内イベントである。本会は「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」として始まり、今回で9回目を迎えた。本活動報告が今後の日本大学の「学生FD活動」の更なる発展に貢献することを期待する。

キーワード：FD (Faculty Development), 学生FD, 「令和3年度 日本大学 学生FD CHAmmiT, アフターコロナにおける授業改革」

### はじめに

「日本大学 学生FD CHAmmiT」とは、全国の大学が集結する「学生FDサミット」の「日本大学版」である。「学生FDサミット」とは全国の大学から学生FD活動に取り組む学生・教員・職員が一堂に会し、各大学における活動や成果を発表し合い、大学教育における課題等を共有し、議論する場である。一方、「CHAmmiT」とはchatとsummitをかけ合わせた造語であることから分かりますとおり、大学をテーマに友だちとチャットをするように気軽に話し合い、その成果を発表する場である。私たちが学ぶ大学の教育をより良くしたいという思いに基づき、学生のみならず、教職員が参加していることも大きな特徴である。

今回で9回目を迎える「令和3年度日本大学 学生FD CHAmmiT」(以下、CHAmmiTとする)は、参加者はオンライン形式、学生スタッフは対面とオンラインのハイブリッド形式で開催し、245名の参加があった。学生スタッフは感染対策をしながら、ファシリテーションを行うことができた。本年度は、昨年度の議論内容と照らし合わせながら「セッション」を運営するという深い内容となった。

## 1. 今年度の「CHAmmiT」の概要と流れについて

今年度の「CHAmmiT」は昨年度の学部提案書と重ね合わせながら、より良い意見を抽出できるようにテーマを策定した。そして、CHAmmiT 当日は、学生と教職員がオンライン授業という未だ課題の多い事柄に対して、しっかりと話し合うことができたと自負している。以下、当日までのスタッフミーティングの様子と当日の動きを要約する。

### 1-1 第1回スタッフミーティング（令和3年6月19日）

初回ミーティングではCHAmmiTの概要を学生スタッフに説明し、今年度のテーマである「アフターコロナの大学教育の在り方×コロナ禍の現況を踏まえた上での質向上」に沿ったテーマとして「アフターコロナでの学修スタイルはどうなってほしいのか？」について、グループごとに分かれて話し合った。話し合った内容をGoogle Jamboard（以下、Jamboardとする）にまとめ、全体で共有した。Jamboardを初めて使うスタッフも多かったので、ツールに慣れてもらうためにも、より身近なテーマを設定した。

学生からは、従来の対面授業の再開のみならず、コロナ禍において普及したオンライン形式の授業のメリットを最大限に活用した、ハイブリッド型の授業を希望する意見が多く挙げられた。教職員からも、学生と同様に、オンライン授業を継続的に活用した授業展開に関する意見を確認した。どのグループの議論も活発に行われたものの、初回とあってJamboardの使い方に慣れていないことから、回数をこなして慣れる必要があるという問題を確認した。

### 1-2 第2回スタッフミーティング（令和3年7月3日）

第2回ミーティングでは、第1回で挙げられた意見を共有し、「オンライン授業の在り方～オンラインになっても大学に行くメリットは何だろう？～」というテーマについて、グループに分かれてJamboardを使って議論し、その後に全体で共有した。

コロナ禍において、多くの授業がオンライン化された。オンライン授業は対面授業の単なる代替手段でなく、オンライン授業ならではのメリットがあることを多くの参加者が指摘した。従来の対面授業の復活と共に、こうしたオンライン授業のメリットを継続して活かし、両者の「いいとこどり」や併用を望む意見が多く出された。

大学のキャンパスに行く価値については、教員とのコミュニケーションによる授業外での知識修得、大学の施設設備を活かした授業、研究の実施、同じ目標をもった仲間との交流、コミュニケーション能力の向上など、様々な意見が出された。

### 1-3 第3回スタッフミーティング（令和3年8月21日）

第3回ミーティングでは、「日本大学に学部を新設する場合の学部名と設置する場所は？」というテーマについて、グループに分かれてJamboardを使って議論し共有した。

今回からグループのファシリテーションはコアスタッフではなく、学生スタッフが練習を兼ねてファシリテーターを務めた。その為に、取り扱いやすいテーマを設定し、結論が出やすいグループワークを実施した。現在の日本大学のキャンパスの利便性の良さはそのままに、サテライト拠点の設置や、文系では社会学部、コミュニケーション学部、理系では看護学部、理学療法学部、中間学部として総合政策学部、情報学部などの新規設置の要望が出された。

そして、これまでの3回のスタッフミーティングを通して、いくつかの改善点が見つかった。Jamboard

の使い方や、整理方法についてまだ慣れていない学生が多く、グループディスカッションでの意見を発表しやすい形に体裁を整えることができていない学生が多かった。これらの点を確認することで、必要なスキルを再度確認するきっかけになった。

#### 1-4 第4回スタッフミーティング（令和3年9月11日）

第4回ミーティングでは「あなたは、なぜこの学部を選んだの?」「コアスタッフ及びミーティングへの要望」という2つのテーマについて議論した。

学部を選んだ理由として最も多く挙げられたものは、学修・資格取得、日本大学ならではの充実した施設・立地の良さ・ネームバリュー、卒業後の将来の目標達成への目的であった。さまざまなジャンルでの活動が盛んであること、実験設備の充実、資格取得支援の充実、他学部との交流ができることなどの意見もあった。

コアスタッフ及びミーティングへの要望では、本番がこういった形になるのか漠然としていて流れが把握できていなくて不安であるという声が上がった。ミーティングに対しては、スタッフ間の親睦をより深めたいという要望も上がっていた。今後は一気にスピードが上がり進路修正は容易ではなくなる。この段階でコアスタッフ・学生スタッフ間の疑問点や改善点を把握する事で CHAmmiT 成功につなげたい。

#### 1-5 第5回スタッフミーティング（令和3年10月9日）

第5回ミーティングでは、本格的なファシリテーションマニュアルの読み合わせと、本番を想定したセッション1の「キャンパスライフのメリット・デメリット」について、グループで共有した。

ファシリテーションマニュアルの読み合わせでは、ファシリテーターの役割を明確にし、本番でより良いファシリテーションが行えるように確認を行った。ただマニュアルを読むだけでなく、いかに沈黙の時間をなくし意見を出し合える時間にするのか、そしてオープンクエスチョンとクローズドクエスチョンをいかに使い分けるか、またメモを取りうまくまとめるコツなどについて共有した。キャンパスライフのメリットとデメリットについては、学生生活から得た経験を基に日本大学の教育現場の課題や良いところを Jamboard に書き出し、グループで共有した。

#### 1-6 第6回スタッフミーティング（令和3年10月23日）

第6回ミーティングでは、ファシリテーションマニュアルの共有と、本番を想定したセッション2の「アフターコロナの日大の教育」について、グループで共有した。

長期にわたった緊急事態宣言が解除され、授業もオンラインだけでなく対面式での授業が少しずつ増えてきた中、コロナ禍において導入されたオンライン授業を終息の方向に持っていくのではなく、ハイブリット型授業をはじめとする IT 化された授業や講義を今後どう取り入れ、活用していくのか、そしてどのような形で、学生・教員・職員にとってよりよい大学生活や教育に繋げる事が出来るのかを議論した。

#### 1-7 第7回スタッフミーティング（令和3年11月6日）

第7回ミーティングでは、前回ミーティング同様にファシリテーションマニュアルの共有と、セッション3の「IT化と大学教育～学部への提案～」についてグループで共有した。

昨年度の各学部の学部提案書に基づく改善報告書に取り上げられた改善点や提案点との繋がりや、合致する点はあるのかに着目して議論を進めた。

ファシリテーションのスキルに個人差がある為、ファシリテーション練習会を1週間の期間を設けて行った。

## 1-8 第8回スタッフミーティング（前日リハーサル）（令和3年11月27日）

前日リハーサルでは、コアスタッフは午前10時に集合し、最終的な流れ確認、それぞれの会場の確認、パソコンなどの接続環境の確認、オープニングとエンディングの最終確認を行った。

その後、13時から学生スタッフ全員と教職員で最終的なリハーサルとして、当日のファシリテーションマニュアルの読み合わせを行い、その上でファシリテーションのコツを再度共有し、当日と同じ時間配分でセッションの最終練習を実施した。その後、全員で全体の当日のスケジュール確認を行い、質疑応答を通して、メンバーの不安解消を図った。

## 1-9 令和3年度 日本大学 学生FD CHAmiT 当日（令和3年11月28日）

令和3年度は昨年同様にオンライン形式（Zoom）、スタッフは対面とオンライン形式によるハイブリット形式での開催となった。

学生からの提案により、スタッフと教職員は事前にZoom背景を統一し、スタッフの一体感を強化した。また、セッションで使用するJamboardは、使いやすいように事前に色分けの説明の付箋を付け、セッション2で昨年度の学部提案書を参考にしやすいように直接各学部の学部提案書を確認できるリンクを用意した。

### 1-9-1 10:00 スタッフ集合

現地参加スタッフは日本大学本部大講堂に集合した。

今年度のCHAmiTスタッフTシャツを配付し、出欠を確認後、集合写真を撮影した。キャプテンの挨拶に始まり、当日の流れを共有し、適切なソーシャルディスタンスを確保するためにいくつかの会議室に別れてZoomに接続し、準備した。

### 1-9-2 10:30～11:00 スタッフ最終打ち合わせ

オンライン参加のスタッフを含めスタッフ全員で、当日の流れの最終確認を行い、ファシリテーションマニュアルを説明し、質疑応答を行った。

### 1-9-3 12:30～ 一般参加者受付開始

コアスタッフにより参加者の出欠確認を行い、順次確認ができた参加者の入室を行った。

事前にZoomでの名前表示の設定をしてもらった入室管理であったため、入室はスムーズに進んだ。入室管理では、出欠確認と共に、それぞれのセッショングループにおける人数調整の要否確認を行った。そして参加者に対しては、注意事項の説明をスライドで行った。

### 1-9-4 13:00～13:30 オープニング

オープニングムービー、日本大学FD推進センター長である青木副学長と竹田キャプテンによる開会挨拶、参加者の参加場所アンケートの実施、CHAmiTについての説明がそれぞれ行われた。そして当日のテーマとスケジュールの共有、注意事項の案内や、より楽しんでもらうためのコツの共有が行われた。その後、ブレイクアウトルームへの移動を開始するアナウンスを行い、それぞれのグループへ移動した。ブレイクアウトルームでは、ファシリテーターがタイムキープしやすいように、ブロードキャスト機能で残り時間のアナウンスを適宜入れた。

#### 1-9-5 13:30～13:40 アイスブレイク

ブレイクアウトルームに移動し、グループのメンバーが揃ったグループから、簡単な自己紹介と「コロナ禍で得た趣味」、「無人島に持っていくなら？」というテーマで、自由に会話を楽しんでもらった。

アイスブレイクは、学部異なる参加者同士が初対面でも会話を楽しんでもらう機会とした。

#### 1-9-6 13:40～14:05 セッション① キャンパスライフのメリット・デメリット

セッション①では、学部を交えたグループに分かれ、キャンパスライフのメリットとデメリットについて議論した。このセッションでは、オンライン・オフラインのメリットとデメリットの4象限の意見をJamboardの付箋機能を使って共有した。参加者の学生生活から得た経験を基に日本大学の教育の課題や良いところを学部の違う仲間と共有することで、参加者の視野を広げたいという狙いがあった。セッション終了後、一度メインルームに戻った。

#### 1-9-7 14:10～14:20 アイスブレイク

セッション②・セッション③は学部ごとでのセッションで、セッション①とは異なるメンバーでのグループワークとなるため、セッション①の前と同様の内容でアイスブレイクを行い、自由に会話を楽しんでもらった。

#### 1-9-8 14:20～15:10 セッション② アフターコロナの日大の教育

セッション②では、セッション①で共有した内容を活かし、昨年度の学部提案書で取り上げられた改善点や提案点との繋がりや、合致する点があるかを、学部別のグループで共有した。繋がり（合致する点）がある場合は重要度が高い項目であり、繋がりがない場合は新たな課題となる可能性と区別した。昨年度のCHAmiTを元に作成された各学部の改善報告書で「実施不可」、「検討中」とされた項目やセッション①で「新しく出てきた課題」についても議論した。

進行はファシリテーターが行い、グループで出た意見はJamboardの付箋機能を活用し、参加者協力のもとJamboardを完成させた。

#### 1-9-9 15:20～16:00 セッション③ IT化と大学教育～学部への提案～

セッション③では、これまでのセッション①とセッション②で議論・共有した内容を活かし、学部に提案したいことについて話し合った。そして、これからのIT化と大学教育について考え、改善策を見出し、提案書を作成した。昨年までの状況を整理し、IT化出来そうなものを、今までのセッションでの意見を参考に提案した。

#### 1-9-10 16:05～16:30 エンディング

エンディングでは、セッション③で作成した学部提案書をそれぞれの学部を代表して危機管理学部、経済学部、生物資源学部の3学部の学生に発表してもらった。全学FD委員会プログラムワーキンググループリーダーである松戸歯学部平山教授と、土屋キャプテンが挨拶を行い、エンディングを締め、最後に集合写真を撮影し、エンドロールを流して令和3年度CHAmiTは閉幕した。

当日は事前の綿密な役割分担、リハーサルもあり、最後まで滞りなく開催することができた。

## 2. 参加者の制作物の分析

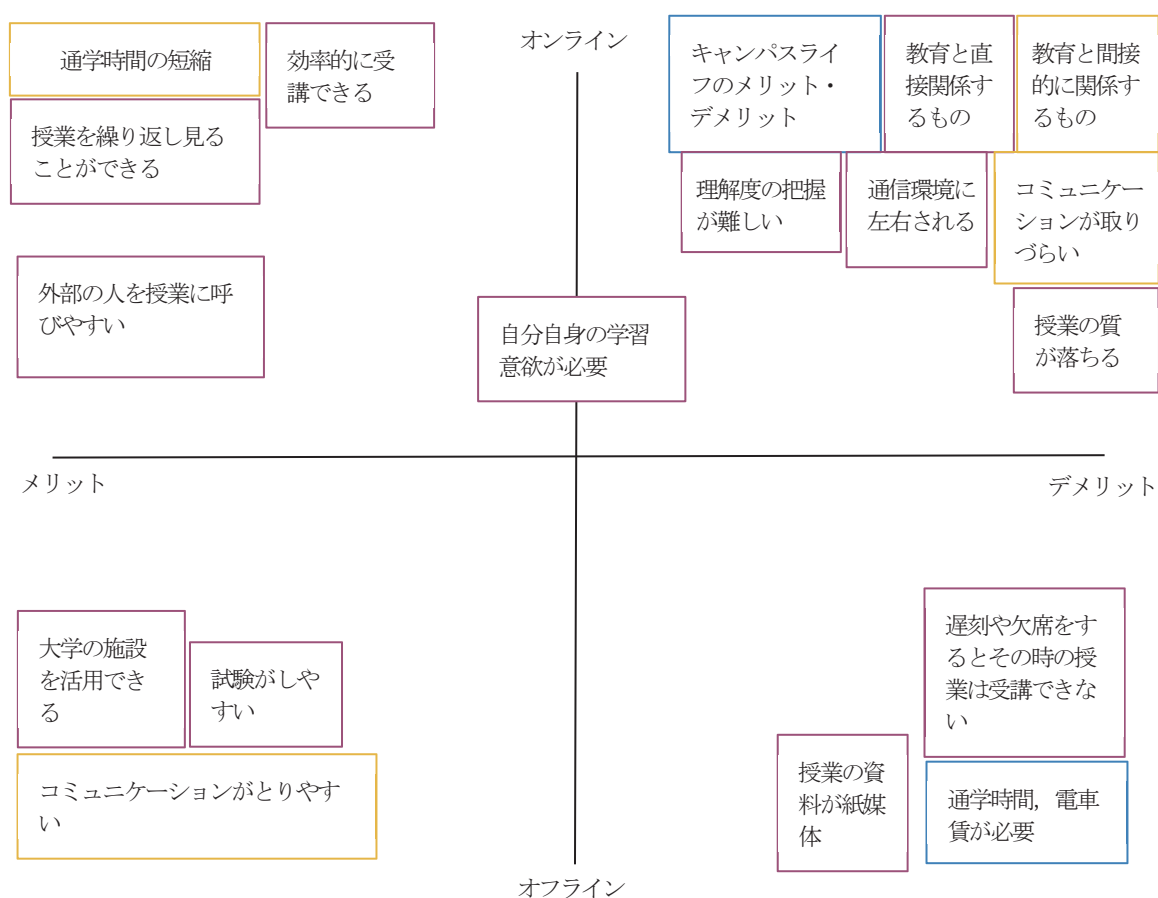
本節では、「令和3年度 学生FD CHAmmiT」のセッション①～③の制作物の分析を行う。

### 2-1 セッション①（キャンパスライフのメリット・デメリット）

セッション①では、学部混合でのグループに分かれてキャンパスライフのメリット・デメリットについて話し合った。

以下の図1は、ある学部の実際の話し合いの内容である。このように、4象限の図を用いて、オンラインにおけるキャンパスライフ、オフラインにおけるキャンパスライフという観点で、それぞれメリット・デメリットをあげた。日本大学の学生に関わらず、コロナ禍の大学生が感じていると思われる意見が多く出た。セッション②での改善点をより明確にするためにも、このセッションは重要であり、様々な意見が出たと感じている。

図1 セッション①



出所 筆者作成

## 2-2 セッション②・セッション③（アフターコロナの日大の教育）・（学部提案書）

セッション②では、同学部でのグループに分かれてアフターコロナの日大の教育について話し合った。セッション②は、「昨年度の提案」を現状の整理として、セッション①で話し合ったメリット・デメリットと現状の整理で似ている意見があれば、重要度が高いものとして話し合うというセッションであった。また、次に行うセッション③では、学部提案書を書くため、一年経った現在、新たに困っている事なども検討して、話し合った。その結果、日大生専用のアプリの開発や、学校内の混雑位置を示すパネルの開発、健康観察の簡略化などコロナ禍の日大生が普段感じていることが意見として多く出た。全体的に革新的な意見が多く、オンライン授業も様々な活用方法がある事を知ることができた。また、昨年度から提案し続けている事物に関しても、実施不可の場合を除き、しっかりと話し合うことができた。以下、他にも様々な意見が出たため、表1として記すこととする。

表1 セッション②，セッション③

| 学部    | 現状の整理                                                                                         | 新たな課題                                                                                                                                               | 提案                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 法学部 | <p>a. 課題・使用・授業の配信の形式の統一化をしてほしい。</p> <p>b. 学生間でコミュニケーションがとれない。</p> <p>c. 1年生にアドバイスする機会がない。</p> | <p>d. Zoomの次に対面授業の場合、Zoomを学校で受けられるようにしてほしい。</p> <p>e. 大学のWi-Fiを使いやすくしてほしい。環境を整えてほしい。</p> <p>f. ポータルサイトが使いづらい。</p> <p>g. オンラインだけだとお互いの情報交換ができない。</p> | <p>a. YouTubeで統一する。<br/>→利便性が良い。<br/>全学部で統一すれば費用が抑えられる。</p> <p>c. SAAS（多機能なクラスルーム）<br/>メリット &gt; 統計データが取れる。<br/>デメリット &gt; プライバシー権との関係。</p> <p>サークル認知のための活動をする。<br/>→新歓用の学園祭をする。<br/>→サークルが一覧できるクラスルームを作る（新入生が自主的にみるかどうか）。</p> <p>d, e. Wi-Fiの設備を整えればよい。<br/>→デメリット：費用が掛かる。</p> <p>f. ポータルの仕組みの改善<br/>→一定期間経つと閉じてしまう。重要な知らせがわかりづらい。都度パスワードの入力が大変。</p> <p>その他・課題の幅を指定する。<br/>&gt;同じ科目でも先生によって課題の量が大きく異なることがあるため差を軽減。</p> |

|        |                                                                                                                                                         |                                                                                                                                                                |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|--------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2 文理学部 | <p>a. 学生同士の交流の場を設けてほしい。</p> <p>b. 学生同士のZoom企画を、自ら立ち上げたい。</p> <p>c. 成績評価基準を教員同士で共有および統一化してほしい。</p>                                                       | <p>d. 対面出席者とそうでない人との間の公平をどう保つか。</p> <p>e. 1. 2年生の時にできなかった実習や実技の対応。実験・実習の簡略化。体験の場の減少。</p> <p>f. 対面化によるリモート慣れを配慮した対策。また、教科書の持ち運びが苦。</p> <p>g. 留学生への対応。</p>       | <p>d. 学生証スキャンによって、授業への出欠席などの管理。これを用いた成績の優劣。</p> <p>e. オンラインで基礎、対面で応用。</p> <p>f. PDFの配布の継続。<br/>→対面もリモートでもPDFで板書、レジュメの確認ができるようにする。ただし、意欲の有無による公開の差別化は必要。</p> <p>g. 帰国せずにオンライン化など。時間などの考慮が必要。</p>                                                                                                                                     |
| 3 文理学部 | <p>a. 交流の機会がない。</p> <p>b. フィードバックの実施や授業評価の細かい説明がほしい。</p>                                                                                                | <p>c. メンタルヘルスのケアを行ってほしい。</p> <p>d. 授業の組み方が大変だった。</p> <p>e. コミッツ（文理学部ポータルシステム）やブラックボード（文理学部遠隔授業学習支援システム）が使いにくい。</p>                                             | <p>c. オンラインでメンタルヘルスのケアを行う。<br/>→アンケートの実施。<br/>→知名度を上げて利用しやすくする。</p> <p>e. 通知をつける。<br/>オンデマンド型の授業を対面の授業にも活かせるようにする（休んだ時も大丈夫になる）。</p>                                                                                                                                                                                                 |
| 4 文理学部 | <p>a. 学生同士の交流の場を設けて欲しい。</p> <p>b. 学生同士のZoomでのイベントを学生が企画したい。</p> <p>c. 先生同士で成績評価の仕方を話し合って、評価の方法や基準を統一してもらいたい。</p> <p>d. オンライン授業でも、社会人聴講生を受け入れてもらいたい。</p> | <p>e. オンライン授業の環境による学修効果の差が出てきている。</p> <p>f. モチベーションの低下。</p> <p>g. フィールドワークなど実習ができない。</p> <p>h. Zoom交流会における参加率の低下</p> <p>i. 授業のZoomだけではその場で交流ができてその後の発展が難しい</p> | <p>f. オンライン授業の長期化による集中力、授業に対する意識の低下がみられる。<br/>→発言の機会を教員側で働きかけて増やす。出席を必ず取る。<br/>→Zoomにおいて、楽しめるような機能（ニコニコ動画のコメントみたいなもの）を使って、学修効果の向上を目指す。<br/>→学校内施設（図書館など）で自主的に勉強できる機会を増やす。また、オンラインで閲覧できるようにする（電子書籍など）。</p> <p>h, i. 授業後にそのままZoomに残る形で交流会を開く。<br/>→就活に関することや、授業に関することなど。<br/>→クラスの代表などの役割を作って、クラス会を開く。</p> <p>j. オンラインとオフラインの両立の難</p> |

|        |                                                                                                                                                                |                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|        |                                                                                                                                                                | <p>j. 完全対面化できない場合のオンライン・オフラインの両立の難しさ。</p> <p>k. 学生と先生の間で信頼関係を築けていない。</p> <p>l. 授業形式の差が大きく、理解度に関連する。</p>                                          | <p>しさ。</p> <p>→対面とオンデマンド型の2極化。</p> <p>→前後の授業の授業方法で対面が難しい場合もあるため、大学側で各授業の授業方式を把握する。</p> <p>k. 授業以外での関わりを作る。</p> <p>→コロナ禍以前は飲み会などで交流ができていたが、現在ではそれができないため、オンライン上でも気軽に交流できるような機会を作る。</p>                                                                                                                                                                                                                  |
| 5 文理学部 | <p>a. オンライン授業でも、社会人聴講生を受け入れてもらいたい。</p> <p>b. 学生同士の交流の場を設けて欲しい。</p> <p>c. 学生同士のZoomでのイベントを学生が企画したい。</p> <p>d. 先生同士で成績評価の仕方を話し合って、評価の方法や基準を統一してもらいたい。</p>        | <p>e. オンデマンド授業の場合に質問しにくく、質問のハードルを下げてほしい。</p> <p>f. 授業資料のデータを長期間残してほしい。</p> <p>g. 対面とオンラインとを選択できる授業を今後も継続してほしい。</p> <p>h. ハイブリッド型授業を学内で受けにくい。</p> | <p>c. 学生が常に自由に使える運動のスペースがほしい。</p> <p>e. 掲示板の活用。</p> <p>→掲示板の周知度が低いので、積極的に宣伝してほしい。</p> <p>→編入生へのブラックボードの使用方法の周知を徹底してほしい。</p> <p>→掲示板の形式をSNS方式のような形にしてみてもどうか。</p> <p>→掲示板を設けない授業もあるので必ず開設してほしい。</p> <p>→質問のために講義の後に必ずそのまま開いておいてほしい。</p> <p>f. 対面授業に戻っても課題をオンラインで提出できるようにしてほしい。</p> <p>g. 縦の繋がりを意識した交流の場を設けるべき。</p> <p>→文系・理系の学科間で交流する機会を設けるべき。</p> <p>h. ハイブリッド型授業の際に学内においてオンライン授業を受講できる専用スペースを置くべき。</p> |
| 6 経済学部 | <p>a. 対面授業の増加に関して。</p> <p>→ゼミ以外にも増加傾向ではある。</p> <p>また感染対策に関しては教室定員の50%以下になるよう調整し、徹底をしている。</p> <p>b. 全体的な課題の量を削減。</p> <p>→各授業において課題の量が増えたという声がある。各授業の教員に一任して</p> | <p>c. 学部全体の設備の見直しを図ってほしい(通信設備等)。</p> <p>d. 学内システムを統一化してほしい。</p>                                                                                  | <p>c.</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハイブリット型授業をする際など、電気供給や通信に限界を感じる。通信設備等の改修を行うことで学生・教員共に快適な学校生活を送ることが可能になる。</li> <li>・キャンパス手帳をもっと使用する機会を増やす。</li> </ul> <p>d.</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・課題の形式や容量に左右されない。</li> <li>・教員からの学生へのレスポンスが早くなりやすい(質問メールなど)。</li> <li>・課題等に関するなにかしらの上限制限を設ける。</li> <li>・学生のアクティビティの可視化。</li> </ul>                                              |

|        |                                                                                                                                                                              |                                                                                                              |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|--------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|        | いるが、最低限ラインを設ける等、学部でも検討中である。                                                                                                                                                  |                                                                                                              |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| 7 経済学部 | <p>a. 対面授業の増加。</p> <p>b. 全体的な課題の量を削減。</p>                                                                                                                                    | <p>c. ハイブリット型の講義であるとして、テストの際に不公平さを感じる。</p> <p>d. 授業に遅れてしまう場合がある。</p>                                         | <p>c. シラバスに授業形態を明示することを継続する。<br/>→シラバスは履修するときに不可欠なもの。授業形態を理解したうえで履修することが重要。また急遽その回だけ授業形態に変更がある場合は、ハイブリット型授業を展開する。</p> <p>a, c. 対面講義ができるなら、同時双方向型の講義は廃止する。<br/>→同時双方向型の講義は教室で講義ができないため行っていた。しかし教室で授業ができる体制が整うのであれば対面講義を導入してほしい。</p> <p>c, d. オフィスアワーを改めて周知する。<br/>→オフィスアワーについて知らない人一定数存在している。また質問する人がたくさんいる時、結果的に質問をできないことがある。そのためスムーズに質問ができるようにオフィスアワーの仕組みや質問しやすい時間帯を明記してほしい。</p> <p>c, d, オフィスアワー以外でも先生に質問できる環境を整える。<br/>→質問コーナーなどを作成することで、いつでも先生に質問ができるため、分からないことを早期に解決することができる。</p> |
| 8 商学部  | <p>a. 課題の提出方法及び期限が授業によって全く異なること。</p> <p>b. オンライン授業下において、新入生は在校生から授業に関して様々な情報を聞くことができない。</p> <p>c. オンライン授業の課題提出のツールを統一する（例Google Classroom）。又は管理ツールを作る。</p> <p>d. 在学生在が授業</p> | <p>f. 対面だからこそ質問がしにくい。</p> <p>g. 新入生に対しての発信の場がないこと。</p> <p>h. 相互履修制度を知らない学生が多い。</p> <p>i. 外部講師の方を呼ぶ機会が少ない</p> | <p>b, d, g, h. 入学の際に大学公式のlineグループを作り情報発信をする（「相互履修制度」についても流す）。</p> <p>f. 質問も含め、発言することで評価が上がるような評価方法を導入する（減点式じゃなくて加点式）。<br/>・オンラインの授業においての、公正なテストの実施（カンニング防止など）。<br/>・登校前の14日間の健康管理システムの記入義務は、改善して欲しい。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                               |

|         |                                                                                                                                                                                                                           |                                                                                                                                                                                                                                |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|---------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|         | <p>について新入生に伝える場を作る。</p> <p>e. 他学部の履修を積極的にできるようにする。</p>                                                                                                                                                                    |                                                                                                                                                                                                                                |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 9 商学部   | <p>a. 課題の提出方法及び期限が授業によって全く異なる。</p> <p>b. オンライン授業下において、新入生は在校生から授業に関して様々な情報を聞くことができない。</p> <p>c. オンライン授業の課題提出のツールを統一する（例 Google Classroom）。又は管理ツールを作る。</p> <p>d. 在学生が授業について新入生に伝える場を作る。</p> <p>e. 他学部の履修を積極的にできるようにする。</p> | <p>f. 健康観察システム：期間を縮小して学生の負担を減らすことができないか。他大学の状況を考えると自由に登校できる大学が増えている。</p> <p>サークルや部活でしか得られない経験を損なうきっかけになってしまっている。</p> <p>g. オンラインスキル：学生・教員でオンラインスキルの有無によって負担が変わってしまっている。</p> <p>これにより学修効果が薄れている可能性があるため動画によって解決したらいいのではないか。</p> | <p>b, d. 新入生が先輩学生に対して授業のことを聞く。</p> <p>全員が参加できるようなオープンチャットを作成することで解決できるのではないか。また、交流会を開催してブレイクアウトルームの人数を2～3人にする、ブレイクアウトルームで趣味について話せるようにするなど。</p> <p>・学部内でワールド・カフェ</p> <p>1年生や2年生にとってはゼミやスポーツの友達しかいないので、学部内ワールド・カフェを行うことで交流の機会を作る。</p> <p>e, g. LMSの統一</p> <p>他学部履修はLMSが統一されていないことによってできない。また、授業の受けやすさも新入生にとっては大事な要素になるのではないか。そのため、検討を続けることが必要なのではないか。</p> <p>オンラインスキルの有無によって学修効果が変わることに対して、課題の提出方法や出し方を動画にしてわかりやすくする必要があるのではないか。</p> |
| 10 芸術学部 | <p>a. 学生同士で交流できる場を設ける。</p> <p>b. オンデマンドにより、授業の理解度アップにつながる。</p> <p>c. 対面とオンラインのハイブリット授業。</p>                                                                                                                               | <p>d. 「学生同士で作品を見てコメントしコミュニケーションができるシステムについて」現在のGoogle classroomの機能だと、教員が課題を「質問」として出題すれば提出作品を学生同士で閲覧することは可能だが、他の受講生に見られないように、作者だけが見られる形でコメントを送れる機能はない。</p> <p>e. オンデマンド</p>                                                     | <p>d. 課題で作った作品を見てコメント、そこから同じ方向性を持つ人とコミュニケーションが取れるようなシステムが必要。</p> <p>全員作品を公開して、作者だけに見られるようなコメントが送れる機能がある場があると良い（他SNSで突撃は勇気がある）。</p> <p>e. オンデマンド授業でも、高校などの放課後に職員室で先生に質問をするような感じで、授業外に短時間（授業外のため、学生も先生も負担にならない程度が望ましい）でリアルタイムで質問できるようなタイミングを設ける。</p>                                                                                                                                                                                 |

|         |                                                                                                                                                                                                                                                              |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|---------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|         |                                                                                                                                                                                                                                                              | 授業において、学生が好きな時間に見られるという利点はあるが、質問に対しての教員のレスポンスが1週間以上かかることもある。                                                                                                                                                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| 11 芸術学部 | <p>a. オンデマンドで授業によっては理解度アップにつながられる。<br/>→授業や課題の時間配分が曖昧で予定が立てにくい時がある。<br/>→中途半端に日時を指定した再放送？的な授業があった。</p> <p>b. 対面授業でもオンラインとのハイブリッド（同時配信）を行うことで多面的な授業の活用とアーカイブ化を進める。<br/>→授業をYou Tubeなどで配信してアーカイブを残す。<br/>→芸術学部は著作物を使うことが多いため、記録を残すのがむずかしい。<br/>→音声のみアーカイブ。</p> | <p>c. 事前、事後学修や課題の量に関する情報を受講前にわかった方がよい。</p> <p>d. 一人で課題解決に挑むことが多く、新たな意見の獲得が困難。</p> <p>e. ハイブリッドだと学校往復の時間もある中で、同じ日にやる別のオンライン授業で当日締め切りの課題がある。</p> <p>f. 著作物（テレビ番組）を普通にアーカイブしてくれる授業としてくれない授業があってムラがある。</p> <p>g. 【教員目線】ハイブリッドだと、対面参加者とオンライン参加者両方に気をつけるため、忙しくなってしまう。</p> <p>h. 限定コメントに書いてもほぼ気付かれない。</p> <p>i. オンライン授業だとレポート課題が多いがフィードバックが</p> | <p>c. 事前、事後学修や課題の量に関する情報を、受講前に告知してほしい（特に必修科目以外の授業には配慮を求める）。<br/>→シラバスに明記。もしくは前週の授業で課題の量と想定時間を担当教員が明示すべき。</p> <p>d. 課題について意見を交換できる場が欲しい。<br/>→きっかけを作る場として、ガイダンスなどを対面で行い、連絡先の交換する機会にしてほしい。</p> <p>e. 課題の締切を工夫して欲しい。<br/>→授業外で取り組ませるレポートにおいて、当日締め切りを原則禁止にするべき。</p> <p>f. 著作物（テレビ番組）を普通にアーカイブしてくれる授業としてくれない授業があってムラがある。<br/>→視聴しやすい手段を教員側で提示。著作権でアーカイブが残せない場合は、せめて音声のアーカイブを残すなどする。</p> <p>h. 限定コメントに書いてもほぼ気付かれない。<br/>→質問の仕方をメールに統一し、教員にチェックを促す。</p> <p>i. 課題のフィードバックが欲しい。<br/>→教員からだけではなく、友人からもフィードバックが貰える環境を整える。</p> <p>j. 「次回の授業で扱うんでこの番組見といてね」という時間外労働的なやつ。<br/>→録画機器持っていない人はリアルタイムで見られないと次の授業終わり。<br/>→授業内で必要な資料がある場合は、極力教員側で資料を用意し、学生が十分に学修できる環境を整える。</p> |

|           |                                                                                                                                                                                                          |                                                                                                                                                           |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|-----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|           |                                                                                                                                                                                                          | <p>ないので、的を射たことを書いてあるのか分かりにくい。</p> <p>j. 「次回の授業で扱うんでこの番組見といてね」 っていう時間外労働的なやつ。→録画機器持っていない人はリアルタイムで見られないと次の授業終わり。<br/>→授業時間と課題想定時間を合計90分と取り決めてはいかがでしょうか？</p> |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| 12 国際関係学部 | <p>a. 定期的な先生と学生との交流の場について（オンライン授業において、オフィスアワーが機能していない）。</p> <p>b. オンラインサロンについて（コロナ禍において、学生同士で相談する相手がいない。Zoomを活用したオンラインサロン（交流の場）が欲しい）。</p> <p>c. 他大学の団体や全国規模の外部団体との繋がりについて（オンラインでの他学部との相互履修も実現して欲しい）。</p> | <p>d. 対面を開始しても、オンラインで授業を受ける学生の割合の方が多（先生方の視点）。</p> <p>e. インフラの整備（Wi-Fi）。</p> <p>f. 健康観察システムが厳格化されていない。</p> <p>g. 学食の場所が少ない。</p>                            | <p>b. 交流の場（オンラインサロン）を増やしてほしい（交友関係を広げる機会の増加）。<br/>→オンラインで他学部だけでなく、海外の大学と交流することができるワールド・カフェのような場を増やして行く。</p> <p>d. 対面でやる必要がある授業とそうでない授業を明確に分ける。<br/>→4年の卒論のように、オンラインでできるものは完全オンライン化する。</p> <p>もっと対面で行くメリットがほしい。<br/>→オンラインでもできれば、対面で行く必要がないため、ケーススタディーのような、実習型の授業を取り入れる。</p> <p>e. 誰でも自由にWi-Fiを使えるようにすることで、対面に来てオンラインの授業を受ける場合はもちろん学生の質が上がる。</p> <p>f. 健康観察システムをもっと簡略化する。<br/>→ログインに手間取ってしまっていて登録していない割合が多く、学生にゆだねてしまっている現状がある。<br/>→メールアドレスの入力記憶など簡略化する管理システムの改善等を行う。</p> <p>g. 北口の食堂の開放をしてほしい。<br/>→本校だけでは、高校生と同じ場で食べるため、密になってしまう。</p> |

|                       |                                                                                                                                 |                                                                                                                                                                                                                       |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|-----------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>13 国際関係・短大三島校舎</p> | <p>教材の購入先が学生によってまばら。</p> <p>定期的な教員と学生の交流の場がオンラインにない。</p> <p>オンライン上で学生同士が相談し合える場を大学側で用意していない。</p> <p>他大学や大規模な団体との連携が求められている。</p> | <p>教材購入を個人に委ねる場合、在庫切れになるリスクがある。</p> <p>オンラインにおけるオフィスアワー。</p> <p>他団体・他学部との交流の場の需要に応える。</p> <p>新入生を学生がサポートする。</p>                                                                                                       | <p>1. 学校を經由した指定ルート入手方法<br/>譲り受けや中古品購入などで確実に入手出来る方法をとる。<br/>個人で新品を購入するという選択をなくす。</p> <p>2. クラスルームの限定コメント機能利用<br/>他者の目や介入がないほうが気軽に相談しやすい。</p> <p>3・4. 日大公式のSNSグループチャットの作成<br/>目的に合わせて別々のグループをつくる。</p>                                                                                                                                             |
| <p>14 危機管理学部</p>      | <p>学部単位でFD CHAmniTのような取り組みを...</p> <p>認知度が低いのは「実際に学部に学生意見が反映された」成果が見えない。<br/>成果を確実にだし、かつスピード感をもって取り組む必要がある。</p>                 | <p>学生の意見を学部にダイレクトに伝える機会を設けスピード感をもって具現化してほしい。<br/>理由：学生の不満を吸い上げる手段が「学修満足度向上調査」と「授業評価アンケート」の2種類しかない。<br/>先生に意見を述べても改善される様子が見受けられない（伝えても改善されていない）ため、学部に直接伝える方法が欲しい。</p> <p>例：「対面・オンラインの選択を自由にさせてほしい」等の学生の意見が反映されづらい。</p> | <p>3年生各ゼミに調査し議論の場を作る。<br/>来年再来年期の学生のためにある程度学習を済ませている上級生へヒアリング。</p> <p>学部長との交流の場を設け、学生の意見や声を直接伝え、交流する場を作りお互いの考えを伝えあう様子をライブ中継し学生の意見を反映する場を作成するべきである。</p> <p>実現しやすそうな具体例1：ゼミごとに数名ずつ学生を呼び、現状の改善を求める声を聞き出す機会を作成し、その内容をまとめたものを学部長に提出することで学生の意見を教職員の方々に伝える。<br/>具体例2 SNSで学生の意見を反映させることのできるチャンネル・ポッドキャストを作成。上記1と合わせて、「吸い上げた学生の重見が反映される」ことを学部生に宣伝する。</p> |
| <p>15 スポーツ科学部</p>     | <p>課題の量が例年に比べて多いと感じる。</p> <p>オンライン授業進行中にトラブル等が見受けられる。</p>                                                                       | <p>1. オンライン授業のための自習室を増やしてほしい。</p> <p>2. オンライン授業サポート支部を作してほしい。</p>                                                                                                                                                     | <p>1. カメラon, マイクon専用の教室を開放してほしい。<br/>→静かな自習室の中で話し出すのは忍びないため。</p> <p>2. オンライン対面のハイブリッド型授業を推進してほしい。<br/>→座学（オンライン）で学んだことを対面（オフライン）で実習。</p>                                                                                                                                                                                                        |

|           |                                    |                                                                                                                                                                                                                                                    |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|-----------|------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|           | 通信環境障害発生時、授業に参加できない。               | 3. 健康観察システムに関して柔軟な対応をしてほしい。                                                                                                                                                                                                                        | <p>→今週オンライン授業，来週は対面授えといったスケジュールを作る。<br/>→スポーツ科学部は学部の特徴として対面で行わざるを得ないものがあるからオンラインだけでは不可。</p> <p>2. 対面授業動画をクラスルームでアップしてほしい。<br/>→授業をやむを得ない理由で休んだ学生のため。</p> <p>→資料だけで授業を振り返るのは忍びないため。授業動画を上げれば，休んだ学生のリカバリーになるのでは。</p> <p>3. 玄関検温，OKだったら学生も入校可能にしてほしい。<br/>→せっかく学校に来たのに健康観察システムを1日でも登録していない日があると入れないのはつらい。</p>                             |
| 16 理工学部 I | 遠隔での質問対応の工夫（メールでの質疑応答では，記号記載が難しい）。 | <p>電源設備などのインフラが教室にて不足している。</p> <p>大学のネット環境が不安定（教授の回線が落ちて教授が気付かない）。カメラ設備などZoomでの無駄な時間がある。</p> <p>対面とオンラインでの評価基準の違い<br/>・オンデマンドだとやる気が出ず，また，豆知識息抜きができない。</p> <p>空きコマ時学校内で勉強できる場所が少ない。</p> <p>出席確認の統一が不十分。</p> <p>何重にも出席確認を取っている。</p> <p>交流の場が少ない。</p> | <p>VR空間の導入（360° カメラなどを利用してオンライン参加者も対面参加者と同じように授業を受けられるようにする）。</p> <p>オンラインの学食（対面で来ている人たちとオンライン参加者が交流できる場所が欲しい）。TAの人員を充実させる。</p> <p>オンラインでのオフィスアワーを充実させて非対面の学生も質問しやすい環境を作る。</p> <p>学修内容や講義の性質によって評価の方法を検討。</p> <p>同時双方向授業がよい。</p> <p>空きコマに利用できる席を絞って設ける。</p> <p>科目によって提出先が違う。<br/>TAや課題など複数回行われる。<br/>講義以外での集まる場を学科毎だけでなく学部全体で企画する。</p> |

|                |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |                                                                                                                                                                                                                                                                                           |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|----------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 17 理工学部<br>II  | <p>&lt;検討中&gt;<br/>遠隔での質問対応の工夫（メールでの質疑応答では、記号記載が難しい）。</p> <p>&lt;理由&gt;<br/>FD活動としての課題であり、教員間で意見交換を行い、引き続き工夫・改善に努めていきたい。</p> <p>&lt;具体案&gt;<br/>1. AIを活用した質問アプリを作成する。授業の質問→先生が回答。<br/>授業以外の学校のシステムなどについての質問→AIが行う。<br/>2. Zoomを利用する。<br/>授業開始時に質問の時間を設ける。<br/>オフィスアワーに合わせて質問をしに行く。<br/>3. グループを作り、質問をしあって教え合う。解決しない場合に先生に聞く。<br/>→インプットとアウトプットを行うことで学生の理解にもつながり先生の負担も減る。</p> | <p>&lt;課題1&gt;<br/>対面とオンラインで内容に差異がある<br/>（ハイブリッドで生まれる不平等性など）。<br/>対面とオンラインどちらにするかという基準がない。</p> <p>&lt;課題2&gt;<br/>研究室の雰囲気分かりづらい。</p> <p>&lt;課題3&gt;<br/>課外学修（未来博士工房）などに取り組めなかったことや、実験、実習を行えなかったことへの対策。</p> <p>&lt;課題4&gt;<br/>教員の学生への教育、質問が統一されていない。</p> <p>&lt;課題5&gt;<br/>入館の方法の緩和。</p> | <p>&lt;具体案1&gt;<br/>内容が等しくなる様、対面で話した細かな補足もオンライン資料に反映させる。<br/>オンラインとオフラインでの差があるため学生が選びにくい。今後対面とオンラインが選べるようになり、対面希望者が多すぎるという問題が発生した場合は隔週で対面にする。</p> <p>&lt;具体案2&gt;<br/>対面にて研究室を見学する時間を設ける。<br/>先輩との交流などで雰囲気をつかみたい</p> <p>&lt;具体案3&gt;<br/>未来博士工房のシステムの再開と、実験、実習の補講を行ってほしい。</p> <p>&lt;具体案4&gt;<br/>それらを予想できる出来事のマニュアルを作成することによって緩和させる。</p> <p>&lt;具体案5&gt;<br/>事前に予約を受け付けることによって図書館など入館を緩和してほしい。</p> |
| 18 理工学部<br>III | a. 遠隔での質問対応の工夫。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              | <p>b. 教員によって使うフォームが異なる。</p> <p>c. 図書館の滞在時間が短い。</p> <p>d. 卒業研究で研究室の試料（資料？）が見にくい。</p>                                                                                                                                                                                                       | <p>i. 一般教養科目などをオンライン化して時間割にとらわれず好きな科目が受講できるようにする。</p> <p>j. オンラインでアクセスできる電子書籍と論文の拡充。</p> <p>k. QRコードのトレーサビリティを用いた混雑化の見える化。</p> <p>l. 雑多な雑談ができるオンラインコミ</p>                                                                                                                                                                                                                                           |

|               |                                                                                    |                                                                                                                                                                                                    |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|---------------|------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|               |                                                                                    | <p>e. タワースコラの1階導線の見直し。</p> <p>f. オンラインとオフラインの授業のつながりが不安。</p> <p>g. 実験は参加者全員毎日登校させてほしい。</p> <p>h. 対面授業を選択しているにも関わらず授業に参加しない学生への対応。</p>                                                              | <p>ユニティ。</p> <p>e. タワースコラにおけるフリースペースの増設。</p> <p>h. 授業動画をオンデマンドで残す。</p>                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 19 理工学部<br>IV | <p>a. 遠隔での質問対応の工夫。</p> <p>b. 他学部の講義の受講。</p> <p>c. 手続きの簡易化(授業のオープン化を進めるように検討中)。</p> | <p>d. 提出期限の統一。</p> <p>e. システムの共通化(moodle CSTポータル:授業支援サイト)。</p> <p>f. コミュニケーションが取れない人へのアプローチ方法。</p>                                                                                                 | <p>d. 学科毎にスケジュールの見える化を進める。</p> <p>e. moodleでの履修登録の簡易化をする。もしくは一元管理をする。</p> <p>f. 困りごとのある学生の早期発見を進めるため、ピアサポーター(学生)を導入する。</p>                                                                                                                                                                                                |
| 20 短大船橋<br>校舎 | <p>a. 授業の質について検討。</p> <p>b. 課題のフィードバックについて検討。</p> <p>c. 交流会 (Zoom) についての検討。</p>    | <p>e. 成績評価で公平性を保つのが難しい。</p> <p>f. オンラインとオフラインの混合授業形態の工夫。</p> <p>j. 対面とオンラインどちらも質問の仕方の見直し。</p> <p>h. ハイブリット授業の検討。</p> <p>i. 交流会の積極的な実施。</p> <p>j. オンライン授業の技術の共有。</p> <p>k. オンライン交流会も大学の予算を使用した。</p> | <p>e. 今後オンライン授業となる場合であっても対面試験実施を確保するなど、成績評価の公平性を保つ方法確立してほしい。</p> <p>f. 授業ごとにどちらの方が有効的かを判断して、時間割を工夫する。<br/>もっとPCの取り扱いができるようになるカリキュラムにしていく。</p> <p>i. 例えば毎週土曜日に定期で交流会を実施するなど、学生間や先生方と気軽に交流する場があるとありがたい。</p> <p>j. PCだけでなくスマホやタブレットでも授業が受けられるようにしてほしい。</p> <p>l. Google classroomに統一することでトラブル発生時の教務課、教員、学生の負担が減るのではないかな。</p> |

|           |                                                                                                                                       |                                                                                                                                                   |                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|           |                                                                                                                                       | 1. 授業サイトが複数あり大変。                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 21 生産工学部Ⅰ | a. 教職学で今後の授業の在り方を考える。                                                                                                                 | b. イベントの開催。<br>c. 交流を目的としたクラスの設定。<br>d. オンライン授業の資産・資源の有効活用。                                                                                       | b. 映画鑑賞など、継続的な交流につながるようなイベントの開催。<br>生産工学部ならではのイベントの開催。<br>学生からのニーズと学科の専門性をふまえたオンライン・オフラインイベントの開催。<br>c. オンライン上では踏み込んだコミュニケーションが難しいため、対面でのやり取りを重視した枠組みを用意。<br>d. 講義の教材・動画は履修終了後でも復習できるようにアーカイブ化。<br>教職員が作成した授業ビデオ・資料が閲覧でき、加えてデジタル学生証が使用できる、日大生専用アプリを開発。                         |
| 22 生産工学部Ⅱ | a. 教職学で今後の授業の在り方を考える<br>(セッション形式で昨年度のオンライン授業の経験を踏まえた今年度の対面授業の実施について、情報交換や意見交換を行い、教職学で考える→9月頃実施予定)。<br>b. 機会不足が原因で、学生の声が届いていないのではないかと。 | c. 対面と比較して学生の反応がわかりにくいため、授業改善がしにくい。<br>d. 登校することが少ないため、キャンパスについて知る機会が少ない。<br>e. 学部提案書の内容の周知不足。<br>f. 課外活動などの制限。<br>g. オンライン授業継続、もしくは対面授業再開における対応。 | c. 授業評価アンケートの効果的な活用などを通して、学生の声を聴く、教職員の声を届けるシステムづくり。<br>d. キャンパス内をわかりやすく紹介した動画やマップなどの作成。<br>サークルなどのSNS発信。<br>e. 教職員への強いリマインダー+新たな提案書の発信。<br>f. サークルや部活動の活動制限の緩和。<br>g. 対面で実施した授業を動画として残り、復習でできるようにする。<br>対面とオンラインのそれぞれの良い点を相互作用させる。<br>科目や科目内容の対面・オンラインの決定など、教職学の話し合いによるIT化の選別。 |
| 23 生産工学部Ⅲ | a. 教職学で今後の授業の在り方を考える。<br>b. 自主的に学修する。<br>c. オンライン授業だと成績評価が高くなっているが、対面で試験した場合にど                                                        | e. 自主性が求められる。やらなければ下がる。<br>f. オンラインから完全対面への猶予期間を作るべきか。                                                                                            | e. 甘えずに行動する。<br>先生からの呼びかけ。<br>向上心を持つ。<br>できる人を救う環境づくり。<br>FDで全体に発信する。<br>健康観察システムとポータルシステムを同期しポータルシステムも見られるようにする。<br>f. テストのやり方や課題の統一など、移行期間で授業をどのように受けるかイメージを知りたい。                                                                                                            |

|          |                                                                                         |                                                                                                              |                                                                                                                                                                                                                 |
|----------|-----------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|          | <p>れだけ問題が解けるか心配。</p> <p>d. 「研究内容や計算能力といった学力の低下」「意欲的な人の減少」などオンライン授業で失ったものも多い。</p>        |                                                                                                              | <p>教室内でディスタンスがとれるのか。</p> <p>カリキュラムで決められたらスムーズになる。</p>                                                                                                                                                           |
| 24 工学部 I | <p>a. 授業及び課題形式の統一化。</p> <p>b. 出席確認の統一化。</p> <p>c. 課題提出先の統一化。</p> <p>d. 面接授業を録画して配信。</p> | <p>e. 他の場所にも感染症対策としてカードリーダーをつけてほしい。</p> <p>f. 出席確認を寛大化してほしい。</p> <p>g. 課題提出できたかわかりやすくしてほしい。</p>              | <p>e. カードリーダーのために本館に出向くのは大変であるため、70号館に何か所か設けてはどうか。</p> <p>f. 欠席扱いになってしまうことから長期のインターンに行けない場合があるため、証明書の発行や企業からのメールで就活を公欠扱いにしてはどうか。</p> <p>g. 課題提出が出来たかわかりにくい為何度も回答を送信したり回答し忘れたりすることがあるため、回答のコピーを回答者に送信してはどうか。</p> |
| 25 医学部   | すべて実施済み                                                                                 | <p>・試験の結果や模範解答を提示してほしい。</p> <p>・試験中の退出についての明確な基準が欲しい。</p> <p>トイレのための退室を認めてほしい。</p> <p>授業資料と配付資料を統一してほしい。</p> | <p>オンライン授業に慣れているので、対面授業になっても、紙資料だけでなくPDF 版の資料が欲しい。</p> <p>実習の予備日を設けてほしい。</p>                                                                                                                                    |
| 26 歯学部   | <p>Googleドライブが使いにくい。提出に関する質問が多い。</p> <p>提出物の形式が学年で違う事が多いためクラスルームでの統一。</p>               | <p>先輩後輩のつながりが無くなってしまう。新しく入った人とコミュニケーションを取る機会が少ない。友達の作り方がネット上になり得意・不得意ができてしまう。</p>                            | <p>課題提出配付方法の統一ができないか。</p> <p>新しく入った人とコミュニケーションを取る機会を用意できないか。</p>                                                                                                                                                |
| 27 松戸歯学部 | <p>教員と学生間の交流の場を増やす。</p> <p>確認試験を増やす</p> <p>講義の日と実習の日を分け</p>                             | <p>教材管理システムがばらばら(学修支援システム, Webclass, Googleドライブ)。</p>                                                        | <p>新校舎に向けて学生の意見を反映できるように、アンケートをして欲しい。</p> <p>交流会(学生間・学生と教職員間)の開催。</p> <p>他学部のように松戸にも学生FD団体を作ると良い。</p>                                                                                                           |

|           |                                                                                                                                 |                                                                                                                                                                                                                                |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|           | <p>る。</p> <p>オンラインでの交流会の場を増やす。</p> <p>Wi-fi関係の強化</p>                                                                            |                                                                                                                                                                                                                                | <p>教室やレンタルスペースをオンラインで予約可能に。</p> <p>ネットワーク登録・接続の申請の省略。講義資料の規格化・統一化。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 28 生物資源学部 | <p>1. ハイブリッド型授業の実施。</p> <p>2. 教員向けオンライン授業の講習。</p> <p>3. 利用していない施設等の費用減免。</p> <p>4. 学生と教員が個別に意見交換を行う場とそれを踏まえた教員同士の話し合いの場の設定。</p> | <p>先生ごとに講義スライドやPDFにばらつきがある(見易さ等)。</p> <p>図書館や学生食堂等の終了時間。学生と教員が意見交換をできる場が授業評価アンケート止まり。</p> <p>実験実習の中止。利用度が減った施設については、その理由を分析して、施設の改善を図る理由を図る必要があるのでは？</p>                                                                       | <p>やむを得ない事情で対面授業へ参加できなかった学生への振替やオンデマンド授業を利用した補講。</p> <p>電子書籍や有料論文のデータをリクエストできるような設備が欲しい。</p> <p>対面でもオンデマンドでも、匿名性のある質問箱等、先生方に質問や意見を投げかけられるフォームの設置。</p> <p>減免の代わりに資格や試験の受験費用にあてる。</p> <p>成績に応じて奨学金を設ける。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 29 薬学部    | <p>配信側の通信トラブル</p>                                                                                                               | <p>1. ラーニングコモンズ・スペースを構築する。</p> <p>2. 6年生以下でも使用できる既存の自習室の開放。</p> <p>3. 在学生との交流の場を設けること。</p> <p>4. サークル活動がしにくい状況なので学校内の活動も少しずつ許可してほしい。</p> <p>5. リモート授業において教員と学生の間で意思疎通できる新たな方法を探る。</p> <p>6. リモート授業におけるライブ配信とオンデマンド配信の使い分け。</p> | <p>-対面授業の制限などで学生間の交流が少なくなっているため、授業外では対面で仲間と学修することの重要性をしている。そのような学修スペースの提供をしています。研究室によっては自習しに来て良い場合があるが、実験機器や器具等で十分なスペースを取ることのできない研究室もあるため、空いている教室を自習室として開放してはしい。</p> <p>学修がオンライン中心となった今だからこそ、学年を横断しコミュニケーションの重要性を感じている。制限付きでもよいので部長の申請に基づき対面での構内サークル活動実現を求める。</p> <p>5.</p> <p>-課題に関して、しっかりと確認しているのかどうか内容を含め、授業中などにフィードバックを行ってほしい。</p> <p>6.</p> <p>ライブ配信は生であり緊張をもって授業を受けることができ、アーカイブを見直すこともできるため、基本的にライブ配信を中心に行ってほしい。オンデマンドでは聞き取れなかった部分を巻き戻したりして本来の授業時よりも長くかかってしまう。</p> |

|          |                                                                                 |                                                                                                                                                                                                                    |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|----------|---------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|          |                                                                                 | <p>7. リモート授業における課題の提出方法の統一化。</p> <p>8. 理解度を都度測れるリアルタイム授業アンケートのシステムの構築。</p> <p>9. 学生間での授業理解度の比較。</p> <p>10. リモート授業における確認試験や小テスト等の成績評価が真の実力に結びついていない。</p> <p>11. 授業後の課題(小テストなど)のあり方。</p> <p>12. 他学部の一部の授業を受講できる。</p> | <p>7.<br/>-何の課題がいつまでに(提出期限)出されているのか、教員も学生もすぐに見てわかるように、掲示板を作成してほしい。</p> <p>-オンライン上で課題を提出する際、形式(Word, PDF等)やファイル名の指示が異なっていたり、指定がなく迷ったりするため、統一を行ってほしい。</p> <p>-授業の途中で、学生がどのくらい理解できているのか調べるための簡単なアンケートを行う。Zoomにもアンケート機能はあるが、準備するのに時間がかかるため、Googleフォームのような簡単に利用できるものを用意してほしい。</p> <p>-学生から質問が来た際は、匿名にして、質問内容及び回答が、その授業を受けている人全員が見られるように共有を行ってほしい。</p> <p>10・11.<br/>-小テストは復習になるのであった方がよいが、先生によっては小テストのまま試験に出す場合もあり、小テストを覚えれば定期試験はパスできる。しかし、実際にはあまり知識が身につけておらず、模試などで躓いてしまうといったことが起きるため、改革が必要である。</p> <p>-教養豊かな人材育成のために、日本大学であるからこそその良さを活かして、授業のアーカイブなどを共有して他学部の授業も見られるようにしてほしい。</p> |
| 30 通信教育部 | <p>授業配信時間や視聴時間は教員に学修効果を理由に教員に一任している</p> <p>情報発信や締切等のリマインドはシステム改修の必要があるため難しい</p> | <p>通信教育部特有の各種締切の多さがある上に、感染状況によりイレギュラーな情報変更があるなど、スクリングがオンラインになったことによる各種通知が増えた。</p> <p>1年前から多様な学修方法や多様なバックグラウンドの学生がいたが、コロナによりもっと増え、既存の学修方法が合わなくなっている。</p>                                                            | <p>情報発信の時間目安を出して欲しい。</p> <p>早く出して欲しい。</p> <p>学修センターのオンライン版を作って欲しい。</p> <p>1対1ではなく学生同士で会話ができる場所が欲しい。</p> <p>レポートを手書きの郵送から学部と同じオンライン提出にして欲しい。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |

### 3. 参加者アンケート分析

本節では、当日実施したアンケートを元に「令和3年度 学生FD CHAmiT」について参加者の視点から考察する。

最初に認知度に関する設問を分析していく。

表3-1-1

今回のイベント以前に「FD」について知っていましたか？

|     | はい |       | いいえ |       |
|-----|----|-------|-----|-------|
|     | 人数 | 割合    | 人数  | 割合    |
| 昨年度 | 89 | 48.0% | 82  | 52.0% |
| 今年度 | 93 | 54.4% | 78  | 45.6% |

出所 筆者作成

表3-1-2

今回のイベント以前に「学生FD」について知っていましたか？

|     | はい |       | いいえ |       |
|-----|----|-------|-----|-------|
|     | 人数 | 割合    | 人数  | 割合    |
| 昨年度 | 73 | 42.7% | 98  | 57.3% |
| 今年度 | 84 | 49.1% | 87  | 50.9% |

出所 筆者作成

表3-1-1と表3-1-2は「FD」と「学生FD」の認知度について去年のCHAmiTアンケートの結果と比較したものである。

まず、表3-1-1から「FD」についての認知度は昨年度と比べて今年度は6.4%増加していることがわかる。さらに表3-1-2より「学生FD」についての認知度も昨年度と比べて今年は6.4%増加していることがわかる。

以上の結果から、昨年度と比べて「FD」「学生FD」の認知度はどちらも約6%程度増加しているため、今年度はFD活動を知ってもらう為の活動を昨年度より行えたといえる。

次に今年度の満足度や参加者の意識の観点から考察する。

表3-2-1

「令和3年度日本大学 学生FD CHAmiT」は全般的に楽しめましたか？

|     | 非常に楽しい |       | 楽しい |       | 普通 |       | あまり楽しくない |      | つまらない |      |
|-----|--------|-------|-----|-------|----|-------|----------|------|-------|------|
|     | 人数     | 割合    | 人数  | 割合    | 人数 | 割合    | 人数       | 割合   | 人数    | 割合   |
| 昨年度 | 55     | 32.2% | 76  | 44.4% | 30 | 17.5% | 6        | 3.5% | 4     | 2.3% |
| 今年度 | 61     | 35.7% | 87  | 50.9% | 19 | 11.1% | 2        | 1.2% | 2     | 1.2% |

出所 筆者作成

表3-2-2

「学生FD」を他の学生・教職員にも紹介したいと思いますか？

|     | はい  |       | いいえ |       |
|-----|-----|-------|-----|-------|
|     | 人数  | 割合    | 人数  | 割合    |
| 昨年度 | 148 | 86.5% | 23  | 13.5% |
| 今年度 | 161 | 94.2% | 10  | 5.8%  |

出所 筆者作成

表3-2-3

令和3年度「日本大学 学生FD CHAmiT」を通じて学部に戻り、「学生FD」について何か行動を起こしたいと思いますか？

|     | 必ず何かしたい |       | 機会があればしたい |       | 学生FD組織があれば関わりたい |      | 思わない |       | わからない |       |
|-----|---------|-------|-----------|-------|-----------------|------|------|-------|-------|-------|
|     | 人数      | 割合    | 人数        | 割合    | 人数              | 割合   | 人数   | 割合    | 人数    | 割合    |
| 昨年度 | 21      | 12.3% | 85        | 49.7% | 16              | 9.4% | 21   | 12.3% | 28    | 16.4% |
| 今年度 | 33      | 19.3% | 94        | 55.0% | 15              | 8.8% | 12   | 7.0%  | 17    | 9.9%  |

出所 筆者作成

上記のアンケート結果はCHAmiTの活動を客観的に評価するにあたって重要なデータである。

まず表3-2-1を考察する。この表では「非常に楽しい」又は「楽しい」と回答した参加者が昨年度は全体の76.6%、今年度は全体の86.6%を占めており、昨年度と比較しても非常に高い数値が出ていることがわかる。「普通」「あまり楽しくない」「つまらない」と回答した参加者も昨年度より減少しており、昨年度問題であったオンライン上でのコミュニケーションを図る難しさが若干解消されたと考えられる。

次に表3-2-2を考察する。この表では「学生FDを紹介したい」と回答した参加者は全体の94.2%を占めており、昨年度に引き続き高い水準を維持していることがわかる。前述した満足度の評価も高かったことから、今年は他の学生や教職員に勧めたくなるほどの充実感を感じた参加者が多かったことが推測できる。

最後に表3-2-3を考察する。この表では「学生FD活動について何か行動を必ず起こしたい」「機会があれば起こしたい」と回答した参加者が全体の74.3%を占めていた。「行動を起こしたいと思わない」と回答した参加者も昨年より5.3%減少しており、参加者の意識が積極的になっていることが考えられる。

以上の結果から、昨年度と比較して今年度のFD活動は全体的に積極的で肯定的な姿勢の参加者が多いことがわかった。昨年度は変化したFD活動の指針に伴い様々な意見が寄せられたことで全体的に満足度が低下していたが、今年度は昨年の反省を踏まえて活動したことで満足度の向上につながったと推測できる。最後に参加者の今後のイベントに関しての意識について考察する。

表3-3-1

次年度もこのようなイベントが開催されるとしたら、参加したいですか？

|     | 何があっても参加したい |       | 声が掛かれれば参加したい |       | あまり参加したくない |      | 参加したくない |      | 企画側として参加したい |      |
|-----|-------------|-------|--------------|-------|------------|------|---------|------|-------------|------|
|     | 人数          | 割合    | 人数           | 割合    | 人数         | 割合   | 人数      | 割合   | 人数          | 割合   |
| 昨年度 | 20          | 11.7% | 124          | 72.5% | 16         | 9.4% | 4       | 2.3% | 7           | 4.1% |
| 今年度 | 18          | 10.5% | 128          | 74.9% | 12         | 7.0% | 7       | 4.1% | 6           | 3.5% |

出所 筆者作成

表3-3-2

今年度もZoomによるオンラインでのCHAmiT開催でしたが、今後もオンラインでの学生交流等のイベントはあったほうが良いですか？または、何かアイデアがある場合はその他に記載してください。

|     | あった方がよい |       | 対面と併用して欲しい |       | 対面が良い |       | その他<br>(アイデア) |      |
|-----|---------|-------|------------|-------|-------|-------|---------------|------|
|     | 人数      | 割合    | 人数         | 割合    | 人数    | 割合    | 人数            | 割合   |
| 昨年度 | 73      | 42.7% | 66         | 38.6% | 23    | 13.5% | 9             | 7.4% |
| 今年度 | 79      | 46.2% | 55         | 32.2% | 33    | 19.3% | 4             | 2.3% |

出所 筆者作成

まず表3-3-1を考察する。「次年度のFD活動のようなイベントがあれば何があっても参加したい」「声が掛かれれば参加したい」と回答した参加者は85.4%と昨年度より1.2%増加した。しかし「参加したくない」と回答した参加者が昨年度より増加し「企画側として参加したい」と回答した参加者が昨年度より減少している。これは今回のCHAmiTの内容が昨年に比べて複雑化したことで参加する難易度が上がったことが

理由として考えられる。

次に表3-3-2を考察する。「オンライン上でのイベントがあった方が良い」または「対面が良い」と回答した参加者がそれぞれ増加している。これは昨年から授業などでオンライン状態を経験したことによりオンラインと対面の特徴を深く理解したため、意見がわかれたと考えられる。

#### 4. 学生コアスタッフからの所感等

##### 4-1 「また、今年も一つ進化した CHAmmiT」 竹田 蘭丸

(日本大学国際関係学部 国際総合政策学科2年・令和3年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ キャプテン)

初めに、「令和3年度日本大学 学生FD CHAmmiT」を開催するにあたり、6月からテーマや今年の動きの検討を共にしてくださった学務課及び担当教員をはじめとする多くの関係者の皆様に厚く御礼を申し上げる。重ねて、史上最も多かった学生スタッフの皆様にも定期ミーティングなどに参加していただいたことに厚く御礼を申し上げる。

今年度、私が応募した理由としては、昨年度、学生コアスタッフとしてやりきれなかった部分があったからである。昨年度は、流れについていくのが精一杯という状態だったため、余裕がなかった。そして、今年度も私の学部ではオンライン授業が主流となった。その中で、まだまだ改善できる点が大いにあると感じ今年度も学生コアスタッフに応募したのである。

私は、題名の通り、今年度のCHAmmiTも大きく成長したと考える。そのように考えられる理由が、何点かある。

一点目は、今年度はコアスタッフ内での役割分担がしっかりと出来たことである。役割として、全体を仕切るキャプテン、インスタグラムなどの広報活動をするインフルエンサー、定期ミーティング等の報告書をまとめるセクレタリー、定期ミーティングの内容を検討するマネジメント、学生スタッフ同士の懇親を深めたりするためのレクリエーション等を企画するチームビルディング、当日のポスター作りやTシャツ作りをした美術部という風に細分化した。昨年度は、やるべきタスクが決まっても、振り分けが上手くいかなかったりした。また、昨年度のコアスタッフと今年度のコアスタッフの大きな違いでもあった経験年数の差があった。昨年度のコアスタッフは、皆が経験していたため一年間の流れが分かっていたため、誰にタスクを振っても基本的にはできてしまっていたのだ。しかし、今年は新しい人が非常に多かったため、CHAmmiT経験者がそもそも少なかったのだ。だから、一から組織化することで乗り越えることが出来た。次年度以降もこの役割分担を活用して行って頂きたい。

二点目は、スタッフは対面、参加者はオンラインという形で今年度は開催された。この形のメリットを挙げると、大人数を収容する会場を用意しなくてよいという点と、遠方のキャンパスの人たちはわざわざ行く必要がないという点である。このことは、国際関係学部にも所属している私からすると、非常に良い事だと考える。オンラインでの参加であれば、国際関係学部や工学部といった遠方のキャンパスの人たちも、気軽にCHAmmiTに参加できるのではないかと感じた。次年度以降もオンラインでの参加者を募っていただきたい。

私の反省点としては、スタッフとのコミュニケーションの方法とテーマの内容が難しいものになってしまったということである。一つ目のスタッフとのコミュニケーション方法という観点では、私の基本的なやり方としてみんなの意見を聞きながら進めるというやり方が主流であった。だから、コアスタッフのミーティングを定期的で開催した際に、意見を求めすぎてミーティングの進行が止まったりした。また、12

人という人数の都合上、コアスタッフ全員とのすり合わせを行う事にも問題が生じてしまった。例えば、土曜日の定期ミーティングを開催するにあたって、毎回テーマを策定していたのだが、ミーティングの内容に誤解が生じていて、各ブレイクアウトルームに分かれた後、各コアスタッフの間でテーマの理解が十分に共有されていなかったせいで、やっていることが違ったりしたことがあった。だから、コアスタッフのミーティングを欠席した人には別で議事録データを送ったり、電話をしたりして何とか伝達することを心がけた。また、2年連続コアスタッフという立場になって、昨年度の進め方と比較し過ぎてしまったことも反省として挙げられる。今年度は、コアスタッフの中でも CHAmmiT の例年の流れを分からない人が多い中で、私だけが流れを知っている状態であった。そのため、コアスタッフの中でも理解を得たりすることが難しかった。しかし、何とか当日までに形にすることが出来たということが幸いであった。

今年度のテーマは、昨年度の学部提案書と比較をしながら、改めて昨今のオンライン授業や対面授業のあり方に関して、話し合うというものであった。「アフターコロナ～IT化と大学教育～」というテーマで、コロナが収束した後も、オンライン授業をどこまで取り入れていくのか、どうやって取り入れていくのか、等を検討することに尽力した。このテーマに策定した理由として、昨年度の学部提案書は実現性が低い意見が多くみられた。例えば、「満員電車に乗るのが嫌だから、オンライン授業にしてほしい。」等である。他にも実現が難しい意見が多数あった。私たちは、教職員の方達とより良い授業づくりをするために CHAmmiT を毎年開催している。つまり、一方的な意見は効率的な話し合いにつながらない。私たちは、こういった点に目を付けた。そして、初の試みとして昨年度の内容とリンクさせたテーマを策定した。その結果、一般スタッフの皆さんには当日複雑なファシリテーションをさせてしまった。しかし、どのグループも特に大きな問題もなく、しっかりとファシリテーションをしてくれたおかげで、昨年度よりも実りのある意見を提案することが出来た。次年度以降の課題として、早期にテーマや方向性を策定して、できるだけファシリテーションする側の立場に立って当日のプログラムを決めることが重要であると考えている。

以上のように、当日までここにも書ききれなかったことも含めて、様々な事が起きた。しかし、重要な事は「日本大学の学生が日本大学の授業を少しでも良くしたい!」という思いであると考えている。そして、この思いが学生スタッフ全員と参加者にもあったために無事に成功させることができたと考えている。

最後に、私は今年度のキャプテンを担わせて頂いたことに感謝と誇りを感じている。改めて、6月から共に準備をして下さった学務課の皆様、多くのタスクを一生懸命こなしてくれた私以外の11名の学生コアスタッフ、当日のファシリテーションを完璧にこなしてくれた学生スタッフ、そして、当日、非常に有意義な意見や考えを提供して下さった参加者の皆様、一部分でも CHAmmiT に関わって下さった全ての皆様に感謝と御礼を申し上げる。また、今後の日本大学学生FD活動と CHAmmiT の更なる発展、飛躍を期待しつつ本稿を終わらせて頂く。

#### 4-2 「これまでのオンライン授業とこれからの授業について」 土屋 怜王

(日本大学経済学部経済学科3年・令和3年度学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ キャプテン)

始めに「令和3年度 学生FD CHAmmiT」開催にご協力いただいたスタッフ、教職員の方々に感謝申し上げます。

日本大学では、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、令和2年度よりオンライン授業を実施していた。私が所属する経済学部では、今年度に入り部分的に対面授業は始まっていたものの、ほとんどの授業がオンライン形式をとっていた。そのため、私は入学からほとんどの授業をオンラインで履修していた。さて、日本大学では「自主創造」を理念に学生が大学生活を送っている。私は、この理念と当時の生活に疑問を感じ、「自ら道をひらく」フィールドを求めて CHAmmiT に参加した。

学生スタッフは、CHAmmiT の企画を行うコアスタッフと主に当日の運営をする一般スタッフに分かれ

ており、合わせて50人規模である。活動内容は、年1回行われる学内でのイベントに向けて半年間準備をし、イベント当日のファシリテーションで一般参加者の意見をまとめながら学部提出する意見書を作るというものだ。私は、コアスタッフ各部門の人手不足の穴を埋めつつ、全体としてイベントが成功するように、一般スタッフに繰り返しイベント当日について説明してより充実した学部提案書を提出できるように努めた。

CHAmmiT 本番でファシリテーションを行うのは一般スタッフであるため、彼らが質問しやすい環境を作ることに力を入れた。当日は、私たちコアスタッフはCHAmmiT 全体が滞りなく進むように問題がある場所に駆け付ける役割をするため、各グループのファシリテーションにはほとんど関わることができない。そのため、一般スタッフがきちんと自分たちでファシリテートできるようになってもらう必要があった。わからないことは小さなことでも解決してもらうことで、当日自信をもってグループワークをすることができると考えており、一般スタッフ向けに練習会を開いたり、LINEのオープンチャットやメール等で質問しやすい環境を作ったりして疑問を解消した状態で当日を迎えられるようにしていた。その中でも一般スタッフのファシリテーション練習会は、できるだけ多くの学生スタッフが参加できるように5日連続で開催し、コアスタッフが分担してシフトを組んで直前期の緊張の中取り組んでいたと思う。

活動を終えて、コミュニケーション能力の向上を実感している。集まってくれるメンバーの多くは、大学やアルバイト、ボランティア、インターンなど掛け持ちしていることが多く、二刀流、三刀流で活動していた。そのため、ときにはグループワークが疎かになってしまうことがあった。しかし、本気でプロジェクトを成功させるために、忍耐強いコミュニケーションをとりながら準備を進める中で、自然と士気が高まって、それぞれが積極的に課題解決しようという姿勢になったときには本当に達成感を感じた。

また、CHAmmiTに参加した学生には次のことを意識して授業に臨んでほしいと思う。一つは授業を担当している先生方の立場や大学側の立場について考えることだ。CHAmmiTでは、それまで授業について抱いていた不満や要望がなぜ生じているのかを真剣に考えることができる。また、それらの問題のバックボーンについても理解できる。この経験を生かして授業により一層主体的に臨む姿勢を持つてほしいと思う。二つ目は大学に通う目的を考えることだ。授業を受ける理由を明確にすることで、大学に通う理由を改めて考えることができただろう。CHAmmiT参加者がこれらを忘れずに意識してこれからの授業に向きあっていくことが日本大学の教育改善に最もよい効果を生み出せると信じている。

#### 4-3 「NEXT STEPにつながるCHAmmiTに」 古家 凌成

(日本大学商学部商業学科4年・令和3年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ)

およそ半年間にわたって準備を重ねてきた、「令和3年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」が令和3年11月28日に開催された。私は昨年度の学生スタッフに続き、コアスタッフとしてCHAmmiTの運営に携わることとなった。

12名在籍するコアスタッフの中で唯一の4年生として参加したため、これまでのCHAmmiTの改善点や新たな運営面での課題点を踏まえながら、今年度の企画にシフトしていく役目を果たした。学生スタッフも含めると、およそ50名というCHAmmiTの中でも最大規模のスタッフ数ということもあり、コアスタッフ間でタスクを細分化するなど、効率よく運営を担える方法を模索しつつ定例会議を重ねていった。また最高学年として自らが率先して動くことにより、他スタッフも積極的に行動に移すことができるように、全体を考えながら過ごすことができたと思う。その結果が当日までのスムーズな運営につながったのではないかと感じる。

また今年度のコアスタッフとしての活動は学生一人ひとりの個性が存分に活かされ、コロナ禍においての学生交流や社会進出にあたっての貴重な経験になったのではないかと考える。オンラインでの定例会議や懇親会が今年度もメインとなってしまう、直接的な交流は前日のリハーサルと本番のみとなってしまったが、

学生同士の交流機会が減ってしまった今日の中では高頻度かつ長期間にわたって実施できたのではないかと感じる。特に同じ日本大学に在学しているという共通項からより一層の団結力が増し、本番までほとんどのスタッフが欠けることなく開催当日まで走り切ることができた。

来年度の CHAmmiT は 10 回目の節目となる予定だ。私は今年度をもって日本大学を卒業するため、スタッフや参加者としての携わりはこれまでより難しくなってしまうが私自身が得た経験を来年度のスタッフと共有し、より充実したイベントになることを願っている。

#### 4-4 「美術部からみた『CHAmmiT』」 渡部大雅

(日本大学文理学部中国語中国文化学科3年・令和3年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ  
美術部)

11月28日に開催された「令和3年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」は、学生FDが導き出したコロナ禍における活動の集大成といえることができる。

私自身は、昨年度に一般学生として参加し、今年度はコアスタッフとして、主にポスターやTシャツ、マニュアルや二種類の説明スライドなどのデザインを手がけた。これは、「CHAmmiT」以前にも PowerPoint を用いたデザインの経験があったため、美術部の代表者に選ばれたからである。美術部の反省点としては、いくつか挙げられる。

一つ目は、スケジュールに十分な余裕が設けられていなかったことである。ポスターのデザイン案は、私とそのほか2人の合計3人がそれぞれ作成した。美術部はこの3人で構成されており、美術部の全員がデザイン案を作成し、実際に採用されたデザイン案はそのうちの一つである。その他の2人が作成した案は、Twitter や Instagram での広告に用いることを計画していたが、ポスターやマニュアルの修正などの思わぬ作業が重なり、気づけば本番の直前となっていた。これについては、事前に十分に余裕のあるスケジュールを計画し、不測の事態に備えることで防げた問題であると考えている。特に「CHAmmiT」のような、多くの人々がかかわるイベントでは、予測を大幅に上回る問題が発生することがある。その中でも、デザインを手がける美術部の仕事は、感染症対策下では非常に顕著なことであるが、社会状況の変化によって記述すべき内容が左右されやすい。また、宣伝に用いるポスターは、その宣伝効果を高めるためにも、完成する時期としては、いくら早くても早すぎることはない。これらのことから、他の部門と比較しても、美術部のスケジュールは最も余裕を設けるべきものであると感じた。ただし、「CHAmmiT」開催にかかわる詳細情報の決定が遅れたために、あらゆる部門における作業の開始が遅れたことにも、触れておかななくてはならない。もちろん、感染症対策下では、何事も早期の決定が難しいという事情があることは言うまでもない。しかし、早いに越したことはないのである。

二つ目は、デザインを仕上げるための学務課とのやり取りに時間がかかったことである。これも感染症対策下に特有の現象であるが、対面での話し合いができず、オンライン会議やメールでのやり取りに限定された。その中で、デザインのチェックや修正の要求はその都度なされ、本番の直前まで続けられた。対面であれば二度程度で済んだと思われるチェックも、メールで行えば幾度にもなってしまう。こうした非効率性が重なり、スケジュールが遅延する原因の一つとなった。また、デザインを行うにあたって、前年度に使われたポスターのほかに、デザインの基準となる基本的な要求が示されなかったことも、作業が遅れるきっかけとなった。状況は常に変化し、求められる情報も、その時々で変わるものである。これからの「CHAmmiT」では、その年度ごとに適した要求を明確に示し、後々の修正作業を効率化させることに尽力するよう、提案する。

ここまでは、ひたすらに課題を書き連ねてきた。しかし当然ながら上手くいった箇所、つまり私たちの「成功」といえる事柄も存在した。特筆すべき「成功」は、ポスター、Tシャツ、説明スライドにおけるデザイ

ンの方針を統一したことである。これまでの「CHAmmiT」では、カラーが統一されていなかった。しかし、統一されたカラーを設定すれば、宣伝もより容易になると考えていたため、真っ先に今回のテーマカラーを決定したかった。結果としては、今回の「CHAmmiT」のテーマカラーは、「レッド」であった。これはたまたまポスターのデザイン案を赤色に設定したところ、コアスタッフの「受け」がよかったので、自然な流れで決定したものである。そしてその流れを受け、あらゆる箇所に「レッド」を多用した。こうした一貫性は、Twitter や Instagram、ホームページなどに統一感を生み、結果としてスタッフの間におけるモチベーションを高める要因ともなった。これらのことは、来年以降にも活かすことができると考え、完全対面での準備、開催が実現すれば、効果はさらに高まると予想できる。

以上のように、課題と「成功」とが存在した今回の「CHAmmiT」は、コロナ禍を経て手に入れた、私たち学生FDの成果の集大成といえる。かつてない規模にわたって感染症が流行する中で、このようなイベントにかかわれたのは非常に大きな喜びであり、誇りとなった。この報告が、来年以降の「CHAmmiT」の助けと支えになることを願う。

#### 4-5 「オンラインという逆境をチャンスに」高野 敦子

(日本大学経済学部金融公共経済学科3年・令和3年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ  
チームビルディング インフルエンサー)

初めに「令和3年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」開催にあたり、ご協力いただいた学生、教職員の皆様に御礼を申し上げます。コロナ禍において、大学全体のイベントを開催することができたのは、関わっていただいた皆様のお力添えがあってこそだといえる。

私は大学3年生になるまで、日本大学において学生が参画するFD活動が存在することを知らなかった。大学の教育改善に関心を持ってこなかったのである。しかし、新型コロナウイルス感染症の蔓延によりオンライン授業が余儀なくされた2020年度を経て、教育の変革に関心を持つようになった。時を同じくして、ゼミナールの教授からCHAmmiTのスタッフ募集について声をかけていただいた。私は、変容する大学教育に一石を投じる機会を作りたいという想いから、コアスタッフへ応募した。

今年度は、コアスタッフは12名、学生スタッフが約40名と例年に比べて大所帯だったため、コアスタッフの役割分担を実施した。私は、チームビルディングとインフルエンサーの二つの役割を担うこととなった。そこで私からは、二つの役割で関わったCHAmmiTについてコメントしたい。まずチームビルディングでは、コアスタッフと学生スタッフのコミュニケーションを図り、チームとしての発展を目指した。顔合わせからリハーサル前のミーティングまで完全オンラインでの実施ということもあり、親交を深めることは重要かつ難しい点であった。そこで、CHAmmiTの公式な活動とは別にオンライン懇親会を複数回企画し実施した。自由参加としたが毎回10名以上が出席し、にぎやかな時間を過ごすことができた。互いの大学生活について語り合うほか、オンラインでできるゲームやビブリオバトル（知的書評合戦）などを実施した。他学部の学生との交流を一つの目的としてCHAmmiTに参加する学生も多いため、懇親会の実施は有効的だったのではないかと感じる。課題としては、参加メンバーがある程度固定されてしまったことだ。より多くの学生に気軽に参加してもらうことを目標としていた。しかし、オンラインによるコミュニケーションの取りづらさや、公式な活動と別に時間を割かなくてはならない点がネックになった。オンラインでのコミュニケーションには、さらなる工夫が必要だったと反省している。しかし、親密な関係を構築した状態であれば、時間や場所を選ばないためオンライン懇親会の実施はメリットが多い。来年度のCHAmmiTが対面で実施できるのであれば、後半の活動にオンラインという手段を取ることも効果的だと考える。次に、インフルエンサーとしてはInstagramとTwitterを運営し、CHAmmiTの広報活動に力を入れた。Instagramでは、ミーティングの様子や懇親会の様子を投稿し、近況報告と今後の動きの予告として活用した。例年に比べても投

稿数が多く、半年間の記録を視覚的にとらえることができるだろう。Twitter では、ミーティングの報告書を公開した。Instagram に比べて消極的な動きになってしまった点が反省点である。また、双方にいいことで、フォロワー数を伸ばすことができなかった点に後悔が残る。日本大学の学生や全国の教育現場に関わる人々に有効的に影響を与えることができなかった。来年度の活動において SNS を利用するのであれば、積極的にターゲットとなるアカウントをフォローしていく必要があるだろう。

最後に、就職活動やゼミナール、授業と多忙を極める大学3年生の半分以上を CHAmmiT の企画運営に充てることができたのは、共に活動をしてきたコアスタッフの存在が大きい。教育改善やイベントへの思いから、意見がぶつかり合うことも多々あった。しかし、そのたびに納得がいくまで議論を交わしてきた。そんな我々の間には、今回の CHAmmiT への熱意と確かな団結力があつたといえるだろう。この点に、FD 活動に学生自身が参画する意義があつたと考える。私は CHAmmiT を通して、大学教育への関心を深めるだけでなく、共に成長できる仲間と考え、行動に移す機会を得ることができた。その結果、大学教育をよりよくするための提案を学生、教職員の皆さんによって抽出することができたのだ。今後も「日本大学 学生 FD CHAmmiT」が、学生、教職員、そして日本大学にとって意義のある活動となるよう願っている。

#### 4-6「みんなが知らない私のこと」 後藤 菜月

(日本大学国際関係学部国際教養学科3年・令和3年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ チームビルディング)

私から①「日本大学 学生 FD CHAmmiT」に参加した経緯、②反省・改善③この活動を通して得たもの、この3つについて述べていく。

##### ①「日本大学 学生 FD CHAmmiT」に参加した経緯

私がこのイベントの企画運営に携わろうと思ったきっかけは、2つある。1つ目が「教育とは何か」について考える機会があつたからだ。学校の授業や本、ボランティアを通し「日本の授業」に対する違和感があつた。2つ目が、この活動をきっかけに「コミュニケーション能力を伸ばしたい」。そう思ったからだ。コロナ禍により、人と接する機会が減った。かつ、学校もオンライン授業。コミュニケーション能力を伸ばすには、まず「人と関わる機会を増やし、話すこと」が大事だと感じた。

##### ②反省・改善

反省は2つある。1つ目が、体力的な問題があつたこと。2つ目がメンバーに自分の意見や気持ちをきちんとぶつけられなかったこと。

1つ目は、私自身疲れやすい体質であつたこと。そのため、ミーティングの最中に眠くなったり、頭の回転が鈍いタイミングでの活動によって本領を発揮できなかったと感じる。2つ目は、メンバーに自分の意見や気持ちをきちんとぶつけられなかったこと。ミーティングの最中に、自分の意見を言いたい場面はたくさんあつたが、どう言葉で表現したらよいかかわからなかった。また話がまとまらず、何を言っているかうまく伝えられないことが多かつたと感じる。その2つの反省を踏まえて、自分なりに改善したことがいくつかある。体力に関しては「ジョギング」や「ウォーキング」といった習慣を作つた。また「仮眠」などを取るようにし、なるべく体力を温存するようにした。他にも栄養が足りていないのかもしれないと思い、サプリメントを取り入れるといったようなこともした。自分にできる限りのことをした。気持ちや意見を上手にまとめられないことに関しては、紙に一度まとめてから話すことやとにかく一所懸命話すことで思いを伝えた。意外と一所懸命話すと、話がまとまってなかつたか相手は意味を汲み取ろうと努力してくれた。

##### ③この活動を通じて得たもの

人と関わることの楽しさを改めて感じた。様々な価値観、様々な環境、様々な思いをもつた人と関わることができ、とても刺激になった。相手と比較し、自分は劣っていると自信を無くすこともあつたが、それ

以上に楽しさが勝ったと感じる。自分のできること、できないことを知る良い機会だったと感じる。できないことに目を向けるよりも、「自分には何ができるかを考え、その能力を伸ばす」ことの大切さなども知った。「自分を知る、自分と向き合う」良い機会だったと感じる。

#### 4-7 「学生FD CHAmmitでIT化について話し合う大切さ」 西村 憲人

(日本大学国際関係学部国際教養学科2年・令和3年度 学生FD CHAmmit 学生コアスタッフ マネージャー)

先ず、「令和3年度 日本大学学生FD CHAmmit」の開催にあたり、お力添えをいただいた教職員の方々、及びスタッフを始めとする多くの関係者の皆様に厚く御礼申し上げる。そして、この学生FD活動に今回初めて参加をし、至らない点も多々あった私に対し、様々なご支援をして下さった周りのコアスタッフの方々にも、深く御礼申し上げたい。

コロナウイルスというパンデミックと通信技術が、オンライン授業というものを、大学に普及させたのである。たしかに、オンライン授業により、友達作りや、コミュニケーションをとる機会が少なくなるという理由で、否定的に捉える者が多い。実際、学生生活でオンライン授業しか受けたことが無かった私にとって、多くの学生と親睦を深めるだけでなく、大学の教育に関するテーマに対し、有意義なディスカッションが出来る機会が設けられているこの学生FD活動が、魅力的なものであった。このような経緯から、この活動に参加をし、「日本大学 学生FD CHAmmit」の開催に向けて、教職員や学生スタッフと定期的に行うミーティングを企画するマネジメントを行ったのである。

さて、オンライン授業を否定的に捉えず、肯定的に捉えてみるということ、そしてコロナウイルスの収束後、コロナウイルスの流行前に行われていた授業形態に戻すのではなく、コロナ禍で得たオンライン授業のメリットを活かした大学教育にしてみてもどうかという意見から、このことを本学のFD活動が開催するイベントであるCHAmmitを通じて、多くの教職員と学生で話し合いたいという経緯で、「IT化と大学教育」を本年度のイベントのメインテーマとした。そして、実際にこのイベントを通じて、多くの学生が、オンライン授業に対し、何かしらのメリットを感じており、アフターコロナのキャンパスライフにオンライン授業があることに肯定的だったことが見受けられた。それは、IT機器を用いた授業の利便性だと考えられる。例えば、自宅で授業が受けられるという点である。特に体調が優れない日は、オンライン授業に有り難みを感じるのではないだろうか。

コロナ禍での、学生FD CHAmmitで話し合った「IT化と大学教育」は、極めて有意義なものであった。とはいえ、パンデミックの収束後も、更なる通信技術の発達により、私たちは大学教育のIT化が加速することについて、向き合う機会が出てくるだろう。その際、本年度のFD CHAmmitで出た意見やアイデアが、その参考として、一役買うことがあれば、本活動のマネージャーとして携わった者として、嬉しい限りである。

#### 4-8 「コロナ禍における学生FD CHAmmitの大きな意義」 合原嘉成

(日本大学法学部法律学科2年・令和3年度 学生FD CHAmmit 学生コアスタッフ マネジメント)

初めに「令和3年度 学生FD CHAmmit」開催にあたり、ご協力いただいた全ての皆様に御礼を申し上げます。

私からは、大きく二つに分けてコメントさせていただきたい。

一つ目は、このCHAmmitの意義についてである。ここでは、コミュニケーションの場と授業改革の場という二つの視点からコメントする。私は、昨年度一般スタッフとして学生FD CHAmmitに参加した。新型コロナウイルス感染拡大のためほぼ全部の授業がオンラインで行われ、コミュニケーション機会が少なくその機会を求めていたからである。実際に参加してみると、話しやすく、リラックスした環境で自分の意

見が言えていたと感じる。コミュニケーション機会が少ない自分にとっては、自分の意見を主張する場、他人と意見を共有する場としても、貴重な場所であったと感じる。昨年度は、大学としても初のオンライン授業というのもあり、授業に対する不満や改善点など多く感じていた。実際、同じグループになった人からも多くの不満や改善点が出てきた。そこで、学生FD CHAmmiTを通して、学部提案書を作り提出したところ、今年度(2021年4月)から大幅に授業の質及び受けやすさが改善された。私自身、その変化を大きく実感した。これらから感じることは、学生FD CHAmmiTの重要性である。私は、このイベントがあるからこそ日本大学は良い方向へ変わっていくのだと考える。

二つ目は、私が今回コアスタッフとして参加した理由である。一つ目の理由で述べた通り「学生FD CHAmmiT」は日本大学及び日本大学の学生にとって重要なイベントである。そこで、私はこのイベントの重要性を広げていきたいと考え昨年の一般スタッフとしての経験を踏まえて、コアスタッフとして参加を決意した。

今年度も新型コロナウイルス感染拡大によりオンラインによるミーティング及び開催となった。オンライン上で限られた時間の中でのミーティングであり、一般スタッフとコアで打ち解けるのに時間がかかったと感じる。また、正直なところ人数も多く一般スタッフ全員が当日しっかりとファシリテーターをやり遂げられるかが不安だった。しかし、本番2週間前からファシリテーション練習会を開くことによって徐々に全体のファシリテーション能力が上がっていくのを実感し、不安も減っていった。そして、迎えた本番は特に大きな問題もなくチャミットをやり遂げることができたと感じる。これは、皆が一つとなってやり遂げた結果だと感じる。

「日本大学学生FD CHAmmiT」は、学生及び大学にとってとても重要なイベントである。来年度以降もこのイベントが続き、日本大学の教育がますます発展していくことを心から願っている。

#### 4-9 「CHAmmiT 取説」 柴田大輝

(日本大学生物資源科学部生命化学科2年・令和3年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ)

この度、初めて学生FD CHAmmiT というものに関わらせて頂いた経緯と感想、そして、反省等を記したいと思う。

まず、経緯としては至って単純である。

このコロナ禍において授業、サークル活動、イベントなど何もかもが停滞し、友達1人作るのが困難な状況において、何もしないことが大変もったいなく感じ、人との関わりや大学生である今しかできない経験ができるのではないかと思い応募した次第である。

もっと簡単に言うなら、大学っばい友達作りをするためである。

先に結果を言わせてもらおうと、大いに満足いく経験とつながりができたように感じる。

普段関わることの無い学部、学科が異なる人たちと毎回のミーティングを通してコミュニケーションを取っていく中で、コロナ禍での授業の雰囲気や学生のあり方、生活状況、また、コロナ禍での様々な考え方や行動など自分とは環境、境遇の異なる話を聴けたことは大変貴重な経験であり、そういった中で同じ活動に参加した人たちというのはこのような状況の中で何かを思い、考え、行動しているかがうかがえた。

普段の活動はこのようなご時世であることから、全てオンラインでの活動となったが、本番では制約があるものの無事、対面で行うことができ、毎回のミーティングや練習、定例会など準備をしたおかげで、非常に満足のいく結果となった。

そのおかげで、大変有意義な時間を過ごすことができた。

参加者の方々からも非常に好評で、来年も参加してみたいという声や知り合いや友人にも勧めたいといったような前向きな意見を多くいただき、自己満足ではなく、みんなに楽しんでもらいながらも中身のある結

果となり、約半年もの活動が実を結んだものとなった。

しかし、反省点もいくつか挙げられる。

まず、今年度のコアスタッフは12人と例年よりも多いことからタスクを細分化し効率よく運営していくために、コアスタッフ内で役割分担し5つの部署に分かれて活動していくなかで、それぞれの部署間での考え、やり方、報連相などの意思疎通が難しい場面などが見られた。

これを改善出来れば、ダブルブッキングを防ぎ、ほかのことに時間を回せ、効率的にタスクを消化できたのではないかと案ずる。

また、学生スタッフや参加者などの途中辞退なども多いのも懸念点の一つであると考えている。本番に向けて、人数が決定していたり、役割の割り当てを決めていてもこれでは抜ける度、毎回の微調整に頭と時間を費やすことになり進むものも進まず、ほかのスタッフにシワ寄せがいくのは違うように感じた。

このことは学生FD CHAmmitの知名度にもつながるのだが、この活動についての認知度が低いことにも起因しているように感じる。

どのような活動で、どのくらいの期間するなどの5W1Hの説明やスタッフ募集、参加者募集など宣伝が全然できていないように思う。

自分が見つけたのもたまたまであり、それ以降案内を見ることがなかった。

そういったことを改善することで、このような活動に興味はあるがよくわからず迷っている学生やただ存在を知らなかっただけで実は積極的に活動したい学生を発掘できたかもしれないことを思うと実に惜しく感じる。

いずれにしろ学生FD CHAmmitという活動が自分に与えた影響は大きく、学生生活においても大変有意義な経験、時間を得られたように思う。

また、この活動を見つけ、半年関わらせていただいたことを誇りに思う。

教職員の方々と学生が参画し大学教育を変えようというかなり難しいものではあるが、来年度のスタッフにはこれらの反省を活かしつつ、その年度にあったやり方を模索していき更に良いものにしていき、日本大学の教育が少しずつでも発展し学生も教職員の方たちも前を向けることを心から願っている。

#### 4-10 「インフルエンサーとアフターコロナ」 曾山はるか

(日本大学生物資源科学部動物資源科学科2年・令和3年度 学生FD CHAmmit コアスタッフ インフルエンサー)

初めに、「令和3年度 日本大学学生FD CHAmmit」開催にあたり、力を貸していただいた教職員及びスタッフを始めとする多くの関係者の皆様に深く御礼を申し上げる。今年度の開催にあたっては対面とオンラインの併用型を導入したことから、多くの配慮や準備をしていただき、感謝申し上げます。

私は今年度、コアスタッフとして初めてFD活動に携わった。コアスタッフに応募したのは、多くの学生とかかわる機会が欲しかったからだ。私が日本大学に入学したときは新型コロナウイルスの感染が拡大しており、授業はすべてオンデマンド型だった。そのため大学1年次は学生とのかかわりがほぼなく、学生がどのような思いを持って生活しているのか全くわからない状態であった。そんな時に目に留まったのが、FD活動におけるコアスタッフ募集のメールだったのだ。結果、FD活動に携わっていなければ出会うことがなかっただろう他学部、他学年のスタッフや参加者、教職員と交流出来た。それだけでなく、さまざまな人の意見や考えを聞くことで、視野が広がり物事を多方面から客観視する力も養うことが出来た。FD活動の目的はあくまで日本大学の教育改善だが、この活動を経て私自身も大きく成長することが出来たと考えている。

ここからは今年度の活動の反省を2つ述べようと思う。まず1つ目に、広報活動の反省について述べる。コアスタッフ内では役割分担をし、私はSNSを活用して広報活動を行うインフルエンサーを担当した。イ

ンフルエンサーに応募してくださった学生スタッフとともにインスタグラムとツイッターの公式アカウントを通してスタッフミーティングの様子などを広報することができた。特にインスタグラムでCHAmmiT 開催 20 日前から掲載したカウントダウンは、コアスタッフ・学生スタッフの紹介も掲載したことでアカウントをフォローしてくださっている方にFD活動を身近に感じてもらうきっかけになったのではないかと推測している。ただ今年度はアカウントのフォロワーを大幅に増やすことが出来なかったことが反省点として挙げられる。来年度は、昨年度や今年度とは異なる新しい企画を計画したり、スタッフがSNSを通して呼び掛けたりすることでフォロワーを増やし、CHAmmiTの知名度向上に貢献することを目指してほしい。広報活動は、FD活動を知らない大学生を始めとした一般の方や活動を応援して下さっている方との懸け橋となる、大変重要な活動である。広報活動が積極的になれば、間接的ではあるがCHAmmiTのステップアップに確実につながることができる。そのため、来年度以降も広報活動には力を入れて取り組んでほしい。

2つ目に、今年度のテーマの反省について述べる。今年度のCHAmmiTは「アフターコロナ～IT化と大学教育～」というテーマを掲げて活動した。昨年度の内容を引き継ぎつつ、新型コロナウイルス収束後の大学教育の在り方について充実したディスカッションを行うことが出来た。その一方、開催後行われた反省会では、学生スタッフから「内容が複雑で参加者に理解してもらうのに時間がかかった」「参加者から難しいという声があった」という反省が多く寄せられた。振り返ってみると、ファシリテーターは当日のやるべきことが例年と比較して複雑化していた。そのため参加者も難しいテーマであると捉えてしまったことが考えられる。その反省をふまえ、来年度以降は学生スタッフがファシリテーターのポジションを練習する期間を多くとり、本番に備えてほしい。またディスカッションの内容を単純化、明確化させることも重要だと思う。

最後になるが、約半年間コアスタッフの一員としてFD活動に携われたことを心から名誉に思う。そして、来年度以降の学生FD活動のさらなる発展を心より願っている。

#### 4-11 「CHAmmiTの反省」 佐藤喜一

(日本大学通信教育部法学部政治経済学科2年・令和3年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ チームビルディング)

私は以前別の大学に通っていたことや、複数の団体に所属している経験をもとに私の携わったCHAmmiTの業務内容と来年度への改善点についてコメントしたい。

まず、コアスタッフのチームビルディングとして行った業務はCHAmmiTスタッフが本番までに良好な関係を築けるよう懇親を深めたり、わだかまりを減らすためにミーティングとは別に懇親会等を企画運営したりすることだ。

CHAmmiTは全学をあげて準備を行うため理系文系問わず50名程度の学生スタッフが集まる。そのスタッフ間の関係を構築することは普段対面授業のない通信教育部に所属している私からするととても魅力的な業務だと思い参加した。

序盤はCHAmmiTスタッフが総勢50名という規模や、今年度も新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、オフラインの交流は難しく全員が友人になるということは不可能と判断し、業務上支障のないような関係性を構築する事を目標とした。そのため、内容は「日大で新しい学部を作るなら学部とキャンパスの場所はどこ？」というようなCHAmmiTに関連するトークテーマで会話をしてもらうことにした。

しかし、参加者の多くは友人関係を築きたいというニーズのもとで参加していることを知った。それ以降は「ワードウルフ」や「麻雀」のような遊びを中心に懇親を深めていくことにした。

チームビルディングとしての反省点は最初の目標設定だと考える。50名を全体としてとらえてしまっていたが、当日は学部ごとに分かれて行われるため学部でチームを分けることで50名という規模のデメリットを解消することができた。また、アンケートフォーム等で学生スタッフのニーズを吸収することで運営と

参加者の意識の乖離も解消できたと考える。

また、チームビルディングはただ遊ぶための時間をつくるのではなく、チームとして「CHAmmiT を成功させる」「日本大学の教育改善を行う」という目的に向かい1つのチームをつくるのが目的である。終盤はその意識が薄れてしまっていたため、来年度は最初の目標設定と目的に向かいブレないチームビルディングを心がけたい。

さらに、コアスタッフのメンバーとしての反省点は先の見えない運営であったと考える。

コアスタッフの目的は50名の学生スタッフをまとめ、教職員と意思疎通をしっかりと図り、CHAmmiTの準備を行うことであったと理解している。

しかし、実際にミーティングが始まるといつまでにどれだけの量と種類の仕事をこなさなければならないかということが直前になるまで分からないということが多かった。CHAmmiTのゴールとコアスタッフとしての業務内容が不明であったことや、大学が求めていることや昨年までの様子が理解できず方向性を見失いコアスタッフ内で意見の衝突が生まれてしまった。昨年度参加者は昨年度の様子を体験しているが、引継ぎ資料はないため経験をもとに話さなければならず、今年度参加者は昨年度参加者や職員へ過度に情報を求めてしまい、昨年度参加者やキャプテンへの負担が大きくなってしまった。

他にもコミュニケーションツールの導入により透明性のある意思決定や欠席したメンバーへの配慮を目指したが、議事録のない意思決定や議事録を読まずにミーティングへ参加したことによる情報不足などにより、別のツールによるリマインドという不要なタスクが発生してしまった。また、議題や時間設定があいまいなミーティングにより、時間を超過したミーティングが増えてしまいコアスタッフの負担が増えていた。

CHAmmiT 学生スタッフとしてはCHAmmiTの全体感と趣旨を途中から見失うことが増えた。CHAmmiTは全学から多くの学生を集めるために自薦と学部の推薦という制度がある。そのため、全員が日本大学の教育改善に向けて参加しているが、どうしてもスタッフや参加者の中でモチベーションに差が出てしまう。中には学部のテストや私用によりミーティングへの参加や、チームビルディングやファシリテーションの練習会への参加も難しく、途中で辞退してしまう学生が毎年でている。モチベーションの維持が難しい環境があったと考える。

また、CHAmmiTに参加した学生だけでなく教職員も全体を把握できていないと感じた。全体を把握していない状態でこの規模のイベントを催行したこと、統括する立場がいなかったこと、ビジョンが共有できていないことは来年度への反省だと考える。

私が来年度へ向けて最も改善したい点は継続性だ。CHAmmiTは毎年数人のスタッフが前年度より継続でスタッフになるが、前年度より引き継ぎの資料はなく、どうしても特定のスタッフの記憶を頼りにしなければならず、負担が大きい。また、参加者からアンケートはとるもののCHAmmiT本番1回の参加のため参加した意義を見出しにくい。

また、今年度に出た意見が来年度以降どう改善されているのか実感することが難しく、継続的な参加のモチベーションを維持できない。

これらのことから、私はCHAmmiTの引継ぎと参加者への報告、学部FDと連携をとりミニCHAmmiTのような継続性のある活動を提案したい。

また、召集の段階でCHAmmiTのスケジュールの詳細や目標、目的などの軸になることについては時間をかけて設定することで統一感をもったチームビルディングが容易になり、年間を通し充実した活動ができると考える。

私は学生会のような学生の意見を届ける組織がなく、多くの学部がある大規模大学の日本大学のFD CHAmmiTという活動はとても意義のある活動だと考える。その一翼を担えたことは今後の日本大学生としての誇りであり、卒業後も日本大学のために貢献したい。

#### 4-12 「CHAmmiT を終えて」 垂見 麻衣

(日本大学通信教育部商学部商業学科 1 年・令和 3 年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ  
セクレタリー)

CHAmmiT にコアスタッフとして参画するに至ったモチベーションは2つの側面から議論することができる。

1つは、私的な側面で、このコロナ禍においてオンラインでの授業がベースとなり、人との接点が希薄化する中で、交流をもっと増やし、より良い大学生活に繋げたいという想い。もう1つは、公的な側面で、日本大学の現状を客観的に分析し、良いところ悪いところを整理したうえで、前者をさらに発展させ、後者の改善を図り、さらに学部間の分断を解消することで、より良い日本大学の実現に向けた改革を担いたいという想いがあった。

今年度のCHAmmiTは、スタッフは対面形式、参加者はZoomを用いたオンライン形式とするハイブリッド形式で開催された。コアスタッフとして運営側に携わり感じたことは、キャプテンのリードのもと綿密なミーティングを重ね、本番に向けてしっかりと準備を図っていること、スタッフ全員に何らかの役割をアサインすることで、スタッフひとりひとりの当事者意識や自己有用感を醸成していることが顕著に見られたことが印象的だった。この全員を巻き込むアプローチは準備段階のみならず、CHAmmiT本番当日の運営においても見られ、CHAmmiT成功の大きな要因のひとつとなっていると言える。

敢えて改善点を挙げるとするならば、もっと早い段階でテーマを定め、本番を想定した形でのファシリテーション練習をより多く重ねられると、コアスタッフのファシリテーション能力の向上と、CHAmmiT本番におけるより円滑な議論に繋がるだろう。

コロナ禍においてオンライン化が急速に進む中、様々なネガティブ要因をオンライン化そのものに見出そうとする動きがあるが、CHAmmiTに関してはこれに当てはまらず、例えば初期の準備段階で見られたスタッフのモチベーション低下の問題は、オンライン化が原因なのではなく、CHAmmiTの方向性がしっかり共有できていないこと、言い換えるとCHAmmiTの最終形、ゴールを各自がしっかりイメージ出来ていなかった事に起因している。こうした状況を一部のスタッフに過度の負担を負わすことなく回避するには、CHAmmiTのコアスタッフの任期に若干の幅を持たせ、前年度のコアスタッフと次年度のコアスタッフとの間にオーバーラップ期間を設け、確実に引き継ぎ作業が実施できるようにするのが望ましい。

今年度のハイブリット開催のCHAmmiTは、決して完成したものではなく、まだまだオンラインでの活動に改善の余地と可能性を感じることができた。今後の学生FDの発展のために更なる決意をもって行動していきたい。

## 『日本大学F D研究』投稿要項

平成 24 年 7 月 4 日制定

平成 25 年 3 月 6 日改正

平成 25 年 4 月 1 日施行

平成 26 年 3 月 5 日改正

平成 26 年 4 月 1 日施行

平成 28 年 3 月 2 日改正

平成 28 年 4 月 1 日施行

平成 30 年 12 月 5 日改正・施行

令和 2 年 10 月 27 日改正・施行

日本大学F D推進センターでは、高等教育開発に関する論考や活動報告などを学内外に広く共有することにより、組織的な教育の質向上を図ることを目的として、『日本大学F D研究』を刊行する。『日本大学F D研究』を編集・刊行するために必要な事項を以下に規定する。

### 1 投稿資格

日本大学（大学院，短期大学部及び付属高等学校等を含む）の教員（非常勤教員含む）・専任職員・学生。

その他，日本大学F D推進センター長が適当と認めた者。

なお，学生が第一著者として投稿する場合は，本大学の専任教職員の推薦を得ること。

### 2 掲載原稿の種類

掲載原稿の種類は，次のいずれかとする。

#### ① 研究論文

高等教育開発（授業開発，改善等。以下同じ）に貢献できる問題提起と意義があり，この分野において価値と有効性がある研究成果をまとめたもの。

〔査読付原著〕

※ 未発表のものに限り，他誌への重複投稿は認めない。以下②，③も同じ。

#### ② 教育実践研究

高等教育開発に関する実践活動から導き出された研究成果をまとめたもの。〔査読付原著〕

#### ③ 研究ノート

高等教育開発に貢献できる問題提起と意義があり，今後，研究論文に発展

する可能性を持ち、研究の進歩に寄与すると見なせる研究成果をまとめたもの。〔査読付原著〕

#### ④ 活動報告

高等教育開発に関する実践報告（主に部科校で開催されたFD活動の紹介・報告等）。

#### ⑤ 学生レポート

学生を著者とする学生FDに関する活動報告（主に「日本大学学生FD CHAmiT」や部科校で開催された学生FD活動の紹介・報告等）。

#### ⑥ その他（資料紹介、書評など）

国内外における高等教育開発に関する研究資料等で、日本大学FD推進センターの活動に資するもの。

### 3 執筆要項

別に定める。

### 4 投稿申請期間

投稿原稿は、原則として期限を設けず随時受け付ける。

### 5 投稿論文に対する審査

#### ① 投稿論文の受付

投稿論文が受付されると、受付日を記載した受付書が送付される。

#### ② 投稿論文に対する審査

投稿論文の審査は、編集委員会が定めた基準に従って、厳格かつ公平に行う。編集委員会は匿名査読者（以下、査読者という。）を選任する。なお、1投稿毎に2名の査読者が選任される。なお、具体的な審査基準は編集委員会が別途定める。

#### ③ 投稿論文の採否

投稿論文の採否は、編集委員会が査読結果報告に基づき、編集委員会が決定する。ただし、審査の結果、研究論文として投稿された論文が研究ノートとしてのみ採択が許可されることがある。また、教育実践研究として投稿された論文が活動報告としてのみ採択が許可されることがある。

#### ④ 条件付で採用の場合の再査読

条件付で採用の場合には、査読者から必要な修正が指示される。投稿者は定められた改訂期限内に編集委員会宛に改訂原稿を送付すること。その際には、改訂箇所を明示したリストを同封すること。

改訂原稿についても同一の査読者が再査読を行う。また、改訂原稿受付後、

投稿者に対して掲載の可否を原則として1ヶ月以内に再通知する。

#### ⑤ 投稿辞退

条件付で採用の場合など審査結果に不服がある場合には、投稿を辞退することができる。この場合、投稿者はその旨を通知後2週間以内に文書で編集委員会に連絡しなければならない。

#### ⑥ 依頼(招待)論文

上記の規定に拘わらず、全学FD委員会からの付託により編集委員会が決定した依頼(招待)論文は、特別枠として掲載する。

#### ⑦ 投稿論文の受理

編集委員会が採用を決定した日を投稿論文の受理日とし、受理日を記載した受理書が送付される。

#### ⑧ 投稿論文の掲載

受理された論文は原則として2週間以内にPDF化し、日本大学FD推進センターウェブサイトに掲載する。なお、WEB掲載日を発行日とする。

### 6 活動報告・学生レポート・その他(資料紹介、書評など)に対する審査

投稿原稿が受付されると、受付日を記載した受付書が送付される。

投稿原稿は、編集委員会が審査の上、採否を決定する。

採用が決定された原稿は原則として2週間以内にPDF化し日本大学FD推進センターウェブサイトに掲載する。なお、WEB掲載日を発行日とする。

## 7 編集

全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループを編集委員会とし、全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループメンバーを編集委員とする。

なお、この他に若干名の編集委員を追加することができる。

## 8 刊行期日

原則として、年1回、毎年3月末日に刊行する。

なお、冊子に収録される原稿は当該年度1月末までに原稿が完成し、WEB掲載ができたものを対象とする。

## 9 著作権

投稿者は、採用原稿における著作権のうち、複製権、翻訳・翻案権、公衆送信・伝達権について、日本大学FD推進センターに帰属し、学内外に公開することを了承する。

#### 10 配付・公開

日本大学F D推進センターウェブサイトにおける公開に加え，冊子での配付を行う。

以 上

## 『日本大学FD研究』執筆要項

平成 24 年 7 月 4 日制定

平成 25 年 3 月 6 日改正

平成 26 年 3 月 5 日改正

平成 28 年 3 月 2 日改正

平成 28 年 4 月 1 日施行

平成 30 年 12 月 5 日改正・施行

令和 2 年 10 月 27 日改正・施行

### 1 分量

掲載原稿 1 篇の分量は、原則として以下を目安とする。

ただし、全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループが認める場合はこの限りではない。

① 研究論文・教育実践研究

20,000 字以内（刷り上り 12 ページ以内，カラー2 ページ以内）

② 研究ノート・活動報告・学生レポート

10,000 字以内（刷り上り 6 ページ以内，カラー2 ページ以内）

③その他（資料紹介、書評など）

刷り上り 4 ページ以内（カラー2 ページ以内）

### 2 原稿の執筆要領

① 原稿の作成にあたっては、原則として Word ファイルで作成して、そのまま印刷できる完成原稿を提出する。なお、テンプレートはホームページに掲載してある最新版を用いる。

② 使用言語は、原則として日本語とする。

③ 用紙は A4 版とし、上 30mm，下 25mm，左右 20mm の余白を設ける。横書き，1 段組，字体は MS 明朝（和文）と Times New Roman（半角英数字）とする。原稿ではヘッダ，フッタは使用しない。

④ 文字サイズは、タイトル：表題 14 ポイント，副題 12 ポイント，要旨：10.5 ポイント，本文：10.5 ポイントとする。和文タイトルは MS ゴシック体を使用し，英文タイトルは Times New Roman を使用する。見出しは，MS ゴシック体を使用し，大見出し 12 ポイント，小見出し 10.5 ポイントとする。

⑤ 原稿は，1 行 48 文字，1 ページ 41 行のフォーマットで作成する。

⑥ タイトルは和英の 2 ヶ国語を使用し，研究論文・教育実践研究・研究ノート・活動報告には英文の要旨（300 語以内）を加える。

⑦ (1)タイトル（日本語），(2)氏名（日本語），(3)所属（日本語），(4)タイトル（英

語), (5) 氏名 (英語), (6) 所属 (英語), (7) 要旨 (英語) の順で記載する。

- ⑧ 3～5 個のキーワード (英文) と 3～5 個のキーワード (和文) を記載する。
- ⑨ 英文はタイトルを含め, 著者の責任において投稿前にネイティブチェックを受けるものとする。
- ⑩ 常用漢字・現代仮名遣いを用い, 句読点は「,」「。」を用いる。
- ⑪ 図表を挿入する場合は, 適宜, 本文の字数を減らす。図と表は, それぞれ連番を付し, タイトルは 10.5 ポイント, 出典は 9 ポイントとする。
- ⑫ 条注は, 本文の末尾に「注」というセクションを設け, 一括して記載する。本文中での注の指示は「<sup>1</sup>, <sup>2</sup>, …」のように連番を付して上付きで示す。
- ⑬ 本文中で参照した文献は, 注のセクションの後ろに「引用・参考文献」というセクションを設け, アルファベット順に漏れなく記載する。別紙「引用・参考文献の記載方法」を参照のこと。
- ⑭ 本文中に文献を引用する場合, 引用個所の後に著者の姓と年号を括弧付きで記入する。

また, 著者名の後に引用する場合には, 年号を括弧付きで記入する。著者が 2 名のときは両者の姓を併記し, 和文名表記の場合は“と”, 外国語名表記の場合は“and” 3 名以上のときは筆頭著者以外を和文名表記の場合は“ら”, 外国語名表記の場合は“*et al.*”と略記する。

例: (日本, 2009), (日本と千代田, 2008), (日本ら, 2007), (Adams, 2007), (Adams and Smith, 2006), (Adams *et al.*, 2004)

- ⑮ 同一著者で同一刊行年の文献を複数引用する場合は, それぞれの刊行年の後ろにアルファベットを付して区別する。例: 2011a, 2011b

### 3 投稿手続き

- ① 原稿等は, 以下のとおり申請時に本部学務部学務課あて提出する。
  - (1) 投稿申請書 (日本大学 F D 推進センターウェブサイトから入手)
  - (2) 原稿電子媒体 (C D 等)
  - (3) プリントアウトした原稿 2 部
- ② 投稿された原稿等 (図版, 写真, C D などを含む) は原則として返却しない。

### 4 校正等

初校校正のみ著者が行う。以降は, 誤植等のみの対応を全学 F D 委員会教育情報マネジメントワーキンググループが行う。

以 上

**【問い合わせ・原稿提出先】**

日本大学本部学務部学務課

〒102-8275 東京都千代田区九段南 4－8－2 4

TEL 03-5275-8314

e-mail adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp

日本大学FD推進センターウェブサイト

[http://www.nihon-u.ac.jp/about\\_nu/effort/fd-center/index.html](http://www.nihon-u.ac.jp/about_nu/effort/fd-center/index.html)

**引用・参考文献の記載方法**

引用・参考文献リストは、和文、外国語文を含めて、筆頭著者の姓のアルファベット順に配列し、同一筆頭著者の文献が複数の場合は発表順に、さらに同一年の場合は次の著者の姓のアルファベット順とし、以下の例のように記述のスタイルを統一して作成する。

- 1 雑誌掲載の文献は、(1) 著者名、(2) 発行年、(3) 表題、(4) 雑誌名、(5) 巻・号、(6) 開始－最終ページの順に記載する。

(例)

日本一郎・千代田太郎 (1981) , 「日本における教育のありかた」『日本教育学会誌』第 18 号, 328-334 ページ。

Anderson, J. E. and E. Van Wincoop (2003), “Gravity with Gravitas: A Solution to the Border Puzzle,” *American Economic Review*, 93(1), 170-192.

- 2 単行本の記載は、(1) 著者名、(2) 発行年、(3) 書名(版)、(4) 発行地名発行所名の順とする。

(例)

藤本隆宏 (2004), 『日本のもの造り哲学』日本経済新聞社。

Krugman, P. (1995), *Development, Geography, and Economic Theory*, Cambridge: MIT Press.

- 3 分担執筆の場合は、(1) 著者名、(2) 発行年、(3) 表題の次に、(4) 編集または監修者名を加えて、(5) 書名(版)、(6) 発行地名発行所名、(7) ページの順とする。

(例)

日本一郎 (2000) , 「戦後教育史」(日本一郎・千代田太郎編『日本の教育史(第 1 版)』朝倉書店) , 109-116 ページ。

- Ye, Xinyue, and Mark Leipnik (2013), “Beyond Small Business and Private Enterprises in China: Global and Spatial Perspectives,” in Ting Zhang and Roger R Stough (eds), *Entrepreneurship and Economic Growth In China*, New Jersey: World Scientific, 289-316.
- Wu, Chung-Tong, Xiao-Ling Zhang, Gong-Hao Cui, and Shu-Ping Cui (2014), “Shrinkage and Expansion of Peri-Urban China,” in Karina Pallagst *et al.*, *Shrinking Cities - International Perspectives and Policy Implications*, London: Routledge, 166-167.

以 上

**令和元年度**

**日本大学 F D 推進センター活動報告書**



**日本大学 F D 推進センター**



## 目

## 次

学修者本位の教育実現に向けた組織的なF D活動の充実

ー F D推進センター基本計画（中期計画）を振り返りながらー

F D推進センター長・副学長（学務担当） 小 田 司

日本大学F D推進センター連携マップ

令和元年度調査・分析ワーキンググループ活動報告

令和元年度プログラムワーキンググループ活動報告

令和元年度教育情報マネジメントワーキンググループ活動報告

令和元年度日本大学F D推進センター活動一覧

令和元年度全学F D委員会名簿

令和元年度全学F D委員会ワーキンググループ名簿

### 【 付 録 】

日本大学F D推進センターに関する内規

F D推進センター基本計画（中期計画）

※ 本報告書に掲載の役職・資格等については、令和元年度当時のものです。

**学修者本位の教育実現に向けた組織的なFD活動の充実**  
**ーFD推進センター基本計画（中期計画）を振り返りながらー**

FD推進センター長・副学長（学務担当）

小 田 司

FD 推進センターは、昨年度から新たな基本計画として、3つのワーキンググループ（以下、WG）ごとに以下の3か年（平成30年度～令和2年度）の計画を掲げました。

調査・分析 WG では、「質保証体制の充実に資する本学FDの在り方の調査と方針の明確化：マクロ・ミドル・ミクロそれぞれの観点から補完する諸方策等の検討ー教育業績評価・ポートフォリオ等の在り方ー」、プログラム WG では、「質保証体制の充実と日本大学教育憲章を捉えたFD活動の各学部等への浸透策の展開ーワークショップ等浸透に関わるプログラムの充実と改善ー」、教育情報マネジメント WG では、「質保証体制を踏まえて実施されるFDの成果とその充実に支援する情報の収集と発信及び教育ツールの開発と充実ーFD ガイドブックの充実・新規教育ツールの開発ー」を中期計画としました。これらの中期計画を基に次のとおり活動を行ってまいりました。

調査・分析 WG では、昨年度に続き、教育業績評価の検討に焦点を当て、ティーチング・ポートフォリオについて検討をしました。本学教員がより簡易に記載できるようティーチング・ポートフォリオ・チャートの手法を基にした、本学様式の「教育状況調査票」を作成し、「成果」項目以外の部分については、概ね完成させました。

プログラム WG では、日本大学教学推進ミーティングを教学戦略委員会と共催し、学部、通信教育部及び短期大学部の学務担当者が一堂に会し、本学で進められている、マクロ・ミドルレベルの教育改革の現状を共有するとともに、日本大学教育憲章を軸とした教育課程編成における課題を明確にし、専門領域学科はもとより学部・学科の枠を超えた情報共有をしながら、課題解決に向けた議論とコンセンサスを得ることを目的として実施いたしました。また、プログラム WG において、実施している新任教員FDワークショップ、全学FDワークショップ、日本大学学生FD CHAmmitの参加者の継続したFDへの関わりが低い傾向であることが課題としてあげられてきたことから、“日本大学FDラリー”と銘打って参加を促しました。さらに7回目の開催となった日本大学学生FD CHAmmitでは、学生の視点と教職員の視点から大学とはどのような場であるかをそれぞれの視点から探求し、“自主創造型パーソン”を学生・教員・職員の三位一体で体现するものとなりました。

教育情報マネジメント WG では、活動計画に基づき、『日本大学FDガイドブック』の全面的な改訂を行い令和2年4月に発行を予定しています。『Teaching Guide』は、表題を「学生と創る授業デザイン Teaching Guide」とし、特に「日本大学教育憲章」を基軸とした教育の質保証を担保すべく、FD 及び教学戦略の両視点から内容の充実を図り

ました。『Learning Guide』についても、全面的な改訂を行い、表題を『ミライヲツクル Learning Guide』と改めて、初年次教育のサブテキストとしての側面から内容の見直しを図り、入学から卒業時に至るまで手元に置いて活用することのできるガイドブックとなるように工夫を行いました。また、「日本大学 FD NEWSLETTER」においては、プログラム WG と連携して FD 活動を前進させるプログラム“日本大学 FD ラリー”について特集し、広く学内外に発信しています。

令和 2 年 1 月 22 日に中央教育審議会大学分科会から「教学マネジメント指針」が公表されました。この指針の中では「教学マネジメントを支える基盤」として、学修者本位の教育を実現するという目的で FD・SD の高度化、教学 IR 体制の確立が求められ、大学全体レベル、学位プログラムレベル、授業科目レベルでの FD 活動の在り方が示されています。本学においても学修者本位の教育を実現するため、中期計画に掲げられたとおり、組織的な FD 活動の充実が教育の質保証を実質化させるものと考えております。次年度は、中期計画の最終年度となりますので、中期計画に係る具体策をまとめていくことを目標に、学修者本位の教育実現に向けた FD 活動の充実を推進してまいりますので、御協力をお願いいたします。

# 日本大学FD推進センター 連携マップ

## FD推進センター〔全学FD委員会〕

### 【 目 的 】

1. 日本大学におけるFD活動の全学的な推進
2. 大学院, 学部, 通信教育部及び短期大学部における FD活動の支援  
⇒日本大学における教育の質的向上を図る

学務部学務課

## ワーキンググループリーダー会議

### 調査・分析 ワーキンググループ リーダー, メンバー

FD活動及び教育活動に関わる調査・分析を行う。  
また、既に保有する各種教育情報等の効果的な活用方法を検討する。

#### 【主な活動内容】

- 「FD等教育開発・改善活動に関する調査」の実施・分析等
- FD等教育開発推進関連組織に関する調査研究
- 学内外のFD活動等に係る調査研究

ほか

### プログラム ワーキンググループ リーダー, メンバー

教職員の教育・研究指導力向上並びに学生の学習意欲向上などを目的とした各種のプログラム・ツールを開発・実施・提供する。

#### 【主な活動内容】

- 全学FDシンポジウム等の企画・実施
- 新任教員対象FDプログラムの企画・実施
- “学生参画型FD”の趣旨を捉えたFDプログラムの企画・実施

ほか

### 教育情報マネジメント ワーキンググループ リーダー, メンバー

日本大学全体及び学部・研究科等におけるFD活動などの取り組みを広く学内外に情報発信するとともに、その効果的な情報共有のあり方を検討する。

#### 【主な活動内容】

- 「日本大学FD NEWSLETTER」の企画・編集
- 『日本大学FDガイドブック』の企画・編集
- 『日本大学FD研究』の編集・刊行
- FD推進センターウェブサイトの具体的活用方法の継続的な検討と展開

ほか

令和元年度

調査・分析ワーキンググループ  
活動報告



日本大学 FD 推進センター

〔全学 FD 委員会調査・分析ワーキンググループ〕



調査・分析ワーキンググループに係る令和元年度における活動内容及び総括は、FD推進センター基本計画（中期計画）並びに令和元年度活動計画に基づき、次のとおりである。

- 1 令和元年度活動計画
  - ① 「令和元年度FD等教育開発・改善活動に関する調査」の実施
    - （１） 学部，短期大学部
    - （２） 大学院研究科
  - ② 学生による授業評価アンケート結果の全学的な活用に係る諸検討
  - ③ 教員の教育業績評価方法等に係る諸検討
- 2 FD推進センター基本計画（中期計画）を踏まえた調査・分析ワーキンググループとしての総括

#### 1－①「令和元年度FD等教育開発・改善活動に関する調査」の実施

##### （１） 学部，短期大学部

本調査は，平成20年度より（平成22年度を除き）毎年実施している。11回目となる今年度の調査は計19学部等に依頼し，全ての学部等より回答を得た。今年度は特に項目の修正は行わず，昨年度と同様の内容で調査を行った。得られた回答について集計を行った結果について，項目を選定した上で以下に示す。

#### I. FD等教育開発・改善活動推進組織

本学では，全ての学部等にFD等教育開発・改善活動を推進するための組織が設置されている。名称は，「FD委員会」が大半を占めるが，他には経済学部「FD推進委員会」，商学部の「教育改善委員会」，危機管理学部の「FD小委員会」，生産工学部の「教育開発センター運営委員会」，医学部の「医学教育センター」，短期大学部船橋校舎の「教職員教育改善委員会」などがある。教職員の構成は教員が1～22名，職員が1～9名で，教職員の合計は，最多が30名，最少が1名であった。1年間の会議開催回数の平均は3.7回であり，最多は11回，最少が1回であった。

#### II. 組織的なFD等教育開発・改善活動

教員の授業におけるPDCAサイクルは，P（シラバス作成），D（指導の展開），C（振り返り），A（授業の改善）で構成されと考えられる。以下では，こうしたプロセスに関連する項目の結果について報告を行う。

##### 1. シラバス作成について

まず，「シラバスにおける準備学習・到達目標・成績評価方法・卒業認定方針との関連・課題のフィードバックなどの明記およびシラバス作成に関する全教員対象のFD（項目⑭）」について，「シラバスにおける準備学習・到達目標・成績評価方法・卒業認定方針との関連・課題のフィードバックなどの明記」は，ほぼすべての学部等で実施しているが，「シラバス作成に関する全教員対象のFD」について実施している学部等は2つ（松戸歯学部と短期大学部船橋校舎），実施予定が1つ（歯学部）となっていた。実践例として，松戸歯学部では，

全教員対象に FD 講演会でシラバスに関わる教示をおこない、新規教員採用者には毎年ワークショップでシラバスに関わる教示をおこなっている。また、短期大学部船橋校舎では、全専任教員対象の教職員研修会において、専門科目（導入科目）のシラバス作成のワークショップを開催した。

また、「担当教員以外の第三者によるシラバス内容の確認（項目⑮）」については、ほとんどすべての学部等（18 学部等）で実施されている。実施主体は学務委員会が中心であるが、シラバス点検のための委員会を別途設置しているケースもある。実践例として、法学部では、「シラバス第三者チェック実施検討小委員会」にて、平成 29 年度よりチェックしている。また、生物資源科学部では、シラバス第三者委員会（学内委員）を設置し、シラバスの記入内容についてチェックしている。

以上のことから、現在では作成されたシラバスのチェックは行われているといえる。ただし、重要なことは教員自身が質の高いシラバスを作成できるようになることであり、その点では、シラバス作成方法に関する全教員対象の FD が望まれる。

## 2. 教育の評価について

「教育業績の評価方法（例：ティーチングポートフォリオ）及び業績評価制度（項目②）」は、実施しているのは 4 学部、検討中が 6 学部等、実施していないと回答したのは 9 学部等であった。実践例として、生産工学部では、教育貢献賞として教育開発センター運営委員会が候補者を推薦、学部内での審議を経て受賞者を決定し、受賞者は学外もしくは学内で受賞内容を公表するようにしている。加えて、平成 27 年度からは、専任教員に対し、ティーチングポートフォリオの提出を義務付けている。松戸歯学部では、年度初めに自己点検評価シートを用いて教育業績を提出しており、ティーチングポートフォリオの作成の検討も考えている。また、危機管理学部では「教育改善報告書」により、各教員が授業評価アンケート結果等から達成度を振り返り、授業改善に役立てている。加えて、今後は業績評価制度の確立に向けて検討を進めている。医学部は授業担当回数、教育関連の委員会役職の有無、ワークショップの受講回数などを昇格審査の際に審議しているが、FD 教育活動の形成的評価としては実施していない。

「3 つのポリシーの点検評価への外部評価（地域社会・産業界等）の導入および学生代表者の参加（項目⑯）」については、昨年と同様、外部評価を導入している学部等は 2 つ（国際関係学部、短期大学部三島校舎）であり、学生代表者の参加を実施している学部等はない。実践例として、国際関係学部や短期大学部三島校舎では、近隣の地方自治体や青年会議所に教育方針、教育目標に関する意見を求めた。

以上のように、教員の教育そのものを学内外で評価する取り組みはまだ多くの学部で行われていない。全学 FD 委員会では、現在「ティーチングポートフォリオ」の内容について検討を進めているが、教育活動をどのような側面から、どのように評価するかについては更なる議論が必要であり、外部評価および学生代表者の参加の導入と合わせ、今後の課題であるといえる。

## 3. 教育の改善について

「授業内容や授業方法等に関する学生への意見聴取、学生からの意見の反映（項目④）」

は 10 学部等で実施されており、実践例として、商学部では「コメントボックス」を設け、学修に関するコメントについては学務担当と教務課長が対応し、必要があれば授業担当教員に改善を求めて、結果を学生に伝えている。また、医学部では委員会に学生に参加してもらい、意見聴取を行っている。また、毎月学年代表 3 名に集まってもらい、大学生生活全体について意見交換を行っているだけでなく、全学年を対象とした教職員学生懇談会を毎年開催しており、400 名の学生が参加している。文理学部では、学生が授業内容を提案できるプロジェクト教育科目を設置している。法学部では、学生からの自由記述をもとに、当該科目担当教員が「アクションプランシート」を作成し、次学期の授業で学生にフィードバックしている。さらに、こうしたアクションプランを教育改善に生かすために、FD 委員会に「PDCA 検討小委員会」を設置し、検討を始めている。歯学部では、平成 29 年 4 月より、学生 FD 活動として学生と教職員のしゃべり場を年 2 回実施している。今年度は、学生の意見を参考に、各教員に授業内容・方法の改善を求め、フィードバックすることを予定している。松戸歯学部では学年教育主任を中心に別にアンケートを実施し改善を図っている。特にオムニバス形式の総合講義ではそれぞれの講義担当者の評価を行い、担当者の変更を検討している。

また、「日本大学学修満足度向上調査」の集計データの教育改善への活用（項目①）」は、3 学部等が実施しており、12 学部等が検討中である。残り 4 学部等は実施・検討していない。実践例として、松戸歯学部では、個別調査内容を精査し、IR 小委員会で再分析し、その結果を教学センター運営委員会、学務委員会、FD 委員会で供覧し、授業改善の提言を行った。また、生産工学部では、教学 IR 室でアンケート結果をまとめ、学部内で公開したほか、各学会に関係すると思われる内容について、改善策を検討していた。

データの活用については、各学部において、多様な取り組みがなされている。データの活用を行う学部が増えていくことは重要ではあるが、それと同時に、「効果的な活用方法」の事例を学部間で共有し、個々の学部の実情に合致した形で取り組みが展開されていくことが望まれる。

### Ⅲ. FD 等教育開発・改善活動に係る講演会、ワークショップ、事例報告会などの開催

平成 30 年 10 月 1 日から令和元年 9 月 30 日までの 1 年間に、19 学部等において FD 等教育開発・改善活動に係る行事が企画・実施された。開催件数の合計は 56 件であった。最多は危機管理学部、歯学部、松戸歯学部の 6 件であった。内容を見てみると、「自主創造の基礎を考える（法学部）」、「他大学における授業評価アンケートの活用方法（文理学部）」、「90 分授業での集中力の持たせ方（経済学部）」、「e ラーニングを活用した授業実践と教育改善（商学部）」、「シラバス作成ワークショップ（危機管理学部）」、「国家試験問題の理解につながる診療参加型臨床実習を考える（歯学部）」など、実に多様な研修会やワークショップが開催された。興味深い取り組みとして、短期大学部船橋校舎は、教職員研修会の中で、新たな取組として「授業改善トライアル」を実施しており、教員が自身の授業改善トライアルを振り返り、PDCA サイクルを充実させていくことを目指している。

各学部等において扱われたテーマはいずれも現在の大学教育において重要なものであるといえる。ただし、教職員の参加率が低いものも見受けられるため、今後は、教員の負担感を下げ、短時間で大きな効果が得られる研修会やワークショップの開催が求められる。

#### Ⅳ. 学生による授業評価アンケートの実施

##### 1. 実施形態と対象

紙媒体による実施が 10 学部等（昨年は 7 学部等）、パソコン・携帯電話による実施が 8 学部等（昨年は 9 学部等）、両者の併用が 1 学部等であった。実施対象の授業については、一部の科目（スポーツ実技科目など）が除かれている場合もあるが、基本的には全ての授業が対象になっていた。

##### 2. 公開方法と分析方法

公開の対象は、担当教員のみ、ポータルサイトを通じての公開、ホームページを用いての公開といったように、学部等によって様々である。また、分析方法についても、科目単位の分析の他、教員個人ごと、学部全体、学科ごと、科目群単位、学年ごとの分析をおこなっている学部等が見られるなど、多様であった。

##### 3. 活用方法

活用方法については、教員個人に任せている学部等が多い（13 学部等）が、6 学部等では、フィードバックを行うとともに、教員に授業改善計画を作成してもらうなどの取り組みが行われていた。たとえば、法学部では、各教員が該当する授業で、受講生に改善計画等を説明するよう求めており、危機管理学部とスポーツ科学部では、教員に「教育改善計画書」を提出してもらっている。また、歯学部では、学生が改善してほしいと指摘した項目についてフィードバックコメントを提出するよう教員に依頼しており、短期大学部船橋校舎では、各教員がアンケート結果を確認後、授業改善につなげ、「授業改善トライアル」に授業改善の内容と成果を記録して報告している。

その他、松戸歯学部では、高評価の科目担当者数名に FD 講演会での講演を依頼しており、授業評価の高い教員の授業を参観するよう若手教員に義務付けている。また、商学部では、問題がある評価が多い教員については、教育改善委員会が改善の指導をするといった取り組みが行われている。

##### 4. アンケートに対する意見や質問

全学共通統一調査項目に対するポジティブな意見としては「全学部の学生が授業について何を思っているのかを考える一定の目安を把握できる」「他学部との比較ができて参考になる」などが見られた。一方で、ネガティブな意見としては、「学部ごとの単純平均値を算出し比較しても、授業規模、教育内容等の相違がある以上、教育改善の資料としては不十分である」「課題（レポート、小テスト等）に関する設問（担当教員から学生へのフィードバック等）について、授業時間との兼ね合いから履修登録者数が非常に多い科目では個別での対応は困難である」があり、その他の意見や質問として「全学共通統一調査項目の集計結果を、各学部でどのように活用しているのか教えてほしい」「授業の形態（講義、実験・実習、演習）、学生の出席率等によって集計を分けるとより意義のあるデータになる」などのコメントが見られた。

その他、アンケート全般に対しては「学修満足度調査等、学生が回答するアンケートの種類が多い。回収率の増加やより正確な回答を得るため、アンケート項目の整理及びアンケート実施時期の調整が必要と思われる（生産工学部）」「授業評価アンケートをまじめに回答にしている学生が少ない。具体的な例として、①全項目同じ番号を塗りつぶしている、②“まったくそう思わない”をすべて塗りつぶす等、悪意が感じられる学生がいる、③自由記述欄をほとんどの学生が記述していない等が挙げられる。今後、現行の授業アンケートを引き続き実施するかどうか、設問や実施方法の変更が必要であればどのようにするのか等、FD委員会で検討する予定である（国際関係学部、短期大学部三島校舎）」などの意見が見られた。

## 5. 今後の課題

学部等によって授業評価アンケートの実施率に大きな差が見られており、上記のように、2回とも100%の学部等がある一方で、2回とも50%に達しない学部等が2つあった。実施率を向上させることが今後の課題であるといえる。また、授業評価アンケートに寄せられたコメントからは、「アンケートの種類や項目が多い」「学生がまじめに回答していない」といった問題も伺える。アンケートの実施の意義を高めるためにも、内容を精選するだけでなく、教員がアンケート結果を授業に反映させる仕組みを作るとともに、学生にそうしたサイクルを明示し、アンケートに回答する意義が伝わるようにすることが必要になると思われる。

### （2）大学院研究科

大学院研究科におけるFD等教育開発・改善活動に関する調査は、平成23年度より毎年実施しているものであり、今回で8回目となる。今年度の調査は19研究科に依頼し、すべての研究科より回答を得た。調査項目に関しては、今年度はプレFDに関する項目（III-⑥）を追加した。

#### I. 大学院に係るFD等教育開発・改善活動組織

FD等教育開発・改善活動推進組織を有しているのは、大学院単独が11研究科、学部との合同が7研究科、また組織なしが1研究科あった。今後、組織的な取り組みができるような体制づくりが望まれる。

#### II. 大学院に係る組織的なFD等教育開発・改善活動

「①研究科に設置された各専攻の課程ごとの日本大学教育憲章に則った3ポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）の作成」に関する設問は、【実施しているが改善を検討】と【現在実施している】と回答した研究科が16と良好であるが、検討中や実施していないところもあり、改善が望まれる。「②学位（修士・博士）授与基準の明確化とその内容の教職員および学生への周知」についての設問では、検討中という2研究科を除いて実施、もしくは改善を検討中ということで良好であった。「③研究科単独でFD等教育開発・改善活動を報告する仕組みとその内容の教職員および学生への開示」に関する設問では、【現在実施している】、もしくは【実施しているが改善を検討】は半数以下の6研究科にとどまっており、改善が必要とされる。「④研究科単独で学外研修

会等への参加および講師派遣を推進する仕組みとその活動実績」「⑤研究科単独で学内における講演会、セミナー、シンポジウム等への非常勤教員の参加を図る仕組みとその活動実績」「⑥研究科単独で教員を対象としたFD等教育開発・改善活動にかかわるアンケートの実施」「⑦研究科単独で担当教員以外の第三者によるシラバスを確認する仕組みとその活動実績」に関しては、実施していない研究科が大半を占めていることから今後改善を図る必要がある。

### III. 大学院学生対する「学位の質保証」に係る組織的な取り組み

「①大学院のグローバル化に対応するための取り組み」に関しては、【現在実施している】と【実施しているが改善を検討】が昨年よりも増えて14研究科となっている。この項目に関しては、多くの研究科が独自の計画を立てて取り組んでいることが分かった。「②研究テーマや研究方法、詳細な工夫を記載した研究計画の作成や学生と教員との間で学位授与に必要なプロセスの共有」「③複数の指導教員や異なる専攻の教員、学外審査員を加えた論文指導体制の構築」「④研究の進捗状況や理解度等を適切に把握するための中間発表やそれに準ずる仕組みの整備」の設問では、【現在実施している】と【実施しているが改善を検討】を合わせると、②では13研究科、③は15研究科、④は17研究科となっており、改善の取り組みが進んでいることが分かった。ただ、「⑤学生のキャリアを見据えた組織的な研究指導体制の実施」に関しては、【現在実施している】と【実施しているが改善を検討】を合わせても6研究科にとどまった。さらに今回より新たに加わった設問「⑥将来を見据えた教育能力向上に向けた学修の場の提供」については、【現在実施している】と【現在実施しているが改善を検討】の合計でも7研究科にとどまっている。

### IV. 大学院FD等教育開発・改善活動に係る講演会、ワークショップ、シンポジウムなどの開催

今年度は、14研究科において、講演会、ワークショップ、シンポジウムなど、合計39件企画・実施された。そのほとんどが学部との共催であった。

### V. 大学院生による授業評価アンケートの実施（対象：平成30年度後期・令和元年度前期実施分）

平成30年度後期と令和元年度前期において授業評価アンケートについて博士前期（修士）課程で実施されたのは12研究科、博士後期課程（博士）過程で実施されたのは10研究科であった。少人数による授業が多いため、学部比べて実施が増えない状況にある。

### VI. 資料提供

資料提供については昨年度同様に、「学内利用のみ」とするものが多い。

#### 1-② 学生による授業評価アンケート結果の全学的な活用に係る諸検討

##### （1）全学的な調査項目に関する改善について

昨年度は、全学的な調査項目の見直しを行い、授業回数が学部によって違いがあることを考慮し、従来の設問2の文言の修正を行った。また、アンケートの集計結果にある標準偏

差について活用された実績がないことなどを理由に削除を行った。こうした検討の中で、日本大学教育状況調査票（仮称）に関連して、授業評価アンケートの評価をポイントに使う際、全学的に関連する項目を検討しても良いのではないかという意見がワーキンググループにおいて提示された。これを受けて、令和元年度はこの取り扱いについての検討を主に行った。

日本大学教育状況調査票（仮称）の「成果」項目については、ポイントが教員評価に直接関連するため、学部や授業の違いによってポイントに大きな差が出ないようにする配慮が必要がある。この点を検討した結果、授業の総合的な満足度を尋ねる項目を追加することになった。現行の全学的な調査項目は6つなので、次回からは項目が7つになる。すでに運用されている授業評価アンケートに、授業の総合的な満足度を問う項目がある学部はそのまま運用する。例えば、通信教育部の授業評価アンケートには「この授業は、総合的にみて満足度は高かったですか」という項目があるので、これをそのまま使用する。相当する項目が現在ない学部に関しては新規に追加をお願いすることになった。

## （２）全学的な調査項目に限らない各学部の調査結果の（教員、学生などへの）公表方法及び活用方法等の検討について

日本大学は、16 学部を要する総合大学である。学部ごとに一定の教員・施設といった教育資源の下で、教育効果が最大となるようにカリキュラムの提供とクラス編成が行われている。そのため、学部によって平均的なクラスサイズも異なれば、教育方法も多様となる。また、演習系の科目が中心となる学部もあれば、講義形式の科目が中心になる学部もある。そのため、授業評価アンケートの分析と活用、教員・学生への公表方法も、学部ごと、または講義の性質に応じて最適化していかなければならない。

今年度においては、全学的な調査項目の改善を実施されたが、各学部単位での活用や公表方法までは議論が至らなかった。一連の議論では、授業評価の結果は、小規模クラスと大クラス、実習系・演習系のクラスと座学のクラス、初年次教育と専門クラスなどで評価がばらつく可能性があることが指摘された。そのため、各学部においては、それぞれの講義の性質に基づく平均値の集計単位と各講義の位置づけを明確にし、教員にフィードバックしていくことで、一層情報の価値が高まる。できるだけ分散が小さくなるように集計単位を学部単位で設置していくことの必要性は理解できるが、その具体的な方法等については今後の課題となる。

### 1－③ 教員の教育業績評価方法等に係る諸検討

#### （１）ティーチングポートフォリオの導入の検討について（「成果」項目以外の検討）

ティーチングポートフォリオの導入の検討について、生産工学部で使用中のティーチングポートフォリオ（TP）をベースに、より簡易に全学の教員が記載できるように日本大学教育状況調査票（仮称）として完成を試みた。

日本大学教育状況調査票（仮称）の「成果」項目以外の部分については、ティーチングポートフォリオチャート（TP チャート）をベースにした教育状況の調査票を作成し、概ね完成させた。これは、まず現在の教育活動を列挙し、その教育活動における改善および努力を記載する。次いで教育活動によって得られた学生の成果および学生や第三者からの評価を記載する。そして自らの教育経験において、いつも行っている方法、最重要視してい

ること、自分の教育を特徴づける方法を基に、自分の教育の方針を導き出し、自分の教育理念を見出すことができる。さらには自分の教育活動における今後の短期目標と長期目標を設定するまでのプロセスを経験できる。このTPチャートをベースにした日本大学教育状況調査票（仮称）では、自分で振り返った教育理念に対して、日本大学教育憲章との関連性についても記載する項目を設定し、日本大学独自のものとした。

今年度は、まずこの日本大学教育状況調査票（仮称）の「成果」項目以外の部分について、全学FD委員会メンバーが記載した結果をもとにブラッシュアップが行われた。さらに調査・分析ワーキンググループでも検討を行い、「日本大学教育憲章との関連性」の項目について「日本大学教育憲章との関わり」では範囲が広すぎて記入しづらいとの意見があり「ディプロマポリシーとの関連性」と訂正した。

また「成果」項目については、直接的な教員評価につながることから、より慎重なブラッシュアップを行った。まずは、FDについてどのくらい時間を費やしているか評価される必要があり、最初のページの担当科目欄に「講義担当時間数」を加えた。この部分は「成果」部分とは離れているが、「成果」に反映されるべき内容との議論がされた。さらに、8月に学務担当の教員を対象とした教学推進ミーティングを開催し、3日目には、藤井リーダーの講演を基にして日本大学教育状況調査票（仮称）を実際に記載する作業を行った。参加者からはアンケートを通じ約8割がTPの重要性を認識しているとの回答を得ることができた。ここで芸術学部の先生からアンケートでご意見いただいているとおり、学部により特異性があるように思われるので、成果については学部毎の運用で良いと考えられたが、今後、人事評価のことを考えると、部分的にでも全学的に統一し、一定の基準により評価できるべきと考えられる。この点については、さらなる議論を基に改善が必要である。現在この内容で実際の運用についての時期等は検討中であるので、来年度に向けて継続的な審議を続けたい。

（添付資料）：日本大学教育状況調査票（仮称）

## 2 FD推進センター基本計画（中期計画）を踏まえた調査・分析ワーキンググループとしての総括

令和元年度は、FD推進センターが掲げている中期計画（3年間）の2年目に当たる。

中期計画である「質保証体制の充実に資する本学FDの在り方の調査と方針の明確化：マクロ・ミドル・ミクロそれぞれの観点から補完する諸方策等の検討－教育業績評価・ポートフォリオ等の在り方－」では、昨年度と同様に「教員の教育業績評価方法等に係わる諸検討」に力点を置き、今年度は、（1）日本大学教育状況調査票（仮称）の導入部の検討と（2）教育の成果についての内容の完成を目指した。（1）については、ティーチングポートフォリオチャート（TPチャート）をベースにした教育状況の調査票を作成した。（2）の項目については、全学FD委員会メンバーが記載した結果をもとに、より慎重なブラッシュアップが行われ、重要度を考慮した点数化を行い、教育貢献賞などの評価に活用することが予定されている。

学部、短期大学部及び大学院を対象としている「FD等教育開発・改善活動に関する調査」

については、毎年実施されている活動である。学部・短期大学部に関しては、昨年度と同様の設問で調査が行われた。大学院については、「将来を見据えた教育能力向上に向けた学修の場の提供」についての設問が追加された。

学部・短期大学部においては、「①「日本大学学修満足度向上調査」の集計データの教育改善への活用」については、3学部等で実施され、12学部等が検討中であるとの回答が得られた。今後、多くの学部等で活用されるような方策が必要であると考えられる。中期計画と関連する設問である「②教育業績の評価方法（例：ティーチングポートフォリオ）及び業績評価制度」に関しては、4学部等で優れた事例が挙げられているが、実施していないと回答したのは9学部等であった。また、「④授業内容や授業方法等に関する学生への意見聴取、学生からの意見の反映」は10学部等で実施されているが、全ての学部等で実施されることが望まれる。大学院研究科においては、プレFDに関する追加設問については、【現在実施している】と【現在実施しているが改善を検討】と回答したのが7研究科であり、すべての研究科に実施事例を共有することが必要である。

「学生による授業評価アンケート結果の全学的な活用に係る諸検討」では、主に日本大学教育状況調査票（仮称）に関連して、授業評価アンケートの評価をポイントに使う際、全学的に関連する項目について検討され、学部や授業の違いによってポイントに大きな差が出ないように配慮するため、授業の総合的な満足度を尋ねる項目を追加することになった。また、全学的な調査項目の改善を実施されたが、各学部単位での活用や公表方法までは議論が至らなかった。

調査・分析ワーキンググループに係る令和2年度活動計画は、次のとおりとする。

#### 令和2年度活動計画

- 1 FD等教育開発・改善活動に関する調査の実施
- 2 学生による授業評価アンケート結果の全学的な活用に係る諸検討
- 3 教員の教育業績評価方法等に係る諸検討

### 1 FD等教育開発・改善活動に関する調査の実施

- ① 本学学部及び短期大学部におけるFD活動の実態を継続的に調査することにより、FD活動の進捗状況や経年変化を把握する
- ② 本学大学院におけるFD活動の実態を継続的に調査することにより、FD活動の進捗状況や経年変化を把握する。

### 2 学生による授業評価アンケート結果の全学的な活用に係る諸検討

学生による授業評価アンケートに係る調査項目等の全学統一調査項目に関して調査結果のデータ分析を引き続き行い、全学的な調査項目に関する改善の要否を検討する。また、教育の質保証につながる効果的な調査結果の公表方法及び活用方法等の検討を行う。

### 3 教員の教育業績評価方法等に係る諸検討

日本大学教育憲章を起点とした本学におけるティーチング・ポートフォリオ（仮称：日本大学教育状況調査票）の在り方とティーチング・ポートフォリオの全学導入に向けた検討を行う。また，本学における教育活動の質向上，教員のモチベーション向上及び教育業績向上への誘導を目的とした教育業績評価方法の検討を行う。

以 上



**教育の方針（なぜその方法を用いているのか）**

本欄には以下の観点を参考に、なぜ書き出した「方法」を用いているのか、といった理由を考えてください。グループ化された方法ごとに、その理由を「方針」としてあげてください。「なぜ学生にとってこの方法が大切なのか?」「この方法を使って学生にどう成長してほしいのか?」「学問の何をどのように学んでほしいのか?」

例) (方法)「パワーポイントの活用」→(方針)「授業内容の理解を促進する」

(方法)→(方針)

(方法)→(方針)

(方法)→(方針)

**教育の理念（なぜやっているのか）**

本欄には、「方針」を用いている理由を基に自分自身の教育理念について述べてください。どのような学生を育てたいのか、それはなぜなのか、それで教育の責任は果たせるのか、などといったことに答えるように記載してください。次の観点が理念を見出すヒントになります。どう成長してほしいか。教員としてどうありたいか。学問の何をどのように学んでほしいか。

**ディプロマポリシーとの関連性**

上記の「教育の理念」について、各部科校におけるディプロマポリシーとの関連性を述べてください（「自主創造」の3つの構成要素及びその能力のうち、どれに相当するか）。

ディプロマポリシーとの関連性

### 今後の目標（これからどうするのか）

以上を踏まえて、今後どのようにするのかについて、短期目標と長期目標とに分けて記載してください。短期目標には数年以内に必ず達成すべき目標を、長期目標には夢を語るくらいのイメージの内容を記載してください。今までの教育活動を振り返った上で目標を設定するので、この部分は PDCA サイクルの Check にあたります。また、目標を達成するように教育活動を進めていくことになるので、この部分は Action への礎になります。短期目標の達成度を確認すれば、自分自身の教育活動について PDCA サイクルが回ることになります。

#### 短期目標

#### 長期目標

### その他（自分の研究との関連、改善・工夫など）

本欄には、自分の活動で強調したいことがあれば、例えば、教育重視の教員なら FD 活動を、研究重視の教員なら研究との関連を、学内活動重視の教員なら、学内活動との関連を、それぞれ重点的に記載してください。

|                                                                                                                                                                                                                                                             |             |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| <b>成果（どうだったか）</b><br>本欄には、教育目的・方法で記載した方法で教育した結果、どのような成果が得られたかについて記載してください。この部分がPDCAサイクルのCheckにあたります。なお、この項目で求めた教育業績のポイントにより教育貢献賞の受賞者を選びます。成果が得られたことを示すためのエビデンス（根拠資料）の提出を要求する場合があります。                                                                        |             |
| <b>① 授業に関する項目</b><br><b>((1) - (6) のポイントの合計 最大65ポイント)</b>                                                                                                                                                                                                   | <b>ポイント</b> |
| (1) 授業評価アンケート（最大15ポイント）                                                                                                                                                                                                                                     | ポイント        |
| 授業評価アンケートの総合的な評価項目（「この授業は総合的にみて満足度は高かったですか」。など）の結果を用いて評価します。<br>・前年度の同一科目より0.1ポイント以上高い【0.1ポイントの増加につき3ポイント】<br>・当該学期の学科・系の平均値よりも0.2ポイント以上高い【0.2ポイントの高いごとに3ポイント】<br>担当したすべての科目およびクラスを対象とし、上記の両方を用いて求めても構いません。最大15ポイントまで加点できます。対象とした科目名とその科目のポイントを以下に記載してください。 |             |
| （記載例 ○○概論[前年度より0.1ポイントの増加]，△△演習[学科・系の平均値より0.2ポイントの増加]）                                                                                                                                                                                                      |             |
| (2) 教材・資料の作成，開発（最大10ポイント）                                                                                                                                                                                                                                   | ポイント        |
| ・当該年度に特筆すべき教材・資料の作成，開発が2件以上ある【10ポイント】<br>・当該年度に特筆すべき教材・資料の作成，開発が1件ある【5ポイント】<br>ポイント算出の対象とした科目名，教材・資料の概要を以下に記載してください。<br>※「特筆すべき」は例として，反転授業などのビデオ教材やMoodleなどのeラーニング教材を指します。<br>通常のパワーポイント資料や配布資料教材は対象としておりません。                                               |             |
|                                                                                                                                                                                                                                                             |             |
| (3) 教科書の作成，発行（最大10ポイント）                                                                                                                                                                                                                                     | ポイント        |
| ・当該年度に教科書，参考書を執筆した【5ページ毎に1ポイント】<br>・当該年度に教科書，参考書を再販した【1件につき2ポイント】<br>・当該年度に教科書，参考書（発行のない独自のもの）を作成した【5ページ毎に0.5ポイント】<br>ポイント算出の対象とした科目名，教科書に関する事項（著者，書名，発行年月日，発行所等）を以下に記載してください。再販に関しては，ページ数は関係なく，1件につき2ポイントとします。また，教科書・参考書の定義についてはシラバスに明記しているものとします。         |             |
|                                                                                                                                                                                                                                                             |             |

| (4) 授業改善 (最大 20 ポイント)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     | ポイント |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|
| <p>当該年度の前期及び後期の担当科目について、授業改善の工夫、改善点を自己評価します。1 科目に関してでも複数科目に関してでも構いませんが、個人の改善に関してのみ評価します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・FD・SD 研修会の講演で取り上げる題材として提案できる内容の改善を行った【15 ポイント】</li> <li>・「学生の授業態度が積極的になり、自主性が増した。学生の理解度が向上した。」等学生の態度に変化が見られるような改善を行った【10 ポイント】</li> <li>・「課題の内容を変更した。シラバスを意識させ、予習を重要視した授業を行った。」等の改善をしたが、目に見える効果が得られなかった【5 ポイント】</li> <li>・DP・CP を意識した教育改善を行った【5 ポイント】</li> </ul> <p>ポイント算出の対象とした授業改善とそれぞれのポイントを以下に記載してください。</p> <p>※学生の理解度や態度の変化については、授業評価アンケートの結果をエビデンスとしてください。</p> |      |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |      |
| (5) 授業参観 (最大 5 ポイント)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | ポイント |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・他の教員の 30 分以上の授業参観を 2 件以上行った【5 ポイント】</li> <li>・他の教員の 30 分以上の授業参観を 1 件行った【3 ポイント】</li> </ul> <p>授業参観した科目名等を以下に記載して下さい (授業参観報告書を教務課へ提出した参観のみが対象になります)。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |      |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |      |

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |      |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|
| (6) その他、在学生に対する授業に関する内容 (最大 5 ポイント)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | ポイント |
| <p>在学生に対する授業に関する教育活動であり、特別な補習や特別な講座の開設などが含まれます。</p> <p>・上記のような内容の教育活動を実施した【5 ポイント】</p> <p>ポイント算出の対象とした活動を以下に記載してください。</p> <p>※特別な補習や資格獲得のための講座を指します。</p>                                                                                                                                                                                                                                                   |      |
| <p>② 教職員を対象とした教育活動に関する項目</p> <p>論文・口頭発表等の内容が研究論文等としても評価される場合、教育論文等としての評価が高いものだけ記載する。その場合、それぞれのポイントの 1/2 を記載する。</p> <p>(1) - (5) のポイントの合計          最大 23 ポイント</p>                                                                                                                                                                                                                                           |      |
| (1) 学内外での教育論文または論文賞受賞 (最大 20 ポイント)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         | ポイント |
| <p>・当該年度に発行した教育に関する論文 (日本大学 FD 研究 (研究論文) を含む) があり筆頭者であるか、教育に関する論文賞等の受賞がある【1 編あたり 10 ポイント】</p> <p>・当該年度に発行した教育に関する論文 (日本大学 FD 研究 (研究論文) を含む) があり共著者である【1 編あたり 3 ポイント】</p> <p>・日本大学 FD 研究 (活動報告、資料紹介) に掲載された原稿があり筆頭者である【1 編あたり 5 ポイント】</p> <p>・日本大学 FD 研究 (活動報告、資料紹介) に掲載された原稿があり共著者である【1 編あたり 3 ポイント】</p> <p>ポイント算出の対象とした論文のタイトル、著者、雑誌名等を以下に記載してください。</p> <p>※日本大学 FD ガイドブックや各学部の FD 委員会ニュース等は対象に含みません。</p> |      |
| (2) 教育に関する講演または口頭発表 (学・協会における学会、研究発表会など) (最大 20 ポイント)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | ポイント |
| <p>・教育に関する講演または口頭発表がある【1 件あたり 5 ポイント】</p> <p>・教育に関する発表の共同研究者である【1 件あたり 2 ポイント】</p> <p>ポイント算出の対象とした発表の発表年月日、タイトル、著者、発表学・教協会名等を以下に記載してください。</p> <p>※FD・SD や授業改善に係る内容に限定します。</p>                                                                                                                                                                                                                              |      |

|                                                                                                      |      |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|
| (3) 学内外での教育活動への参加（学・協会における研究発表会，講演会，その他の学内外の教育活動への参加など）（最大１５ポイント）                                    | ポイント |
| ・教育に関する研修会，講習会などに参加した【１件あたり３ポイント】<br>・ポイント算出の対象とした研修会，講習会等の名称及び活動の概要を以下に記載してください。                    |      |
|                                                                                                      |      |
| (4) 全国私立大学 FD 連携フォーラム（JPFF）「実践的 FD プログラムオンデマンド講義」の視聴，レポート提出（最大１５ポイント）                                | ポイント |
| ・実践的 FD プログラムオンデマンド講義を視聴しレポートを作成した【１講義提出につき３ポイント】<br>視聴した講義名を以下に記載してください（レポートを教務課へ提出した講義のみが対象になります）。 |      |
|                                                                                                      |      |
| (5) その他，教職員を対象とした教育活動（FD・SD セミナー等の講師など）（最大１０ポイント）                                                    | ポイント |
| ・FD・SD セミナー等の講師を務めた【１件あたり３ポイント】<br>ポイント算出の対象とした活動の概要を以下に記載してください。                                    |      |
|                                                                                                      |      |

|                                                                                                                                                       |      |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|
| ③授業以外の教育についての項目<br>(1) - (2) のポイントの合計    最大7ポイント)                                                                                                     | ポイント |
| (1) 学内外での学生・院生の発表・受賞における指導 (最大5ポイント)                                                                                                                  | ポイント |
| <p>・学会等で学生・院生の発表を指導し、受賞に至った【5ポイント】<br/>         ポイント算出の対象とした発表のタイトル、著者、学会名、受賞名称、学生・院生名等を以下に記載してください。<br/>         ※ゼミ生や研究指導を行っている学生に限定してください。</p>     |      |
|                                                                                                                                                       |      |
| (2) その他、授業以外の教育に関する内容 (最大2ポイント)                                                                                                                       | ポイント |
| <p>学部や学会等が主催する大学生、高校生等を対象とした教育活動であり、模擬授業、出張授業や理科教室なども含まれます。<br/>         ・模擬授業、出張授業等を担当した【2ポイント】<br/>         ポイント算出の対象とした活動のイベント名、対象者等を記載してください。</p> |      |
|                                                                                                                                                       |      |
| 教育業績のポイントの合計 (①-③のポイントの合計)                                                                                                                            | ポイント |

令和元年度

## プログラムワーキンググループ活動報告



日本大学 FD 推進センター

〔全学 FD 委員会プログラムワーキンググループ〕



プログラムワーキンググループ（以下、プログラムWG）に係る令和元年度における活動内容及び総括は、FD推進センター基本計画（中期計画）並びに令和元年度活動計画に基づき、次のとおりである。

- 1 令和元年度活動計画
  - ① 全学FDワークショップの企画・開催
  - ② 令和元年度 日本大学 学生FD CHAmiT」の企画・開催
  - ③ 新任教員を対象としたFDプログラムの検討及び企画・開催
  - ④ 日本大学オンデマンド及び全国私立大学FD連携フォーラム実践的FDプログラムの活用の検討
  - ⑤ 全学FDシンポジウムの企画・開催に向けた検討
  - ⑥ 令和元年度 日本大学 教学推進ミーティング in 軽井沢 ～NE-Consensus～企画・開催
- 2 FD推進センター基本計画（中期計画）を踏まえたプログラムWGとしての総括

#### 1-① 全学FDワークショップの企画・開催

・テーマ

「大学教育における課題の解決に向けて

ー教育能力の開発（Faculty development）を企画・運営できる人材の育成ー」

・日 時

第1回目 令和元年9月5日（木）・ 6日（金）

第2回目 令和元年9月9日（月）・ 10日（火）

・会 場 日本大学会館2階大講堂

・対象者 日本大学全学部教職員のうち、以下の条件に該当する者

- ① FD等教育開発を現在担当している、あるいは、ファカルティ・ディベロッパーとしてFDを企画・運営していくことが見込まれる教員 各学部等から1名
- ② 教員と共に協働し、教育能力の開発を企画・運営する職員 各学部等から1名
- ③ 令和元年度 新任教員FDワークショップの参加対象者 各学部等から3名  
（単科の学部・通信教育部・短大各校舎は1名）

・参加者

第1回目 39名（教員34名（新任教員22名）、職員 5名）

第2回目 35名（教員24名（新任教員15名）、職員 11名）

・タスクフォース

第1回目 11名

第2回目 10名

・企画運営（全学FD委員会プログラムWG） 9名

・趣旨

全学FDワークショップの趣旨は、良質な人材養成のために、各部科校においてFD等教育開発を担当する教職員が一堂に会し、教育分野における概念や手法を取り込みつつ、ニーズに沿った検討を行い、積極的討議と体験を通して、実践的な教育の在り方を修得し、ファカルティ・ディベロッパー（FDer）として学部等で活躍できる人材を育成することにある。全学FDワークショップは2013年度より始まり、今回で7年目である。2015年度（第

3回)からは、対象者を教員及び職員として開催している。

・タスクフォースミーティング

第1回タスクフォースミーティング

実施日：令和元年7月3日(水) 18:00～20:00

内 容：実施組織(役割分担)の決定、実施スケジュールの確認、配布資料及びアンケート等の確認と検討

会 場：日本大学会館9階907A会議室

第2回タスクフォースミーティング

実施日：令和元年7月29日(月) 15:00～19:00

内 容：企画・運営の確認と検討、配布資料及びアンケート等の確認と検討、予行演習

会 場：日本大学会館9階907A会議室

#### 【第1回令和元年度全学FDワークショップ】

・第1日目 令和元年9月5日(木)

10:00より開会式が行われ、小田司副学長からご挨拶をいただいた。

10:05より講演1「日本大学の教育と教育改善活動－21世紀に求められている大学のあるべき姿と本学の動向」を全学FD委員会プログラムWGメンバーの薬学部・亀井美和子教授が講演し、続いて、オリエンテーションが行われた。オリエンテーションでは、まず、タスクフォースの危機管理学部・宮脇健専任講師の進行でアイスブレイク(他己紹介)が行われ、その後、タスクフォースの薬学部・張替直輝教授の進行で総合プレアンケートが実施された。その後、タスクフォースの生物資源科学部・山下正道准教授がワークショップの進め方を説明した。

11:40よりタスクフォースの理工学部・桑本剛准教授がKJ法について説明した後、参加者が6グループに分かれ、「初年次教育の問題点・問題点への対応」というテーマで、昼食を摂りながらグループ討議を行い、引き続き各グループが発表し、全員で討議を行った。続いて、桑本准教授が二次元展開法について説明した後、「初年次教育の問題点・問題点への対応」というテーマで、二次元展開法を用いてグループ討議を行い、引き続き各グループが発表し、全員で討議を行った。

14:53よりタスクフォースの法学部・石川徳幸准教授が学修目標について説明した後、「コース・ユニットの決定」についてグループ討議し、各グループが発表し、全員で討議を行った。

17:28より、タスクフォースの薬学部・神雄太主任と三軒茶屋キャンパス・藤巻辰崇課員により第1日目の評価のアンケート及び集計が行われた。

17:38より学修目標の修正についてグループ討議し、第2日目の学修目標の修正②に向けた指摘事項等の確認を行い、1日目の作業を終了とした。

18:00より情報交換会を全学FD委員会プログラムWGメンバーの危機管理学部・山添譲准教授の司会進行で行った。情報交換会終了後、タスクフォースミーティングを行った。

・第2日目 令和元年9月6日(金)

9:00よりタスクフォースの危機管理学部・宮脇健専任講師が第1日目の振り返りを行い、その後、各グループで1日目に引き続き、学修目標の修正を行った。

9:40 よりタスクフォースの法学部・杉本純子教授が学修方略について説明し、その後、各グループで討議が行われ、各グループの発表・全員での討議が行われた。

12:30 よりタスクフォースのスポーツ科学部・原怜来専任講師がプレ評価演習を行い、引き続き、学修評価について説明した。その後、12:57 より各グループで昼食をとりながら討議が行われ、14:47 より各グループの発表・全員での討議、ポスト評価演習が行われた。さらに、タスクフォースの薬学部・神雄太主任と三軒茶屋キャンパス・藤巻辰崇課員が総合ポストアンケートと第2日目の評価を実施し、集計が行われた。

16:20 より全学FD委員会プログラムWGメンバーの薬学部・亀井美和子教授が本年度の新しい試みである「教育憲章の評価比率の検討」を説明し、各グループで討議が行われ、プロダクトを作成した。引き続き、スポーツ科学部・原怜来専任講師によりプレとポストの評価演習の概説が行われた。さらに、薬学部・張替直輝教授が総合プレ・ポストアンケートの概説を行い、危機管理学部・宮脇健専任講師が第2日目の振り返りを行った。

17:20 より全学FD委員会アンケートを実施し、引き続き、全学FD委員会プログラムWGメンバーの危機管理学部・山添謙准教授の司会進行で閉会式が行われ、タスクフォースによるプロダクトの評価結果が公表された後、参加者、タスクフォース、全学FD委員会プログラムWGメンバーから所感や感想が述べられた。その後、薬学部・亀井美和子教授から修了証授与、感謝状贈呈が行われ、集合写真の撮影後、閉会した。

#### 【第2回令和元年度全学FDワークショップ】

##### ・第1日目 令和元年9月9日（月）

当初の予定は10:00 から開会式が行われる予定であったが、台風の影響により12:30 より開始した。参加者は、各学部の教職員31名であった。まず、全学FD委員会プログラムWGリーダーの松戸歯学部・河相安彦教授による「日本大学の教育と教育改善活動—21世紀に求められている大学のあるべき姿と本学の動向—」と題した講演が行われた。講演終了後、オリエンテーションとして、タスクフォースの医学部・内ヶ崎西作准教授の担当による「アイスブレイキング」で自己他己紹介を行った。また、タスクフォースの歯学部・菅野直之准教授の担当で「総合プレアンケート」を行った。さらに、タスクフォースの工学部・杉浦隆次准教授の担当で「ワークショップの進め方」を説明した。

13:50 より、「初年次教育の問題点・問題点への対応」というテーマで、タスクフォースの短期大学部（三島校舎）・安西なつめ助教の担当による「KJ法」及び「二次元展開法」について説明した後、参加者が5グループに分かれグループ討議を行った。15:28 より、各グループで話し合った内容を7分間で発表し、全員で討議を行った。

16:05 より、タスクフォースの経済学部・久井田直之専任講師の担当で「学修目標」について説明した後、「コース・ユニットの決定」についてグループ討議した内容を各グループが8分間で発表し、全員で討議を行った。その後、第1日目の評価についてのアンケート集計結果の説明をタスクフォースの商学部・烏山芳織主任及び工学部・横田大輔課員の担当により行った。

18:40 より、情報交換会を全学FD委員会プログラムWGメンバーの短期大学部（三島校舎）・石川元康准教授の司会進行で行った。

##### ・第2日目 令和元年9月10日（火）

9:00より、タスクフォースの医学部・内ヶ崎西作准教授の担当による第1日目の振り返りが行われ、その後各グループに分かれて昨日に引き続き、「学修目標の修正」について討議を行った。

9:40より、タスクフォースのスポーツ科学部・近藤克之専任講師の担当による「学修方略」についての説明があり、その後各グループで討議した内容を各グループが10分間で発表し、全員で討議を行った。

12:20より、タスクフォースの国際関係学部・杉本宏昭准教授の担当による「プレ評価演習」及び「学修評価」について説明があり、その後各グループに分かれて昼食を摂りながら討議を行った。14:37から、グループ討議した内容を各グループが12分間で発表し、全員で討議を行った。その後、ポスト評価演習を行った。最後に、タスクフォースの商学部・烏山芳織主任及び工学部・横田大輔課員の担当により総合ポストアンケートと第2日目の評価の集計結果について説明があった。

16:00より、FD推進センター副センター長、全学FD委員会プログラムWGリーダーの松戸歯学部・河相安彦教授による「教育憲章の評価比率の検討」と題した講演が行われた。講演終了後、プロダクトをまとめ、提出を行った後、評価演習プレ・ポスト概説をタスクフォースの国際関係学部・杉本宏昭准教授が行い、総合プレアンケート・ポストアンケートの概説と第2日目の振り返りについて、歯学部・菅野直之准教授と医学部・内ヶ崎西作准教授が説明を行った。

17:05より、全学FD委員会アンケートを実施し、引き続き、全学FD委員会プログラムWGメンバーの短期大学部(船橋校舎)・佐藤秀人教授の司会進行で閉会式が行われ、参加者、タスクフォース、全学FD委員会プログラムWGメンバーから所感や感想が述べられた。その後、松戸歯学部・河相安彦教授から参加者に修了証が授与され、タスクフォースと全学FD委員会プログラムWGメンバーには感謝状が贈呈された。集合写真の撮影後、無事閉会した。

各グループの構成メンバーは、文系、理系、医療系及び職員が混ざり合い、5～7人のグループとなっていた。各グループでは様々な意見が出ていたので今後も同様なグループ編成が好ましいと思われる。ワークショップでは、「初年次教育の問題点・問題点への対応」をテーマとして、「日本大学マインド(自主創造型パーソン)養成コース」というコース名を設定し、各グループでユニット(科目)名を決定した。なお、第2回目のユニットについては、Aグループ「未来を拓く基礎」、Bグループ「コミュニケーションの基礎」、Cグループ「4年後の自分の将来を考える」、Dグループ「スマホの中身をのぞいて未来のコミュニケーションツールを考える」、Eグループ「グローバル社会におけるキャリア形成」であった。「コミュニケーション」という言葉が2グループ、「キャリア・将来」という言葉が2グループで使われていた。初年次教育において、コミュニケーション力や就職への準備が必要であることが推察される。

今年度から、学修目標、学修方略、学修評価、評価配分についてのExcelワークシートを作成し、各グループの成果を入力した。このExcelワークシートにより、日本大学教育憲章で示されている8つの能力の有無が一目でわかり、シラバス作成に対して効果的な資料となっていた。

参加者のアンケート結果では、FDへの理解が深まったことや各学部での利用を考えている方が多かった。運営面では、タスクフォースの方々への評価が高かった。また、第2回

目は台風により開始時間を2時間繰り下げたこともあり、作業時間が短い、休憩時間を確保して欲しいなどの意見があった。全体的には肯定的な意見が多く、FD活動の重要性、必要性が理解されたワークショップであったと推察される。

#### 1-② 令和元年度 日本大学 学生 FD CHAmiT の企画・開催

「令和元年度日本大学学生FD CHAmiT」の開催

- ・日 時：令和元年12月8日（日）
- ・会 場：日本大学理工学部（駿河台校舎）及び歯学部
- ・対象者：日本大学全学部全学科の学生・教員・職員代表
- ・参加者：285名（スタッフを含む、申込者数は320名）

学生、教員、職員が三位一体となって大学教育を改革・改善していくFD活動において、学生が主体となって取り組む学生FDの一環として、令和元年12月8日に「令和元年度日本大学学生FD CHAmiT」が開催された。平成25年度からスタートした学生FD CHAmiTは、今回で7回目となる。

企画・運営に当たっては、学生スタッフとして、コアスタッフ7名、学生スタッフ42名（各学部等からの推薦枠33名と公募枠9名）が、企画検討（事前のミーティング・準備等を含む）及び当日の運営（オープニング、エンディング、しゃべり場でのファシリテーター、その他）を担い、全学FD委員会プログラムWGメンバーと学務部学務課職員がサポートした。また、当日は、理工学部、歯学部の教職員の協力を得た。

開催当日までに、学生コアスタッフミーティング2回、学生コアスタッフ合宿1回、学生スタッフミーティング5回、前日リハーサル・設営が実施された。

##### ○第1回学生コアスタッフミーティング

実施日：令和元年6月8日（土）13：00～17：05

内 容：顔合わせ、自己紹介、CHAmiT概要説明、昨年度体験談、代表選出、スケジュール検討、企画案検討

会 場：日本大学会館9階907A会議室

##### ○第1回学生スタッフミーティング

実施日：令和元年6月22日（土）13：00～17：30

内 容：自己紹介、CHAmiT概要説明、ファシリテーションの説明（吉野大輔准教授）

会 場：日本大学会館9階907A会議室

##### ○第2回学生スタッフミーティング

実施日：令和元年7月6日（土）

内 容：講義「日本大学の教育と教育改善活動」（河相安彦教授）、会場下見、企画骨子決定、キャッチフレーズ検討、一般スタッフ班分け

会 場：日本大学歯学部本館7階創設百周年記念講堂

##### ○第2回学生コアスタッフミーティング

実施日：令和元年8月6日（火）13：00～17：40

内 容：企画案検討、広報取材、各役割のタスク確認、今後の作業・流れ確認

会 場：日本大学会館2階203会議室

○学生コアスタッフ企画検討合宿（学生コアスタッフ6名と教職員スタッフ8名が参加）

実施日：令和元年8月20日（火）・21日（水）

内 容：企画案検討，広報案・ポスター検討及び教学推進ミーティングに参加

会 場：日本大学軽井沢研修所

○第3回学生スタッフミーティング

実施日：令和元年9月21日（土）13：00～17：30

内 容：目的と企画案の共有，ファシリテーションマニュアルの共有

会 場：日本大学会館9階907A会議室

○第4回学生スタッフミーティング

実施日：令和元年10月27日（日）13：00～17：30

内 容：ファシリテーションマニュアルの説明，企画案実践，企画・広報班からの情報共有，班分け

会 場：日本大学会館9階907A会議室

○第5回学生スタッフミーティング

実施日：令和元年11月9日（土）13：00～17：30

内 容：会場誘導路の確認，企画案・ファシリテーションマニュアルの説明，企画案実践，ミーティング終了後企画班リハーサル

会 場：日本大学理工学部1号館3階134教室・6階 CST ホール及び歯学部本館7階創設百周年記念講堂

○前日リハーサル・設営

実施日：令和元年12月7日（土）9：30～18：00

内 容：会場設営，機材等の最終確認，企画のリハーサル

会 場：日本大学理工学部1号館3階131教室・3階134教室・6階 CST ホール及び歯学部本館7階創設百周年記念講堂

○「令和元年度日本大学学生FD CHAmiT」開催

実施日：令和元年12月8日（日）

会 場：日本大学理工学部（駿河台校舎）及び歯学部

テーマ：大学とは。

10：30から歯学部本館7階創設百周年記念講堂において，オープニングのセッションが行われた。2013年度から7回目の開催となる今回は，全学から多くの参加者が集い，大変盛会であった。まず，オープニングのムービーの上映から始まり，学生スタッフによるFDやCHAmiTの企画内容についてユーモアたっぷりの説明が行われた。会場は一気に盛り上がった。今回は，「大学とは」をメインテーマとし，日本大学の学生・教員・職員は大学に何を求めているかについて純粋な意見を交換し教育改善につなげていく試みであった。混成グループで複数回のしゃべり場を実施した。まずは，私にとっての大学とはについて話し合い，その後，学生と教職員のグループに分かれて，互いの大学のイメージを話し合い，その内容を擦り合わせていくという企画であった。

オープニング終了後，理工学部1号館へ移動し，学生・教員・職員混成（学部混合）の32グループに分かれて，導入パートのアイスブレイクが実施された。ここでは，それぞれの自己紹介からグループ対抗のクイズ大会，さらにランチを食べながら意見交換を行った。

引き続き、12:30 から本イベントの中心企画である「しゃべり場」が開始された。まずは「しゃべり場1」の導入として、学生と教職員が分かれて「私にとっての大学とは」についてグループ内で話し合った。「しゃべり場2」では学生が他花受粉を行い、教職員は資料作成を行った。まず各メンバーが大学生活を振り返る中で、学生にとって、教職員にとって大学とはどのような場であるかを書き出してグループで共有した後、意見交換をして取りまとめた。各グループには1名ずつ学生のファシリテーターが配置され、しゃべり場の活発でスムーズな進行を援助した。

14:15 からは「しゃべり場3」として、学生・教員・職員混成（学部混合）グループに再編成された（ファシリテーターのみ残留）。ここでは、各自が「しゃべり場1と2」で話し合った内容について説明し、他のグループだったメンバーと意見を共有し、他花受粉によって私にとっての大学とは、そして影響を受けた意見について意見が書かれた模造紙を中心に共有した。

15:10 から「しゃべり場1・2・3」で得られた主要な内容を、学部ごとに学生・教員・職員で構成されたグループ内で共有し、学生が求めるものと教職員が提供できるものの擦り合わせ、解決案と強化案について話し合い、プロダクトとしてワークを完成させた。

16:00 からは歯学部本館に移動して16:20 からオープニング会場と同様に歯学部本館7階創設百周年記念講堂にてエンディングのセッションに移行した。Google フォームを利用したアンケートを実施した後、理工学部・歯学部・通信教育部より、「大学とは」の最終プロダクトに関する発表があった。次に、学生FD団体を有する文理学部・生産工学部・工学部より学部における学生FD活動の紹介があった。続いて、理工学部長の岡田章教授から講評、日本大学副学長の小田司教授からご挨拶があり、最後に学生スタッフ代表による閉会宣言となった。参加者全員で記念写真を撮影した後、18:00 から理工学部・歯学部の2会場において懇親会が開催された。

今回の企画は、学生視点と教職員の視点から大学とはどのような場であるかをそれぞれの視点から探求する試みであり、まさに“自主創造型パーソン”を学生・教員・職員の三位一体で体现するものであった。「日本大学 学生FD CHAmiT」は、本学における学びに焦点を当てた学生参画型FDの視点からの取組であり、本学としての組織的な教育改善活動として今後も継続して開催する意義がある。

#### 1-③ 新任教員を対象としたFDプログラムの検討及び企画・開催

以下の日時及び会場において、「令和元年度 新任教員FDワークショップ」を開催した。

- ・ 日 時 令和元年5月18日（土）13:30～17:00
- ・ 会 場 日本大学会館2階 大講堂
- ・ 対象者 原則として、平成31年4月1日以降、日本大学に新規に採用された大学（大学院・短期大学部及び他大学で専任教員だった者も含む）専任教員。
- ・ 参加者 15学部、2研究科、短期大学部（三島校舎及び船橋校舎）より 計115名
- ・ 司 会 全学FD委員会プログラムWGメンバー 短期大学部（船橋校舎）・佐藤秀人教授

本プログラムは昨年度まで「新任教員FDセミナー」と称していたが、本年度より「新任教員FDワークショップ」へ名称を変更し、内容的にもワークショップを中心としたものに

変更して実施した。

はじめに、松林肇学務部長より開会の挨拶があった。その後、第一部として、全学共通初年次教育検討 WG の歯学部・中島一郎教授の説明・進行によって、「日本大学教育憲章を基軸としたシラバス作成のワークショップーアウトカム基盤型教育の教育評価についてー」を実施した。

まず、中島教授より、本研修会の以下の到達目標が説明された。

【一般目標】

「日本大学教育憲章」を基軸とした教育を実施するために、全学共通教育と各学部教育の位置づけを理解し、各学部での学部教育のシラバス作成に関する基本的能力を身につける。

【行動目標】

1. 「日本大学マインド」を説明できる。
2. 「日本大学教育憲章」の理念を理解する。
3. 学部教育の DP, CP, AP の各ポリシーを説明できる。
4. カリキュラムプランニングの基礎事項について説明できる。
5. 履修系統図に沿った教育実践のためのシラバス作成ができる。

次に、本ワークショップで想定するシチュエーションが説明された。

【シチュエーション】

1. 自主創造学部の第一学年の教員として、初年次の演習科目として設置された「国際社会と日本」について、日本大学教育憲章を踏まえたシラバスの作成を行う。
2. 「どのような人材を育成して社会に送り出すのか」というアウトカムを基盤として、教育内容の改善も視野に入れた、学生にわかりやすいコンテンツを計画する。

グループワークは、A～Q の 17 グループに分かれて以下の手順で行なわれた。

【グループワーク】

1. 学生のどのような能力を引き出すのかを考えた教育目標と教科のアウトカムに関する意見交換。
2. 日本大学教育憲章を踏まえた一般目標（GIO）と行動目標（SB0s）に関する検討。
3. 日本大学教育憲章ルーブリックの評価を参考にした、評価方法の検討。
4. プロダクトの発表会（発表者以外は引接するグループに行き、相互に意見交換する）

各グループでは、①自己紹介（アイスブレイク）、②司会、書記、発表者の選出、③掲示科目の旧シラバスの問題点についての討議、④グループ討議結果をもとに新シラバスの作成を行った。今回のワークでは、日本大学教育憲章の 3 要素と 8 能力を踏まえて、掲示された教科で学生のどのような能力を引き出したいのかというアウトカムを議論し、日本大学教育憲章の GIO と SB0s について考えることをポイントして指摘した。グループワークでは、GIO, SB0s に関する質問が散見された。これは、新任教員の多くが、これらの FD 用語に不慣れであることから生じるものと思われた。ただし、多くの教員は非常に積極的に議論に参加しており、充実したグループワークになったと思われる。また、日本大学教育憲章ルーブリック評価を参考にして評価方法も考えるべきであることが説明された。各グル

ープの成果物については、ほとんどのグループが学修目標、教科の関連する DP、一般目標 GIO、行動目標 SBOs、成績評価、準備学習について項目を完成できたが、短時間のワークであったため多くのグループでは 15 回の講義内容まで完成できなかった。グループワーク終了後、隣接グループの成果発表を聴き、質疑応答・意見交換を行った。

第二部では、日本大学 FD 推進センター副センター長 松戸歯学部・河相安彦教授に、「日本大学の教育と教育改善活動—教学と FD の両輪性と FDer の役割—」と題した講演を行った。

講演では、まず、「21 世紀に求められている大学のあるべき姿と日本大学の教育改革・改善の動向」について、中央教育審議会の動向とそれに対応した日本大学教学戦略会議の検討結果（N. グランドデザインの骨子）が説明され、「自主創造型パーソン」の育成・排出を目指して、自主創造力のコンピテンスとコンピテンシーを明確化したうえで、日本大学の DP を策定して「日本大学教育憲章」を施行したこと、これに対応して、学部・学科単位で今後は CP に対応した配当科目見直しなど、点検・評価を行い、改革・改善を実施することで内部質保証を充実していく重要性が説明された。そして、組織的に新たな教育改善を行う教学戦略と、新たな改善の課題解決を行う FD・SD 活動は車の両輪であり、これらをバランスよく進めて PDCA サイクルを充実させることの重要性が説明された。また、教学と FD を連携させて、日本大学全体の教職員による組織的な取り組み（FD・SD）の必要性が示された。本年度に計画されている、全学 FD ワークショップ、日本大学ワールドカフェ、学生 FD CHAmmit が紹介され、これらへの参加をお願いして、講演が終了した。

セミナー終了後の参加者アンケートによると、「日本大学の教育と教育改善活動」については参加者のほぼ 100%が大変よく理解できた、ある程度理解できたと回答している。また、「日本大学教育憲章を基軸としたシラバス作成のワークショップ」については、94%が自身の授業や FD 活動に役立てることができると回答しており、本セミナーの目標は概ね達成することができたと思われる。改善した方がよい意見としては、「時間の余裕がなかった」、「作業量が多すぎ」という意見が目についた。15 回講義分の内容までシラバス作成するためには、終日開催が良いと思われた。

なお、今回のワークショップは、事前課題として日本大学の VOD 教材（2018 年度新任教員 FD セミナー講演動画（河相教授・中島教授））及び JPDF 実践的 FD プログラムによる VOD（「FD 概論Ⅰ」、「高等教育論Ⅳ」、【任意視聴動画】として「授業設計論Ⅰ」、「教育方法論Ⅴ」）を視聴することを課すことで、ワークショップの受講で FD に関する理解がより深まることを想定した。VOD 教材利用率向上のためにも、今後も同様の課題を科すことが必要であると思われる。

#### 1-④ 日本大学オンデマンド及び全国私立大学 FD 連携フォーラム実践的 FD プログラムの活用検討

日本大学オンデマンドコンテンツの今年度から取組として、昨年度の新任教員 FD セミナーの講演動画や各ワークショップの講演動画を編集したものを日本大学の公式 Youtube（限定公開）にアップロードしている。また、全国私立大学 FD 連携フォーラム・実践的 FD プログラムについては、昨年度末から新任教員 FD ワークショップ参加者の事前課題及び@キャンパス参加者の事前学習として組み込んだ結果、平成 30 年度の各学部の利用状況は比較的改善された。しかし、未だに全く利用していない学部もあるため、本 WG では、引き続き

いくつかの検討がなされた。その要点は、次のようなものである。

(1) @キャンパス及び新任教員 FD ワークショップ参加者の事前学習として JPFF 利用の呼び掛けを徹底周知させる。特に新任教員については、採用が決定した段階から新任教員 FD ワークショップ開催まで期間が空くため、各学部庶務課の協力のもと、採用関連書類に事前課題の通知書類を同封してもらって、スムーズにワークショップに参画できるような仕組みづくりを継続していきたい。

(2) 調査・分析 WG で検討している教育状況調査票（日本大学版ティーチングポートフォリオ）が全学 FD 委員会において承認され、全学部で実施をすることとなった。様式内の成果項目に『全国私立大学 FD 連携フォーラム (JPFF) 「実践的 FD プログラムオンデマンド講義」の視聴、レポート提出（最大 15 ポイント）』を設けることとなった。そのため、利用率の上昇が見込まれる。

(3) 非常勤講師にも各オンデマンド動画を FD プログラムの一環として、周知することとなった。周知方法としては、新任教員と同様、各学部庶務課において、令和 2 年 4 月 1 日付け以降に雇用契約を結んだ非常勤講師を対象に、雇用契約書兼労働条件通知書等を送付の際に併せて送ることとする。また、翌年度以降は、新たに雇用契約を締結した非常勤講師を対象として、非常勤講師にも浸透させるための仕組みづくりを検討している。

今後は、Youtube の動画再生件数及び JPFF 事務局から送付される各学部の利用状況を確認し、視聴率を検証して PDCA サイクルを回していきたい。また、日本大学オンデマンドに更なるコンテンツを追加し、日本大学版カリキュラム・マップに沿ったオンデマンド動画を展開するように準備を進めていきたい。

本 WG では引き続き、上記の活用方法について検討を行うこととした。

#### 1-⑤ 全学 FD シンポジウムの企画・開催に向けた検討

平成 29 年 6 月に全学 IR シンポジウムが開催されて以降、全学的なシンポジウムが実施されずに推移してきた。そこで、令和 2 年度にシンポジウムを開催することを目標に、企画立案を推進した。今回は、前回の反省に立ち、シンポジウムで提起された課題に継続的に取り組むことができるように、ベーシックからアドバンス、または問題点の抽出から解決策の提示といった 2 段階の展開が可能となることを目標に、今日の大学を取り巻く諸課題の中からテーマを検討することとした。

その結果、ステークホルダーである学生の意向を背景にした大学改革を推進することを念頭に、「学生調査」を活用した大学改革の可能性を検討することを主題に掲げ、シンポジウムを開催する企画を検討している。また、本学が蓄積している「学修満足度向上調査」の活用した各部科校の改革の取り組みについて、各部科校の事例の発表を通し、次年度以降の活用の拡大を促すことも検討している。

#### 1-⑥ 令和元年度 日本大学 教学推進ミーティング in 軽井沢 ～NE-Consensus～企画・開催

令和元年度 日本大学 教学推進ミーティング in 軽井沢 ～NE-Consensus～は教育の内部

質保証体制とカリキュラム改訂に関する確認を行う内容であった。その目的は、日本大学は教育理念である「自主創造」の能力を有する人材の育成のために、2017年4月に日本大学教育憲章が施行され、学生が身につけるべき「自主創造」の具体的な8つの包括的能力を示された。そして、学部・通信教育部及び短期大学部は課程を通じてその能力を育成し、その質保証を担保した上で「日本大学マインド」を有する人材を社会に送り出す使命が付託されているところである。本教学推進ミーティングは、学部、通信教育部及び短期大学部の学務担当者が一堂に会し、本学で進められている、マクロ・ミドルレベルの教育改革の現状を共有するとともに、日本大学教育憲章を軸とした教育課程編成における課題を明確にし、専門領域学科はもとより学部・学科の枠を超えた情報共有をしながら、課題解決に向けた議論とコンセンサスを得ることであった。

実施日時は下記の別表の通りであった。

1日目 (8/21)

|             | プログラム                                                                                                 |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 13:00～13:05 | 開会式 挨拶 学務部長 松林 肇                                                                                      |
| 13:05～14:05 | 日本大学のカリキュラムブランディングについて 学務部次長 角田憲良<br>シラバスガイドラインについて 学務課課長補佐 佐藤香生                                      |
| 14:05～14:15 | 日本大学教学推進ミーティングに期待されるもの<br>日本大学FD推進センター副センター長、全学FD委員会プログラムWGリーダー<br>教学戦略委員会教育開発推進検討WGメンバー 松戸歯学部教授 河相安彦 |
| 14:15～15:15 | アイスブレイク                                                                                               |
| 15:15～15:35 | 日本大学 学生FD CHAmiTの歴史及び今年度企画について<br>令和元年度日本大学 学生FD CHAmiT 学生コアスタッフ                                      |
| 15:35～15:45 | 休憩                                                                                                    |
| 15:45～17:30 | 自主創造型人材育成のあり方 ～ワールド・カフェ～                                                                              |
| 17:30～18:30 | 自由時間                                                                                                  |
| 18:30～20:30 | 情報交換会                                                                                                 |

2日目 (8/22)

| 時 間         | プログラム                                                   |
|-------------|---------------------------------------------------------|
| 9:00～ 9:50  | 教育の内部質保証体制とカリキュラム改訂<br>教学戦略委員会教育開発推進検討WGメンバー 法学部教授 池田 実 |
| 9:50～10:00  | 休憩                                                      |
| 10:00～12:00 | 日本大学教育憲章に基づく能力育成<br>3つのポリシーから授業科目までの体系性 ～ポスターツアー～       |
| 12:00       | 昼食                                                      |
| 13:00～16:00 | 日本大学教育憲章に基づく能力育成<br>3つのポリシーから授業科目までの体系性 ～ポスターツアー～       |
| 16:00～18:00 | 自由時間                                                    |
| 18:00       | 夕食                                                      |
| 19:30～21:30 | 情報交換会                                                   |

3日目 (8/23)

| 時 間         | プログラム                                                                                |
|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 9:00～10:00  | 日本大学教育憲章に基づく能力育成<br>3つのポリシーから授業科目までの体系性 (まとめ)                                        |
| 10:00～10:10 | 休憩                                                                                   |
| 10:10～12:00 | ティーチング・ポートフォリオ (TP) について<br>教学戦略委員会教育開発推進検討WGリーダー、全学FD委員会調査・分析WGリーダー<br>生産工学部教授 藤井孝宜 |
| 12:00       | 昼食                                                                                   |
| 13:00～14:20 | 教学推進ミーティングにおけるコンセンサスのまとめ                                                             |
| 14:20～14:30 | 閉会式                                                                                  |

研修方略と共有は各学部・通信教育部・短期大学部よりあらかじめ、学位単位で DP、CP 及びカリキュラム（科目）に関連する見直しである Step1、学科単位で CP に対応する配当科目の見直しである Step2、カリキュラム改訂を含めた教育課程変更の必要性の判断である Step3 までをポスターにまとめ、それを全員で共有するポスターツアーの形式で行われた。

8 月 2 2 日のポスターツアーの概略は以下の通りである。

#### ① 学系間ポスターツアー（10：00～12：00）

##### 1）4 グループ（学系別）に分かれて実施

|      | 説明順番 |       |        |         |       |
|------|------|-------|--------|---------|-------|
| グループ | 1    | 2     | 3      | 4       | 5     |
| P 1  | 法学部  | 経済学部  | 国際関係学部 | 危機管理学部  | 短大三島  |
| P 2  | 文理学部 | 商学部   | 芸術学部   | スポーツ科学部 | 通信教育部 |
| P 3  | 理工学部 | 生産工学部 | 工学部    | 短大船橋    |       |
| P 4  | 医学部  | 歯学部   | 松戸歯学部  | 生物資源科学部 | 薬学部   |

2）自身の学部の順番になったら、他のグループメンバーにポスターの内容について説明を行う。

3）ポスターの内容【教育基本方針（3つの方針）】【履修系統図】【Step1：8つの能力と科目の関連性】【Step2：CP に対応する配当科目をリストアップ】【Step3：学部ループリック】【シラバス】について説明を 10 分、質疑応答 10 分として、ファシリテーターの指示に従う。

4）終了後、フィードバックを元に修正を行う。

#### ② 学系横断ポスターツアー（13：30～16：00）

##### 1）修正したポスターを講堂に掲示。

##### 2）2 グループに分かれる（学系横断）

| グループ | 1  | 2  | 3  | 4  | 5  | 6  | 7    | 8  | 9  | 10 |
|------|----|----|----|----|----|----|------|----|----|----|
| A    | 通信 | 薬  | 歯  | 工  | 危機 | 商  | 法    | 三島 | 船橋 | 松戸 |
| B    | 理工 | 芸術 | 経済 | 生物 | 医  | 生産 | スポーツ | 国際 | 文理 |    |

3）自身の学部の順番となったら、他グループメンバーにポスターの内容について説明。

4）説明 8 分、質疑応答 5 分とし、進行はファシリテーターの指示に従う。

#### ③ コンセンサス（学系別）8 月 2 3 日（金）9：00～10：00

1）前日のツアーを踏まえて、学系で振り返りを行い、学系における合意点を整理する。（「どのような学生を育てるのか」を基本に、カリキュラムの改訂、カリキュラムの体系的な順序性、学生の学修評価、教育効果の測定、質保証など）

2）学系の代表による合意点の提示をして、教員の教育業績の評価、社会のニーズに応えるシラバスや履修系統図などの作成、能動学修を促進する授業手法、ループリックや GPA 等による成績評価方法など、ミクロレベルの情報共有を図り、各学系グループよりまとめた提示していただいた。

本ミーティングでは別表のように、前日から合宿を行っていた学生 FD CHAmmit のコアスタッフとのミーティング、教員の教育業績の評価、社会のニーズに応えるシラバスや履修系統図などの作成、能動学修を促進する授業手法、ルーブリックや GPA 等による成績評価方法など、ミクロレベルの情報共有も行われた。

参加者のコンセンサスを抜粋して以下に示す。

#### 【学生 FD 等】

1) 質保証の活動に学生・卒業生等の意見を反映する体制の構築が必要である

はい：84%，どちらとも言えない：16%，いいえ：0%

2) その体制の構築には課題がある

はい：58%，どちらとも言えない：21% いいえ：21%

3) 学生との交流で気づきがあった

はい：95%，どちらとも言えない：0% いいえ：5%

4) 学部における学生 FD 活動の重要性を認識している

はい：84%，どちらとも言えない：16% いいえ：0%

以上から、質保証の活動に学生・卒業生等の意見を反映する体制の構築の重要性と、学生の意見に関する気づきに伴う、学生 FD の重要性に関するコンセンサスが得られたと考えられるが、構築への課題（仕組み、学生の多様性やアンケートの妥当性）解決が望まれる結果であった。

#### 【学系間・学系横断ポスターツアーによる共有】

情報共有が主な目的であり様々な学系間横断の内容を確認し、各学部・通信教育部・短期大学部へのフィードバックができたものと思われる。一方、修正には時間と、各学部等における検討が必要であるため、改めて年度内に再度ミーティングを行うことが検討された。第2日目に行われた学系間のコンセンサスの概要は以下の通りである。

1) 法学部・経済学部・国際関係学部・危機管理学部・短大三島

憲章の8つの能力のバランス、教職員への周知（FDの強化）、ルーブリックに関する理解等

2) 文理学部・商学部・芸術学部・スポーツ科学部・通信教育部

シラバスの詳細化と分かりやすさ、ルーブリックの機能、8能力と総合科目と専門科目の位置付け、FD活動の活性、能力の客観評価

3) 理工学部・生産工学部・工学部・短大船橋

Step2 における DP ごとの科目のばらつき、DP7 の能力を実験科目や実習科目で対応、DP1 「豊かな知識・教養」と「倫理観」が獲得する能力として並列関係

4) 医学部・歯学部・松戸歯学部・生物資源科学部・薬学部

日本大学教育憲章の他のモデル・コアカリキュラムなどの存在、ルーブリック等 FD に関する理解、低学年での専門科目履修とルーブリック評価レベルとの整合性などのキーワードが抽出された。

#### 【教員の教育業績の評価】

1) 教員の教育業績評価と日本大学教育憲章との関連を理解できた

はい：58%，どちらとも言えない：21% いいえ：21%

2) 学部学科等における教員の教育業績評価の重要性を理解している

はい：78%，どちらとも言えない：11% いいえ：11%

以上から、教員の教育業績評価についての仕組みは理解いただけた一方で、学部学科における運用についてはコンセンサスを得ることはできていない模様であった。その要因として

- ・研究業績とは別に、教育業績の位置付けを明確
- ・FDの浸透と内容の理解が必要

などの意見が散見されたことから、今後の検討として全学FD委員会での検討課題とさせていただきたい。

## 2 FD推進センター基本計画（中期計画）を踏まえたプログラムWGとしての総括

プログラムWGではFD推進センター基本計画（中期計画）：質保証体制の充実と日本大学教育憲章を捉えたFD活動の各学部等への浸透作の展開を踏まえてPDCAサイクルのP及びDにあたる、前述のプログラムを平成31・令和元年度の活動計画として企画し実施してきた。総括として概要とC及びAについて総括する。

### （1）全学FDワークショップの企画・開催

#### ① 令和元年度全学FDワークショップ

教職共同で行うワークショップも今回で7年目を迎え、本ワークショップの受講修了者は延べ287名となった（教員206名（日本大学全教員の約8%）、職員81名）。一昨年度施行された「日本大学教育憲章」に合わせ、研修内容を毎年ブラッシュアップし、教育憲章の能力を担当する初年次教育科目という位置づけで実施してきている。今年度は、さらに改善を加えKJ法による「初年次教育の問題点」を抽出、ニーズの検討を行った上で関連する教育憲章の能力を決定し、学修目標を検討するという研修を試行している。また、今年度は新たにシラバスの最終像を提示できるツールの開発を行い、実施したところ、技術的な問題はなく進められたが、運用上の問題点（修正箇所の提示、目標・方略・評価の一括提示の困難さなど）も浮かび上がってきた。この点は次年度に向けた課題点であろう。

昨年度から教育憲章をより意識する目的で、作成するカリキュラムのコースを「自主創造型パーソン養成コース」とし、初年次科目のユニットを作成するという関係を明確にした。この点は大きな問題はなかったが、現実的なカリキュラムから乖離しがちであるという意見も上がった。同じく日本大学VALUEルーブリックに関する説明を加え、初年次で到達すべき「パフォーマンスレベル」が高すぎず、かつ低すぎないことを意識しつつ、科目と目標の設定に関するグループでの検討を促してきているが、この点はツールに組み込んだため、理解が進んだのではないかと思われる。一方で、ルーブリックが初めてという参加者もいる中、如何に研修を通じて理解を深めるには、ツール等の工夫が必要ではないかと思われる。

KJ法では「初年次学生の学修上の問題」など、範囲を狭めた主題の提示の検討が必要である。また、発想を変えて問題点の抽出をKJ法以外の方略での検討も余地を残す。本ワークショップ（ミクロレベル）をベーシック、懸案であったアウトカム基盤型における科目

のカリキュラムプランニング（マクロ・ミドルレベル）をアドバンスと位置付け、ベーシックの参加者，学務の中核にいる教職員対象のワークショップを令和2年度の実施に向け，検討を開始している。

## ② 全学FDワークショップ@キャンパス

平成28年度第5回全学FD委員会で審議され，実施に移された@キャンパスは全学FDワークショップの参加者をコアとして各部科校でタスクフォースを構成して開催し，各部科校におけるFDerの活動を促進する目的で実施されている。今年度は工学部・三軒茶屋キャンパス（危機管理学部・スポーツ科学部）・法学部（2回目）で実施した。残る学部も令和2年度中に実施が決まり，すべての部科校で実施が完了する予定である。@キャンパスは，部科校の教職員が運営体制を構築し，FD推進センターからの派遣者は実施に関わる主にモニタリングを行うオブザーバーの役割を担っている。モニタリングの結果は実施と並行して随時Web入力され，実施後に学部にはフィードバックされるがその徹底を継続していきたい。一方，@キャンパスを一度行った後に引き続き学部独自でワークショップを実施している部科校は希少である。その中で法学部においては@キャンパスが定着し，参加者がFDerとして運営，タスクフォースとして携わる循環が形成されている。引き続き，各部科校のワークショップを継続し，習慣化を促すことが必要であり，その仕組み・方略について検討を行う予定である。

## （2）令和元年度 日本大学学生FD CHAmmitの企画・開催

本年度で7回目となる学生FD CHAmmitは理工学部（駿河台校舎）・歯学部合同で開催された。

今回の学生企画の特徴は「大学とは。」をテーマとし，ワールドカフェ形式で行われた。教員と学生の考える「大学」を教職員・学生別個の「しゃべり場」で話し，その後交わり，意見の合致と相違を確認して気づきを得る内容である。そして，最後に学部ミーティングを行い，自らの学びに生かす解決策を持ち帰るという実質化を目指した。FD CHAmmitは参加者が「気づき」を得ること，そして実際の教育改善に役立てることが求められている。そのような観点から今回のFD CHAmmitは，昨年度のFD CHAmmit 2018に引き続き，本学の教育改革に沿った内容であったし，今年度のプロダクトを教育現場へフィードバックすることを期待する。それには，プロダクトを学部等で共有することが重要であることは間違いなく，その実施を教職員が認識していただきたい。「日本大学 学生FD CHAmmit」の認知度は年々高まっており，他大学からの参加者も年々増えている。今後もFD推進センターのホームページ等を通じた広報活動によってさらなる認知度の向上と，各部科校での学生FDの浸透が加速するよう，企画の検討を進めていく予定である。

## （3）新任教員を対象としたFDプログラムの検討及び企画・開催

今年度も従来型の講習とワークショップのハイブリッド型で実施し，例年と同様に参加者の評価は概ね良好であった。一方，参加後のフォローアンケートから，参加者の継続したFDへの関わりが低い傾向であることが課題としてあげられてきた。そこで今年度は，「FDラリー」と銘打って，新任教員FDワークショップ・全学FDワークショップ・日本大学学生FD CHAmmitを促した。そこで，全イベントへの参加者は7名（新任教員以外では3名），

であった。また意見としては「他学部の教職員との意見交換は大変有意義であった」、「学生の声を直接聞くことが出来て良かった」などが挙げられた。新任教員は次世代の本学を担う人材として重要な存在であり、参加者の増加と、参加疲れのしない工夫、その後に生かす連携を検討することが重要である。今後も、他プログラム（学生 FD 及び全国私立大学 FD 連携フォーラム・実践的 FD プログラムの活用など）との連携で FD に接する機会の増加へ繋がるような仕組みを検討する予定である。

#### （４）全国私立大学 FD 連携フォーラム（JPFF）・実践的 FD プログラムの活用

平成 28 年に作成したカリキュラム・マップの改定を行った。しかし、浸透については供覧される閲覧データから十分な浸透が行われたとは言い難い。部科校への閲覧の促進のみでは利用率の向上には繋がりにくいことが原因のようである。解決に向け引き続き、@キャンパス及び新任教員 FD ワークショップにおける事前学修として視聴を促した。その結果、部科校の視聴率は上昇し、スムーズに FD プログラムに参画できるような仕組みづくりが構築された。令和 2 年度はこれに加えて、非常勤講師にもすそ野を広げ、教育状況調査票（日本大学版ティーチングポートフォリオ）の成果項目にも記載する欄を設けたため、更なる利用率向上が見込まれる予定である。

#### （５）全学 FD シンポジウムの企画・開催に向けた検討

全学 FD シンポジウムは、本学教学戦略に沿ったテーマを検討している。中でも、本学で実施されている「学修満足度向上調査」の活用等は、教学マネジメントと可視化に繋がる重要な事項である。またシンポジウムを従来の単年完結型から、複数年の修得目標を設定し複数年に及ぶカリキュラム取ることを検討中である。本計画については本 WG で検討し、調査分析及び教育情報マネジメント各グループと連携を取りながら引き続き進める予定である。

以 上

令和元年度

## 教育情報マネジメントワーキンググループ活動報告



日本大学 FD 推進センター

〔全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループ〕



教育情報マネジメントワーキンググループ（以下、WG とする）に係る令和元年度における活動項目は、令和元年度活動計画並びに FD 推進センター基本計画（中期計画）に基づき、次のとおりである。

1 令和元年度活動計画

- ① 「日本大学 FD NEWSLETTER」の作成
- ② 『日本大学 FD ガイドブック』の改訂
- ③ 『日本大学 FD 研究』の編集・刊行
- ④ FD 推進センターウェブサイトの具体的活用方法の継続的な検討と展開

2 FD 推進センター基本計画（中期計画）を踏まえた教育情報マネジメントワーキンググループとしての総括

1-① 「日本大学 FD NEWSLETTER」の作成

日本大学 FD NEWSLETTER については、平成 30 年度までに第 14 号までを発行してきた。令和元年度は、日本大学 FD NEWSLETTER「第 15 号」（令和元年 7 月 1 日発行）および「第 16 号」（令和 2 年 1 月 1 日発行）を発行し、「第 17 号」（令和 2 年 4 月頃発行予定）の企画・発行準備を行った。本誌の発行に際しては、関係者に多大なご協力とご負担をいただいていることから、この場をお借りして御礼を申しあげる。

まずは、平成 30 年度の本報告と FD NEWSLETTER 発行日の関係から詳細について記載することができなかった「第 14 号」の内容について報告する。「第 14 号」では、日本大学学修満足度向上調査の全学的な実施について取り上げた。本調査は、教育の質保証体制の確立に向けての課題を把握する目的で、全学部 of 学生を対象にして実施されたものであるが、本調査結果が全学で十分には活用されていないことを指摘している。また、全体的には満足度の割合が高い傾向がうかがえたもの、満足度の割合が低い学生の動向に注目することの重要性も指摘している。次に、連載記事として「部科校における学修支援等の事例紹介」では、工学部で行われているチューター制度の初年次教育への効果的利用について取り上げた。チューターは選抜された 4 名の大学院生がその役割を務め、学生が解くことができない課題を質問するケースが多く、試験の対策も行っていた。その結果、一年生の必修基礎科目の合格率が向上したことが報告された。学生が「わかった」という成功体験を積むことにより、学修の習慣づけにも繋がるということが期待できるとのことであるが、課題としては利用率を向上させることが挙げられていた。さらに、「授業改善のためのティーチングティップスの収集と情報提供」では、国際関係学部における授業の効率化と活発な学びを支援するシステムの活用について取り上げた。国際関係学部において、2018 年 4 月より Google 社の教育現場向けオンラインサービス「Google Classroom（以下、GC）」を授業へ導入した効果について報告された。GC は、オンライン上の講義クラスを通して、いつでも学生に各種資料の配付と提示、連絡事項の配信が可能となるシステムで、学生にとってはポートフォリオの役割も担うことが可能とのことであった。GC の導入により、ペーパーレス化と学生指導の効率化が進むだけでなく、学生の参加意識向上、コミュニケーションの活発化などの効果が認められるため、今後は利用率を向上させることにより、学修ツールのスタンダードとすることが期待されるということが報告された。

「第15号」は、FD活動を前進させるプログラム“日本大学FDラリー”について取り上げた。これまで、本学FD推進センターは、新任教員FDワークショップ、全学FDワークショップ、日本大学学生FD CHAmiTを主催・実施し、それぞれが独立したFDイベントとして回数を重ねているが、これらのFDイベントに各学部等における教育ワークショップ@キャンパスを加え、STEP 1：新任教員FDワークショップ→STEP 2：全学FDワークショップ→STEP 3：日本大学学生FD CHAmiT→STEP 4：各学部等における教育ワークショップ@キャンパスというFDラリーを構築し、アウトカム基盤型教育を支える人材育成に向けた意義あるプログラムとしていくことが報告された。続いて、“日本大学FDラリー”のSTEP 1である令和元年度新任教員FDワークショップの開催について報告された。本イベントには、平成31年4月以降に採用された新任教員115名が参加し、日本大学教育憲章を基軸としたシラバス作成に取り組んだ様子が報告され、本学におけるシラバス作成への理解が深まったことが確認されたと紹介された。次に、連載記事として「部科校における学修支援等の事例紹介」では、スポーツ科学部における積極的な担任制度とセンターオフィスアワーの活用について取り上げた。まず、1年次生には、全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎」を受け持つ教員がクラス担任となり、授業内にとどまらず学生からの質問や相談を受け付けるだけでなく、副担任制度も導入し、複数の教員に相談できる環境を整えたことが紹介された。次に、ラーニングセンターで決められた曜日・時間に相談を受け付けるセンターオフィスアワーについて紹介された。これらの取り組みは教員にとっても自らの授業を振り返るきっかけとなっていることが報告された。さらに、「授業改善のためのティーチングティップスの収集と情報提供」では、芸術学部でのアクティブラーニングの実践におけるグループワークの評価について取り上げ、1年生の全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎」における専用のノートブックを利用したグループワークの様子が紹介された。

「第16号」は、FD活動を前進させるプログラム“日本大学FDラリー”のSTEP 2：全学FDワークショップおよびSTEP 3：日本大学学生FD CHAmiTの開催について取り上げた。まず、“日本大学FDラリー”の全体像を改めて紹介した。次に、令和元年9月5・6日および9・10日に開催された全学FDワークショップの様子が報告された。5・6日および9・10日の各回に各学部等から約35名の教職員が参加し、「大学教育における課題の解決にむけて-教育能力の開発(Faculty Development)を企画・運営できる人材の育成-」をテーマとして、日本大学教育憲章を活かした初年次教育のカリキュラムプランニングについてのワークショップを行った様子が紹介された。2日間のワークショップは、「初年次教育の問題点」、「学修目標」、「学修方略」、「学修評価」の4つのセッションで構成され、各セッションの冒頭にタスクフォースによるワーク内容の説明があった後、グループでその内容について討議した内容を発表するという形式で進められた様子が紹介された。その中で特に、「学修方略」の構築に難しさがあったことが報告された。今後、全学FDワークショップを修了し、FDerを認定された教職員を中心に各学部等でFDワークショップ@キャンパスが開催され、FD活動がより推進されることが期待される。次に、令和元年12月8日に歯学部・理工学部で開催された令和元年度日本大学学生FD CHAmiTが紹介された。今回のテーマは「大学とは」で、各学部等から188名の学生および97名の教職員が参加して行われた。「しゃべり場」と呼ばれるグループワークが計4回行われ、エンディン

グでは、自分たちが考える「大学とは」を3学部の学生が発表し、締めくくりにしゃべり場の様子を見て岡田章 理工学部長から、「教職員の会議などの業務負担を軽減し、このような学生との対話の場をもっと多く設けていきたい」と述べられたことが紹介された。

「第17号」では、「学生FDの実践」をテーマとして医学部などでの取り組みを紹介する予定である。また、連載記事として、「部科校における学修支援等の事例紹介」では商学部の事例を取り上げ、「授業改善のためのティーチングティップスの収集と情報提供」では薬学部の事例を取り上げることが計画されている。

#### 1-② 『日本大学FDガイドブック』の改訂

##### 『Teaching Guide』

平成31年度の活動計画に基づき、『Teaching Guide』第9版を令和2年4月に発行する予定である。今年度は表紙のデザインも含めた全面的な改訂を行った。表題を「学生と創る授業デザイン Teaching Guide」とし、特に「日本大学教育憲章」を基軸とした教育の質保証を担保すべく、FD及び教学戦略の両視点から内容の充実を図った。内容的には2章構成に改編し、末尾に大学用語集を配した。第1章は日本大学が目指す教育の全体像の、第2章は教員一人ひとりが担う授業デザインについてのより深い理解を目的とする内容とした。

本学の教育の方向性を規定する概念には、「自主創造」の教育理念、日本大学教育憲章、日本大学マインド、8つの能力、3つの構成要素、AP・CP・DPの3つのポリシーなどがあり、それらが複雑な重層構造を作っている。さらに、それらを説明したり具体化したりするのに必要な概念や用語には教育界独特のものが多く、新任教員にとって目新しく難解である。第1章では、それらの概念を分かりやすく解き明かすように努力した。

授業は教員によって創られるのではなく、学生と共に創るものであるというコンセプトの下に、第2章では実際に良い授業をデザインするために必要な概念、手続き、技術について説明した。授業にあたる新任教員の「手札」を増やすことにより、アクティブ・ラーニングの普及を目指している。

以上のように各章ともに、教員一人ひとりの重要性や学生と共にという視点を強調し、学生、教員、職員が丸となって確実に歩んでいくことが、日本大学が目指す教育であることが分かるように工夫を施した。

##### 『Learning Guide』

『Learning Guide』についても、今年度は表紙のデザインも含めた全面的な改訂を行った。表題を『ミライヲツクル Learning Guide』と改めて、初年次教育のサブテキストとしての側面から内容の見直しを図り、入学から卒業時に至るまで手元に置いて活用することのできるガイドブックとなるように工夫をした。内容的には2部構成とし、日本大学の学び方の「ガイド編」と履修や単位修得のための「知識編」に改編し、学生が目的に沿って読むことができるように再構成した。

「ガイド編」では、『Teaching Guide』と同様に、日本大学の教育を規定する概念やそれらの相互の関係をわかりやすく説明することに心がけた。そして、それらの概念と日々の授業や全学的イベントがどのように結びついているかを説いた。しかし、抽象的な教育概念を個人の成長に当てはめて考えるのは、学生にとっては難しい作業である。そこで日本

大学の掲げる教育目標が個人において達成されているかを学生本人に確認・実感してもらうために、書き込みができる Personal page を設けた。

「知識編」では、入学生にとっての最初の壁である「履修」と、ゴールである「卒業」に焦点を当てた。シラバスを読んで履修のための情報を得る行為は、高校までの教育にはないステップであり、順調な学生生活のスタートに欠かせない。自分の判断で卒業に必要な単位を揃える履修計画の立案も高校では経験がないため、丁寧な説明を心がけた。

なお各編ともに、学生の活用度を高めるために、見出しの細分化や解説の簡素化などにもつとめて読みやすさの向上を目指した。

#### 1ー③ 『日本大学FD研究』の編集・刊行

令和元年度教育情報マネジメントWG活動計画に基づき、『日本大学FD研究』の原稿の募集と編集を行った。今年度の「第8号」については、全学FD委員会プログラムワーキンググループによる教育実践研究「全学FDワークショップ2018実施報告および参加者評価の解析と改善に向けた取り組み」及び全学FDワークショップ@キャンパスに関する活動報告3編を掲載し刊行した。

なお、本号は、平成30年12月の「投稿要項」改正後初めての『FD研究』である。その改正点は、掲載原稿の種類が、従来「①論文」「②活動報告」「③資料紹介」の3種類であったものを、「①研究論文」「②教育実践研究」「③研究ノート」「④活動報告」「⑤資料紹介（書評を含む）」に改めるとともに、「査読付原著」の扱いとなる範囲を広げた点にある。

このように形式的要件を整備したことを学内外に周知し、FD関連の論考の投稿を広く募ることが、今後の課題となろう。

#### 1ー④ FD推進センターウェブサイトの具体的活用方法の継続的な検討と展開

平成28年度にFD推進センターウェブサイトの全面改訂並びにソーシャルメディアの整備（Facebook 及び Twitter）を行った。これら一連の情報インフラ整備を活用し、令和元年度は情報発信の拡充を推進してきた。とくにソーシャルメディアでの情報発信は頻繁に行われ、タイムリーな情報発信媒体として機能している。しかし例年通り、情報の発信並びに情報へのアクセスは、日本大学ワールドカフェや学生FD CHAmmitなどの全学的行事前に急増する傾向にある。今後もこのような傾向は継続されるものと考えられる。全学的行事の情報源がFD推進センターウェブサイトであることを広く学生教職員へ周知すれば、さらなる情報アクセス量を獲得できる。

そこで令和2年度には、教育情報の発信と量と質を高めるための具体的方策の検討に着手したい（すでに素案は本年度に議論済み）。具体的には、各部科校のウェブサイトのトップページとFD推進センターウェブサイトの連結である。日本大学の教育に対する取り組みを広く社会へ発信するためには、ステークホルダー（学生、保護者、教職員、その他関係者）への効率的な情報発信と情報へのアクセス容易性を整備する必要がある。

#### 2 FD推進センター基本計画（中期計画）を踏まえた教育情報マネジメントワーキンググループとしての総括

中期計画（平成30年～令和2年度）とは「質保証体制を踏まえて実施されるFDの成果とその充実を支援する情報の収集と発信及び教育ツールの開発と充実ーFDガイドブックの充実・新規教育ツールの開発ー」である。

今年度は中期計画3年の2年目であった。特筆すべき報告事項は、中期計画の要であった『日本大学FDガイドブック』の全面改訂の実施にある。学生、教職員の立場より、冊子のコンセプト開発を一から行い、授業の中での活用度が高まることを念頭に工夫に工夫を重ねた。詳細は本報告書の1-②を参照いただきたい。本WGのメンバーが、学生、教員、職員あるいは保護者の立場に立って意見を出し合い、よりよいものに仕上げるために努力した。その成果は『Learning Guide ミライヲツクル』、『Teaching Guide 学生の共に創る授業デザイン』という新しい名称に端的に示されている。令和2年4月に新入生諸君と教職員へ本冊子が届くことを心待ちにする。

『日本大学FD NEWSLETTER』の作成ならびに『日本大学FD研究』の編集と刊行については、計画に従い、例年通り滞りなく完遂することができた。すべてはWGのメンバーの強固な協力体制と関係諸氏の献身的なご助力の賜物である。

教育情報マネジメントWGに係る令和2年度活動計画は、次のとおりとする。

令和2年度活動計画

- 1 FD推進センターウェブサイトを中心とし、ステークホルダー（学生、保護者、教職員、その他関係者）との継続的かつ効果的なコミュニケーションの方法につき抜本的に検討し、計画を立案、一部実行に移す
- 2 『日本大学FD NEWSLETTER』の作成
- 3 『日本大学FD研究』の編集・刊行
- 4 『日本大学FDガイドブック』の成果の測定と改善案の検討

以 上

令和元年度 日本大学FD推進センター活動一覧

| 日 程             | 内 容 等                                                                                                                                                                                                               |
|-----------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 平成31年 4月 1日 (月) | 『日本大学FDガイドブック2019』発行                                                                                                                                                                                                |
| 令和元年 5月13日 (月)  | 第1回プログラムワーキンググループ会議                                                                                                                                                                                                 |
| 5月16日 (木)       | 第1回全学FD委員会ワーキンググループリーダー会議                                                                                                                                                                                           |
| 5月18日 (土)       | 新任教員FDワークショップ2019開催<br>高等教育を取り巻く環境変化、大学教員の役割・責務を認識するとともに、日本大学の教育理念及び教学施策を理解し、自主創造の観点から、各教員が教育力向上の担い手となることを目的として実施                                                                                                   |
| 5月28日 (火)       | 第1回全学FD委員会                                                                                                                                                                                                          |
| 5月28日 (火)       | 第1回調査・分析ワーキンググループ会議                                                                                                                                                                                                 |
| 6月 8日 (土)       | 令和元年度 日本大学 学生FD CHAmmit 第1回コアスタッフミーティング                                                                                                                                                                             |
| 6月19日 (水)       | 第1回教育情報マネジメントワーキンググループ会議                                                                                                                                                                                            |
| 6月22日 (土)       | 令和元年度 日本大学 学生FD CHAmmit 第1回スタッフミーティング                                                                                                                                                                               |
| 7月 1日 (月)       | 「日本大学FD NEWSLETTER」(第15号)発行<br>・FD活動を前進させる年間プログラム”日本大学FDララー”<br>・部科校における学習支援等の事例紹介<br>・授業改善のためのティーチングタイプの収集と情報提供                                                                                                    |
| 7月 2日 (火)       | 第2回調査・分析ワーキンググループ会議                                                                                                                                                                                                 |
| 7月 3日 (水)       | 全学FDワークショップ2019 第1回タスクフォースミーティング                                                                                                                                                                                    |
| 7月 6日 (土)       | 令和元年度 日本大学 学生FD CHAmmit 第2回スタッフミーティング                                                                                                                                                                               |
| 7月23日 (火)       | 第2回全学FD委員会                                                                                                                                                                                                          |
| 7月23日 (火)       | 第2回プログラムワーキンググループ会議                                                                                                                                                                                                 |
| 7月29日 (月)       | 全学FDワークショップ2019 第2回タスクフォースミーティング                                                                                                                                                                                    |
| 8月 6日 (火)       | 令和元年度 日本大学 学生FD CHAmmit 第2回コアスタッフミーティング                                                                                                                                                                             |
| 8月20日 (火)       | 令和元年度 日本大学 学生FD CHAmmit 学生コアスタッフ合宿(軽井沢研修所)                                                                                                                                                                          |
| 8月21日 (水)       |                                                                                                                                                                                                                     |
| 8月27日 (火)       | 北翔大学 学生FDサミット2019                                                                                                                                                                                                   |
| 8月28日 (水)       |                                                                                                                                                                                                                     |
| 9月 5日 (木)       | 令和元年度 全学FDワークショップ<br>「大学教育における諸問題の解決を推進するために、生涯にわたる教育への関心を継続し、望ましいカリキュラム開発能力を発展させることにつながる基本的な教育技法と、各部科校におけるFDを企画・運営できる能力を習得すること」を一般目標とし、テーマを「大学教育における課題の解決に向けてー教育能力の開発 (Faculty development) を企画・運営できる人材の育成ー」として実施。 |
| 9月 6日 (金)       |                                                                                                                                                                                                                     |
| 9月 9日 (月)       |                                                                                                                                                                                                                     |
| 9月10日 (火)       |                                                                                                                                                                                                                     |
| 9月21日 (土)       | 令和元年度 日本大学 学生FD CHAmmit 第3回スタッフミーティング                                                                                                                                                                               |
| 10月 9日 (水)      | 第2回教育情報マネジメントワーキンググループ会議                                                                                                                                                                                            |
| 10月15日 (火)      | 第3回調査・分析ワーキンググループ会議                                                                                                                                                                                                 |
| 10月24日 (木)      | 第2回全学FD委員会ワーキンググループリーダー会議                                                                                                                                                                                           |
| 10月27日 (日)      | 令和元年度 日本大学 学生FD CHAmmit 第4回スタッフミーティング                                                                                                                                                                               |
| 10月29日 (火)      | 第3回全学FD委員会<br>・「令和元年度FD等教育開発・改善活動に関する調査」について                                                                                                                                                                        |
| 10月29日 (火)      | 第3回プログラムワーキンググループ会議                                                                                                                                                                                                 |
| 11月 9日 (土)      | 令和元年度 日本大学 学生FD CHAmmit 第5回スタッフミーティング                                                                                                                                                                               |
| 12月 7日 (土)      | 令和元年度 日本大学 学生FD CHAmmit 前日設営、リハーサル(理工学部・歯学部共同開催)                                                                                                                                                                    |
| 12月 8日 (日)      | 令和元年度 日本大学 学生FD CHAmmit(理工学部・歯学部共同開催)                                                                                                                                                                               |
| 12月11日 (水)      | 第4回調査・分析ワーキンググループ会議                                                                                                                                                                                                 |
| 12月17日 (火)      | 第3回全学FD委員会ワーキンググループリーダー会議                                                                                                                                                                                           |
| 12月24日 (火)      | 第4回プログラムワーキンググループ会議                                                                                                                                                                                                 |
| 12月24日 (火)      | 第3回教育情報マネジメントワーキンググループ会議                                                                                                                                                                                            |
| 令和 2年 1月 1日 (水) | 「日本大学FD NEWSLETTER」(第16号)発行<br>・全学FDワークショップ、日本大学学生FD CHAmmit開催<br>・令和元年度全学FDワークショップ開催<br>・令和元年度日本大学 学生 CHAmmit開催                                                                                                    |
| 1月30日 (木)       | 第5回プログラムワーキンググループ会議                                                                                                                                                                                                 |
| 2月 7日 (金)       | 令和元年度 日本大学 学生FD CHAmmit 学生スタッフ事後ミーティング                                                                                                                                                                              |
| 3月 1日 (金)       | 「日本大学 学生 FD CHAmmit 2019 NEWSLETTER」発行                                                                                                                                                                              |
| 3月 3日 (火)       | 第4回教育情報マネジメントワーキンググループ会議                                                                                                                                                                                            |
| 3月 3日 (火)       | 第5回調査・分析ワーキンググループ会議                                                                                                                                                                                                 |
| 3月17日 (火)       | 第4回全学FD委員会<br>・令和2年度FD推進センター活動計画に関する件                                                                                                                                                                               |
| 3月31日 (火)       | 『日本大学FD研究』(第8号)発行                                                                                                                                                                                                   |

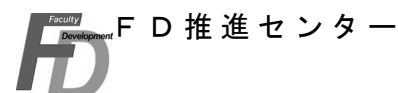
令和元年度 全学FD委員会名簿

令和2年3月31日現在

|     |    |     |    |                        |        |
|-----|----|-----|----|------------------------|--------|
| 委員長 | 落小 | 合田  | 実司 | (FD推進センター長・副学長)        | ※～8/31 |
| 員   | 河  | 相井  | 彦也 | (FD推進センター長・副学長)        | ※9/1～  |
| 委   | 臼  | 安哲  |    | (FD推進センター副センター長・松戸歯学部) |        |
| 員   | 古  | 智久  |    | (法学部)                  |        |
|     | 篠  | 圭太  |    | (文理学部)                 |        |
|     | 保  | 佳昭  |    | (経済学部)                 |        |
|     | 村  | 英治  |    | (商学部)                  | ※～7/31 |
|     | 吉  | 大輔  |    | (商学部)                  | ※8/1～  |
|     | 梅  | 順子  |    | (芸術学部)                 |        |
|     | 山  | 謙典  |    | (国際関係学部)               |        |
|     | 森  | 保典  |    | (危機管理学部)               |        |
|     | 清  | 千弘  |    | (スポーツ科学部)              | ※～4/11 |
|     | 大  | 進一郎 |    | (スポーツ科学部)              | ※4/12～ |
|     | 藤  | 孝宜  |    | (理工学部)                 |        |
|     | 根  | 修克  |    | (生産工学部)                |        |
|     | 木  | 浩作  |    | (工学部)                  |        |
|     | 日  | 智佳  |    | (医学部)                  | ※～5/31 |
|     | 今  |     |    | (医学部)                  | ※6/1～  |
|     | 小見 |     |    | (歯学部)                  |        |
|     | 須  |     |    | (松戸歯学部)                |        |
|     | 亀  |     |    | (生物資源科学部)              |        |
|     | 中  | 美和  |    | (薬学部)                  |        |
|     | 秋  | 俊一  |    | (通信教育部)                |        |
|     | 織  | 有基  |    | (大学院総合社会情報研究科)         |        |
|     | 石  | 元   |    | (大学院法務研究科)             |        |
|     | 佐  | 秀   |    | (短期大学部三島校舎)            |        |
|     | 松  |     |    | (短期大学部船橋校舎)            |        |
|     | 酒  |     |    | (学務部長)                 | ※～3/14 |
|     | 角  | 誠   |    | (学務部長)                 | ※3/15～ |
|     | 中  | 憲   |    | (学務部次長)                |        |
| 幹事  | 八  | 好   |    | (学務部特任事務長兼学務部入学課長)     |        |
|     | 後  | 英   |    | (学務部学務課長)              | ※～6/30 |
|     |    |     |    | (学務部学務課長)              | ※7/1～  |

以上

令和元年度 全学FD委員会ワーキンググループ名簿



|    |       |                        |
|----|-------|------------------------|
| 総括 | 河相 安彦 | FD推進センター副センター長，松戸歯学部教授 |
|----|-------|------------------------|

【調査・分析ワーキンググループ】

|      |       |              |         |
|------|-------|--------------|---------|
| リーダー | 藤井 孝宜 | 生産工学部教授      |         |
| メンバー | 篠ヶ谷圭太 | 経済学部准教授      |         |
|      | 梅本 順子 | 国際関係学部教授     |         |
|      | 森丘 保典 | スポーツ科学部教授    | (～4/11) |
|      | 清水 千弘 | スポーツ科学部教授    | (4/12～) |
|      | 今村 佳樹 | 歯学部教授        |         |
|      | 小見山 道 | 松戸歯学部学務担当・教授 |         |
|      | 中澤 瞳  | 通信教育部准教授     |         |
|      | 八町 斉  | 学務部学務課長      | (～6/30) |
|      | 後藤 英次 | 学務部学務課長      | (7/1～)  |
|      | 後藤 裕哉 | 学務部学務課課長補佐   |         |
|      | 濱野 泰三 | 学務部学務課主任     |         |

【プログラムワーキンググループ】

|      |       |              |         |
|------|-------|--------------|---------|
| リーダー | 河相 安彦 | 松戸歯学部教授      |         |
| メンバー | 古田 智久 | 文理学部教授       |         |
|      | 吉野 大輔 | 芸術学部准教授      |         |
|      | 山添 謙  | 危機管理学部准教授    |         |
|      | 大貫進一郎 | 理工学部教授       |         |
|      | 亀井美和子 | 薬学部教授        |         |
|      | 佐藤 秀人 | 短期大学部船橋校舎教授  |         |
|      | 石川 元康 | 短期大学部三島校舎准教授 |         |
|      | 八町 斉  | 学務部学務課長      | (～6/30) |
|      | 後藤 英次 | 学務部学務課長      | (7/1～)  |
|      | 濱野 泰三 | 学務部学務課主任     |         |
|      | 関 雄太  | 学務部学務課主任     |         |
|      | 佐賀 友美 | 学務部学務課       |         |

【教育情報マネジメントワーキンググループ】

|      |       |            |         |
|------|-------|------------|---------|
| リーダー | 臼井 哲也 | 法学部教授      |         |
| メンバー | 保苅 佳昭 | 商学部学務担当・教授 | (～7/31) |
|      | 村田 英治 | 商学部学務担当・教授 | (8/1～)  |
|      | 根本 修克 | 工学部学務担当・教授 |         |
|      | 木下 浩作 | 医学部学務担当・教授 | (～5/31) |
|      | 日臺 智明 | 医学部教授      | (6/1～)  |
|      | 須江 隆  | 生物資源科学部教授  |         |
|      | 八町 斉  | 学務部学務課長    | (～6/30) |
|      | 後藤 英次 | 学務部学務課長    | (7/1～)  |
|      | 後藤 裕哉 | 学務部学務課課長補佐 |         |
|      | 濱野 泰三 | 学務部学務課主任   |         |
|      | 芳 祥子  | 学務部学務課主任   |         |

以 上

# 【 付 録 】



## 日本大学FD推進センターに関する内規

|                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| 平成 20 年 2 月 26 日制定 | 平成 22 年 3 月 12 日改正 |
| 平成 20 年 4 月 1 日施行  | 平成 25 年 4 月 1 日施行  |
| 平成 22 年 3 月 16 日改正 | 平成 27 年 3 月 24 日改正 |
| 平成 22 年 4 月 1 日施行  | 平成 27 年 4 月 1 日施行  |

(名称及び設置)

第1条 この組織は、日本大学FD推進センター(以下「センター」という)と称し、日本大学(以下「本大学」という)に置く。

(目 的)

第2条 センターは、本大学のファカルティ・デベロップメント(以下「FD」という)を全学的に推進するとともに、大学院、学部、通信教育部及び短期大学部(以下「学部等」という)のFDの支援を行い、もって本大学の教育の質的向上に資することを目的とする。

(活 動)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の活動を行う。

- ① 学内外のFD情報の収集及び調査並びにFD推進に係る各種の分析されたデータの提供
- ② 授業改善のための基本方針の策定
- ③ 教員に対する研修会、講習会及び講演会等の開催
- ④ 教員の教授活動のための相互研鑽の実施
- ⑤ 学部等におけるFDの推進支援
- ⑥ 学生による授業評価の全学的推進
- ⑦ 本大学学生生活実態調査結果の教育的活用
- ⑧ 自己点検・自己評価等の調査との連携
- ⑨ 教員の教育・研究業績評価方法の検討
- ⑩ その他FDに関する事項

(センター長)

第4条 センターに、センター長を置く。

- 2 センター長は、センターを代表し、その業務を統括する。
- 3 センター長は、副学長(学務担当)とする。

(副センター長)

第5条 センターに、副センター長を置く。

- 2 副センター長は、センター長を補佐する。
- 3 センター長に事故あるときは、副センター長がその職務を代理し、センター長が欠けたときは、その職務を代行する。
- 4 副センター長は学長が任命し、その任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

(全学FD委員会)

第6条 センターに、第3条各号に定める事業を推進するため、全学FD委員会(以下「委員会」という)を置く。

(委員会の構成)

第7条 委員会は、次の者をもって構成し、委員及び幹事は大学が委嘱する。

① 委員

(1) センター長

(2) 副センター長

(3) 学務部長

(4) 本部部長及び部次長 若干名

(5) 各学部長、通信教育部長、大学院独立研究科長及び専門職大学院研究科長が推薦する教員 各1名

(6) 短期大学部各校舎次長が推薦する教員 各1名

(7) センター長が指名する者 若干名

② 幹事

(1) 学務課長

(2) 本部部課長 若干名

(委員長)

第8条 委員会の委員長は、センター長とする。

(委員会の招集)

第9条 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。

(委員及び幹事の任期)

第10条 委員長、委員及び幹事の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

2 補充の委員及び幹事の任期は、前任者の残任期間とする。

(学長の出席)

第11条 学長は、随時、委員会に出席することができる。

(構成員以外の者の出席)

第12条 委員長は、必要に応じ、委員以外の者を出席させ意見を求めることができる。

(専門委員会)

第13条 委員長は、必要に応じて、専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会の委員長及び委員は、センター長の推薦に基づき、本大学が委嘱する。

(所 管)

第14条 センターに関する事務は、学務部が行う。

(内規の改正)

第15条 この内規を改正する場合は、委員会の審議を経て、常務理事会で決定しなければならない。

(内規等)

第16条 センターの運営その他に関し必要ある場合は、別に内規等で定めることができる。

附 則

この内規は、平成27年4月1日から施行する。

## 日本大学FD推進センター基本計画（中期計画）



「教学に関する全学的な基本方針」の通達（平成 29 年 10 月 6 日付け）を踏まえて、教学戦略委員会において、本学の教育の質保証体制を実質化するための各種検討を進めている。

FD推進センターにおいて、その検討を受け（互いに共有しつつ）これらを補完するFD活動の実質化を図ることは極めて重要であるといえる。当センターでは、これを実現するため、以下のとおりFDの視点から全学的な教学方針等の共有と広く捉えた各種教育手法等の理解浸透を中期計画として推進していく。

### ◆ 中期計画〔期間：平成 30 年度～平成 32 年度（3 か年）〕

#### 学生の成長を一義的に捉えた教育の質保証を実質化するFD活動の充実

- ① 質保証体制の充実に資する本学FDの在り方の調査と方針の明確化：マクロ・ミドル・ミクロそれぞれの観点から補完する諸方策等の検討  
ー教育業績評価・ポートフォリオ等の在り方ー
- ② 質保証体制の充実と日本大学教育憲章を捉えたFD活動の各学部等への浸透策の展開  
ーワークショップ等浸透に関わるプログラムの充実と改善ー
- ③ 質保証体制を踏まえて実施されるFDの成果とその充実を支援する情報の収集と発信及び教育ツールの開発と充実  
ーFDガイドブックの充実・新規教育ツールの開発ー

以 上



---

## 令和元年度日本大学F D推進センター活動報告書

---

発 行 令和2年3月

発行者 日本大学F D推進センター

〒102-8275 東京都千代田区九段南4－8－24

日本大学会館 4階 日本大学本部学務部学務課

電話：03-5275-8314 F A X：03-5275-8315

E-mail：adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp

---



**令和 2 年度**

**日本大学 F D 推進センター活動報告書**



**日本大学 F D 推進センター**



## 目

## 次

コロナ禍でも止めない学びの継続の実現

ー F D 推進センター基本計画（中期計画）を振り返りながらー

F D 推進センター長・副学長（学務担当） 本 田 和 也

日本大学 F D 推進センター連携マップ

令和 2 年度調査・分析ワーキンググループ活動報告

令和 2 年度プログラムワーキンググループ活動報告

令和 2 年度教育情報マネジメントワーキンググループ活動報告

令和 2 年度日本大学 F D 推進センター活動一覧

令和 2 年度全学 F D 委員会名簿

令和 2 年度全学 F D 委員会ワーキンググループ名簿

### 【 付 録 】

日本大学 F D 推進センターに関する内規

F D 推進センター基本計画（中期計画）

※ 本報告書に掲載の役職・資格等については、令和 2 年度当時のものです。

**コロナ禍でも止めない学びの継続の実現**  
**ー F D 推進センター基本計画（中期計画）を振り返りながらー**

F D 推進センター長・副学長（学務担当）  
**本 田 和 也**

令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大を受け、政府も「緊急事態宣言」を発令し、これまでの生活様式が一変しました。構内への入校規制をはじめ、キャンパス内で講義を受けることや学生生活さえも満足に送ることができない状況を迎えました。このような状況下でも学生の学びを止めず、学生の安全と学修を第一として、オンライン授業を実施することとなりました。しかし、これまでにほとんど経験のないオンライン授業への転換に悪戦苦闘の日々を送った教職員は実に多かったことと存じます。当然ながらオンライン授業においても、面接授業と同様に学生の学修目標への到達が最重要となりますので、そこへの到達をオンラインでどのように展開していくか懸念されたことと存じます。さらに、教員自身のICTに関する知識の問題、オンライン授業を受講する学生の学修環境への問題等、待ち構えている問題は山積でした。しかし、そういう状況下でも、教職員が一同になり、各学部内でオンライン授業に関するコンテンツの操作に関する講習会や操作用マニュアル等が作成されるなど、学部独自でFDが醸成されていきました。その成果が実り、令和2年5月8日に前学期の授業開始を迎えることができたことと存じます。しかし、継続したオンライン授業の実施を踏まえ、オンライン授業に不安を抱えている教員も多かったのではないのでしょうか。特に、ICTスキルの向上（ツール活用方法）成績評価の方法、学生の学修効果を高める方法は急務であり、それ以外にも他学部で行われている授業例やオンラインを有効に活用した刷新的な授業の紹介など、学内の情報共有が必要であると考え、FD推進センターでオンライン授業に関するシンポジウムを定期的開催してまいりました。また、9月からビデオ会議システム（Zoom）を大学で包括契約したことで、Zoom社からの本学限定のトレーニングプログラムを提供していただき、専任教員だけでなく非常勤講師にも積極的に参加し、Zoomを活用した授業方法を紹介していただきました。

このようなシンポジウムやトレーニングプログラムにより、オンライン授業の可能性をさら広げる機会となり、各教員の授業改善に役立っていることと存じます。授業紹介、講演をはじめ企画立案に御協力いただいたFD委員会の各ワーキングリーダー及び学務課に感謝申し上げます。

さて、FD推進センターは、中期計画を掲げており、令和2年度は平成30年度からの3年計画のまとめとなる年です。中期計画では、全学FD委員会の傘下である3ワーキンググループ（調査・分析ワーキンググループ、プログラムワーキンググループ及び教育情報マネジメントワーキンググループ）の活動計画としております。

調査・分析ワーキンググループでは、継続して実施している①FD等教育開発・改善活動

に関する調査の実施、②学生による授業評価アンケート結果の全学的な活用に係る諸検討③教員の教育業績評価方法等に係る諸検討を行ってきました。特に③教員の教育業績評価方法等に係る諸検討では、教員自身の自己点検・評価を行うことで、教育改善を図り教育の質向上を持続していくことで内部質保証にも関連する事項となりますので、今後も検討を重ねてまいります。

プログラムワーキンググループでは、これまで各学部の授業改善、カリキュラム改善及び組織整備を目的としたFDを企画・実施できる人材「ファカルティ・ディベロッパー」の養成を目的とした「全学FDワークショップ」の実施や新規採用教員に対して本学の教育理念及び教学施策を理解しカリキュラムプランニングの基礎を学ぶ「新任教員ワークショップ」を実施してまいりました。しかし、これらのワークショップは、新型コロナウイルス感染拡大を踏まえ、新任教員ワークショップは、オンデマンドを利用した代替措置とし、全学FDワークショップは中止ということになりました。しかし、「学生FDCHAmmit」は、学生側から開催の強い要望があり、オンラインでの開催を迎えることができました。企画検討から学生スタッフが主体となりオンラインでのミーティングを重ね無事に開催に至ることができました。テーマは、オンライン授業に関することをテーマとし、学生と教職員がグループに分かれ、問題点を共有し、各学部でオンライン授業に関する提案書の策定を行いました。

教育情報マネジメントワーキンググループでは、「FD NEWSLETTER」を年2回発行しており、令和2年度は、前述のオンラインシンポジウムの特集とオンラインで実施した学生FDCHAmmitの特集を組み発行に至りました。また、「FD研究」の発行に関しては、今年度は発行には至りませんでした。投稿要項及び執筆要項を改正し、学生による投稿がFD研究として正式に掲載することが可能となりました。さらに、毎年新入生及び教員に配付している「日本大学FDガイドブック」のデザインと内容を一新し、タイトルを「ミライヲツクル Learning Guide (学生版)」及び「学生と創る授業デザイン Teaching Guide (教員用)」としました。このガイドブックの具体的な活用状況についてアンケートを集計し見直しを進めてまいります。

FD推進センターでは、令和3年度から新たな3年間の中期計画を掲げ、本学の内部質保証の一旦を担い、今後も継続して教員の教授力向上及び授業改善並びに職員の教学管理能力の向上に寄与し、学修者本位の教育実現に向けた活動を推進してまいります。

引き続き御協力の程よろしくお願いいたします。

# 日本大学FD推進センター 連携マップ

## FD推進センター〔全学FD委員会〕

### 【 目 的 】

1. 日本大学におけるFD活動の全学的な推進
2. 大学院, 学部, 通信教育部及び短期大学部における FD活動の支援  
⇒日本大学における教育の質的向上を図る

学務部学務課

## ワーキンググループリーダー会議

### 調査・分析 ワーキンググループ リーダー, メンバー

FD活動及び教育活動に関わる調査・分析を行う。  
また、既に保有する各種教育情報等の効果的な活用方法を検討する。

#### 【主な活動内容】

- 「FD等教育開発・改善活動に関する調査」の実施・分析等
- FD等教育開発推進関連組織に関する調査研究
- 学内外のFD活動等に係る調査研究

ほか

### プログラム ワーキンググループ リーダー, メンバー

教職員の教育・研究指導力向上並びに学生の学習意欲向上などを目的とした各種のプログラム・ツールを開発・実施・提供する。

#### 【主な活動内容】

- 全学FDシンポジウム等の企画・実施
- 新任教員対象FDプログラムの企画・実施
- “学生参画型FD”の趣旨を捉えたFDプログラムの企画・実施

ほか

### 教育情報マネジメント ワーキンググループ リーダー, メンバー

日本大学全体及び学部・研究科等におけるFD活動などの取り組みを広く学内外に情報発信するとともに、その効果的な情報共有のあり方を検討する。

#### 【主な活動内容】

- 「日本大学FD NEWSLETTER」の企画・編集
- 『日本大学FDガイドブック』の企画・編集
- 『日本大学FD研究』の編集・刊行
- FD推進センターウェブサイトの具体的活用方法の継続的な検討と展開

ほか

令和 2 年度

## 調査・分析ワーキンググループ活動報告



日本大学 FD 推進センター

〔全学 FD 委員会調査・分析ワーキンググループ〕



調査・分析ワーキンググループに係る令和2年度における活動内容及び総括は、FD推進センター基本計画（中期計画）並びに令和2年度活動計画に基づき、次のとおりである。

## 1 令和2年度活動計画

### ① 「令和2年度FD等教育開発・改善活動に関する調査」の実施

#### （1）学部，短期大学部

#### （2）大学院研究科

### ② 学生による授業評価アンケート結果の全学的な活用に係る諸検討

### ③ 教員の教育業績評価方法等に係る諸検討

## 2 FD推進センター基本計画（中期計画）を踏まえた調査・分析ワーキンググループとしての総括

### 1-① 「令和2年度FD等教育開発・改善活動に関する調査」の実施

#### （1）学部，短期大学部

本調査は、平成20年度より（平成22年度を除き）毎年実施している。12回目となる今年度の調査は計19学部等に依頼し、医学部を除くほぼ全学部より回答を得た。今年度は新型コロナウイルス感染症のパンデミックという緊急事態に見舞われたが、特に項目の修正は行わず、昨年度と同様の内容で調査を行った。得られた回答について集計を行った結果について、項目を選定した上で以下に示す。

### I. FD等教育開発・改善活動推進組織

本学では、全ての学部等にFD等教育開発・改善活動を推進するための組織が設置されている。名称は、「FD委員会」が大半を占めるが、他には経済学部の「FD推進委員会」、三軒茶屋キャンパス（危機管理学部、スポーツ科学部）の「FD小委員会」、生産工学部の「教育開発センター運営委員会」、医学部の「医学教育センター」などがある。教職員の構成は教員が3～22名、職員が2～9名で、教職員の合計は、最多が31名、最少が7名であった。1年間の会議開催回数の平均は3.6回であり（昨年は3.7回）、最多は9回、最少が0回であった。

### II. 組織的なFD等教育開発・改善活動

教員の授業におけるPDCAサイクルは、P（シラバス作成）、D（指導の展開）、C（振り返り）、A（授業の改善）で構成されと考えられる。以下では、こうしたプロセスに関連する項目の結果について報告を行う。

#### 1. シラバス作成について

まず、「シラバスにおける準備学習・到達目標・成績評価方法・卒業認定方針との関連・課題のフィードバックなどの明記およびシラバス作成に関する全教員対象のFD（項目⑭）」について、「シラバスにおける準備学習・到達目標・成績評価方法・卒業認定方針との関連・課題のフィードバックなどの明記」は、ほぼすべての学部等で実施している。「シラバス作成に関する全教員対象の

FD」については、説明会（講演会）などの方法で実施した学部等は5つ（松戸歯学部、芸術学部、工学部、短期大学部船橋校舎、短期大学部三島校舎）、実施検討中が4つ（文理学部、商学部、理工学部、生産工学部）となっていた。実践例として、松戸歯学部では、全教員対象にFD講演会でシラバスに関わる教示を行い、新規教員採用者には毎年ワークショップでシラバスに関わる教示を行っている。また、短期大学部船橋校舎では、全専任教員対象の教職員研修会において、専門科目（導入科目）のシラバス作成のワークショップを開催している。

また、「担当教員以外の第三者によるシラバス内容の確認（項目⑮）」については、ほとんどすべての学部等で実施されている。実施主体は学務委員会が中心であるが、シラバス点検のための委員会を別途設置しているケースもある。実践例として、法学部では、「シラバス第三者チェック実施検討小委員会」にて、平成29年度よりチェックしている。また、生物資源科学部では、シラバス第三者委員会（学内委員）を設置し、シラバスの記入内容についてチェックしている。

以上のことから、現在では作成されたシラバスのチェックは行われていると言える。ただし、重要なことは教員自身が質の高いシラバスを作成できるようになることであり、その点では、シラバス作成方法に関する全教員対象のFDが望まれる。

## 2. 教育の評価について

「教育業績の評価方法（例：ティーチングポートフォリオ）及び業績評価制度（項目②）」は、実施しているのは4学部、検討中が5学部等、実施していないと回答したのは9学部等で昨年度と同様の結果であった。実践例として、生産工学部では、教育貢献賞として教育開発センター運営委員会が候補者を推薦、学部内での審議を経て受賞者を決定し、受賞者は学外もしくは学内で受賞内容を公表するようにしている。加えて、平成27年度からは、専任教員に対し、ティーチングポートフォリオの提出を義務付けている。松戸歯学部では、年度始めに自己点検評価シートを用いて教育業績を提出しており、ティーチングポートフォリオの作成の検討も考えている。歯学部では、ティーチングポートフォリオの導入に向けた講演会を実施した。また、三軒茶屋キャンパス（危機管理学部、スポーツ科学部）では「教育改善報告書」により、各教員が授業評価アンケート結果等から達成度を振り返り、授業改善に役立てている。加えて、今後は業績評価制度の確立に向けて検討を進めている。

「3つのポリシーの点検評価への外部評価（地域社会・産業界等）の導入および学生代表者の参加（項目⑯）」については、昨年と同様、外部評価を導入している学部等は2つ（国際関係学部、短期大学部三島校舎）、検討中が三軒茶屋キャンパス（危機管理学部、スポーツ科学部）であり、学生代表者の参加を実施している学部等はなかった。実践例として、国際関係学部や短期大学部三島校舎では、近隣の地方自治体や青年会議所に教育方針、教育目標に関する意見を求めた。

以上のように、教員の教育そのものを学内外で評価する取り組みはまだ多くの学部で行われていない。全学FD委員会では、現在「ティーチングポートフォリオ」の内容について検討を進めているが、教育活動をどのような側面から、どのように評価するかについては更なる議論が必要であり、外部評価および学生代表者の参加の導入と合わせ、今後の課題であると言える。

## 3. 教育の改善について

「授業内容や授業方法等に関する学生への意見聴取、学生からの意見の反映（項目④）」は10

学部等で実施されており、実践例として、商学部では「コメントボックス」を設け、学修に関するコメントについては学務担当と教務課長が対応し、必要があれば授業担当教員に改善を求めて、結果を学生に伝えている。文理学部では、学生が授業内容を提案できるプロジェクト教育科目を設置している。法学部では、学生からの自由記述をもとに、当該科目担当教員が「アクションプランシート」を作成し、次学期の授業で学生にフィードバックしている。さらに、こうしたアクションプランを教育改善に生かすために、FD 委員会に「PDCA 検討小委員会」を設置し、検討を始めている。歯学部では、平成 29 年 4 月より、学生 FD 活動として学生と教職員のしゃべり場を年 2 回実施している。松戸歯学部では各学科の学年教育主任を中心に別にアンケートを実施し改善を図っている。特にオムニバス形式の総合講義ではそれぞれの講義担当者の評価を行い、担当者の変更を検討している。

また、「日本大学学修満足度向上調査」の集計データの教育改善への活用（項目①）は、5 学部等が実施しており、7 学部等が検討中である。残り 5 学部等は実施・検討していない。実践例として、松戸歯学部では、個別調査内容を精査し、IR 小委員会で再分析し、その結果を教学センター運営委員会、学務委員会、FD 委員会で供覧し、授業改善の提言を行った。また、生産工学部では、教学 IR 室でアンケート結果をまとめ、学部内で公開したほか、各学会に関係すると思われる内容について、改善策を検討していた。

データの活用については、各学部において、多様な取り組みがなされている。データの活用を行う学部が増えていくことは重要ではあるが、それと同時に、「効果的な活用方法」の事例を学部間で共有し、個々の学部の実情に合致した形で取り組みが展開されていくことが望まれる。

### Ⅲ. FD 等教育開発・改善活動に係る講演会、ワークショップ、事例報告会などの開催

コロナ渦の影響もあり、令和元年 10 月 1 日から令和 2 年 9 月 30 日までの 1 年間、FD 等教育開発・改善活動に係る行事の実施は昨年より減少し、中止となった場合も多い。開催件数の合計は 33 件である（昨年は 56 件）。最多は文理学部、医学部、松戸歯学部の 5 件だが、ほとんどがパンデミック以前の開催によるものである。コロナ渦が始まって以降では、Google Classroom 及び Meet の操作説明会（芸術学部、三軒茶屋キャンパス）、学生の多様化時代における教育法（理工学部）、オンライン時代の大学教育（文理学部）といったテーマで開催されている（いずれもオンライン実施）。

次年度も新型コロナウイルス感染症の影響が続くと予想されるので、おそらく FD 関係の研修会やワークショップの開催もオンラインでの実施となると考えられる。オンライン実施のメリットとして、教員の参加率が高まることも予想できるが、今後、複数の学部等でオンライン時代の FD のあり方を問う研修会やワークショップが積極的に開かれることを期待したい。

### Ⅳ. 学生による授業評価アンケートの実施

#### 1. 実施形態と対象

令和元年度後期には紙媒体による実施が 10 学部等であったが、令和 2 年度前期には全てパソコン・携帯電話（ポータルシステム）による実施へと移行した。実施対象の授業については、一部の科目（スポーツ実技科目など）が除かれている場合もあるが、基本的には全ての授業が対象になっている。

## 2. 公開方法と分析方法

公開の対象は、担当教員のみ、ポータルサイトを通じての公開、ホームページを用いての公開といったように、学部等によって様々である。また、分析方法についても、科目単位の分析の他、教員個人ごと、学部全体、学科ごと、科目群単位、学年ごとの分析を行っている学部等が見られるなど、多様であった。

## 3. 活用方法

活用方法については、教員個人に任せている学部等が多い（14 学部等）が、6 学部等では、フィードバックを行うとともに、教員に授業改善計画を作成してもらうなどの取り組みが行われていた。たとえば、法学部では、各教員が該当する授業で、受講生に改善計画等を説明するよう求めている。三軒茶屋キャンパス（危機管理学部、スポーツ科学部）では、教員に「教育改善計画書」を提出してもらっている。また、歯学部では、学生が改善してほしいと指摘した項目についてフィードバックコメントを提出するよう教員に依頼しており、短期大学部船橋校舎では、各教員がアンケート結果を確認後、授業改善に繋げ、「授業改善トライアル」に授業改善の内容と成果を記録して報告している。

その他、松戸歯学部では、高評価の科目担当者数名に FD 講演会での講演を依頼しており、授業評価の高い教員の授業を参観するよう若手教員に義務付けている。また、商学部では、問題がある評価が多い教員については、教育改善委員会が改善の指導をするといった取り組みが行われている。

## 4. アンケートに対する意見や質問

全学共通統一調査項目に対するポジティブな意見としては「全学部の学生が授業について何を思っているのかを考える一定の目安を把握できる」「他学部との比較ができて参考になる」などが見られた。一方で「授業の形態（講義、実験・実習、演習）、学生の出席率等によって集計を分けるとより意義のあるデータになる」などのコメントが見られた。

その他、アンケート全般に対しては「学修満足度調査等、学生が回答するアンケートの種類が多い。回収率の増加やより正確な回答を得るため、アンケート項目の整理及びアンケート実施時期の調整が必要と思われる（生産工学部）」「大学として実施するアンケート種が増加しており、回答する学生の負担、多くのアンケートを回答することにより、正確に回答しない学生がいることが危惧される（短期大学部船橋校舎）」「学生からは、設問数が多数であり、解答するのに疲弊するとの声が聞かれる（歯学部）」「授業評価アンケートをまじめに回答にしている学生が少ない。具体的な例として、①全項目同じ番号を塗りつぶしている、②“まったくそう思わない”をすべて塗りつぶす等、悪意が感じられる学生がいる、③自由記述欄をほとんどの学生が記述していない等が挙げられる。今後、現行の授業アンケートを引き続き実施するかどうか、設問や実施方法の変更が必要であればどのようにするのか等、FD 委員会で検討する予定である（国際関係学部、短期大学部三島校舎）」などの意見が見られた。

## 5. 今後の課題

学部等によって授業評価アンケートの実施率に大きな差が見られ、専任教員の実施率が 2 回と

も100%の学部等がある一方で、2回とも50%に達しない学部等も複数あった。実施率を向上させることが今後の課題であるといえる。また、授業評価アンケートに寄せられたコメントからは、「アンケートの種類や項目が多い」「学生がまじめに回答していない」といった問題も伺える。アンケートの実施の意義を高めるためにも、内容を精選するだけでなく、教員がアンケート結果を授業に反映させる仕組みを作るとともに、学生にそうしたサイクルを明示し、アンケートに回答する意義が伝わるようにすることが必要になると思われる。

## （２） 大学院研究科

大学院研究科におけるFD等教育開発・改善活動に関する調査は、平成23年度より毎年実施しているものであり、今回で9回目となる。今年度の調査は、19研究科に依頼し、すべての研究科より回答を得た。調査項目に関しては、今年度は特に追加する項目はないが、経年変化の観点からⅢ－①の表記の一部（英語→外国語）の修正、変更を行った。

### Ⅰ. 大学院に係るFD等教育開発・改善活動組織

大学院に係るFD等教育開発・改善活動推進組織を有しているのは、10研究科、学部との合同が8研究科、また組織なしが1研究科あった。今後、組織的な取り組みができるような体制づくりが望まれる。

### Ⅱ. 大学院に係る組織的なFD等教育開発・改善活動

「①研究科に設置された各専攻の課程ごとの日本大学教育憲章に則った3ポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）の作成」に関する設問は、【実施しているが改善を検討】と【現在実施している】と回答した研究科が16、検討中が2と良好であった。「②学位（修士・博士）授与基準の明確化とその内容の教職員および学生への周知」についての設問では、15研究科において実施、2研究科で【実施しているが改善を検討】ということと比較的良好であった。「③研究科単独でFD等教育開発・改善活動を報告する仕組みとその内容の教職員および学生への開示」に関する設問では、【現在実施している】もしくは【実施しているが改善を検討】は半数以下の8研究科にとどまっており、今後も改善が必要とされる。「④研究科単独で学外研修会等への参加および講師派遣を推進する仕組みとその活動実績」に関する設問では、4研究科を除き、実施していない研究科が大半をしめていることからこちらも今後の改善が必要である。「⑤研究科単独で学内における講演会、セミナー、シンポジウム等への非常勤教員の参加を図る仕組みとその活動実績」に関する設問では、実施しているのは6研究科のみで、大半の研究科が実施に至っていない。なお、今年度は新型コロナウイルス感染拡大に伴う影響もあり、実施を見送ったケースもあった。「⑥研究科単独で教員を対象としたFD等教育開発・改善活動にかかわるアンケートの実施」に関する設問では、【現在実施している】もしくは【実施しているが改善を検討】が半数以下の7研究科にとどまっている。今後も改善が必要である。「⑦研究科単独で担当教員以外の第三者によるシラバスを確認する仕組みとその活動実績」に関する設問では、【現在実施している】もしくは【実施しているが改善を検討】が10研究科で、実施していない研究科が大半を占めていた昨年度と比較して改善がみられる。

### Ⅲ. 大学院学生対する「学位の質保証」に係る組織的な取り組み

「①大学院のグローバル化に対応するための取り組み」に関しては、【現在実施している】と【実施しているが改善を検討】が昨年度よりも増えて、15 研究科となっている。この項目に関しては、多くの研究科が独自の計画を立てて取組んでいることが分かった。「②研究テーマや研究方法、詳細な工夫を記載した研究計画の作成や学生と教員との間で学位授与に必要なプロセスの共有」「③複数の指導教員や異なる専攻の教員、学外審査員を加えた論文指導体制の構築」「④研究の進捗状況や理解度等を適切に把握するための中間発表やそれに準ずる仕組みの整備」の設問では、【現在実施している】と【実施しているが改善を検討】を合わせると、②では 13 研究科、③は 15 研究科、④は 17 研究科となっており、改善の取り組みが進んでいることが分かった。ただ、「⑤学生のキャリアを見据えた組織的な研究指導体制の実施」に関しては、【現在実施している】と【実施しているが改善を検討】を合わせても 6 研究科にとどまっている。さらに前回より新たに加わった設問「⑥将来を見据えた教育能力向上に向けた学修の場の提供」については、【現在実施している】と【現在実施しているが改善を検討】の合計でも 7 研究科にとどまっている。

### Ⅳ. 大学院 FD 等教育開発・改善活動に係る講演会、ワークショップ、シンポジウムなどの開催

今年度は、13 研究科において、講演会、ワークショップ、シンポジウムなど、合計 26 件企画・実施された。そのうち 9 件が大学院単独、17 件が学部との共催であった。

### Ⅴ. 大学院生による授業評価アンケートの実施（対象：令和元年度後期・令和 2 年度前期実施分）

令和元年度後期と令和 2 年度前期において授業評価アンケートについて博士前期（修士）課程で実施されたのは 12 研究科、専門職学位課程で実施されたのは 1 研究科、博士後期課程（博士）過程で実施されたのは 7 研究科であった。少人数による授業が多いため、学部に比べて実施が増えない状況にある。

### Ⅵ. 資料提供

資料提供については昨年度同様に、「学内利用のみ」とするものが多い。

#### 1-② 学生による授業評価アンケート結果の全学的な活用に係る諸検討

##### （1）全学的な調査項目に関する改善について

昨年度は、日本大学教育状況調査票（仮称）において、授業評価アンケートの評価をポイントに使う際、全学に関連する項目を使用することについて検討した結果、授業の総合的な満足度を尋ねる項目を追加することになった。ただし、すでに運用されている授業評価アンケートの中に授業の総合的な満足度を問う項目がある学部（例えば通信教育部）はそのまま運用することにし、アンケート内に相当する項目がない学部に関しては新規に追加をお願いすることになった。

この件について、改めて今年度の WG 内でも取り上げ確認を行った。なお、この件に関しては全学 FD 委員会で二度報告済みである（2019 年 10 月 29 日、および 2020 年 7 月 21 日報告）。これに伴い、現行の全学的な調査項目は 6 つから 7 つになる。

今年度はコロナ禍によって十分な検討を行うことができなかったが、授業評価アンケート結果の全学的な活用が、日本大学教育状況調査票（仮称）と結びつく場合には、アンケートを通じて

算出されるポイントが教員評価に直結する可能性があるため、学部や授業の違いによってポイントに大きな差が出ないようにする配慮する必要がある。この点はさらに引き続き検討する必要がある。

## **（２）全学的な調査項目に限らない各学部の調査結果の（教員、学生などへの）公表方法及び活用方法等の検討について**

日本大学は、16 学部及び通信教育部、短期大学部を要する総合大学であるため、授業評価アンケートにおいては、全学的な状況把握と分析だけでなく、学部単位での調査結果の公表方法や活用方法を検討していかなければならない。各学部での授業評価の状況は、受講者数、主とする授業形態及びキャンパスの環境等が各学部の状況で異なることから、一定条件での比較は困難である。しかし、そのような相違を前提としたうえで、学部ごとの共通点と相違点を分析した。経年的な変化については、従前は、レーダーチャートを利用した年度比較を行ってきたが、今年度から棒グラフでの比較表に変更した。このように簡素化したことで、変化を容易に見ることができるようになった。そのうえで、平均値が下がった学部においては、状況进行分析することを要請した。また、平均値が上がった項目（特にシラバスの記載）については、FD の効果が表れていることも伺えた。令和 2 年度では、新型コロナウイルス感染症の影響により、オンライン講義を急遽導入されたことから、時間軸上での比較は困難であった。具体的には、評価アンケートの結果に平均値が上がる項目や下がる項目があることが予想された。そこで、別途実施した「オンライン授業に関するアンケート」を用いることで、現在の状況を正確に把握することに努めた。

### **1－③ 教員の教育業績評価方法等に係る諸検討**

#### **（１）ティーチングポートフォリオの導入の検討について（「成果」項目以外の検討）**

令和 2 年度は、コロナ禍ですべての教員は、従前と全く異なった教育上の努力を求められた 1 年だった。ティーチングポートフォリオについても、各学部での導入についての検討の予定であったが、前年度と環境が大きく異なることから、前年度との評価が難しい項目が多々あり、現在の様式での検討を継続することが難しいと考えられた。令和 3 年度は、引き続き、従前の様式での導入が可能か検討を加える必要がある。

## **2 FD 推進センター基本計画（中期計画）を踏まえた調査・分析ワーキンググループとしての総括**

令和 2 年度は、FD 推進センターが掲げている中期計画（3 年間）の最終年である。

中期計画である「質保証体制の充実に資する本学 FD の在り方の調査と方針の明確化：マクロ・ミドル・ミクロそれぞれの観点から補完する諸方策等の検討－教育業績評価・ポートフォリオ等の在り方－」では、昨年度と同様に「教員の教育業績評価方法等に係る諸検討」に力点を置き、今年度は、（１）日本大学教育状況調査票（仮称）の導入部と（２）教育の成果についての内容の完成を目的とした再検討を行った。（１）については、ティーチングポートフォリオチャート（TP チャート）をベースにした教育状況の調査票を見直し、今後のスケジュール等を確認した。（２）の項目については、全学 FD 委員会メンバーが記載した以前の結果をもとに、教育貢献賞などの評価目的に活用すること等を議論した。

学部、短期大学部及び大学院を対象としている「FD 等教育開発・改善活動に関する調査」は、毎年実施されてきた活動である。学部・短期大学部に関しては、昨年度と同様の設問で調査が行われた。大学院については、「将来を見据えた教育能力向上に向けた学修の場の提供」についての設問が追加された。

学部・短期大学部においては、「①「日本大学学修満足度向上調査」の集計データの教育改善への活用」については、3 学部等で実施され、12 学部等が検討中であるとの回答が得られた。今後、多くの学部等で活用されるような方策が必要であると考えられる。中期計画と関連する設問である「②教育業績の評価方法（例：ティーチングポートフォリオ）及び業績評価制度」に関しては、4 学部等で優れた事例が挙げられているが、実施していないと回答したのは 9 学部等であった。また、「④授業内容や授業方法等に関する学生への意見聴取、学生からの意見の反映」は 10 学部等で実施されているが、全ての学部等で実施されることが望まれる。大学院研究科においては、プレ FD に関する追加設問については、【現在実施している】と【現在実施しているが改善を検討】と回答したのが 7 研究科であり、すべての研究科に実施事例を共有することが必要である。

「学生による授業評価アンケート結果の全学的な活用に係る諸検討」では、主に「日本大学教育状況調査票（仮称）」に関連して、授業評価アンケートの評価をポイントに使う際、全学的に関連する項目について検討され、学部や授業の違いによってポイントに大きな差が出ないように配慮するため、授業の総合的な満足度を尋ねる項目を追加することになった。また、全学的な調査項目の改善を目的に、各学部関係者と対面で意見交換を実施することが検討されたが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、実施には至らなかった。

オンライン授業に関する学生・教職員向けのアンケートは、本部学務部学務課主導で全学的に実施した。アンケート結果は、令和 2 年 8 月 8 日（土）と 9 月 5 日（土）の第 1 回及び第 2 回オンライン授業に関するシンポジウムで総括し、各学部の代表者にアンケート結果をフィードバックし、後期授業への改善を依頼した。

以 上

令和 2 年度

## プログラムワーキンググループ活動報告



日本大学 FD 推進センター

〔全学 FD 委員会プログラムワーキンググループ〕



プログラムワーキンググループに係る令和2年度における活動内容及び総括は、FD推進センター基本計画（中期計画）並びに令和2年度活動計画に基づき、次のとおりである。

- 1 令和2年度活動計画
  - ① 全学FDワークショップの企画・開催
  - ② 令和2年度 日本大学 学生FD CHAmiT」の企画・開催
  - ③ 新任教員を対象としたFDプログラムの検討及び企画・開催
  - ④ 日本大学オンデマンド及び全国私立大学FD連携フォーラム実践的FDプログラムの活用を検討
  - ⑤ 全学FDシンポジウムの企画・開催に向けた検討
  - ⑥ 日本大学オンライン授業に関するシンポジウム及びZoom社における日本大学限定トレーニング企画・開催
- 2 FD推進センター基本計画（中期計画）を踏まえたプログラムワーキンググループとしての総括

#### 1－① 全学FDワークショップの企画・開催

各部科校において教育開発や授業改善に対する意識を涵養し、主体的にFD活動ができる優秀な人材を養成する目的で平成25年度より全学FDワークショップが開催され、今年度で8年目を迎えた。その間、カリキュラムプランニングを通じて教育分野の基本的概念や教授手法について学部を超えた積極的なディスカッションが行われ、実践的な教育改善に取り組むことが出来る人材「ファカルティ・ディベロッパー（FDer）」を多数育成してきた。

令和2年度全学FDワークショップは、前年度と同様に2クール（第1クール：8月27日（木）・28日（金）、第2クール：8月31日（月）・9月1日（火））の開催を企画していた。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を鑑み、密な状態で実施せざるを得ないワークショップの開催を中止するに至った。

代替企画として、一昨年度から日本大学教育憲章をより意識する目的で、初年次科目のユニットを作成するという関係を明確にした全学FDワークショップの変更内容を全学FDワークショップ受講者であるFDerに対して再教育を目的に、オンデマンド上で配信できるコンテンツの作成を検討した。過去の全学FDワークショップのセッション別プレゼンテーションに音声を載せた教材を作成中である。

令和2年度全学FDワークショップ@キャンパスについては、商学部と芸術学部での開催を予定し、さらに令和2年3月18日付け文書をもって全学部で開催取扱い要項を周知していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を鑑み開催を中止とした。来年度以降は候補学部の状況を見ながら、その学部のニーズに合わせた開催形態を模索し、検討していく。

#### 1－② 令和2年度 日本大学 学生FD CHAmiT の企画・開催

「令和2年度日本大学学生FD CHAmiT」の開催

・日 時：令和2年11月29日（日）

- ・実施本部：日本大学会館 2 階大講堂
- ・対 象 者：日本大学全学部全学科の学生・教員・職員代表
- ・参 加 者：225 名（スタッフを含む，申込者数は 240 名）

学生，教員，職員が三位一体となって大学教育を改革・改善していく FD 活動において，学生が主体となって取り組む学生 FD の一環として，令和 2 年 11 月 29 日に「令和 2 年度日本大学学生 FD CHAmiT」が開催された。平成 25 年度からスタートした学生 FD CHAmiT は，今回で 8 回目となるが，コロナ禍のなか今回初めて Zoom を利用したオンラインで実施された。

企画・運営に当たっては，学生スタッフとして，コアスタッフ 6 名，学生スタッフ 43 名（各学部等からの推薦枠 34 名と公募枠 9 名）が，企画検討（事前のミーティング・準備等を含む）及び当日の運営（オープニング，エンディング，しゃべり場でのファシリテーター，その他）を担い，全学 FD 委員会プログラム WG メンバーと学務部学務課職員がサポートした。また，当日は，日本大学会館 2 階大講堂に，学生コアスタッフ及びプログラム WG メンバーと学務部学務課職員，そして参加学生のうちの希望者が集まって運営に注力した。

開催当日までに，学生コアスタッフミーティング 5 回，学生スタッフミーティング 6 回（前日リハーサルを含む）が実施された。例年 8 月に実施されていた学生コアスタッフ合宿は，今年度は取り止めとなった。

#### ・第 1 回学生コアスタッフミーティング

実施日：令和 2 年 7 月 4 日（土）10：00～

内 容：顔合わせ，自己紹介，CHAmiT 概要説明，スケジュール検討，企画案検討

会 場：オンライン開催

#### ・第 1 回学生スタッフミーティング

実施日：令和 2 年 7 月 11 日（土）13：00～15：00

内 容：学生 FD 並びに FD CHAmiT の概要説明，Google Meet しゃべり場実践

会 場：オンライン開催

#### ・第 2 回学生コアスタッフミーティング

実施日：令和 2 年 8 月 19 日（水）15：00～17：00

内 容：第 2 回スタッフミーティングの内容企画

会 場：オンライン開催

#### ・第 2 回学生スタッフミーティング

実施日：令和 2 年 8 月 22 日（土）13：00～15：00

内 容：Zoom を使用したブレイクアウトルーム，結果の共有

会 場：オンライン開催

#### ・第 3 回学生コアスタッフミーティング

実施日：令和 2 年 9 月 15 日（火）15：00～

内 容：FD 企画案検討

会 場：オンライン開催

・第3回学生スタッフミーティング

実施日：令和2年9月19日（土）13:00～15:00

内 容：Zoomを使用したブレイクアウトルーム，結果の共有

会 場：オンライン開催

・第4回学生コアスタッフミーティング

実施日：令和2年10月7日（水）17:00～19:00

内 容：企画案検討

会 場：オンライン開催

・第4回学生スタッフミーティング

実施日：令和2年10月10日（土）13:00～15:00

内 容：Zoomを使用したブレイクアウトルーム，結果の共有

会 場：オンライン開催

・コアスタッフによるリハーサル

実施日：令和2年10月28日（水）17:00～

内 容：ファシリテーションマニュアルの最終確認，Zoom操作方法の確認

会 場：オンライン開催

・第5回学生スタッフミーティング

実施日：令和2年11月7日（土）13:00～15:00

内 容：Zoomを使用したブレイクアウトルーム，結果の共有

会 場：オンライン開催

・第6回学生スタッフミーティング／前日リハーサル

実施日：令和2年11月28日（土）10:00～17:00

内 容：会場設営，機材等の最終確認，企画のリハーサル

会 場：日本大学会館2階大講堂

・「令和2年度日本大学学生FD CHAmMiT」開催

実施日：令和2年11月29日（日）13:00～16:00

会 場：オンライン開催

実施本部：日本大学会館2階大講堂

**テーマ：ミライの大學生へ -オンライン授業のミライのカタチ-**

13:00 から日本大学会館2階大講堂を拠点としてZoomを利用したオンライン形式で学生FD CHAmMiTのオープニングが行われた。平成25年度から8回目の開催となる今回は，新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から従来のような大学施設に参加者が集合して対面で行う形式とは異なり，オンラインアプリケーションを利用した形式となった。まず，オープニングでは学生コアスタッフ2名（通信教育部4年・吉田未来氏，文理学部3年青砥光希氏）による司会進行で，日本大学FD推進センター長・副学長本田和也先生からの開会挨拶，学生コアスタッフの紹介，松戸歯学部河相安彦先生による学生FD CHAmMiTの実績や経緯についての説明が行われた。引き続き，学生コアスタッフ（国際関係学部1年・竹田蘭丸氏）による学生FD・CHAmMiTについての説明と本日のテーマ・プログラム，注意

事項について説明が行われた。今回は、「ミライの大學生へ～オンライン授業のミライのカタチ～」をメインテーマとし、今年度の大学の授業が新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、急遽オンライン授業となったことから、学生・教員・職員が「オンライン授業」という学習形態に対する意見を交換し、教育改善につなげていく試みであった。

オープニング終了後、13：30 から Zoom のブレイクアウトルーム機能を使って、事前に学生・教員・職員混成（学部混合）の 30 グループに分かれて、アイスブレイクを実施し各グループ内での自己紹介等を行った。続いて、セッション①では「オンライン授業のメリット・デメリット」について話し合い、出てきた意見を Google Jamboard（オンラインホワイトボード）上に書き込み、グループ内の意見を集約した。なお、各グループには 1 名ずつ学生スタッフであるファシリテーターが配置され、オンライン上でのスムーズな進行とオンラインアプリの利用方法の援助を行った。

14：15 から、先と同様に Zoom のブレイクアウトルーム機能を使って、学生・教員・職員混成（学部混合）の 30 グループ（セッション①とは異なる）に分かれて、セッション②「オンライン授業のミライのカタチ」について話し合った。ここでは、先のセッション①で出たオンライン授業のメリット・デメリットをセッション②のグループで共有し、オンライン授業のデメリットをどうやったら改善できるのか、メリットの内容をさらに発展させてこんなことができたらいなという意見を Google Jamboard 上に書き出してグループで集約した。

15：05 から、先と同様に Zoom のブレイクアウトルーム機能を使って、学部ごとに編成した学生・教員・職員混成の 30 グループに分かれて、セッション③「学部提案書の作成」について話し合った。ここでは、参加者がセッション①と②で意見交換した内容を活かして、各学部でオンライン授業を実施するにあたり、学部に提案・要望したいことについてディスカッションし、Google Jamboard 上に「学部提案書」としてグループの意見を集約した。この学部提案書には、「対面授業が再開してもオンライン授業を行って欲しい・欲しくない」、「私たちが考える、オンライン授業の改善点は」、「来年やそれ以降で、今はないけどこういうのがあったらいいのに」といった要望」の 3 つの項目があり、各グループの参加者で学部提案書を作成した。

15：45 から、学生コアスタッフ 2 名の司会進行でエンディングを開始した。エンディングでは、今回の CHAmiT 成果として、1 番目に生産工学部学生、2 番目松戸歯学部学生、3 番目商学部学生、4 番目薬学部学生による学部提案書についての発表があった。次に、Zoom の投票機能を利用した参加者満足度アンケートを実施した後、全学 FD 委員会プログラムワーキンググループリーダー松戸歯学部の平山聡司先生による講評、CHAmiT コアスタッフの国際関係学部 2 年・小林歩夢氏による閉会の挨拶があり、令和 2 年度日本大学学生 FD CHAmiT を閉会した。

今回の学生 FD CHAmiT は、多くのイベントが中止となる中、学生の強い要望と学生スタッフの協力によりオンラインでの開催が実現した。オンライン開催という初めての試みであり、学生、教職員が準備や慣れない環境の中、協力して成功に導くことができたのは意義深かった。将来、大学に求められる様々な学びのスタイルに対して、学生・教員・職員が連携して問題解決にあたるにはどうしたらよいか、学生達へより良い学びを提供するために大学が行わなければならない改革・改善の取組みは何かを考える上で、この成果は貴

重である。今回の CHAmiT は、「オンライン授業のメリット・デメリット」を考え、さらにデメリットをどのように改善できるのか、メリットの内容をさらに発展させるにはどうしたらよいかを、学生と教職員それぞれの視点から共に考える場であり、まさに“自主創造型パーソン”を学生・教員・職員の三位一体で体现するものであった。「日本大学学生 FD CHAmiT」は、本学における学びに焦点を当てた学生参画型 FD の視点からの取り組みであり、本学としての組織的な教育改善活動として今後も継続して開催する意義がある。

### 1-③ 新任教員を対象とした FD プログラムの検討及び企画・開催

当初は、以下の日時及び会場において、対面開催における「新任教員 FD ワークショップ」を企画していたが、新型コロナウイルス感染拡大のためこれを中止し、その代替措置を下記のように実施した。

#### 【当初案（新型コロナウイルス感染拡大のため中止）】

- ・ 日 時：令和 2 年 5 月 16 日（土）13 時 30 分～17 時 00 分
- ・ 会 場：日本大学会館 2 階 大講堂
- ・ 対 象 者：原則として、令和 2 年 4 月 1 日以降、日本大学に新規に採用された大学（大学院及び短期大学部を含む）専任教員
- ・ 内 容：日本大学教育憲章を基軸としたシラバス作成のワークショップ
- ・ 講 師：日本大学歯学部教授・全学共通初年次教育検討WG 中 島 一 郎
- ・ 趣 旨：本セッションでは、日本大学教育憲章を基軸としたシラバス作成方法等の手法について、ワークショップを通じて参加者の理解を深める。
- ・ 事前課題：日本大学 VOD 及び JPFF 実践的 FD プログラムによる以下の VOD の視聴
  - ① 令和元年度新任教員 FD ワークショップ講演動画（河相教授）
  - ② 平成 30 年度新任教員 FD セミナー講演動画（中島教授）
  - ③ JPFF の VOD：「FD 概論Ⅰ」，「高等教育論Ⅵ」

#### 【代替措置】

- ・ 内 容：当初案において事前課題としていた、日本大学 VOD 及び JPFF 実践的 FD プログラムによる VOD を視聴して報告書を提出する。
- ・ 対 象 者：原則として、令和 2 年 4 月 1 日以降、日本大学に新規に採用された大学（大学院及び短期大学部を含む）専任教員
- ・ 報告内容：① 動画の視聴及び日本大学 FD ガイドブックを読んで、次年度のシラバスを作成する上で参考になった部分や役立てられそうな部分を報告する。
  - ② 「日本大学教育憲章」の内容を実際の授業において、どのように反映するかを報告する。
  - ③ 動画を視聴しての所感を述べる。
- ・ 報告方法：Google Form を利用した報告書の提出
- ・ 提出締切：令和 2 年 11 月 30 日（月）

本プログラム参加予定者 148 名のうち、「業務多忙のため VOD 視聴の時間がとれなかった」

という一部の新任教員を除き、142名（95.95%）からの報告書提出があった。

なお、本年度未回答の教員については、次年度に本プログラムに参加することを確約している。

報告内容から主な意見を抜粋すると以下のようであった。

- ・シラバスは、授業概要をただ記載するのではなく、教育改善や教育の質的転換を促すための重要なツールであることを認識した。
- ・シラバスは、日本大学教育憲章の方針を意識し、学部や学科内での教育目的や教育目標を俯瞰する意識を持ちながら作成する必要があることを知った。
- ・学生に対して何を教えたのかではなく、どのような学生を育成するのか、何ができるようになったかというアウトカム基盤型の考え方が重要となることを理解できた。
- ・「日本大学マインド」を有する学生を育成するためには、知識重視の講義型授業のみではなく、学生参加型のアクティブラーニング型授業を積極的に取り入れたい。
- ・知識の伝達が主となる授業では、フィードバックを行うことで理解を深めることを実践したい。
- ・演習や卒論教育、研究室活動を通して、それまでに養った「自ら学ぶ力」を生かしながら、「問題を発見し、挑戦を続け、解決に結びつけるための力」を養い、仲間たちとの関わりを通して「道をひらく力」を養いたい。
- ・「自主創造」の8つの能力の獲得を目指し、分野横断的な学習を授業内容に盛り込みたい。
- ・日本大学の「日本大学教育憲章」の位置づけや、DP・CPとの整合的を意識してシラバスを作成したい。
- ・日本大学として、どのような人材を育成したいのか、その理念がよく理解できた。また、FD・SDの重要性がよく理解できた。

令和2年度は、急遽予定を変更した内容での開催となったが、提出された報告書を見ると、本プログラムの目的は概ね達成できたと思われる。また、JPFFの実践的動画プログラムは有効であったという意見が多くあり、今後は新任教員以外にも積極的に利用してもらいようなプログラムを考えていきたい。ただし、その反面で、内容や構成を見直した方がよいという意見も散見されたため、今後、検討していく必要があると思われる。

#### 1-④ 日本大学オンデマンド及び全国私立大学FD連携フォーラム実践的FDプログラムの活用検討

日本大学オンデマンドコンテンツの取組として、平成30年度及び令和元年度の新任教員FDワークショップの講演動画等の編集したものを日本大学の公式Youtube（限定公開）にアップロードしている。また、全国私立大学FD連携フォーラム・実践的FDプログラムについては、平成30年度末から新任教員FDワークショップ参加者の事前課題及び@キャンパス参加者の事前学習として組み込んだ結果、各学部の利用状況は増加したが、未だに全く利用していない学部もあるため、令和元年度にいくつかの検討がなされ、令和2年度においては引き続き実施された。その要点は、次のようなものである。

① @キャンパス及び新任教員FDワークショップ参加者の事前学習としてJPFF利用の呼び掛けを徹底周知させる。特に新任教員については、採用が決定した段階から新任教員FDワークショップ開催まで期間が空くため、各学部庶務課の協力のもと、採用関連書類に事前課題の通知書類を同封してもらい、スムーズにワークショップに参画できるような仕組みづくりを継続している。

② 調査・分析WGで検討している教育状況調査票（日本大学版ティーチングポートフォリオ）が全学FD委員会において承認され、全学部で実施をすることとなった。様式内の成果項目に『全国私立大学FD連携フォーラム(JPFF)「実践的FDプログラムオンデマンド講義」の視聴、レポート提出（最大15ポイント）』を設けている。

③ 非常勤講師にも各オンデマンド動画をFDプログラムの一環として、周知することとなった。周知方法としては、新任教員と同様、各学部庶務課にお願いして、令和2年4月1日付け以降に雇用契約を結んだ非常勤講師を対象に、雇用契約書兼労働条件通知書等を送付の際に併せて送ることとした。また、翌年度以降は、新たに雇用契約を締結した非常勤講師を対象としており、非常勤講師にも浸透させるための仕組みづくりを継続している。

令和2年度においては、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、CHAmiTを除く各プログラムが中止となったため、積極的に利用したとは言い難いが、新任教員FDワークショップにおいては、代替として参加者に事前学習動画を視聴させ、レポートを提出することを義務付けたため、昨年度に比べても利用状況はそれ程まで下がっていないかと思料する。また、令和2年度に新たに開催した「オンライン授業に関するシンポジウム」での講演動画の配信をYoutubeで行っており、各学部で活用されている。今後は、Youtubeの動画再生件数及びJPFF事務局から送付される各学部の利用状況を確認し、視聴率を検証してPDCAサイクルを回すとともに、日本大学オンデマンドに「オンライン授業に関するシンポジウム」の講演動画等の更なるコンテンツを追加し、ホームページ等で広く周知できるような仕組みを検討していく必要があるかと考える。

本WGでは引き続き、上記の活用方法について検討を行うこととしたい。

#### 1-⑤ 全学FDシンポジウムの企画・開催に向けた検討

令和元年度中から、令和2年6月の開催を目指して準備を進めてきたが、COVID-19の感染拡大に伴う緊急事態宣言の発出などの社会状況を考慮し、秋以降に延期して開催を模索してきた。結果的に年度内開催が困難であると判断し、次年度へ延期することとした。

延期決定以降も、開催方法も含め企画の検討を進め、現段階では次年度前半にオンライン・ライブ方式による開催へ向けて成案を得るべく調整を進めている。基本的に、今年度開催予定の企画を踏襲し、「学生調査」を活用した大学改革の可能性を検討することを主題に掲げ、学生調査を活用した「内部質保証システム」の確立に向かって求められていることを共有できるよう企画を整えている。

また、本学が蓄積している「学修満足度向上調査」を活用した各部科校の改革の取り組みについて、各部科校の事例の発表を通し、次年度以降の活用の拡大を促すことも検討している。

## 1-⑥ 日本大学オンライン授業に関するシンポジウム及び Zoom 社における日本大学限定トレーニング企画・開催

- ・趣 旨：新型コロナウイルス感染症の拡大に伴いオンライン授業へのニーズが急速に高まり広く展開される中で、今後の本学の授業方法のあり方や授業方法の改善等についての方向性を明確にすることが求められている。日本大学内における情報共有と授業手法の改善等と図るため下記のとおり、オンライン授業に関するシンポジウム及び Zoom 社における限定トレーニングを実施した。
- ・対 象 者：日本大学の教職員（非常勤講師を含む）
- ・開催方法等：Zoom を利用したオンライン形式
- ・日時及び参加者数等（令和 2 年 12 月 19 日までの取組状況）：参考資料参照

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、従来の対面で行う授業形態の抜本的な改善が急務となり、オンライン授業へのニーズが急速に高まり広く展開されるようになった。全学的に授業実施方法やオンライン授業の効果的な教授手法について暗中模索する中で、日本大学内における情報共有と授業手法の改善等を図る目的で実施された「日本大学オンライン授業に関するシンポジウム」はまさにタイムリーな企画となった。

8 月から 12 月までの毎月 5 回開催された本シンポジウムは、日本大学が有する学部を文系・理系そして医歯薬系と区分する中で、それぞれの学系での効果的な授業のために積極的に取り組む事例が紹介され、教育効果の高いオンライン授業手法を視聴者が学びあうことが可能となり、学系を超えた授業改善に対する意識の向上と授業スキルの修得に繋がったと言える。特筆すべきは第 5 回開催の本シンポジウムにおいて、前述の「日本大学学生 FD CHAmiT」で協議された、学生が考える「オンライン授業のミライのカタチ」について報告があり、その後学生・教員によるパネルディスカッションが行われたことである。このような学生の意見に耳を傾けながら、より良き授業の在り方を真摯に希求する学生・教員によるコラボレーションは、日本大学における教育の在り方や FD 活動の新たな扉を開く機会となった。なお、本シンポジウム 5 回の合計参加者数は、1,822 名であった。

また、日本大学として Zoom の導入に伴い「Zoom 社における日本大学限定トレーニング」も実施された。合計 7 回のトレーニングに 2,705 名が参加し、授業を担当する教員や運営を行う職員の ICT リテラシーの向上にとって大変に効果的な企画であった。

## オンライン授業に関するシンポジウム及び Zoom トレーニング一覧

1 実施期間 令和2年8月8日（土）から令和2年12月19日（土）まで

### 2 オンライン授業に関するシンポジウム

| 回数  | 日時/内容                                                                                                                                                | 申込者数   | 参加者数   |
|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|--------|
| 第1回 | 令和2年 8月 8日（土） 午後3時<br>【報告】オンライン授業アンケート報告<br>【授業紹介】芸術学部，スポーツ科学部<br>理工学部，薬学部<br>【講演】著作権等の取扱いについて                                                       | 500名   | 413名   |
| 第2回 | 令和2年 9月 5日（土） 午後3時<br>【講演】Zoomの基本機能等について<br>【報告】①オンライン授業アンケート結果<br>②学生満足度9割を達成した組織対応と取組みについて（歯学部）<br>【授業紹介】法学部，生産工学部                                 | 580名   | 417名   |
| 第3回 | 令和2年10月17日（土） 午後3時<br>【授業紹介】商学部，工学部，松戸歯学部<br>【報告】学部内アンケートによる遠隔授業の形態と教育効果について（文理学部）<br>【講演】コロナ禍における教職員の学生支援について（学生支援センター）                             | 462名   | 363名   |
| 第4回 | 令和2年11月 7日（土） 午後3時<br>【授業紹介】経済学部，国際関係学部，<br>危機管理学部，生物資源科学部<br>【講演】コロナ禍における教職員の学生支援について2（学生支援センター）                                                    | 366名   | 272名   |
| 第5回 | 令和2年12月19日（土） 午後3時<br>【説明】学生 CHAmmit・学生 FD とは<br>【報告】①オンライン授業のメリット・デメリット<br>②オンライン授業のミライのカタチ<br>【学生・教員ディスカッション】<br>①文系・理系・医歯薬系別<br>②全体（文系・理系・医歯薬系含む） | 492名   | 357名   |
| 合計  | —                                                                                                                                                    | 2,400名 | 1,822名 |

第1回から第4回の内容は，こちらで視聴できます。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PL85mhGUARnDrCOyzE6CVXExA9vyYXTQLE>



### 3 Zoom トレーニング

| 回数  | 日時/内容                                                 | 申込者数   | 参加者数   |
|-----|-------------------------------------------------------|--------|--------|
| 第1回 | 令和2年9月14日(月) 午後6時30分<br>ベーシックトレーニング                   | 1,159名 | 996名   |
| 第2回 | 令和2年9月16日(水) 午後6時30分<br>ベーシックトレーニング                   | 638名   | 526名   |
| 第3回 | 令和2年9月25日(金) 午後6時30分<br>アドバンストレーニング                   | 893名   | 771名   |
| 第4回 | 令和2年10月19日(月) 午後6時30分<br>初心者トレーニング                    | 111名   | 91名    |
| 第5回 | 令和2年11月25日(水) 午後6時30分<br>トレーニング・シリーズ①<br>「画面共有編」      | 150名   | 116名   |
| 第6回 | 令和2年12月9日(水) 午後6時30分<br>トレーニング・シリーズ②<br>「ブレイクアウトルーム編」 | 165名   | 144名   |
| 第7回 | 令和2年12月16日(水) 午後6時30分<br>トレーニング・シリーズ③<br>「チャット・投票機能編」 | 69名    | 61名    |
| 合計  | —                                                     | 3,185名 | 2,705名 |

第2回及び第3回の内容は、こちらで視聴できます。

ベーシックトレーニング

<https://youtu.be/ksQNNxhiZDE>



アドバンストレーニング

<https://youtu.be/ci4jBqA6DVQ>



以 上

# 日本大学オンライン授業に関するシンポジウムスケジュール

日 時 令和2年8月8日(土) 午後3時 オンライン開催

対 象 者 日本大学の教職員(非常勤を含む)

司会進行 全学FD委員会 教育情報マネジメントWG リーダー

法学部 教授 臼井哲也

|             | プログラム                                                                            |
|-------------|----------------------------------------------------------------------------------|
| 15:00~15:05 | 【開会】日本大学FD推進センター長, 副学長,<br>法学部長 教授 小田 司                                          |
| 15:05~15:20 | 【報告】オンライン授業に関するアンケートについて<br>全学FD委員会 調査・分析WG リーダー<br>理工学部 教授 大貫進一郎                |
| 15:20~15:45 | 【オンライン授業紹介】<br>①「人間の心理Ⅰ, 自主創造の基礎Ⅰ」<br>～オンラインツールを利用した大規模授業運営の工夫～<br>芸術学部 准教授 吉野大輔 |
| 15:45~16:10 | ②「スポーツ実技」<br>～ライブ・オンデマンド併用型による体育実技の授業展開例～<br>スポーツ科学部 専任講師 澤野大地                   |
| 16:10~16:35 | ③「振動工学」<br>～数式を多用する工学系講義科目のオンデマンド授業化における<br>課題と工夫～<br>理工学部 教授 宮崎康行               |
| 16:35~17:00 | ④「EBMと薬物治療」<br>～Google meet と moodle を利用した予習先行型授業の取組み～<br>薬学部 教授 岸川幸生            |
| 17:00~17:05 | 【休憩】                                                                             |
| 17:05~17:20 | 【講演】<br>オンライン授業における著作権等の取扱いについて<br>法学部 准教授 藤田晶子                                  |
| 17:20~17:35 | 【質疑・応答】                                                                          |
| 17:35~17:40 | 【閉会】日本大学FD推進センター副センター長<br>生産工学部 教授 藤井孝宜                                          |

以 上

## 第2回 日本大学オンライン授業に関するシンポジウムスケジュール

日 時 令和2年9月5日(土) 午後3時 オンライン開催

対 象 者 日本大学の教職員(非常勤を含む)

司会進行 全学FD委員会 教育情報マネジメントWG リーダー

法学部 教授 臼井哲也

|             | プログラム                                                                                                          |
|-------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 15:00~15:05 | 【開会】                                                                                                           |
| 【第1部】       | オンラインツール「Zoom」に関連した講演                                                                                          |
| 15:05~15:25 | <b>【冒頭説明】</b><br>「Google meet」から「Zoom」へ10月以降の変化等について<br><b>【基本編】</b><br>「Zoom」に触れてみよう ～設定・基本機能等について～<br>Zoom 社 |
| 15:25~15:45 | <b>【オンライン授業紹介】</b><br>①「Zoom」を用いた教材作成と新しい生活様式に対応した講義の実践<br>～オンデマンド型と同時双方向型のハイブリッドでの授業運用～<br>生産工学部 教授 柏田 歩      |
| 15:45~16:05 | ②「Zoom」による講義<br>～ライブ方式におけるスムーズな講義運営～<br>法学部 教授 坂本力也                                                            |
| 16:05~16:10 | 【休憩】                                                                                                           |
| 【第2部】       | オンライン授業に関するアンケート経過報告と学部事例紹介                                                                                    |
| 16:10~16:30 | <b>【報告】</b> オンライン授業に関するアンケート経過報告<br>～学生・教員アンケート結果の比較から見えるもの～<br>全学FD委員会 調査・分析WG リーダー<br>理工学部 教授 大貫進一郎          |
| 16:30~16:55 | <b>【報告】</b><br>令和2年度前学期学部内オンライン授業アンケート結果より<br>～学生満足度9割を達成した組織対応と取り組み～<br>歯学部 准教授 松本邦史                          |
| 16:55~17:00 | 【休憩】                                                                                                           |
| 17:00~17:15 | <b>【質疑・応答】</b><br>全学FD委員会プログラムWG リーダー<br>松戸歯学部 教授 平山聡司                                                         |
| 17:15~17:20 | <b>【閉会】</b> 日本大学FD推進センター副センター長<br>生産工学部 教授 藤井孝宜                                                                |

以 上

### 第3回 日本大学オンライン授業に関するシンポジウムスケジュール

日 時 令和2年10月17日（土） 午後3時 オンライン開催

対 象 者 日本大学の教職員（非常勤を含む）

司会進行 全学FD委員会 教育情報マネジメントWG リーダー

法学部 教授 臼井哲也

|             | プログラム                                                                                                  |
|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 15:00～15:05 | 【開会】日本大学FD推進センター長，副学長，<br>歯学部長 教授 本田和也                                                                 |
| 15:05～15:25 | 【オンライン授業紹介】<br>①「Zoom」を利用した語学授業の成功モデルの例<br>～アクティブラーニング導入から，前期の課題の検討まで～<br>商学部 准教授 山崎明日香                |
| 15:25～15:45 | ②「化学（化学を主専攻としない学生に対して）」<br>～本当にわかってる？先生は心配です。。。～<br>工学部 教授 沼田 靖                                        |
| 15:45～15:50 | 【休憩】                                                                                                   |
| 15:50～16:10 | ③評判の良いオンライン授業に向けた取組み<br>松戸歯学部 専任講師 竹内麗理                                                                |
| 16:10～16:30 | 【報告】文理学部内調査より<br>遠隔授業の形態と教育効果について<br>文理学部 助教 大川内隆朗                                                     |
| 16:30～16:35 | 【休憩】                                                                                                   |
| 16:35～16:55 | 【講演】「コロナ禍における教職員の学生支援について考える」<br>～カウンセラーの調査から見える現状と<br>学生を未来へつなげる学生支援～<br>本部学生部 学生支援センター コーディネーター 道又襟子 |
| 16:55～17:15 | 【質疑・応答】<br>全学FD委員会プログラムWG リーダー<br>松戸歯学部 教授 平山聡司                                                        |
| 17:15～17:20 | 【閉会】日本大学FD推進センター副センター長<br>生産工学部 教授 藤井孝宜                                                                |

以 上

#### 第4回 日本大学オンライン授業に関するシンポジウムスケジュール

日 時 令和2年11月7日（土） 午後3時 オンライン開催

対 象 者 日本大学の教職員（非常勤を含む）

司会進行 全学FD委員会 教育情報マネジメントWG リーダー

法学部 教授 臼井哲也

|             | プログラム                                                                         |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| 15:00～15:05 | 【開会】                                                                          |
| 15:05～15:25 | 【オンライン授業紹介】<br>①観光分野のオンライン授業における<br>アクティブラーニングの実践と課題<br>国際関係学部 教授 穴戸 学        |
| 15:25～15:45 | ②「簡単ローテク講義動画の作り方」<br>～インテリジェンス論（1・2）の動画紹介～<br>危機管理学部 教授 茂田忠良                  |
| 15:45～15:50 | 【休憩】                                                                          |
| 15:50～16:10 | ③学部2年生の微生物学実験の実験操作動画を配信するまで<br>～撮影から動画編集まで～<br>生物資源科学部 准教授 中川達功               |
| 16:10～16:30 | ④GIGA スクール時代にむけた教職 ICT 活用授業の序章<br>～経済学部・文理学部・通信教育部での地理授業実践から～<br>経済学部 教授 ト部勝彦 |
| 16:30～16:35 | 【休憩】                                                                          |
| 16:35～16:55 | 【講演】コロナ禍における教職員の学生支援について考える2<br>学生支援センター 主任カウンセラー 沖田 肇                        |
| 16:55～17:15 | 【質疑・応答】<br>全学FD委員会プログラムWG リーダー<br>松戸歯学部 教授 平山聡司                               |
| 17:15～17:20 | 【閉会】日本大学FD推進センター副センター長<br>生産工学部 教授 藤井孝宜                                       |

以 上

オンライン授業 その先へ  
～オンライン授業を通して見えてきたミライのカタチ～  
(第5回 日本大学オンライン授業に関するシンポジウム)

日 時 令和2年12月19日(土) 午後3時 オンライン開催

対 象 者 日本大学の教職員(非常勤を含む)

司会進行 全学FD委員会 教育情報マネジメントWG リーダー

法学部 教授 臼井哲也

|             | プログラム                                                                                              |
|-------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 15:00～15:05 | 【開会】                                                                                               |
| 【第1部】       | 未来の大學生へ<br>～オンライン授業のミライのカタチ～<br>令和2年度日本大学 学生FD CHAmiT の報告                                          |
| 15:05～15:15 | 【説明】 CHAmiT・学生FD とは<br>文理学部 哲学科 3年 青砥光希                                                            |
| 15:15～15:30 | 【報告①】 オンライン授業のメリット・デメリット<br>商学部 経営学科 3年 竹田 匠<br>通信教育部 法学部 政治経済学科 4年 吉田未来<br>経済学部 経済学科 3年 落合凌也      |
| 15:30～15:45 | 【報告②】 オンライン授業のミライのカタチ<br>経済学部 金融公共経済学科 3年 大貫陽司<br>国際関係学部 国際教養学科 2年 小林歩武<br>国際関係学部 国際総合政策学科 1年 竹田蘭丸 |
| 15:45～15:50 | 【休憩】                                                                                               |
| 【第2部】       | 学系別、学生・教員によるディスカッション                                                                               |
| 15:50～16:10 | 【文系グループ】<br>法学部 法律学科 3年 渡邊菜月<br>商学部 商業学科 3年 古家凌成<br>芸術学部 准教授 吉野大輔                                  |
| 16:10～16:30 | 【理系グループ】<br>生産工学部 数理情報工学科 3年 梅村智輝<br>理工学部 准教授 長谷部 寛                                                |
| 16:30～16:50 | 【医歯薬系グループ】<br>薬学部 薬学科 3年 鈴木杏奈<br>松戸歯学部 歯学科 3年 伊藤暢祐<br>歯学部 准教授 松本邦史                                 |
| 16:50～16:55 | 【休憩】                                                                                               |
| 16:55～17:25 | 【文系・理系・医歯薬系】ミライに向けた全体ディスカッション<br>コーディネーター 全学FD委員会 プログラムWG リーダー<br>松戸歯学部 教授 平山聡司                    |
| 17:25～17:30 | 【閉会】日本大学FD推進センター副センター長<br>生産工学部 教授 藤井孝宜                                                            |

※令和2年度日本大学 学生FD CHAmiT 学生スタッフが登壇及び視聴します

以 上

## 2 FD 推進センター基本計画（中期計画）を踏まえたプログラムワーキンググループとしての総括

プログラム WG では FD 推進センター基本計画（中期計画）：質保証体制の充実と日本大学教育憲章を捉えた FD 活動の各学部等への浸透策の展開を踏まえて前述のプログラムを令和 2 年度の活動計画として企画し実施してきた。総括としてその概要と令和 3 年度に向けた取り組みについて報告する。

### （1）全学 FD ワークショップの企画・開催

#### ① 令和 2 年度全学 FD ワークショップ

今年度で第 8 回目を迎える全学 FD ワークショップであったが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を鑑み、密な状態で実施せざるを得ないため開催は中止となった。

本ワークショップは、一昨年度から初年次科目のユニット作成にあたり日本大学教育憲章をより意識させることを目的に、一般目標の設定から評価に至るまで「8つの能力」との関係性を明確にした内容に進化・変更している。そこで、中止となった全学 FD ワークショップの代替企画として、このような内容を過去の全学 FD ワークショップ受講者に対する再教育を目的に、オンデマンド上で配信できるコンテンツの作成を検討した。しかし、受講対象者にその内容を簡潔で分かり易く伝えることができる教材の開発が困難であった。

1 年間のブランクを作ってしまった全学 FD ワークショップであるが、来年度の課題として集合型の開催形式で実施する場合は、①密を避けるため 1 グループあたりの参加者を 5 名程度で実施する。②グループの数を 5 グループに減らす。③グループディスカッションで会議室を利用する。④昼食の取り方を検討する。⑤徹底した手指の消毒や換気を実施するなど、運営面での十分な配慮が必要となる。

さらに全学 FD ワークショップの進化系として、昨年度から実施に向けて協議が重ねられてきた「アウトカム基盤型」カリキュラムプランニングを全学 FD ワークショップのアドバンスコースとして位置付け、従来の全学 FD ワークショップの参加者や、学務委員会、FD 委員会の中核にいる教職員を対象として令和 3 年度中に実施できるよう具体的な検討を開始しなければならない。

#### ② 全学 FD ワークショップ@キャンパス

平成 28 年度から始まった@キャンパスは、全学 FD ワークショップに参加者した各部科校の FDer がタスクフォースとしてワークショップを運営することにより、各部科校における新しい FDer の育成を促進及び各部科校における企画により定期的にワークショップを展開し教育改善を行うことが目的で実施されてきた。

令和 2 年度の@キャンパスについては、商学部と芸術学部での開催を予定し、令和 2 年 3 月 18 日付け文書をもって全学部で開催取扱い要項を周知していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により開催中止となった。来年度以降は、候補学部の状況を鑑みながら、その学部のニーズに合わせた開催形態を模索し、検討していく。

### （2）令和 2 年度 日本大学学生 FD CHAmmit の企画・開催

本年度で 8 回目となる学生 FD CHAmmit は、コロナ禍の影響を受けて開催が危ぶまれた

が、Zoom による初のオンライン形式で開催された。

今回は「ミライの大學生へーオンライン授業のミライのカタチー」をテーマに Zoom のブレイクアウトルーム機能により「しゃべり場」を設定し、ディスカッションでは Google Jamboard を使って学生・教職員が活発な意見交換を行っていた。最後に学部ごとのミーティングが行われ「学部提案書」を作成し、各部科校の授業改善に向けた課題が明らかとなった。

令和 3 年度の課題として、この「学部提案書」を各部科校に持ち帰り、教職員と学生が問題点を共有し、解決に向けて協議と行動を開始する必要がある。今年度は、第 5 回「オンライン授業に関するシンポジウム」にコアスタッフが登壇し、学生 FD CHAmmit で協議した内容を発表する機会を得ることができた。これによって視聴していた数多くの教職員に学生 FD 活動を周知することができた。さらに来年度の学生 FD CHAmmit の開催形式については、開催時期のコロナ感染状況に依存するが、学生コアスタッフメンバーの意見を尊重して決定したい。また、オンライン開催となる場合でも、スタッフメンバーのミーティングは、メンバーの一体感や結束を高めるために感染拡大防止に努めながら、可能な限り対面でのミーティングを実施するべきである。

### （３）新任教員を対象とした FD プログラムの検討及び企画・開催

当初は、対面開催における「新任教員 FD ワークショップ」を企画していたが、新型コロナウイルス感染拡大のためこれを中止し、その代替措置として日本大学 VOD 及び JPFF 実践的 FD プログラムによる VOD を視聴して報告書を提出することになった。報告書の内容として、① 動画の視聴及び日本大学 FD ガイドブックを読んで、次年度のシラバスを作成する上で参考になった部分や役立てられそうな部分を報告する。② 「日本大学教育憲章」の内容を実際の授業において、どのように反映するかを報告する。③ 動画を視聴しての所感を述べるであった。提出された報告書の内容から、「シラバスは日本大学教育憲章の方針を意識し、学部や学科内での教育目的や教育目標を俯瞰する意識を持ちながら作成する必要があることを理解した」や『日本大学マインド』を有する学生を育成するためには、知識重視の講義型授業のみではなく、学生参加型のアクティブラーニング型授業を積極的に取り入れたい」など新任教員の多くから日本大学の教育に関して能動的かつ建設的である感想が寄せられた。しかし、参加者の一部には「業務多忙のため VOD 視聴の時間がとれなかった」という報告書未提出の新任教員も存在した。この方たちは、来年度の同企画を受講することとなった。日本大学の教育を担い立つ人的資源として新任教員の役割は重要である。今後とも FD 活動に接する機会を増やす努力と興味を持てる企画を検討していかなければならない。

### （４）日本大学オンデマンド及び全国私立大学 FD 連携フォーラム（JPFF）・実践的 FD プログラムの活用

全国私立大学 FD 連携フォーラム・実践的 FD プログラムについては、昨年度からの取り組みで各学部の利用状況は増加したが、未だに利用状況が向上しない学部もあるため、更なる周知徹底が必要である。一方で、新たに開催した「オンライン授業に関するシンポジウム」における講演動画を Youtube 配信することができた。今後も講演動画等の更なるコ

ンテンツを追加していく予定である。そして、「オンライン授業に関するシンポジウム」動画をホームページ等で広く周知し、各学部の教職員に視聴を促し、FD 教育講演などで活用することにより、Youtube の動画再生件数及び JPFF 事務局から送付される各学部の利用状況を確認し、視聴率を解析して更なる改善に向けた検討を行っていく。

#### **（５）全学 FD シンポジウムの企画・開催に向けた検討**

令和 2 年 6 月の開催を目指して準備を進めてきたが、新型コロナウイルス感染拡大により年度内での開催が困難であると判断し、次年度へ延期することとなった。全学 FD シンポジウムは、本学教学戦略に沿ったテーマに基づいて「学生調査」を活用した大学改革の可能性を検討することを主題に掲げ、「内部質保証システム」の確立に向けて求められていることを共有できるよう企画している。基本的に今年度の企画を踏襲し、オンラインで行われる可能性が高いこともあり、よりコンパクトな開催を目指している。

以 上

令和 2 年度

## 教育情報マネジメントワーキンググループ活動報告



日本大学 FD 推進センター

〔全学 FD 委員会教育情報マネジメントワーキンググループ〕



教育情報マネジメントワーキンググループ（以下、WG とする）に係る令和 2 年度における活動項目は、令和 2 年度活動計画並びに FD 推進センター基本計画（中期計画）に基づき、次のとおりである。

- 1 令和 2 年度活動計画
  - ① 「日本大学 FD NEWSLETTER」の作成
  - ② 『日本大学 FD ガイドブック』の成果の測定と改善案の検討
  - ③ 『日本大学 FD 研究』の編集・刊行
  - ④ FD 推進センターウェブサイトの具体的活用方法の継続的な検討と展開
- 2 FD 推進センター基本計画（中期計画）を踏まえた教育情報マネジメントワーキンググループとしての総括

#### 1-① 「日本大学 FD NEWSLETTER」の作成

日本大学 FD NEWSLETTER は年 2 回の発行を行っており、令和元年度までに第 16 号（令和 2 年 1 月 1 日発行）までを発行してきた。当初、令和 2 年度は、第 17 号を令和 2 年 4 月頃に発行する予定で企画・準備を行っていたが、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、その内容および発行時期の大幅な見直しを行った。

令和 2 年度はこれまでの通常の対面形式での授業とは全く異なる、オンラインによる授業が各学部で実施された。そのため、オンライン授業についての情報共有と授業手法の改善を図ることを目的として、第 1 回から第 5 回までの計 5 回、「日本大学オンライン授業に関するシンポジウム」が FD 推進センターにより開催された。そこで本年度の FD NEWSLETTER は 1 年を通じて実施した「オンラインシンポジウム」だけに焦点をあて、第 1 回から第 4 回の内容を「第 17 号」で取り上げ、第 5 回の内容を「第 18 号」で取り上げて「日本大学オンライン授業に関するシンポジウム特集」へと変更して発行準備を行った。まず「第 17 号」の内容についての報告を行う。

政府の緊急事態宣言を受け、本学では前学期の授業開始が延期され、5 月上旬からオンライン授業が各学部で実施された。また、後学期も原則、授業はオンラインで行なうことが継続されている。教員は急遽、対面の授業形式からオンライン授業への対応を迫られ、各学部が手探りの状態で出発せざるを得ない状況であったが、オンライン授業への取り組みにおける失敗や改善を後学期に活かすべく全学的な情報共有や改善を目的として「オンライン授業に関するシンポジウム」が企画されている。そこで FD NEWSLETTER 「第 17 号」では、まず、FD 推進センター副センター長である藤井孝宜教授にご寄稿いただき、シンポジウムを通して学生を中心に教員・職員がさらに連携を取り合い改善し、点在する学部を繋ぎ総合大学としての総合力を終結して新しい教育形式の創出を目指すというその目的と、第 1 回から第 5 回までの全体的な実施内容についての紹介を行った。続いて「第 17 号」では「オンライン授業紹介」として、第 1 回、第 3 回および第 4 回シンポジウムにおける様々な学部の授業運営の取り組みの具体例の紹介を行った。「オンラインツールを利用した大規模授業運営の工夫」（芸術学部、第 1 回）、「ライブ・オンデマンド併用型による体育実技の授業展開例」（スポーツ科学部、第 1 回）、「zoom を利用した語学授業の成功モデル」（商学部、第 3 回）、「学部 2 年生の微生物学実験の実験操作動画を配信するまで」（生物資源科学部、第 4 回）といった各学部における先進的、かつ具体的なオンライン授業の取り組みを紹介し、今

後のオンライン授業や感染症終息後も含めた各学部における授業改善に非常に有用な情報を紹介することができた。さらに「第 17 号」では、第 2 回シンポジウムにおける「アンケート結果報告」として歯学部における令和 2 年度前学期学部内オンライン授業アンケート結果について取り上げ、学生満足度 9 割を達成した組織対応とそのオンライン授業に関する取り組みについて紹介した。

FD NEWSLETTER「第 17 号」は、令和 3 年 1 月 1 日付での発行となっている。

続いて FD NEWSLETTER「第 18 号」についての報告を行う。「第 18 号」では、学生・教職員合わせて 500 人強が参加して 12 月 19 日に開催された第 5 回日本大学オンライン授業に関するシンポジウム「オンライン授業のミライのカタチ」について取り上げた。

シンポジウムの第 1 部では、オンライン授業の課題について学生視点で意見交換が行われた学生 FD CHAmiT に関して、学生コアスタッフから報告がなされた。また、学生 FD 活動に関して「各学部へのさらなる広がり」、「活動内容の評価と可視化」、「継続的な推進」などの課題が指摘され、今後の発展に不可欠な貴重な意見を紹介することが出来た。また、誌面では「報告 1」として FD CHAmiT で挙げたオンライン授業のメリット・デメリットについて報告し、メリットとしての「時間や場所の制限がない」、「繰り返し観ることができる」、「ペーパーレス化になった」といった意見や、デメリットとしての「教員の IT スキルに差がある」、「友達と会えない」、「評価や提出方法がバラバラ」などの意見を紹介し、実際に指摘された様々な意見を紹介することができた。さらに「報告 2」として学生スタッフ 3 人が「報告 1」のデメリットを解消して授業の質の向上を図るために行った 3 つの提案（①授業の質を均一化するためのガイドライン作成や教員間での情報交換会の実施、②オンライン授業用の課題提出方法、③評価基準を明記したシラバスの作成）についての紹介を行った。報告 1、2 ともにオンライン授業に対して学生が実際に抱えている貴重な意見を紹介することができ、今後の授業改善に役立つものと考えている。

シンポジウムの第 2 部では、今後のオンライン授業はどうあるべきかについての学生と教員の意見交換が行われた。第 2 部前半では 3 つの学系別（文系・理系・医歯薬系）に CHAmiT 学生スタッフと教員が集まり、第 1 部で挙げたオンライン授業の課題を洗い出して、どのような改善が必要であるかの議論が行われたが、FD NEWSLETTER「第 18 号」では、まず前半部分で学生・教員から出された様々な意見の紹介を行った。続いてシンポジウムの後半部分では、①シラバスの整備、②通信環境と ICT 機器整備、③相互履修の可能性、④学修効果の高い授業のデザイン、という 4 つのテーマについて「ミライの授業」に向けた意見交換が行われたが、「第 18 号」ではこれらのディスカッションから出たオンライン授業に対する色々な意見について紹介した。こちらも学生側、教員側の双方の視点からの「ミライの授業」に向けた生の意見を紹介することができ、いずれも今後の授業改善に役立つものと考えている。「第 18 号」は令和 3 年 3 月 1 日発行に向けて現在発行準備を行っている段階である。

## 1-② 『日本大学 FD ガイドブック』の成果の測定と改善案の検討

『日本大学 FD ガイドブック』は、令和 2 年 4 月よりコンセプトを新たに、内容を全面的に一新し、『ミライヲツクル Learning Guide』及び『学生と創る授業デザイン Teaching Guide』として発行した。そのため今年度は、大改訂を行った成果の測定と更なる改善案を検討し、実際に役立つより有用なガイドブックとするために、各部科校の FD 委員会等や実際に使用している学生・教職員などを対象に、両ガイドブックの活用方法とにそれらに対するコメント・意見・新たなアイデ

ィアに関する聴取を「回答票」にて行った。

現在、聴取した意見等については整理・検証中であるが、コロナ禍の影響もあってか、回答を寄せたのは殆どが教員で、学生からの意見等の聴取は一部に留まり、回答してもらうのが難しかったようである。

「回答票」より、活用方法に関して、『ミライヲツクル Learning Guide』は、各学部等で「自主創造の基礎1」のサブテキストとして主に活用されており、『学生と創る授業デザイン Teaching Guide』は、各教員の授業設計に役立てられていることは看取できた。

コメント・意見・新たなアイディアに関して、『ミライヲツクル Learning Guide』には、学生からのコメントとして、「全体的に文字と絵や図が組み合わせられていて見やすかった。」「自分で書き込めるスペースがあることで、次に見たときに振り返りやすいと思う。」「新入生には不慣れな言葉も、右端の欄に言葉の解説を書いてくださったおかげで、何度も単語を調べることなくスムーズに読み進めることができた。」「自主創造とは何かを示す説明の後に、今後社会で学ぶ具体例が示されているので夢をより明確に持つことができると思った。その夢を実現するために、グラフや表を使って大学生生活を計画できるのでより充実した大学生生活を送る、目標にできると思う。」「大学で初めて履修登録を知る人が多いと思う。私のように初めて知る人でも、履修登録について詳しく記載されていてわかりやすかった。」などが寄せられた。改訂のコンセプトとして、入学してきた学生が体系的に学修できるよう内容を意識した点や、書き込みスペース等を増やして在学期間に長く利用してもらえるように意図した点があったが、これらのコメントからは、ある程度その成果があらわれたといえよう。一方、「アイディアとしては、現在、新型コロナウイルス感染症が続いていて、オンライン授業で不安な学生も多いと思うため、オンライン授業の受け方等も載せると良いのではないか。」「新型コロナウイルス感染症の影響からいくつかの変更点があったこともあり、遠隔授業との相違点もあったので、このような状況下であれば遠隔授業やパソコンの基本操作など付け足していただけたら、新入生としては助かる。」などのコメントもあり、遠隔授業に関わるガイドの必要性も痛感された。

『学生と創る授業デザイン Teaching Guide』には、「講義の構成と運用のための内容がよくまとめられている。」「授業の構築やシラバスの書き方等、昨年よりも具体的に参考にできる内容が増えたと感じられる。」「日大の目指す教育や授業デザインについて重要なことが網羅的に解説されている、有益なガイドブックであると思います。」などの教員からのコメントがあり、日本大学で行われる教学戦略と各教員が担当する授業について関連性がより理解しやすいよう改訂を行った意図が教員サイドにある程度伝わったことが看取できた。一方で、「授業アンケートの結果を載せてはどうか。」「第2章の中に、実際に日大で行われている優れた授業の実践例を幾つか入れているは如何か。」「どのような授業が魅力的かということについての学生の声を載せるのもよいかもしれない。」「オンライン授業、オンデマンドによる受講などが多く導入された場合の成績評価方法、評価基準なども記載する必要があると思われる。」「オンラインでの打ち合わせでも活用できるように内容をホームページ上でPDFとして活用できればと思う。」などなど、要望や改善点についても多々指摘されている。

以上、今年度中に聴取した意見等について一部を披瀝したが、収集した「回答票」については現在検証中である。『ミライヲツクル Learning Guide』及び『学生と創る授業デザイン Teaching Guide』に関しては、次年度以降も、より多くの学生をはじめ教職員からも広く意見等を聴取し、

その情報を更に蓄積・検証し、改善案の立案に繋げていく必要がある。

#### 1-③ 『日本大学 FD 研究』の編集・刊行

令和2年度教育情報マネジメント WG 活動計画に基づき、『日本大学 FD 研究』の原稿募集を行った。本年度は「第9号」を刊行する予定であったが、投稿が少なく、冊子体の刊行には至らなかった。今後は、オンライン授業の取り組み等に関する報告を各学部へ依頼し、令和3年度には「第9・10合併号」を刊行する予定である。

なお、令和2年10月には「投稿要項」及び「執筆要項」を改正した。本誌は主として教職員による投稿を念頭においているが、近年は「学生 FD CHAmiT」等学生による投稿があり、これまでは「活動報告」として掲載してきた。しかし、「投稿要項」では「活動報告」について「高等教育開発に関する実践報告(主に部科校で開催されたFD活動の紹介・報告等)」と規定しており、学生による投稿を「活動報告」として扱うことには無理があった。そこで、教育情報マネジメントWGで検討を重ねた結果、「投稿要項」における掲載原稿の種類に「学生レポート」及び「その他(資料紹介、書評など)」を加えるとともに、「執筆要項」の分量にも「学生レポート」及び「その他(資料紹介、書評など)」を加えることとした。

改正後の「投稿要項」及び「執筆要項」は「FD推進センター」のウェブサイトで公開しているが、今後は各学部にも周知し、「学生レポート」を含む投稿を広く募ることが課題となろう。

#### 1-④ FD 推進センターウェブサイトの具体的活用方法の継続的な検討と展開

令和2年度はオンライン授業への対応を優先したことにより、FD推進センターのウェブサイトを活用した情報発信が停滞する傾向にあった。しかし、オンラインで開催となった日本大学ワールドカフェと学生 FD CHAmiT、そしてシリーズで展開した「オンライン授業に関するシンポジウム」の実施前にはFD推進センターのウェブサイトへのアクセスが急増した。また、ソーシャルメディアでの情報発信は昨年度に引き続き頻繁に行われ、タイムリーな情報発信媒体として機能している。

令和2年度に教職員と学生が一体となって取り組んできたオンラインでの一連のFD活動の取り組みについて、動画形式で広く社会へ配信するという新たな企画が立ち上がった。緊急対応であったがこれを実現すべく、関係各所へ調整を行ってきた。その結果、本部ホームページ内の「キャッチアップ」コーナーにて、FD活動を動画にて取り上げていただくことができた。大きな成果であると評価できよう。

引き続き、日本大学の教育改善に対する取り組みを広く社会へ発信するためには、ステークホルダー(学生、保護者、教職員、その他関係者)への効率的な情報発信と情報へのアクセス容易性を整備する必要がある。

### 2 FD 推進センター基本計画(中期計画)を踏まえた教育情報マネジメントワーキンググループとしての総括

中期計画(平成30年～令和2年度)とは「質保証体制を踏まえて実施されるFDの成果とその充実を支援する情報の収集と発信及び教育ツールの開発と充実—FDガイドブックの充実・新規教育ツールの開発—」である。

令和2年度は中期計画3年の最終年度であった。すでにお示ししたように、本年度は全学FD委員会が一丸となり、全学的なオンライン授業への移行を支援する活動を中心に様々な企画を立案し、実行してきたため、この中期計画の内容を踏まえた成果を十分に上げることは困難であった。このような緊急事態であっても、『日本大学FD NEWSLETTER』において、『オンライン授業に関するシンポジウム』の様子を発信できたことは特筆に値する。昨年度（令和元年度）に中期計画の要であった『日本大学FDガイドブック』の全面改訂が実施済みであったため、今年度は緊急対応にも資源と時間を当てることができた。これもまた特筆すべきであろう。しかしこの緊急対応にも限界があり、『日本大学FD NEWSLETTER』の作成ならびに『日本大学FD研究』の編集と刊行については、当初計画通りに滞りなく完遂することはできなかった。感染症が落ち着けば、来年度にはキャッチアップしたい。

このような困難な状況ではあったものの、この緊急事態の中、WGメンバーの協力体制と関係諸氏の献身的なご助力により、全学的なオンライン授業への移行と運営において、当WGメンバーもまた全学FD委員会の一員として、十分に貢献できたものとする。

教育情報マネジメントWGに係る令和3年度活動計画は、次のとおりとする。

令和3年度活動計画

- 1 ステークホルダー（学生、保護者、教職員、その他関係者）への効果的な情報発信の方法につき、抜本的に検討し、具体策を立案する
- 2 『日本大学FD NEWSLETTER』の作成
- 3 『日本大学FD研究』の編集・刊行
- 4 『日本大学FDガイドブック』の成果の測定と改善案の検討

以 上

令和2年度 日本大学FD推進センター活動一覧

| 日 程            | 内 容 等                                                                    |
|----------------|--------------------------------------------------------------------------|
| 令和 2年 4月 1日(水) | 『日本大学FDガイドブック2020(ミライツツクル Learning Guide及び学生と創る授業デザイン Teaching Guide)』発行 |
| 5月26日(火)       | 第1回全学FD委員会                                                               |
| 7月 4日(土)       | 第1回学生FD CHAmiTコアスタッフミーティング                                               |
| 7月 7日(火)       | 第1回調査・分析ワーキンググループ会議                                                      |
| 7月11日(土)       | 第1回学生FD CHAmiTスタッフミーティング                                                 |
| 7月16日(木)       | 第1回プログラムワーキンググループ会議                                                      |
| 7月21日(火)       | 第2回全学FD委員会                                                               |
| 8月8日(土)        | 第1回 日本大学オンライン授業に関するシンポジウム                                                |
| 8月19日(水)       | 第2回学生FD CHAmiTコアスタッフミーティング                                               |
| 8月22日(土)       | 第2回学生FD CHAmiTスタッフミーティング                                                 |
| 8月31日(月)       | 第1回教育情報マネジメントワーキンググループ会議                                                 |
| 9月 5日(土)       | 第2回 日本大学オンライン授業に関するシンポジウム                                                |
| 9月14日(月)       | Zoom トレーニング(ベーシックトレーニング)                                                 |
| 9月15日(火)       | 第3回学生FD CHAmiTコアスタッフミーティング                                               |
| 9月16日(水)       | Zoom トレーニング(ベーシックトレーニング)                                                 |
| 9月19日(土)       | 第3回学生FD CHAmiTスタッフミーティング                                                 |
| 9月25日(金)       | 第2回調査・分析ワーキンググループ会議                                                      |
| 9月25日(金)       | Zoom トレーニング(アドバンストレーニング)                                                 |
| 9月28日(月)       | 第2回プログラムワーキンググループ会議                                                      |
| 10月 7日(水)      | 第4回学生FD CHAmiTコアスタッフミーティング                                               |
| 10月10日(土)      | 第4回学生FD CHAmiTスタッフミーティング                                                 |
| 10月17日(土)      | 第3回 日本大学オンライン授業に関するシンポジウム                                                |
| 10月19日(月)      | Zoom トレーニング(初心者トレーニング)                                                   |
| 10月27日(火)      | 第3回全学FD委員会<br>・「令和2年度FD等教育開発・改善活動に関する調査」について                             |
| 10月28日(水)      | 学生FD CHAmiTコアスタッフによるリハーサル                                                |
| 11月 7日(土)      | 第5回学生FD CHAmiTスタッフミーティング                                                 |
| 11月 7日(土)      | 第4回 日本大学オンライン授業に関するシンポジウム                                                |
| 11月25日(水)      | Zoom トレーニング(トレーニング・シリーズ①「画面共有編」)                                         |
| 11月28日(土)      | 第6回学生FD CHAmiTスタッフミーティング/前日リハーサル                                         |
| 11月29日(日)      | 令和2年度 日本大学 学生FD CHAmiT(Zoomによるオンライン開催)                                   |
| 12月 9日(水)      | Zoom トレーニング(トレーニング・シリーズ②「ブレイクアウトルーム編」)                                   |
| 12月16日(水)      | Zoom トレーニング(トレーニング・シリーズ③「チャット・投票機能編」)                                    |
| 12月18日(金)      | 第3回プログラムワーキンググループ会議                                                      |
| 12月19日(土)      | 第5回 日本大学オンライン授業に関するシンポジウム                                                |
| 12月22日(火)      | 第4回全学FD委員会                                                               |
| 令和 3年 1月 1日(金) | 「日本大学FD NEWSLETTER」(第17号)発行<br>・日本大学オンライン授業に関するシンポジウム                    |
| 1月22日(金)       | 第4回プログラムワーキンググループ会議                                                      |
| 2月12日(金)       | 学生FD CHAmiTスタッフ事後ミーティング                                                  |
| 2月19日(金)       | 第5回プログラムワーキンググループ会議                                                      |
| 3月 1日(月)       | 「日本大学FD NEWSLETTER」(第18号)発行<br>・「オンライン授業のミライのカたち」を探る                     |
| 3月 2日(火)       | 第6回 日本大学オンライン授業に関するシンポジウム                                                |
| 3月11日(木)       | Zoom トレーニング(トレーニング・シリーズ④「授業・ゼミナール・研究会で使える機能」～年間総まとめ～)                    |
| 3月16日(火)       | 第5回全学FD委員会                                                               |
| 3月16日(火)       | 「令和2年度 日本大学 学生 FD CHAmiT NEWSLETTER」発行                                   |
| 3月17日(水)       | 第7回 日本大学オンライン授業に関するシンポジウム                                                |
| 3月22日(月)       | Zoom トレーニング(トレーニング・シリーズ⑤「受講者アンケートから質問が多く寄せられた機能編」)                       |
| 3月31日(水)       | Zoom トレーニング(トレーニング・シリーズ⑥「ZoomRoomsとは何か?」)                                |

令和2年度 全学FD委員会名簿

令和3年3月31日現在

|     |     |                        |         |
|-----|-----|------------------------|---------|
| 委員長 | 小田司 | (FD推進センター長・副学長)        | ※～8/31  |
| 〃   | 和孝也 | (FD推進センター長・副学長)        | ※9/1～   |
| 委員  | 藤井  | (FD推進センター副センター長・生産工学部) |         |
| 〃   | 臼井  | (法学部)                  |         |
| 〃   | 古田  | (文理学部)                 |         |
| 〃   | 坂野  | (経済学部)                 |         |
| 〃   | 西山野 | (商学部)                  |         |
| 〃   | 吉野  | (芸術学部)                 |         |
| 〃   | 蓼沼  | (国際関係学部)               |         |
| 〃   | 山添  | (危機管理学部)               |         |
| 〃   | 清水  | (スポーツ科学部)              |         |
| 〃   | 大貫  | (理工学部)                 |         |
| 〃   | 根本  | (工学部)                  |         |
| 〃   | 日臺  | (医学部)                  | ※～10/31 |
| 〃   | 阿部  | (医学部)                  | ※11/1～  |
| 〃   | 今村  | (歯学部)                  |         |
| 〃   | 平山  | (松戸歯学部)                |         |
| 〃   | 須江  | (生物資源科学部)              |         |
| 〃   | 岸川  | (薬学部)                  |         |
| 〃   | 中澤  | (通信教育部)                |         |
| 〃   | 秋草  | (大学院総合社会情報研究科)         |         |
| 〃   | 織田  | (大学院法務研究科)             |         |
| 〃   | 石川  | (短期大学部三島校舎)            |         |
| 〃   | 佐藤  | (短期大学部船橋校舎)            |         |
| 〃   | 酒井  | (学務部長)                 |         |
| 〃   | 角田  | (学務部次長)                | ※～9/14  |
| 〃   | 渡邊  | (学務部次長)                | ※9/15～  |
| 幹事  | 中村  | (学務部特任事務長)             |         |
|     | 後藤  | (学務部学務課長)              |         |

以上

令和2年度 全学FD委員会ワーキンググループ名簿



FD推進センター

|    |       |                        |
|----|-------|------------------------|
| 総括 | 藤井 孝宜 | FD推進センター副センター長，生産工学部教授 |
|----|-------|------------------------|

【調査・分析ワーキンググループ】

|      |       |            |         |
|------|-------|------------|---------|
| リーダー | 大貫進一郎 | 理工学部教授     |         |
| メンバー | 坂野 徹  | 経済学部教授     |         |
|      | 蓼沼 智行 | 国際関係学部教授   |         |
|      | 清水 千弘 | スポーツ科学部教授  |         |
|      | 今村 佳樹 | 歯学部教授      |         |
|      | 中澤 瞳  | 通信教育部准教授   |         |
|      | 後藤 英次 | 学務部学務課長    |         |
|      | 後藤 裕哉 | 学務部学務課課長補佐 | (～9/30) |
|      | 濱野 泰三 | 学務部学務課課長補佐 |         |
|      | 佐賀 友美 | 学務部学務課主任   |         |

【プログラムワーキンググループ】

|      |       |              |  |
|------|-------|--------------|--|
| リーダー | 平山 聡司 | 松戸歯学部教授      |  |
| メンバー | 古田 智久 | 文理学部教授       |  |
|      | 吉野 大輔 | 芸術学部准教授      |  |
|      | 山添 謙  | 危機管理学部准教授    |  |
|      | 岸川 幸生 | 薬学部教授        |  |
|      | 佐藤 秀人 | 短期大学部船橋校舎教授  |  |
|      | 石川 元康 | 短期大学部三島校舎准教授 |  |
|      | 後藤 英次 | 学務部学務課長      |  |
|      | 濱野 泰三 | 学務部学務課課長補佐   |  |
|      | 関 雄太  | 学務部学務課課長補佐   |  |
|      | 佐賀 友美 | 学務部学務課主任     |  |

【教育情報マネジメントワーキンググループ】

|      |       |            |          |
|------|-------|------------|----------|
| リーダー | 臼井 哲也 | 法学部教授      |          |
| メンバー | 西山 秀人 | 商学部教授      |          |
|      | 齋藤 義雄 | 工学部教授      |          |
|      | 日臺 智明 | 医学部教授      | (～10/31) |
|      | 阿部百合子 | 医学部准教授     | (11/1～)  |
|      | 須江 隆  | 生物資源科学部教授  |          |
|      | 後藤 英次 | 学務部学務課長    |          |
|      | 後藤 裕哉 | 学務部学務課課長補佐 | (～9/30)  |
|      | 濱野 泰三 | 学務部学務課課長補佐 |          |
|      | 芳 祥子  | 学務部学務課主任   |          |

以 上

# 【 付 録 】



## 日本大学FD推進センターに関する内規

|   |                    |                    |   |
|---|--------------------|--------------------|---|
| ( | 平成 20 年 2 月 26 日制定 | 平成 22 年 3 月 12 日改正 | ) |
|   | 平成 20 年 4 月 1 日施行  | 平成 25 年 4 月 1 日施行  |   |
|   | 平成 22 年 3 月 16 日改正 | 平成 27 年 3 月 24 日改正 |   |
|   | 平成 22 年 4 月 1 日施行  | 平成 27 年 4 月 1 日施行  |   |

(名称及び設置)

第1条 この組織は、日本大学FD推進センター(以下「センター」という)と称し、日本大学(以下「本大学」という)に置く。

(目 的)

第2条 センターは、本大学のファカルティ・デベロップメント(以下「FD」という)を全学的に推進するとともに、大学院、学部、通信教育部及び短期大学部(以下「学部等」という)のFDの支援を行い、もって本大学の教育の質的向上に資することを目的とする。

(活 動)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の活動を行う。

- ① 学内外のFD情報の収集及び調査並びにFD推進に係る各種の分析されたデータの提供
- ② 授業改善のための基本方針の策定
- ③ 教員に対する研修会、講習会及び講演会等の開催
- ④ 教員の教授活動のための相互研鑽の実施
- ⑤ 学部等におけるFDの推進支援
- ⑥ 学生による授業評価の全学的推進
- ⑦ 本大学学生生活実態調査結果の教育的活用
- ⑧ 自己点検・自己評価等の調査との連携
- ⑨ 教員の教育・研究業績評価方法の検討
- ⑩ その他FDに関する事項

(センター長)

第4条 センターに、センター長を置く。

- 2 センター長は、センターを代表し、その業務を統括する。
- 3 センター長は、副学長(学務担当)とする。

(副センター長)

第5条 センターに、副センター長を置く。

- 2 副センター長は、センター長を補佐する。
- 3 センター長に事故あるときは、副センター長がその職務を代理し、センター長が欠けたときは、その職務を代行する。
- 4 副センター長は学長が任命し、その任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

(全学FD委員会)

第6条 センターに、第3条各号に定める事業を推進するため、全学FD委員会(以下「委員会」という)を置く。

(委員会の構成)

第7条 委員会は、次の者をもって構成し、委員及び幹事は大学が委嘱する。

① 委員

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 学務部長
- (4) 本部部長及び部次長 若干名
- (5) 各学部長、通信教育部長、大学院独立研究科長及び専門職大学院研究科長が推薦する教員 各1名
- (6) 短期大学部各校舎次長が推薦する教員 各1名
- (7) センター長が指名する者 若干名

② 幹事

- (1) 学務課長
- (2) 本部部課長 若干名

(委員長)

第8条 委員会の委員長は、センター長とする。

(委員会の招集)

第9条 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。

(委員及び幹事の任期)

第10条 委員長、委員及び幹事の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

2 補充の委員及び幹事の任期は、前任者の残任期間とする。

(学長の出席)

第11条 学長は、随時、委員会に出席することができる。

(構成員以外の者の出席)

第12条 委員長は、必要に応じ、委員以外の者を出席させ意見を求めることができる。

(専門委員会)

第13条 委員長は、必要に応じて、専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会の委員長及び委員は、センター長の推薦に基づき、本大学が委嘱する。

(所 管)

第14条 センターに関する事務は、学務部が行う。

(内規の改正)

第15条 この内規を改正する場合は、委員会の審議を経て、常務理事会で決定しなければならない。

(内規等)

第16条 センターの運営その他に関し必要ある場合は、別に内規等で定めることができる。

附 則

この内規は、平成27年4月1日から施行する。

## 日本大学FD推進センター基本計画（中期計画）



「教学に関する全学的な基本方針」の通達（平成 29 年 10 月 6 日付け）を踏まえて、教学戦略委員会において、本学の教育の質保証体制を実質化するための各種検討を進めている。

FD推進センターにおいて、その検討を受け（互いに共有しつつ）これらを補完するFD活動の実質化を図ることは極めて重要であるといえる。当センターでは、これを実現するため、以下のとおりFDの視点から全学的な教学方針等の共有と広く捉えた各種教育手法等の理解浸透を中期計画として推進していく。

### ◆ 中期計画〔期間：平成 30 年度～平成 32 年度（3 か年）〕

#### 学生の成長を一義的に捉えた教育の質保証を実質化するFD活動の充実

- ① 質保証体制の充実に資する本学FDの在り方の調査と方針の明確化：マクロ・ミドル・ミクロそれぞれの観点から補完する諸方策等の検討  
ー教育業績評価・ポートフォリオ等の在り方ー
- ② 質保証体制の充実と日本大学教育憲章を捉えたFD活動の各学部等への浸透策の展開  
ーワークショップ等浸透に関わるプログラムの充実と改善ー
- ③ 質保証体制を踏まえて実施されるFDの成果とその充実を支援する情報の収集と発信及び教育ツールの開発と充実  
ーFDガイドブックの充実・新規教育ツールの開発ー

以 上



---

## 令和２年度日本大学ＦＤ推進センター活動報告書

---

発 行 令和３年３月

発行者 日本大学ＦＤ推進センター

〒102-8275 東京都千代田区九段南４－８－２４

日本大学会館 ４階 日本大学本部学務部学務課

電話：03-5275-8314 ＦＡＸ：03-5275-8315

E-mail：adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp

---



## 編集後記

『日本大学FD研究（第9号）』は、関係各位のおかげをもちまして、ここに発刊することができました。研究論文2編、教育実践研究2編、活動報告2編、学生レポート3編を御投稿いただいた執筆者の皆様、論考の審査に御協力いただいた皆様、教育情報マネジメントワーキンググループを中心とする全学FD委員会及び本部学務部学務課の皆様の様々な御協力、御尽力に深く感謝いたします。

昨年度からの新型コロナウイルス感染拡大の影響で、各部科校の講義でZoomなどのオンラインツールの利用、そしてGoogle Classroomなどのラーニング・マネジメント・システム（LMS）の導入がかなり進みました。第9号に掲載された各論考も、教育現場におけるこれらの大きな変化を反映した内容となっております。新型コロナウイルスの一刻も早い終息を願うばかりですが、コロナ後に講義が対面授業中心になってもコロナ前とまったく同じ状態に戻ることはないでしょう。むしろ、コロナ禍で利用が拡大した様々なツールのおかげでアクティブラーニングや反転授業などが進めやすくなり、それと共にオンラインツールやLMSの利用が今後も続くことが予想されます。このため掲載論考が今後の各部科校における教育の在り方や改善活動に大きな示唆を与えてくれることを期待しております。執筆者の皆様の所属学部なども多岐にわたり、多くの専門や講義形態、そして教育支援の仕組みなどについて参考となる内容となっております。

そして、投稿原稿が迅速に審査されることや、掲載決定論考が刊行前にFD推進センターウェブサイトにも速やかに掲載されることなど関係者の努力が、『日本大学FD研究』が高等教育実践に関する研究発表の場としての学内外での認知の広がりにつながっていると考えます。これからもこの姿勢を続けていくと同時に、日本大学学生FD CHAmiTの内容紹介など全学または部科校別のFD活動との連携を進めることで内容の充実を図っていければと思います。

今後は、本誌への掲載が研究論文、教育実践研究、研究ノート、活動報告、学生レポート、その他（資料紹介、書評など）の計6種類と様々な形での研究発表を可能としていること、そして上記の論考処理のスピードの速さを各部科校にアピールすることで、より多くの教職員の皆様に多彩な内容の投稿を促していきたいと思います。ぜひともFD推進センターウェブサイトをご覧になって『日本大学FD研究』に関心を持っていただき、お気づきの点があれば御意見をいただければ幸いです。全学の教職員の皆様からの御投稿を心よりお待ちしております。

日本大学全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループメンバー  
日本大学商学部 教授

松 原 聖

## 編集

日本大学全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループ

|      |                  |
|------|------------------|
| リーダー | 臼井 哲也（法学部教授）     |
| メンバー | 松原 聖（商学部教授）      |
|      | 齋藤 義雄（工学部教授）     |
|      | 阿部百合子（医学部准教授）    |
|      | 須江 隆（生物資源科学部教授）  |
|      | 後藤 英次（学務部学務課課長）  |
|      | 関 雄太（学務部学務課課長補佐） |
|      | 芳 祥子（学務部学務課主任）   |

※所属、役職等については、令和3年12月現在のものです。

### 〔表紙デザインコンセプト〕

日本大学FD推進センターの諸活動が日本大学をはじめとするあらゆる教育界に広がり影響していくイメージを水の波紋としてデザインしています。

水滴（FDの諸活動）が水面に落ちたとき、あらゆる教育界に波紋（影響、効果）が広がっていくイメージです。

また、水面で交わっている波紋は、教員や職員、そして学生の三者が交わっている様子を表しています。三者が相互に影響してはじめて水の流れができる。三者が相互に影響することで、はじめて教育の質的向上を図ることができる。そのようなイメージでデザインされています。

---

## 日本大学FD研究 第9号

---

発行 令和4年3月31日

発行者 日本大学FD推進センター センター長 青木 義男

〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24

電話：03-5275-8314 FAX：03-5275-8315

E-mail：adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp

所管部署：日本大学 本部 学務部学務課

---



Nihon University  
Journal of Faculty Development  
Vol.9